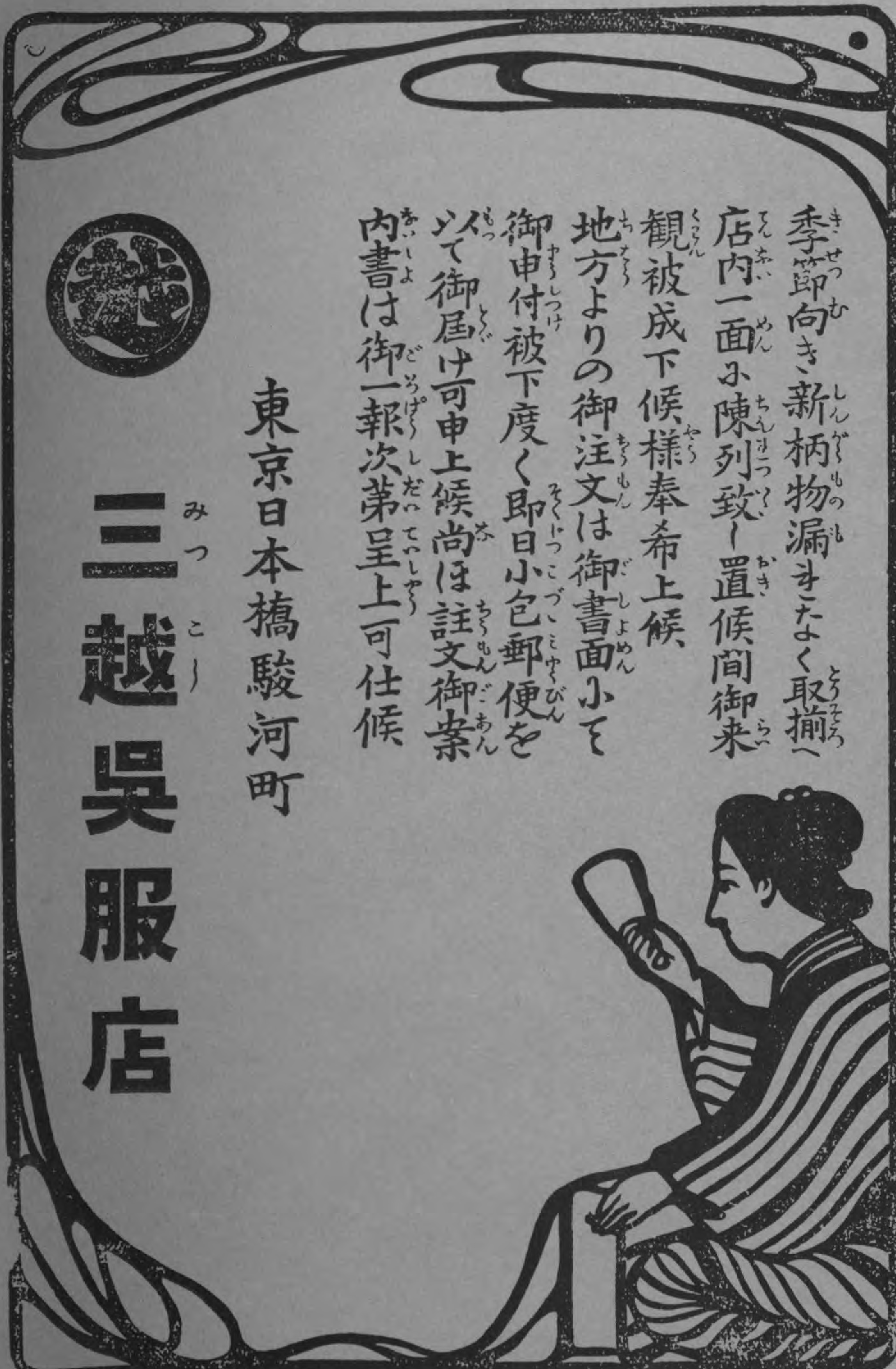


女鑑

第拾五年
第八號

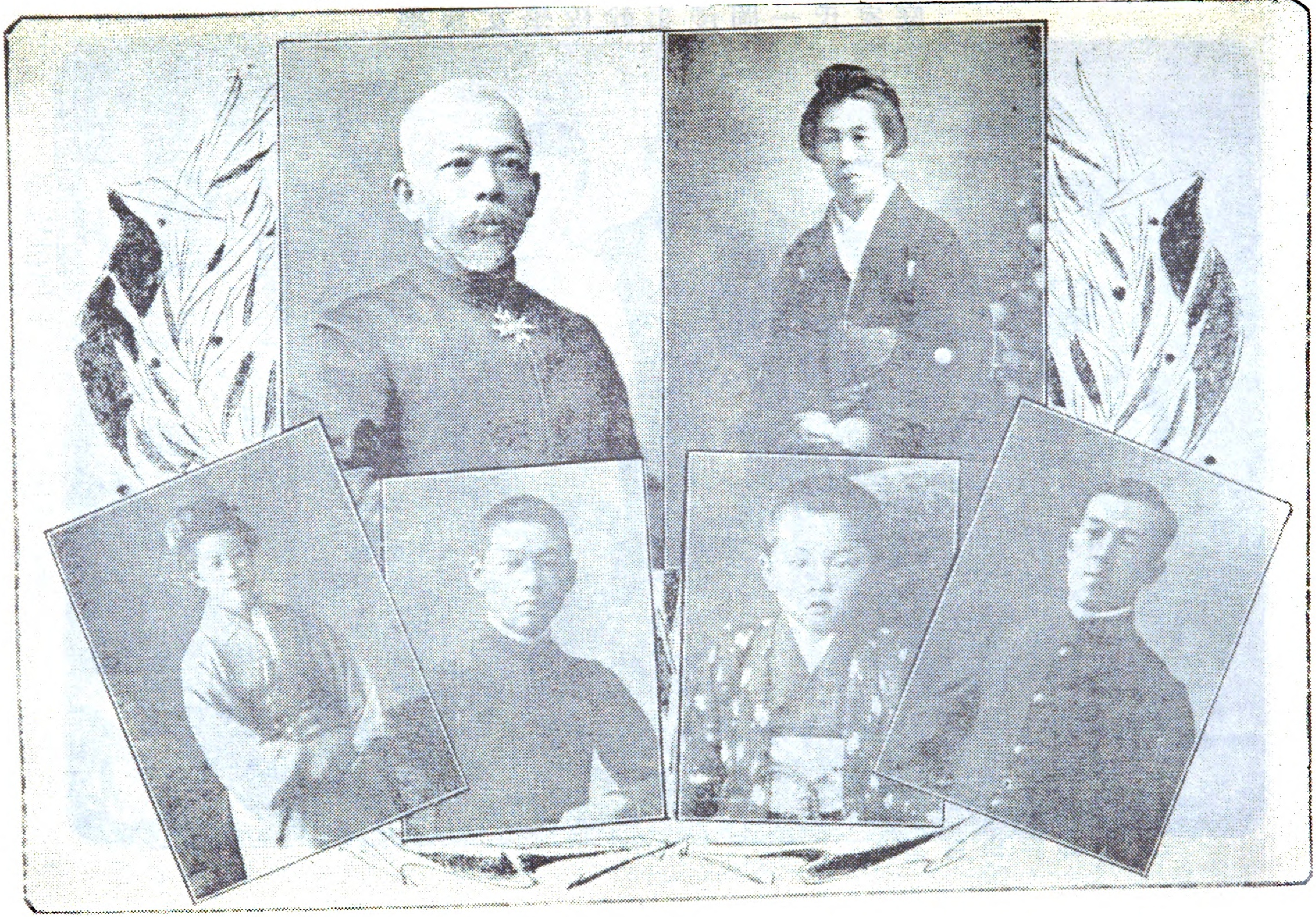
明治廿五年五月十二日第三種郵便物認可
明治三十四年八月創刊毎月一回一日發行



季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ注文御案
内書は御一報次第呈上可仕候
東京日本橋駿河町
三越呉服店

女鑑 第拾五年第八號 目次

片岡海軍中將並夫人多磨子及令息令孃



華族女學校幹事淺岡一氏家庭



新濱御獵地に於ける獨逸皇族

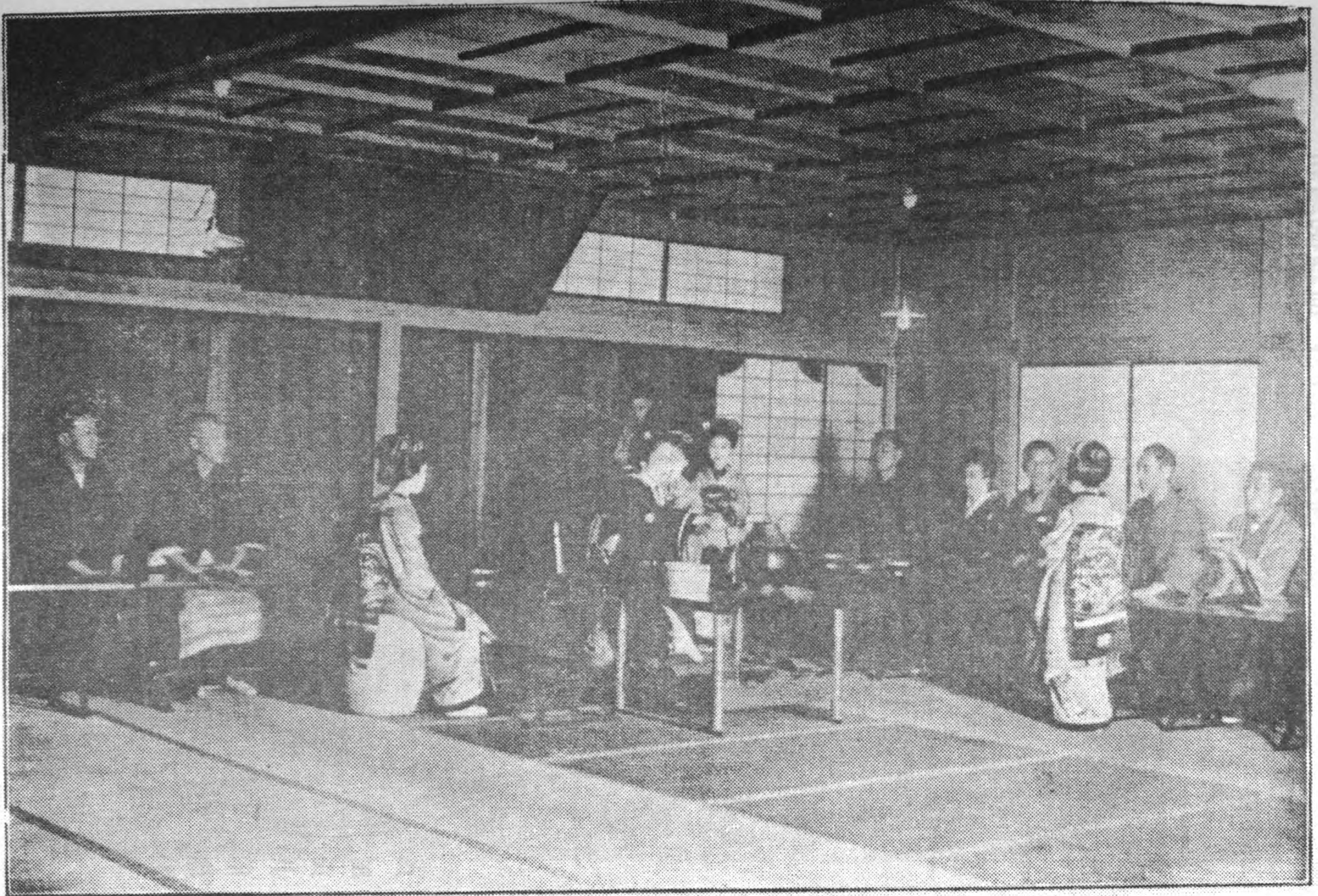
（本年四月來遊せられたる獨逸皇族カールツアントン殿下の閑院宮殿下と御同伴千葉縣新濱御獵地に於て御獵の催しありし時の光景を寫したるものなり）





（戸田氏共伯撮影）

京都抹茶會席上の景況



歐米各種化粧品直輸入商

最新煉香油

(紳士用)(貴婦人用)

パール



東京濱町一町目

平尾商店

電浪 一二〇

全國到ル處ニ在リ

特約販賣店

東京 大阪 平尾賛平 本店 店

香油(ゴールド、オイル)發賣元

競馬香水は佛國の製品にして芳香の優美耐久なる既に世の高評を辱ふす
幸に貴孃紳士益々御愛顧の榮を給はらんことを

麝香獸印ムスク白粉
水 廿錢　同大五十錢
練 廿五錢　同大五十錢

小包料三本毎に十錢

東京市日本橋區橘町二丁目九番地

石鹼
香水
輸入商

竹間[illegible]商店

電話浪花一六一四

賣捌所は全國有名なる洋物小間物店賣藥化粧品店にあり



小瓶廿五錢◎中瓶一圓◎三本美函入

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

宮內省御用達

ヒゲタ印醬油

銚子港　田中玄蕃釀造　千葉縣

米國紳士貴婦人用

プレスト洗粉

專賣



●プレスト洗粉は皮膚の理をなめらかにし色を白くし光澤を艶麗ならしめ自ら精神の爽快を覺ゆること妙なり

●プレスト洗粉は白粉を洗ひ落すに至極適切にして妙なり

●プレスト洗粉は効能顯著なるが故に普通の洗粉の如く多量に使用すべからず袋入壹つは六七回の入浴に適すべし故に經濟上却て徳用なり

●日本特約一手販賣 アーム齒磨本舖 山本玉川堂

●販賣店は全國到る所の化粧品小間物商藥種店にあり

帝國貯蓄銀行

東京京橋區一丁目河岸通り

（電話 新橋 八一六 二八〇八）

本郷一丁目	本郷支店
坂倉三丁目	飯倉支店
赤坂表一丁目	赤坂支店
四谷大通り	四谷支店
南品川一丁目	品川支店
横濱吉田町	横濱支店

牛込神樂坂	神樂坂支店
神田須田町	須田町支店
兩國米澤町	米澤町支店
淺草雷門前	吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候

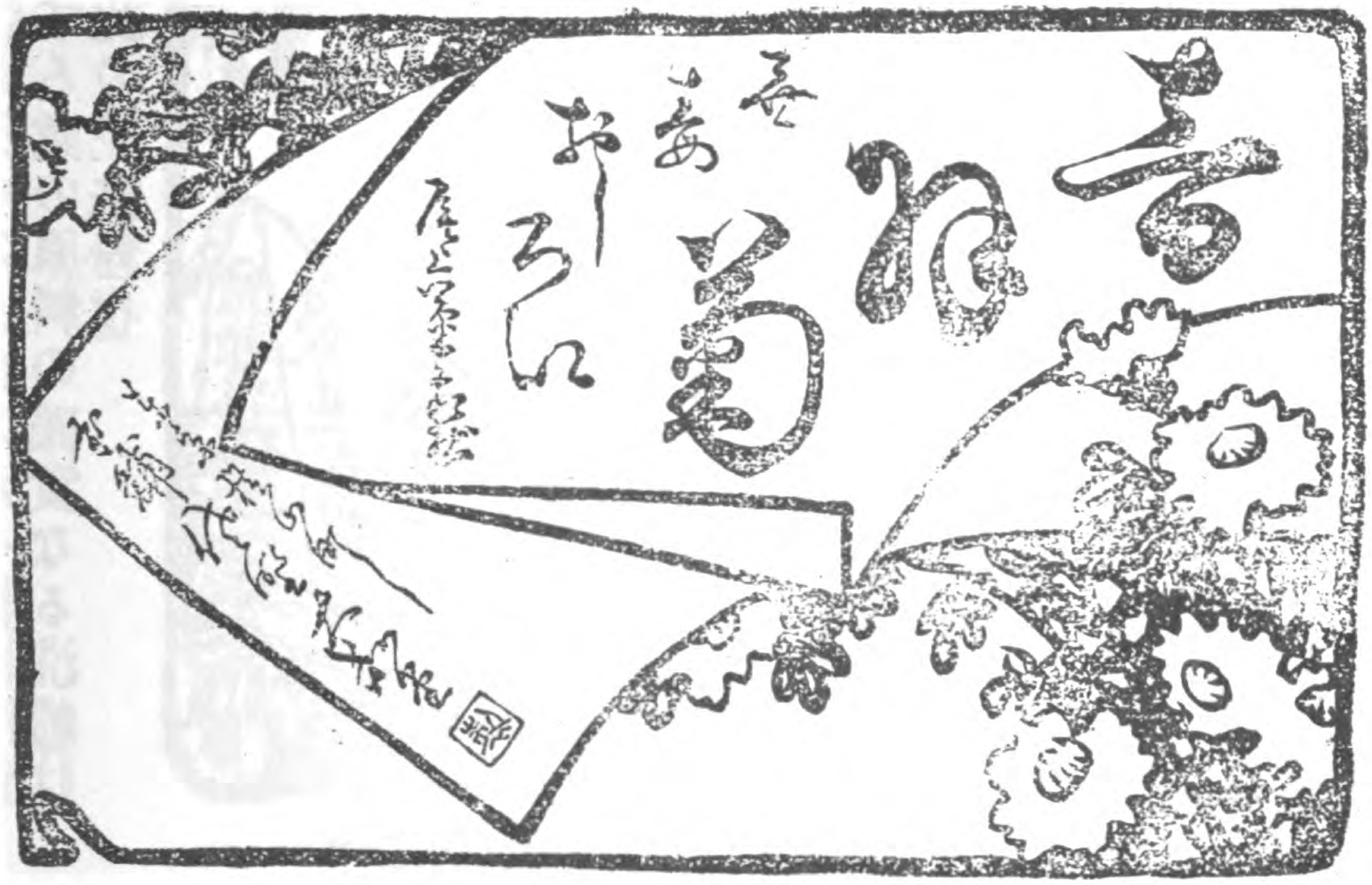
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

東京府女子師範學校卒業生



長野縣松本高等女學校卒業生

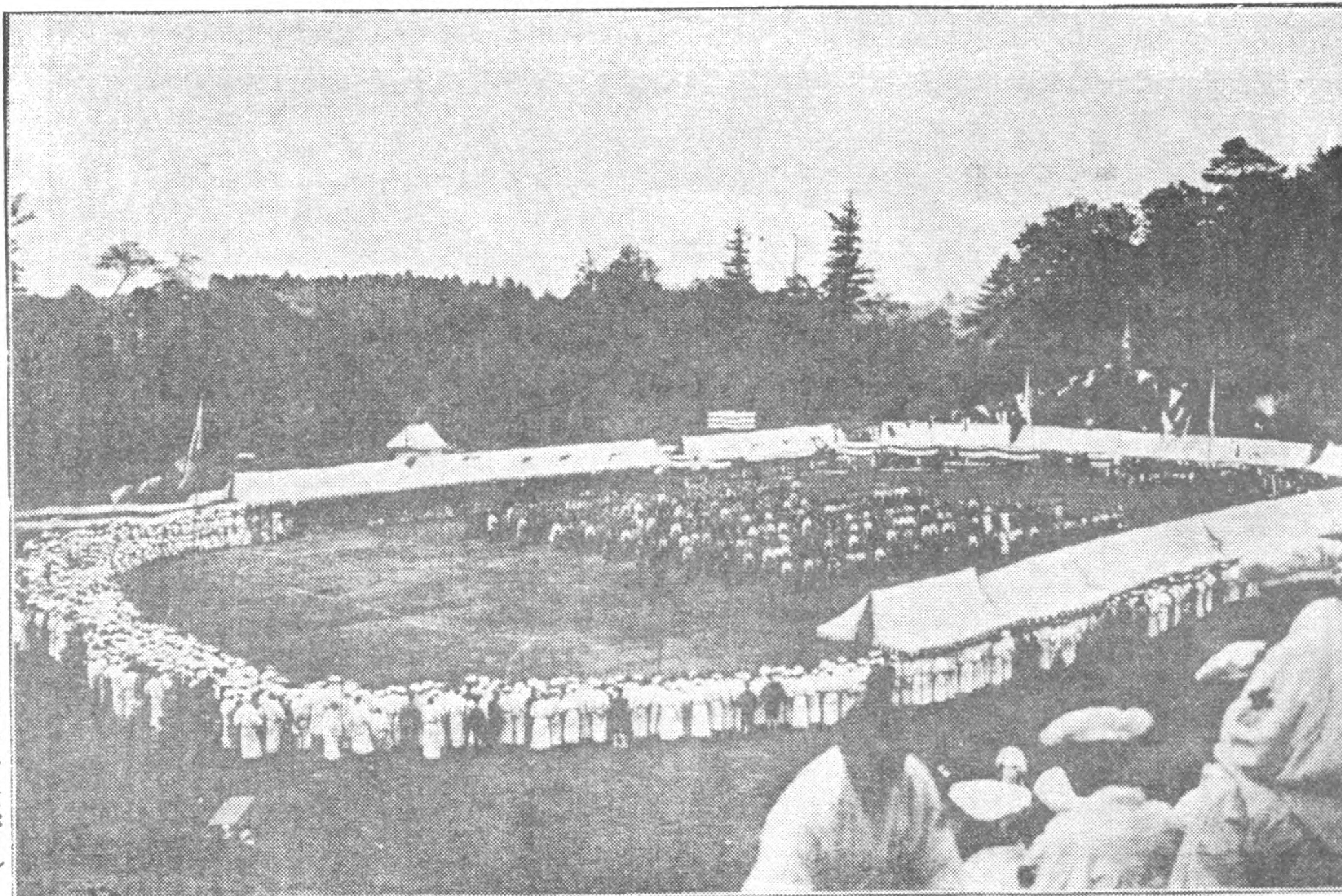






定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金十二錢

戸山病院に於ける傷病兵慰藉運動會



（女子高等師範學校附屬高等女學校生徒の催ふしに係る）

加賀千代尼及蓮月尼筆蹟




御用諸學校
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Uraiimho-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 一、〇三〇
二號同 一、二三〇
三號同 一、三五〇
四號同 一、五一〇
同用テーブル 上等一臺
拾參圓 並等一臺 九圓半
號大人用
體操器械 御用
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇ヨリ二、九五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

輕便一瓦斯の煮焼一徳用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮焼用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

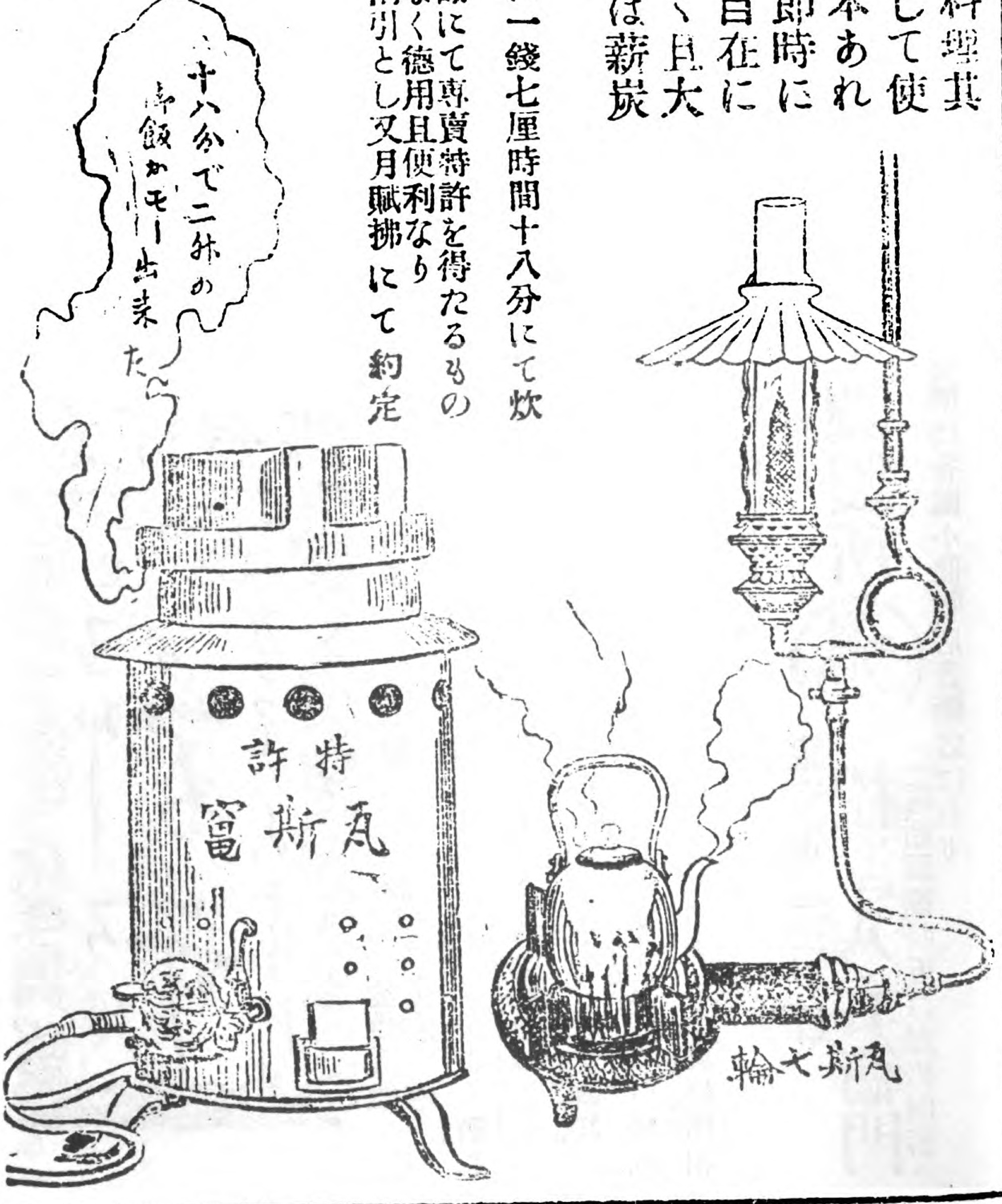
○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三番、五四八番
二三〇三番

根治確治

わきが

新發明

必ず全治し決して再發せず他病に變ぜず 價七拾錢 乙價壹圓卅錢 甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收され毒素を根底より全滅さし不快臭を消滅せしむる作用を有する最近發見の猛烈なる新劑にして如何程頑固劇烈の腋臭も甲價特別製を用ゆれば速に苦惱を脱せしむ

毛のはへる

定價壹圓卅錢 特製貳圓 送料拾四錢 本品は原品なるベグ子スと稱する現今最も賞用せらるゝ有力なる最新液にして

毛をはやしたき人は早く試みられよ

●はへぎわうすき人 ●まゆ毛 ●口ひげ ●婦人こまあたりのはげ ●ぬけ毛落毛を止むべき所に毛なき人用ひよ毛髪増生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

色の白くなる

名方 カトロン液

本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第々々に新陳代謝を盛ならしめ白色艶美の容貌となる

皮膚を漂白するを以て如何程色黒き人もB印特製を用ゆれば 男女共交際上最も必用の品なり ●A印壹圓 B印特製壹圓十錢 送料十三錢

月やくどろし

メソルヒン此薬は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下ります又二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下ります 二三ヶ月以上のとまり及び血塊には特製を用ゆれば速に流經す 本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なし又月經不通月經不順より起る子宮血の道悪血古血を全治し一ヶ月の驚くべき効驗あり 價半劑六拾五錢 壹劑壹圓貳拾錢 貳劑貳圓參拾錢 特製參圓五拾錢 送料拾錢 郵券代用一割増

東京市本所區 專賣發賣所 オリエンタル藥舗

意匠登録

新發賣玉白粉

登録商標 おしろい くも井

定價瓶入 金貳拾錢 同曲入 金拾五錢 金六錢

この玉おしろい(雲井)の儀はへちまの水にてよく晒し玉に製したる白粉へ化粧料の薬品と龍脳麝香の芳しき香を加へ候故御顔の皮膚を清く艶を出し。其他御顔一切に宜く腫物を防ぎ候等實に類なき御重寶なる白粉也 御用法は常のおしろいの如く水にてときて御使用相成候得ば麗しく相付申候

東京銀座三丁目

調製所 (八) 松澤八右衛門

(電話新橋特五百參拾四番)

賣捌は各處小間物店賣藥店にあり



第十五年第八號

消夏の用意

夏は苦みの世界にして、又樂みの世界なり。實に金をも鑠かし、石をも銷すてふ、燬くが如き炎熱に對しては、誰れかは苦悶せざるべき。されど此の苦悶の世界に於ける、一陣の清風は、千金の價ありて、無限の快感を與ふるにあらずや。

昨日今日の熱さには、堅くるしき行儀も作法も、殆んど無用となりぬ。肌くつろぎて、團扇つかふ手さへ尙ほまどろしと思ふ許りなれば、或は午窓一睡の夢の中に、遠く雪山の皚々たるを辿らんとするもあるべく、或は海邊の樓臺に、涼風を納るゝもあるべし。

されば諸官衙にありては、戰時多端の故を以て、昨年來暑中賜暇を廢せられたれども、尚ほ一般の規則として、執務の時間を午前中に短限し、午後は各自悠遊休息せしめらる。況て諸學校にありては、小學校は申すに及ばす、中學、大學、其他各種の專門學校もみな休業となり。高等女學校以上の各女學校に於ても、公立たると私立たるとを問はず、何れも同時に休暇となりぬ。朝に夕に傘影紛として裙履織るが如くなりし諸學校も、今は咿唔讀書の聲を聞かず、遊戲體操の影を見ず、寂寞として門前雀羅を設くべき光景の中にあり。かくて沈靜と睡眠とは、今や教育界を支配しつゝあるなり。

是を以て學生の多くは、故郷に還るあり、旅行するもありて、學校所在地に留まる者は、其數甚だ稀なるべし。偶々留まつて都門にある輩といへども、朝に公園の樹陰に憩ひ、夕べには橋畔に清風を趁ひ、ひたすら閑逸を求めて餘念なきが如し。その渇望するところは、氷水と、アイスクリームと、梨子と林檎なり。その翫弄するところは、小說、詩歌、骨牌一般の遊具に外ならず。懶惰と放縱とは、正に一般學生を襲ひつゝあるにあらずや。

女學生も亦かゝる沈默と睡眠の世界にありて、懶惰と放縱とに其日を送らざるべきか。或は辛抱強き女性的精神を發揮して、三伏の苦熱と鬪ひ、尚怠らず精勵しつゝあるか。昨日今日の熱さには、如何に意氣は快活なるにせよ。懶惰放縱に其日を送るが如きことはなきにせよ、又自然に沈默睡眠の人たらざるを得ざるべし。聞く、女學生中の或向は、寄宿舍一同を擧げ、相當なる監督者に引率され、避暑旅行として、海水浴場に行くもあり。或は校友相携えて溫泉地に赴くもありと。而して故郷に歸省する人、及び父母に從れられて、都門を去り閑地に就くもあるべければ、實際東京に留まりて、下宿屋又は寄宿舍にあるもの

は比較的に少數なるべしと雖も、尙ほ幾百千の女學生は都會にあるものと概算するを得べく、而して是等の人々は、猶ほ男學生のそれの如くに、朝夕の散歩、納涼の外は、その樂しむところのものは、恐らく氷水にあらざれば、小說ならざるを得るか。

故鄕に還るは、その父母親戚を省するなり。淸淨なる田園の空氣は、父母の悅べる顏色と共に、俗氣紛紛たる都會生活の煩勞を洗うて、身も心も健全愉快なるを得べく、溫泉と海水浴場とに旅行するもまた適當なる監督者だにあらむには、日に淸新活潑なる樂みを受くるを得べく、別に憂ふるところなかるべきも、たゞ彼の殘りて下宿屋に朝夕を送るものにあつては、其人自ら深く戒愼すべきは更なり、學校其他監督の責ある者の尤も注意すべきものならざるを得ず。體は暇なり、身は樂なり、爭で此間の時間が、美事善事のみに使用せらるべけんや。

極端なる事例を擧げて、全般を批評するは、公平なる判斷を下すの道にあらざれば、予輩は成るべく斯の如き偏頗なる批評を避けんと欲するものなれども、又一方より觀るときは、極端なる一二の事例も亦取つて以て全般の戒めとなさゝるべからざるものなきにあらず。此頃ろ女學生に關する忌はしき風聞の頻々として新聞紙上に散見するは、その人一身の不幸は云ふに及ばず、一般女學生の爲にも頗ぶる哀むべし、是等は幸にして千百人に對する一二の事實に過ぎざらんには、尙ほ大に安んずべきも、若し世上一般の事例と同じく、偶々世上の風聞に上る者よりも、顯はれずして秘密の間に行はるゝ事柄の却て多く存在する如きあらば、頗る痛心すべきにあらずや。予輩は實にかゝる風聞の千百人中の一二人に過ぎざらんことを望み且つ信ぜんとするものなり。然るに此頃信用厚き某女學校當局者の竊かに語るところを聞くに、大に

驚愕に堪へざるものあり、其言に云はく、某女學校に於ては、生徒に宛てたる差出人不明の書狀の到達するもの、一日少なきも十通、多きは數十通を越ゆることありて、幹事、事務員等立會の上、開封するを常とす。而して是等の書狀は悉く男女間に關係するものにあらざるなく、宛名の女生が眞に差出人と相知の間柄なるは、甚だ少なきも、尙ほ全く之れなしとは斷言する能はざるが如し。現に此の學校に於て本年四月以來不正なる懷姙の故を以て、旨を諭して退校を命ぜし者二名、某外國人の妾たるの嫌疑を以て、同じく退校せられたるもの一人、男學生との關係上同し處分を受けし者三名ありといへり。此の學校の私立女學校中、最も完備せるものにして、殊に監督の任に當る校長を始め、其他の職員みなよく其の任務を盡せりとの好評あるに拘はらず、尙且斯の如くなるを以て見れば、其他の女學校に於ても之と同一なる事故の伏在することなしとは、斷言し難かるべし。而して彼等厭ふべき行ひを敢てせし女生は、都下に家庭を有するものに全くなく、寄宿舍中にも又殆んと絕無にして、盡く下宿屋生活を爲すものにありといふを以て一考すれば、下宿屋に寄寓せる女學生の境遇の安全ならざるは粗々推知するに難からざるなり。

況んや身體に何等の羈束もなく、無事に苦しむに加へて、炎熱堪へがたく、何事にも倦怠を生し易き暑中の天地に於て、狹隘なる下宿屋の中にあるの極めて不攝生不健全にして、且つは各種誘惑の入り易きは、殆んと自然の道理といふも不可なかるべきに於てをや。

夏は苦みの世界にして、又樂みの世界なり。此の苦悶より逃れて、自然の清風に浴し、滿身の涼氣を求めんとせば、宜しく故山の田園に歸臥すべし、或は溫泉地に行くべし、海水浴に赴くべし。不潔汚穢なる下宿の下に止りて、三伏の日を過さんは、決して策の得たるものに非ざるなり。



女學生の流行服裝に就て

三輪田高等女學校教頭 文學士 三輪田元道

流行の服裝に就てお話しを致す前に。一寸述べて置かねばならぬ事がある、それは

△趣味に於ける内外人の嗜好

であつて、日本人と西洋人と其趣味に於いて好む所が異なつて居ります、西洋人は外形に顯はれた所の美を好み、例令ば花でも燦爛として派手やかなものを採る傾きがあります、一寸活けるにも派手な抓み挿しです、之れに反して日本人は澁味あるもの、寂たもの、即ち質朴なものを好むのであつて、其趣味に禪味を帶びて居ります、これは奈良朝時代からの風で、嗜好が高尚で、そうして其趣味が幽邃である、例令ば活花でも花一枝、花一輪など丶言つて、實に高尚な優雅な處を好みます、是れは西洋人が眞似ても出來ぬことであつて、從つて是等の趣味は迚も西洋人には解釋が出來ぬものでありますが、此趣味に適しなければ我々日本人には滿足は出來ませぬ。

昨今西洋趣味が頻りに輸入されて來るに就て、日本人が特有の嗜好である禪味が漸次に缺乏して行く、西洋風の文物が輸入するに付て、勢ひ西洋好みの燦爛たる風物が流行する樣に成つて來ます、流行の服裝の事を論ずるに就ても、此前提を大いに考へな

ければならぬ。

△過渡時代の流行

昨今は所謂過渡時代の流行であります、形でも珍らしいものを好む、色合でも異つたものを嗜く、唯だ洋風の派手やかなのが善い樣に思つて、輸入の珍しい異つたものであれば採るので、趣味も意味も何にもない流行であるから、從つて其流行の服裝も一定の標準がない、であるから此間には常識を外れたものが出來易いのである、斯いふ際には元祿時代の派手なものが流行するのも決して怪しむに足らない、而して其流行は善いものばかりで無いから、中には黴菌の含まれて居る樣なものが流行するのである、で此流行を歷史的に考へて見ると、女の風俗は多くは下層社會のものを受け入れる、流行の源因は下層から侵入されて來る、例令ば彼の昔し流行つた勝山の髷は、遊女の勝山と云ふものが結ひ始めたのを、立派な婦人が之を眞似る樣になつた、又島田などいふ髮も、素は藝妓の髮であつたのが一般に流行し、今では良家の娘などは、結婚する以前には、是非一度は島田に結はなければならぬ樣な風習になつて居る、流行は多くは藝妓町の近邊から發達して來る、或は又芝居などからも及ぼして來る、或婦人の着物などは芝居見物などから夫を摸倣して、段々と婦人社會に及ぼす樣な事があつて、大低流行の淵源は花柳社會から來るといふのは、實に歎かはしい事である。

△東西模倣の差異

斯いふ有樣で日本の流行は、上流社會が下層の流行を眞似るのであるが、西洋では之に反して下層社會が

却つて上流社會に摸倣して居る、嘗て巴里から歸朝た佛蘭西通の友人の話に、醜業婦や賤業婦が巧みに貴婦人の風裝を眞似て、一見少しも違はぬ樣に化けて居るから、始めて見れば何處の貴婦人かと思ふのであるが、能く〳〵聞いて見ると、醜業婦なので驚く事が有るといふ事である、是等の摸倣は風俗上から言へば、甚だ善い現象であります、斯いふ摸倣は日本人は西洋人と全く反對である、此點は大いに考へなければならぬ、又社會を善に導かうといふには、流行をして自然の傾向に打ち委して置く譯には行かぬ、その流行が社會の爲めに善とか、惡いとか大いに之に向つて批評をして行かねばならぬ、之を批評するには、能く日本人の歷史的趣味、性格から、前にも述べた一種の禪味を帶びて居る事を考へて、西洋人の趣味嗜好と異なる點をも究めねばならぬ、斯の如くにして置て、そうして女子の流行服裝に就て、批評するのが秩序であろうと思ふ。

△四個の理由方面

近年女服の改良といふことが絶叫されつゝあるが、是には四個の理由方面があります、それは如何いふ理由であるかと言へば、

一、衞生を根底にした理由

二、美的方面を根底にした理由

三、西洋風に摸倣したもの

四、歷史的に根底を定めたもの

であります、で此衞生を根底にしたものは、是れに實用と云ふことも伴ふので、運動にも便利であるとか

言ふ理由もある、美的方面を根底にしたものは、總て美術上から割出したので、此服裝は外形の美、活動の美が標準であつて、多くは毛織物を中心として居る、活動の美と言ふのは翩翻と飜へるのである、歴史的を根底にしたものは、古來の習慣風俗を保存して行くので、急に之を革めるは見苦しいとか言ふのである、摸倣は善惡に係はらず、單に歐風に擬するといふのであるが、今、日本の文物は大抵西洋の摸擬であるのに、特り女服ばかり固く日本の舊慣を守るの必要は無いとか、是ばかりを西洋風に出來ないと言ふ事はあるまいと言ふので、此方面は總て於て議論が強い、斯いふ風で今や女服の改良論は火花を散して爭ふが如くナカ／＼盛んである、是れに向つて直ちに一刀兩斷の即決を與へるのは甚だ難い事であります。

△服裝上の色彩

今の女學生の服裝は形の上に於て一定の標準がない、色彩の配合の上に於ても、日本固有の高尚な優美な雅致を發揮して居らぬ、帶は今日は袴と成つて仕舞て、帶に凝らす趣味がなくなつた、髮も亦然である、在來の樣に頭髮を凝らす所の趣味が無くなつたから、勢ひ色の配合に於て大いに考へる樣に成つたのである、袴を穿かなければ着物を善くするとか、又絽なども通常のでは行かぬ、是れも紋付きにするとか、漸次凝るやうになつて來る、これは社會の富の程度が進んだからと言ふのならば善いが決して然でない、今日女服の色合といふものは頗る派手なものを用ふる、是れを一方から見れば美的思想の發達の樣であるが、精神は決して然でない、此色彩の派手な配合を好むのは、その精神の内部を外部に現はすものである、例へば彼のラブレツターは赤い物に書くのと一般で、赤い色は刺激を與へて人の心を動かすからである、夜會の時は薔薇の簪を挿す、これも戀を顯はすのである、菫は謙遜を顯はして、又一種のハイカカラである、

十字架を胸に吊すのは、信仰を顯はすので、總て內部の精神を裝飾の色彩に依つて外部に現はすのであります。

△衣服の色彩は其人の精神

着服の色彩は、その人の精神を現はすものであることは心理學上の動かぬ議論である、元來日本人は結婚の際などは、白無垢だとか、綿帽子だとか、都て白いものを用ひます、是れは白色は人間をして質素で、而して潔白なる事を顯はさしむるのである、又黑色は沈着せしめるものであるから、不幸の場合などには多く黑い色が用ゐられて居ります、之れに反して前にも述べた如く、赤は頗る派手であつて、ラブレッターなどに用ひても、大いに刺激を與えるものであるから、子供の外には餘りに赤い色を用ひない、であるから賤業者、醜業婦などは、比較的この赤き色彩のものを多く用ふる、赤は兎に角淫靡な色である、又雜色——即ち赤でもない青でもない雜色の色は、西洋ではシンプルの符合としては、決して用ひぬのである、これは獨り人間ばかりではない、植物でも甚だ忌むので、雜草は大抵雜色である、で、雜色は正しい色としては用ひられて居らぬ、否、用ふべからざる色であります、然るに人の氣を引く爲めとして、色々と雜つた色彩を用ふるのは甚だ宜しくない、如上の色彩を連想しても、種々なる色合ひの彩られた派手な服裝は、一寸見ても眞面目でない、穩當でない人間であることを思はしめるのであります。

△雜色の時代

頭髮も昨今流行する束髮には、簪を用ひないからリボンを用ひて居るが、其リボンも近來は漸次と雜色の

ものを用ふる樣になつた、元來頭の飾といふものは人間の氣を迷はすものである、今日は服裝から頭の飾りまで何でも皆な雜色にしなければ滿足しない、袴でも然である、從來は海老茶なれば海老茶一と色を着けたのも、今日では袴の裾へ白の浪形を縫ひつけると云ふ樣な有樣であります、總て斯樣な服裝が今日流行る女學生の風で、白粉なども一時八釜しい問題で有りました、是も學校の制裁などもあつて、白粉を用ひぬ者もあるが、或る一部の上流社會の女などは、ナカ〱盛んに白粉を使用して居る、此頃の女學生は白粉を用ひぬ代りとして大抵香水を用ふる、斯いふ風で今日女子の風俗は日一日と贅澤になつて來て居る、是等の奢侈の風は特り女學生のみに止まらずして男子にも及ぼし、往々男子がリボンを用ひ、雜色の服裝を好む樣になつた、實に今日は雜色の時代である。

△衞生上の矛盾

今の時代の流行は甚だ矛盾して居る、道理に合はぬ事でも世人の嗜好に投すれば流行るのである、で此矛盾を捨れば善い方面に向くのである、例へば袴（女學生の）の如きも、近來は女子が丈を高く見せ樣として、無暗に上の方へ着ける、腰へ着けないで胸へ穿く、是は胸膈に異動を生ずる基であつて、衞生上から言ふと甚だ善くない、又筒袖は輕便で働き易くて、且つ衞生上にも、總ての點からも善いが、更に美點がない、日本では袖の美は布片の丈けにある、この振袖と云ふものは優雅なる美觀を示すものであります、これを約めて筒袖にして仕舞へば形ちの美といふものが無くなる、服裝の美點を殘して、衞生上實用上にも善いと云ふ事にするに付いては、其袖の布片に何れだけを殘すのが適當であるかと云ふ事を考へなければならぬ。

△形の美と色の配合

前にも述べた如く、服裝の色彩に依つて、其人の精神を顯はす、若しその色彩が人間に淫風を盛んならしむる場合には、如何なる美的の色彩でも之れを禁じなければならぬ、歷史上から考へても、女の服裝は曲線を描いて居る、であるから流行の服裝が人の氣を引き付けると云ふ事を考へねばならぬ、又然いふ惡い點と善き點とを看破して、大いに警戒するのが必要であろうと思ふ、歐羅巴でさへも人の知る如く婦人の服には、胸にワクを入れ尻にもワクを入れる、是等は識者の批難を受けて居る、如何に文明國の服裝でも、斯いふ流行は模倣しては善くない、併し歐羅巴の婦人の輕快活潑なるところは眞似ても宜しい、或西洋婦人は嘗て斯いふ事を言ふた、日本の婦人は顏の先はかりに注意して、外の部分は少しも構はぬのは間違つて居ると、西洋では下婢でも用が濟めば體操學校へ行く、是れは美人になる爲めです、體操をやれば姿勢が正しくなる、動作がよくなる、即ち美人の資格を備へるのである、日本婦人のやうに顏の先ばかりでは行かぬ、斯いふところは須らく歐羅巴風を模倣すべしである、西洋婦人は槪して動作の美が顯はれて居るが、日本は此美點が無い、その代りに色彩の美が發達して居る、着物の縞柄などに至つては、日本ほどの美は殆んど世界に有りませぬ。

で、前にも述べた通り、流行の服裝には兎角矛盾の點が多い、道德にも衛生にも、實用上總てに於て矛盾して居る事が多いのである、此矛盾して居るところは宜しく矯正して行かなければならぬ、畢竟人間は模倣であるから、その惡い點は充分に直さねばならぬ、私は目下の女學生の流行服裝に就て、敢て歐風に模倣するのを惡いとは言はぬが、その矛盾の點を矯正して行くのが必要であろうと思ふ、又社會の木鐸を以

て任ずる人達は、假令歐風の流行であらうとも間違つて居る處――善くない流行は充分に矯正されるのが責任であらうと思ひます。

女子體美論と其の實行

巴里文科大學教授　ヘンリ、マリオン

▲敎育に於ては不必要なことは一つもない、敎育は人を完うする道で、言を換ふれば、完き人を作る道であるから、苟も此の目的に歸するものは如何なる小事と云ふと雖も、また尤たるを失はぬものである。

▲偖乃で敎育は完き人を作る道であると云ふから、人の凡ての部分を養成して、其の進歩發達を期して往かねばならぬものである、是に於て乎英人の所謂 head, heart, hand 即ち頭と心と手との敎育と云ふもの、必要が起るのである、今日の敎育者は之を知育、意育、體育と云ふ。

▲余は今茲に手の敎育に就て語らうと思ふ、今まで人々は餘り重きを茲に置かなかつたから、尚更ら之を論ずるの必要がある、茲に手と謂ふは身體全體を指すので、知識と意志との精神的二大能力を運用せしめんが爲に必須缺くべからざる機關である、體力が缺げて居るときは、腦の力も心の力も、充分働きをなすとは出來ぬものである。

▲手の敎育所謂體育なるものは、今日まで女子には殆んど不必要のやうに思はれて居つたのである、其の原因は種々あらうが、女子の社會的天職を認めなかつたのが其の原因である。

▲尚一歩を進めて何故女子の社會的天職を認めなかつたのであるかと云ふに、そは今日まで女子の生活

が東洋に於けるが如く閨門蟄居的生活なると、西洋に於ても今仍慣座惰性的生活なるとに職由することであらうと思ふ。

▲幸にして二十世紀の今日に至りては女子の生活は一方より衛生の進歩を利用し、他の一方よりは自由の進歩を利用するやうになつた、今日の婦人は昔日の婦人に比して確に言動の自由を得て居る、乍然教育が未だ其の生活の改良に効を奏して居らぬ、就中體育の方面より見て然である。

▲余は體育の必要は女子に取りて男子よりも薄いと云ふ理由を認めぬ、成程女子は概して纎弱である、然し纎弱であるから、尚一層之が強固にする必要があるのではあるまいか、男子の如く勞働的生活はしないにしても、天の賦與したる所を充分發達せしむることは必要でないと云はれぬ。

▲體力と健康とは凡ての生物に通じて絶體的必要物である、女子は人生の花である、人界の美である、愛の源である、情の泉である、故に此の美なる者に取りて體力と健康とは尚一層必要である。

▲況や其の美は子々孫々に傳はるものとするならば、之を傳ふるの任は多く女子にある、故に此の方面より見て女子の體育は、尤も必要なるものと云はねばなるまい。

▲若夫れ健全なる精神は概して健全なる身體に宿ると云ふ眞理と、識徳と云ふものが如何に高尚なるものであつても、體力の之に伴はざるときは社會に對して充分の働きをすることは出來ぬものであると云ふ事實を思ひ合すれば、才色と淑徳との發揮を社會に求めんとするとき、如何程體育が必要であるか分らぬ。

▲茲に想到らざる者は、初めより女子を輕蔑し、社會に對しては先天的に何等の天職なきものと視倣して居るからである、之を女性蔑視論者と云ふべきである、古來此種の論者は澤山あつた、今日に於ても澤山あるのを見れば左程珍らしいとも云はれぬ。

▲乍然.現今の有識者就中科學者は、此等の論者と着眼點を異にして居て、婦人は其の美質缺點を子孫に傳ふるといふ理由に於て、自然陶汰の最も大なる機關である、ダ氏以來科學者は女性淘汰の必要を認めぬ者はない、而して女性が此の自然淘汰を行ふに當つて、其の最も與つて力あるものは第一體格、第二德操、第三知能と云ふ順序にて、此點に於ては知能が一番其の力の微弱なものであると云て居る。

▲進化論者の說に據れば、自然[天性]は民族の利益を計るものであると云ふ、而して民族に關する點に於ては、如何に才學ある者と雖ども、身體組織[體質]の微弱なる者は殆ど何等の効をも及ぼさぬと云ふことである、蓋し其の子孫は健康の一大缺陷により數代を出でずして亡びて了ふ。

▲之に反して體質健全にして充分體質を備具して居る者は、設令才學を缺いて居ても、國家の爲に健強美大なる子孫を提供するから、系統斷絶の憂なくして、子々孫々の知識が無限に發達し、國家百年の大計上如何程大切であるか分らぬ、此種の婦人は師範學校を卒業したる生徒や、檢定試驗に及第したる女子などに比し、其の國家に補益する點に於て數層優つて居るものである。

▲世人の眼孔は女子に就て此の如き點にまで透徹して居らぬのである、故に女性蔑視論を吐いて得々威張つて居るのである。

▲論者或は曰はん、體力體美の理想、結構は結構であるが、貞操を斷頭場裡の露と消失せしむとまではゆかぬとしても、之を犧牲に供して了ふやうな憂はあるまいか、云々と、如何にも若し目的を誤るならば、此の如き憂もあるかも知れぬが、然し余は決して斯くまで體力體美を主唱するものではない、且之を年若き女子を柔弱に育てる事に比して見たならば、其の弊害は數等すくない方である、自餘の議論は姑く措き、兎に角余は體美體力を重んずるとは云へ、決して之が爲に容貌美を婦人第一の德となし、自ら美神の信仰

者とならんと欲するのではない、又決して之が爲に婦人をして悉く肥滿なる一種の女傑となし、スパルタ女子の角力場裡に力量を競ふが如きを理想とするのでもない、唯だ女子の天性を充分發達せしめ、其の社會的本分を竭すにも、國家の爲に健强なる子孫を作るにも、好適するに至らしめんと欲するのみであるから、論者の言は全く杞憂に過ぎない。

▲然し右は體育の理論とも云ふべきものであるが、愈々之を實行すると云ふ場合に至つたならば如何にすべきかと云ふのが、自然の順序によりて起り來る問題である、余は今玆に實行の細目に亙つて一々申述べることは出來ぬが、然しながら少くもその二三を掲げて語らなければならぬ、乃で先づ第一に必要なるものは、

▲空氣である、空氣は生命の養料である、生物の因つて以て活きて往くところの本源である、故に之を人間に取つて考へても、人生第一の養料と云はねばならぬ、空氣を屢々とりかへなければ、呼吸が出來なくなり、酸素の缺乏によりて窒息して了ふことは、誰でも知つて居る所である、之を知つて居るならば、之を實行するが爲に家庭に於ても學校に於ても、空氣の腐敗せぬやう、若くば屢次之を新鮮ならしむるやう有らゆる方法を取らなければならぬ、其の方法まで一々書き記すには及ぶまいと思ふ。

▲次に室内に於けるばかりでなく、戸外に出で、新鮮なる空氣を呼吸すると云ふことも極めて必要である、庭園に於て或は遊戲するとか、或は花木培養の勞を取るとか、休暇などの節は遠足して、山に海に遊ぶだとか云ふことは、女子に於ても其の身體、其の境遇、及び其の淑德の許す限り行はなければならぬ。

▲處が女子は往々古來の閨門的生活に馴れて了つて、殆んど習ひ性となり、終日一室に座して、或は針仕事をするとか或は小說的讀物を讀んで居るのが多い、或は閨門深く閉籠つて人の前に出ぬのみか、戸外に

一寸出ることさへもいやがる女子がある、是れが洵に女子の一大弱點で、其の弱點は健康に取りて大なる害になるものである、此の如くしてどうして體美體力の立派に備つた婦人が出來やうか、然り、光りを見ず、空氣を吸はぬ婦人は顔色蒼然、青菜に鹽と云ふやうな有様で、人間の生氣もなくなつて了ふ。次に

▲睡眠と食事である、先づ食事の方から語らう、女子にも菜食ばかりでなく、大に肉食の必要がある、勿論其の年齢にもより、其の勤勞にもより、其の職分にもよることであるが、體力氣質が弱いからとて、全く肉食を絶つと云ふことは餘り感心は出來ぬ、肉を其儘食することが出來ぬならば、肉汁なり、ソップなり作つて飲むことも出來る、然し富の問題、生活の程度問題に關聯して居るときは仕方がない、玆には肉食が出來る家庭の女子に就て言ふのである。

▲倘又肉食をするに於ては、尚更に胃の状態の健全を保ち、食慾の亢進を促すことを忘れてはならぬ、此は肉食者の必要條件である。

▲食する時間に就ても頗る注意を要するので、餘り長きに過ぎず、餘り短きに失せず、其の中を取つて往かなければならぬ、如何に富豪の家庭とて終日食ひ通しと云ふやうでは大害である、然し又如何に學校的生活、寄宿舍的生活なりとて、汽車的速力で食ひ了ると云ふのも惡い、今玆に一定の規則を立てると云ふことも出來ぬが、然し二十分間としたならば、大抵凡ての場合に於てよろしからうと思はれる、

▲食するとき無言を守ると云ふことは、餘り感心せぬことである、或る寄宿舍に於ては此の事に就ては餘りに嚴重に過ぎるところがある、成程食しながらペチャクチャ饒舌ると云ふことは感心せぬが、然し絶體的沈默を命令的に守らしむると云ふのは、餘り酷に過ぎる話で、天性にも又衛生にも背くことである、況してや年若き女子の如き、尤も談笑を好むものであるから、尚更さう無理に壓抑すべきでない。

▲睡眠に就ては人々多く女子の餘りに眠り過ぎるとを、非難するが、然し今日の衛生論者は寧ろ反對の說を立て丶居る、勿論睡眠は其の期間の長からんよりは、其の心地のよからんことを期すべきであるが、然し女子は重に神經質であるから、出來得る丈け安眠せしむるの必要がある、ドクトル、ロシャール氏は十一歲までの女子には少くも十一時間、十一歲から十五歲までの女子には九時間、十五歲以上の女子には八時間眠るが好いといふて居る、如何にも安眠が出來るとするときは、是れで充分である、然し余は其の日を醒すときには其の自然に任せることを希望するものである、人爲的の方法は始終苦しく且いやな心地をなさしむるものである、此の方法は試驗などを受くる時期に達したとき用ゆる筈である。

▲又身體を淸潔にすると云ふは、男子に取りても必要であるが、女子に取りては、尙更必要である、衛生論者は此點に就き十二分にも其の必要を論ずるのである、コッペ氏の曰ふには「婦人にして不潔なるは世界最大の不潔物」であると、然しチュパンル氏の曰ふが如く、餘り飾過ぎると云ふやうになつてはならぬ、幸にして此點については世の母たる者はよく注意して居る。

▲昔は潔癖を以て虛飾の如く視做し、多少之を罪惡視した傾きがあつたけれども、今日では此點に就き、餘程進步して來たと云つてもよろしからう、潔癖は實に或る程度まで極めて必要である。

▲衣服に就ては女子に多く語る必要は無からうと思ふ、又此れは體育の方よりも美育の方に關係して居るものである、然し衛生の方面から見て、衣服の汚れなく、綻びなく、又切れて居る所もなきやうに留意すべきは勿論である、就中直接肌身に觸れるものに汚れなからんを必要とする、多くの女子は衣裳其物の美をのみ希望するが、此れは誤りである、衣服の用は寒暑風雨を凌ぐのに在るから、衛生上身體に害を來たし、病を起さしむるやうなことなきやうに注意すればよいのである。

▲尙姿勢に就ても留意しなければ、身體の發達上大害を來すものであるが、斯く細目に亘つて一々之を語ると云ふことも出來ぬ故、兎に角如上の數點に就きよく注意して之を實行するやうに願ひたいのである。

▲述べ去り述べ來りて爰に致れば、體育の理論と實行との大要は誰にも了解せられ、又誰にも承認せられて異議を申立てる者はなからうと思ふ、余は體育の實行點に就ては如何なる女子にも行はれ易き事をのみ掲げたのであるが、尙此の方面に於ては體操、遊戯、舞踏等の事もある、此は別に稿をあらためて語らうと思ふ。

將來の女子教育に就て

寺田勇吉

教育の成功は獨り學校教育にのみ賴るに非ずして、家庭及社會教育と相須つに非ざれば到底得て完全を望むべからず。元來教育は人をして日進の社會に處し、適切なる生活を營み、男女相共に其本分を盡し、小にしては一家團欒の家庭を作り、大にしては國運の伸張を骨子とするものなれば、是に適應する人物を養成すること最も必要なり。現下の教育は果して能く是に適合するや否や。

日露開戰以來、老幼男女の別なく意を戰局の發展に注ぎ、各應分の力を盡せり。故に今回の皇軍は其實我が同胞四千五百萬總出陣の戰爭なりと謂ふも可なり。此の戰爭たる我邦開闢以來の大戰にして、又世界開闢以來文明的の大戰なり。我邦にして一朝若し露國に敗衄を取らば、波蘭人、芬蘭人、猶太人の覆轍を踐み、壓制を受くることとなしとせず。然るに難攻不落の旅順口も既に開城し、奉天、鐵嶺も占領し、對馬

の大海戰にて敵を全滅し、聖天子殊に宏量の處置を垂られ、旅順及大海戰の敵將に名譽の降伏を與へ、四萬餘の捕虜を收容し、强大國を以て世界に自任せる彼に對し連戰連捷せるは、是我邦二十世紀の劈頭に於て儼然たる一大强國と爲り、五大强國を變じて六大强國と爲せしことを世界に向て宣言せしものなり。露國は國大に、人口多く、兵勇なるを以て傲然世界を壓す。是を以て歐米諸列國は彼の半野蠻國にして、時わつて雄大なる蠻勇的勢力を逞するを恐れ、日露戰爭以前に於ては常に敬遠主義を以て之を迎へ、遣使贈物、其意を損せざらんことを努めたり。露帝は玆に至りて益々增長し、今や其態度世界の大王を以て自認するに至れり。然るに皇軍は破竹の勢を以て常に之を破る。世界各國の驚嘆讃賞を爲すも亦宜なりと謂ふべし。然りと雖も是れ武的戰爭の捷利にして、教育、經濟其他社會制度に至ては未だ以て誇るべからず。試に之を數字上に對比せば、恰も西洋諸國の十は我の一に於けるが如くなるべし。

一國の文明は唯に軍艦、師團、學校等の數量の大を以て眞の文明と謂ふを得ず。眞の文明は其國內各種の機關互に相調和し發達するを要す。我國教育の如きも、外觀上著しく發達せるは明かなる事實なり。試に東京帝國大學附近を散步し、宏壯なる煉瓦建築の參差として櫛比するを觀れば、宛然身を「ケンブリッヂ」「ヲックスホート」の側に置くかと疑はしむ。吾輩は嘗て學事視察として足跡殆ど全國に普く、山村水廓到る處學校建築の壯麗なるものを觀たり。高等女學校の如き今より十年以前は全國に僅々十二校なりしに、今や九十五校に達し、十年間に十倍に進めり。然とも飜て其內容を精査せば、果して彼の外觀の進步と共に發達せるや否や。校舍設備の完全は難しとする所、而かも金を投ずれば尙ほ之を建設することを得ん。完全なる精神教育を施すに至りては固より容易のことに非ず。

我國は軍事以外に於ては確に歐米諸國に比して未だ充分に進步せざること明かなり。其原因那邊に歸すべ

きか、吾輩の觀る處を以てすれば、家庭敎育の進步せざることと其一大原因たることを信ず。何となれば一家は即ち一國の基礎なり。幾家族集合して終に國家を組織するものなれば、一家の富は即ち一國の富と爲り一家庭は一國の細要素なる故に、若し家庭にして圓滿ならずんば國家は得て圓滿なるべからず。歐米文明諸國の家庭を見るに、其進步せること羨むに堪えたり。是れ吾輩一個の私見に非ずして親しく彼の地に遊ぶもの丶同感する所なり。英國の今日を致せる基因は何れに存せるかを問はゞ、全く家庭敎育の發達に因るものなるを知るべし。然るに家庭敎育の發達せるは獨り英國のみならず、獨逸の如き、佛國の如き、米國の如き皆然り。而して家庭善惡の由て起る所は如何、其責一に主婦に歸せざるべからず。主婦にして敎育あり思想健全にして善良ならんか、即ち家庭善良と爲り、是に反すれば家庭亦反す。未だ一般家庭善良ならずして一國眞の文明國たりしことを聴かず。

邦人動もすれば我邦を以つて眞の文明國と認むるものあるべしと雖も、未だ半野蠻國たり。眞の文明國たらんには、其根元たる賢母良妻を養成せざるべからず。若し此點に於て考慮せざれば、今後幾多の歳月を經るも眞に文明の域に達すること難かるべし。彼の露國の如き、家庭敎育に至りては感ずべきの點少なからず。又獨逸國の如き、婦人にして湯水の如く麥酒を飲用するも、喫煙は露國婦人を除くの外、歐洲の婦人社會にては多く見ざる所なり。露國婦人は往來又は汽車中に於て屢々喫煙するを見るべし。此等の風俗は半野蠻國を證するものなり。此點に於ても、我邦も亦露國に讓らず半野蠻の風習を脱せざるものといふべし。令夫人と稱せらるゝものにして尙且吸煙するのみならず、吸付煙草を爲し、賓客に細菌を傳播す。如何に親密の間なりと雖も、是れ愼むべきの一事なり。獨り自己の害のみならず他人に及ぼすことも亦大なり。故を以て國運の進步を圖らんとせば、先づ女子敎育に力を盡くし、良妻賢母を養成することを努めざ

るべからず。此語たる簡にして意長し。世人能く之を唱ふも、能く之を解釋し、之を實行するもの稀なりといふべし。吾輩の將來女子教育の目的とする所亦此點に外ならざるなり。

賢妻良母の標準に向て女子を教養せんと欲せば、先づ家庭の研究を要す。元來家庭は如何にして發達せしものなるか、人類は他の動物のごとく單獨孤立にして發達するものに非ず。人類若し孤立にして己の欲する所を行ひ他を顧みずんば、紛亂絶ゆること無し。人類の社會を組織するや、談話ありて相互に思想感情を述べ以て愉快に生活を爲すことを得。美を感じ、快を知るも、之を語るに人無く默然として獨居せば、其不愉快實に甚だし。吾輩嘗て某と東京に於て意見を異にし爭論したることあり。其後某地に巡回し、旅亭に泊せしに、談するに友無く其無聊に窮したり。偶々客あり來り訪ふ。會すれば即ち嘗て爭論せしもの、彼は今其地に住せしなり。依て某地の狀況習慣等を談じて愉快に一夕を過ごしたり。此の如く人は社交的動物なるを以て、決して單獨孤棲を許さゞるもの、是れ家庭の依て起る所以なり。

抑も家庭の成立するや、茲に夫婦ありて兩々互に相受け事業を爲し、苦樂を共にし、子女を養育し、以て生活す。茲に於て分業行はる。即ち男子は外部に向て事業を爲し、女子は内部に於て家業を爲す。若し此分業無からんか、男子終日外部に於て勞作し、食物の料を得るも、主婦家庭に居らず、之を保管せざる以上は、盗賊の厄に逢ふこと必せり。男子の勞働に依りて得たる結果は、主婦家に在りて之を保管するは一つの分業なり。故に家庭を圓滿に作らんには、一夫一婦道徳上の秩序を正うして各自の幸福を進むること肝要なり。夫は妻を娶るが爲めに幸福と爲り、妻は夫に嫁するが故に幸福と爲る。即ち一夫一婦は社會の根本なれば、樂しき家庭を組織して、家庭は愉快なる休息所たらしむべし。「モルトケ」、「ビスマルク」其他英雄豪傑の出でたる家庭に於ては、多くは皆主婦の力に依り圓滿にして愉快なる休息所たらしめたり。

本邦に於ける英雄豪傑の家庭も主婦の力與つて大なることは歴史上明かなる事實なり。

然るに現下日本の中流以上の社會に生活する家庭の主婦は、概ね恰も夫の臣下の如し。即ち夫、外より皈れば、妻は夫に向て「お皈り遊ばせ」と禮す。夫は「ウン」と應ふ。若し主婦外より皈り、妻は夫に對し「只今皈りました」と禮せば、夫は「ウン」と謂ふのみ。夫は妻に向て「ウン、ウン」と謂ふのみ。恰も主君と臣下の如し。故に夫は家にありて若し主婦の行爲に不滿在れば怫然として直に家を出づ。之に反して主婦若し夫の許を得ずして家を出づるあらば、家庭の紛擾忽にして起り、遂に之か爲めに妻は離縁せらるゝに至るべし。しかれども主婦より夫に向ひ離縁するが如きは殆ど無かるべし。世人能く男女同權を口にし、夫にして妻を離縁せば、妻も亦夫に對して離縁すること能はざるの理なしと爲すも、事實上男女同權なるもの無く、而して圓滿なる家庭を作るには、夫は家の長者として置くべき必要あり。之に反して若しも一家内に二王、即ち更に主婦の女王あり、男女同權行はるゝときは、其家内は日として喧騒絶ゆること無けん。泰西にては男女同權なりと云ふ人あるも、吾儕は其實際を目擊せしに、矢張日本に於けるが如く、主婦は夫に從ひ、夫は即ち最上命令者にして、主婦は之を遵奉して行ふ迄にて、決して男女同權といふを得ず。唯我邦に比して主婦の待遇厚きを見るのみ。

概して日本の婦人は歐洲の婦人に比すれば意氣地無きものゝ如し。加ふるに男子は女子を輕蔑し、其極女子は男子の玩弄物たる傾向あり。我邦に於ける斯る男尊女卑の弊風は封建制度の餘弊といふべし。今日俄に之を矯正せんこと固より難し。然るに今日諸學校に於る女學生の狀況を見るに、華美なる衣服を着け、高價なる袴を穿ち、髮は束髮に（花月卷最も流行す）眼鏡を掛け、英語を操り、困難なる書物を讀み、理屈を云ふ。此の如く外觀的裝飾の美を競ひ風潮を追ふもの未た賢母たるの資格なし。昔日の箱入娘令夫

人の狀態亦望む所にあらず。今日は男子と提携し活動することを得る婦人を養成せざるべからず。文明的教育を受けたる婦人ならざるべからず。斯る婦人は今後の社會に於て必要なり。

又女子は身體の點に於ては男子より虛弱なりと雖も、社會を改良する上に於て其勢力大なるものなり。即ち婦人一滴の涙一片の笑は能く人を支配し、人心をして善にも惡にも變化せしむ。勇氣勃々たる有髯兒の如き男子も、婦人一言の爲めに或は泣き、或は笑ひ、或は怨み、英雄を一擒一縱翻弄するの力あり。之を大にして國家をして文弱の弊に流れしめ、或は尙武の氣象を振起せしむ。從て社會風俗を改良し品行を矯正するも亦婦人の力に屬す。故に有力なる婦人奮起せば、即ち國家をして隆盛ならしめ、眞の文明國たらしむること決して難きにあらず。男子は能く婦人の此勢力あるを利用し、風俗を改良し、品行を矯正すべし。若し此勢力を濫用せば、却て社會の風俗を亂し、遂に國民をして柔弱に陷らしむ。要は其利用方法如何に在り。

新聞紙上に散見する處に依れば、「ステッセル」將軍の旅順開城の念を發せしは、其夫人の勸めに原因せりと。有形的の側より推測するも、其夫人の勢力實に大なるを知る。即ち旅順口戰爭の繼續より生ずる彼我何萬の死傷兵を未發に防ぎ、是が攻守に要する數億の金を消費せずして止むを得たるは、僅々一夫人の熱情より發せし福音なり。何ぞ其の結果の偉大なる効力を奏せしや。元來男女相提携し相合して始めて人間の獨立を爲すことを得べく、文明の域に進むことを得べし。一見せば男子は獨立し得る如くなるも、實際は然らず、即ち衣服、食事に至る迄婦人の手を煩さざるべからず。甚だしきは、夫の夜床に就くに當り、「寢るよー」の一言を發すれば、妻は直に夜具を以て之を蔽ひ、恰も小兒の手數を要するが如し。殊に夫の在宅の際は家婦の手を要すること非常にして、無益に時を費すこと多し。男女共自己の身邊に屬する所の

ものは、自ら之を處理するの習慣を養成すること肝要なり。西洋に於ては此點に對し實に感ずべきなり。男女の區別なく、皆自ら之を處理す。邦人の泰西に遊ぶ男子其感化を受け、皈朝後自己の身邊を處理するに他人の手を煩はさゞるも、暫くして主婦は一々之れを辨ずるを以て、夫は非常に好意に堪えざるの情を生ずるも、歸朝後二三ケ月を經過せば、羽織、帽子、袴、下駄等に至る迄、一々之を煩はして、元の本阿彌と化し去るなり。歐洲の兒童の學校に通學するものは、自己の書籍、帽子、靴等に至る迄皆之を處理して敢て家人を煩さず。我邦の兒童は出入共に他人の手を要し、且つ本を失へり、鉛筆を失へり、草履を紛失せりと言へば、母は直に之を求め授く。其煩思ひ遣らる。此自己の身邊を處理する習慣は、獨り男子のみならず、男女共に之を養成せざるべからず。

本邦人は一般に勞働することを厭ひ、且つ懶惰なり。近來婦女子も盛に體操を實修するに至れるは大に慶すべし。懶惰を去り勞働を好むは好き習慣なり。然るに身體を強健に爲すは決して體操のみに非ず、勞働も亦身體を強健ならしむるに必要なるに、古來我邦にては職業の貴きを知らず、勞働を賤めり。現に地方農家の女子出京遊學し、女學校に通學せるもの、卒業後如何なる希望を有するか、家に皈りて農を營み或は農業家に嫁せんとする希望を懷くもの少く、多くは俸給に依て衣食するものに嫁せんとし、或は文學者の許に結婚せんとす。此等の現象も亦職業を賤しみ、之を輕んずる弊風として見るに足る。西洋にては恰も日本と正反對なり。西洋婦人の體格强健なるは、是れ一朝一夕のことにあらざるべし。即ち體育を奬勵し勞働を好むの結果、四肢五體に力を生じ强健に至りしなり。

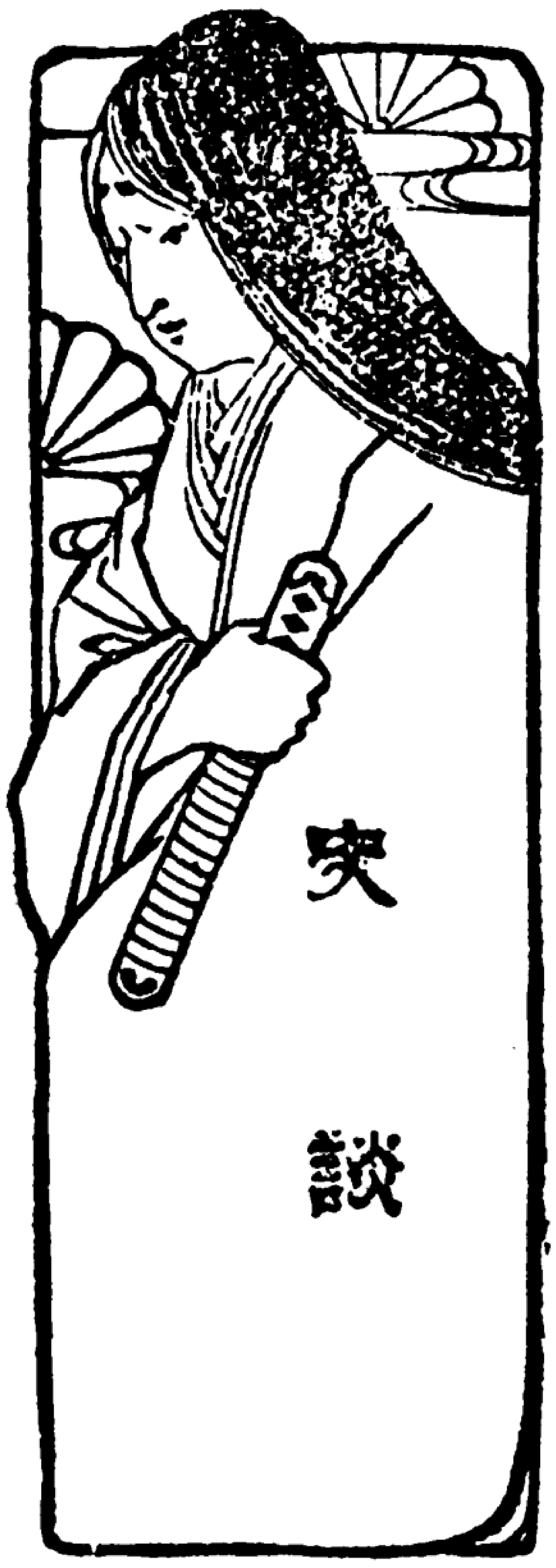
試に本邦婦人にして西洋婦人と交際せば、其握手の際力量の大なるに驚くべし。獨り女子の然くのみならず、男子も亦同一に感ずることあり。吾輩嘗て伯林の某下宿屋に宿し、將に皈朝せんとする時、家婦は

熱心なる握手の禮を以てせり。其握力の強大なる、今尚ほ其痛みを追想せしむ。邦人の體格、男女共に惡し。先づ日本婦人の概評を試んか、身長の短きこと、胴の短きこと、首の短きこと等にて、到底西洋婦人に比較すべからず。現に邦人の身體は漸次薄弱と爲るの傾向あり。是れ男子のみならず、女子に於ては一層甚だしきを見る。如何かして身體強健なる女子を養成するに非ずんば、將來日本國民の强健は期すべからざるに至らん。明治三十五年の徴兵檢査に依り、數字上より打算せば、吾人の身長は一ヶ年平均二分宛を減せり。二分は僅少なりと雖も、決して然らず、平均毎年二分宛を減少するとせば、今後二百五十年を經ば、吾人の身體は消滅すべし。

之を體重の方面より論せば、一ヶ年十二匁宛を減す。是れ稍望を屬すべきも、尚ほ向後一千二百五十年を經過せば、又其體量は減じて零の時期と爲ること數理上の事實なり。西洋人は其體量益々增大するに、日本人は之に反して短小と爲り、小量と爲るは誠に悲むべき事實なるを以て、努めて是が健全を計らざるべからず。相撲取なる語は少しく語弊ありと雖も、彼の相撲取の如き體格を有する婦人を養成すること望ましきことなり。

婦人の身體をして此の如く虛弱ならしめたるものは、其罪獨り女子のみに在ざるなり。一體男子の女子に對する愛情、嗜好は、孱弱にして蒼白なるものに非んば以て美人と爲さず、故を以て女子は其望に副はんが爲に、成るべく細腰と爲り、大阪地方にては教育ある嫁期の婦人にして、一日二回の食事を爲し、以て一回の食量を減じ、日中戶外に出づれば皮膚の日射せられんことを恐れ、夜間を以て戶外の用を辨ずといふ。此の如くして、尚體量を減じ、白色ならんことを欲す。如何に社會の要求に應するとは謂へ、其爲す所、一丁字あるものゝ所爲とは思はれざるなり。

（未完）



小楠公（三）

文學士　大町桂月

第四　瓜生野

興國は七年まで續きて、正平と改元す。先に正成義貞相踵で死し、藤房亦身を雲水に隱し、尋で先帝崩御ありて以來、こゝ五七年は夢の如くにすぎ去りぬ。南北朝の對峙は依然として、尊氏の專横は日に甚しく、諸國の小迫合には一勝一敗あるも、殆んど南風に勢を添ふるに足らず。正行も輕兵を以て時に夜討朝駈を爲し、北軍を挑むの外、何等の目立ちたる働を示すに及ばずして、疾く既に二十の歲を迎へしが、生來虛弱多病にして、自ら夭壽の甚だ長からざるを覺るにつけ、獨り憂愁にたえざるは、南朝の行末なり。半宵私かに劍を撫して、天運のはかなきに泣きしも數々なりき。

正平二年、正成の十三回忌を畢りし後、正行慨然として意を決し、家士を招き寄せて、一場の軍評定を開きたり。即ち衆に謂て曰く『我畿內に在り、朝敵と境を接するも、未だ兵を擧げざるにより、高德等我を捨てゝ、謀議を與にせざる色あり、耻ぢざるべけむや。且君父の讐、近隣にあるに、徒らに空しく歲を送るは、わが堪ふるところにあらず。如かず。速に襲ひて一戰を決せむには。衆以て如何となす。』と、和田源秀膝をうちて、其擧を快とし『君一たび鞭を擧げなば、和泉河內の群士は、招かずして指揮に應ぜむこと必せり』といへば、安間了願の曰ふ樣、『故判官の遺訓に、二十年の後を待ちて、兵を擧げよとあり、尊氏は統御の才に非るも、未だ主從相諍ふを聞かず。もし一朝事あらば諸將恐らくは、爭ひて戰功を勵まむ。これわが利にあらず。待ちて

數年を經ば、則ち尊氏兄弟、及び高、上杉の諸族等、權を爭ひて相陷擠するに至らむ。其時を以て乘ずれば、必ず勝つを得べきにあらずや。』と、言ふ所一理なきにあらず。正行も强て深く爭はずして、暫く形勢を觀望し居たりしが、熟ら考ふるに、如何にも空しく座視して、なほ數年の歲月を過し去るに忍びず。依りて再び家士を召して、之にはかりて曰く『正行近く數年の間、深く時勢を察するに、父判官の言、眞に掌を指すが如きものあり。されど南朝の政務も、また善しといふを得ず。偶ま我に降を請ふの士あるも諸卿地を惜んで與へず。即ち天下半ば山中公卿の領に歸し、半ば新田以下舊族の邑たらば、新參の新士、或は恩賜の地なきに至らむ。斯の如くば天下又反覆するものを出すや必せり。且我、年をおひて多病、恐らくは生き存らへて六七年を待つことかなふまじ、我今茲二十三歲、先考の十三回忌に逢ひて、冥福既に修め畢りぬ。早く尊氏の堅陣に入りて、命を隕さむこと、先考も深く咎むまじく覺ゆ、諸士以て如何となすか。』と、其言悲壯自ら、一族の心を動かして、弟正時先づ贊し、源秀、了願以下敢て違はず、乃ち一族徒黨のもの誓約狀を作りて、其志を明にしぬ。狀に記するところを見るに曰く、

凡そ身を捨て恩に酬ゆるは人倫の法也。危きを見て命を致すは忠臣の節也。故に先主判官正成、死を戰場に輕んじ、言を子孫に遺して、亡朝を扶け嗣王を護らしめむとしぬ。方今孝子正行、臣たるの道を守り、勇爲の旗を揚げ、身を鴻毛よりも輕んじ義を金石に等しくす。況や家僕たる者、何ぞ志に感じ、功を勵まざらむや。榮辱存亡宜しく正行と相共にすべし。若し其れ此誓に違ふものあらば、神明それ之を罰せよ、敢て辭せざる所也。

と連判するもの百四十三人、陪臣下品等八百九十二人。

正行即ち郎黨を引率し、金剛山下に合して勢を揃へ、先づ河内の賊據矢尾城を拔かむと圖りしが、尊氏之を聞き、小童の分際に小癪なる眞似をなすかな

とわざ笑ひて、細川陸奥守顯氏を將とし、三千餘騎を率ゐて河內に向はしめぬ。其勢八月十四日に藤井寺に着きて、正行の本陣を距ること僅に七里の地に陣を張り、河內勢の寡少、爲すなきを侮りて、物具を解き、馬鞍を卸し、全く油斷して休み居たり。其意蓋し正行の遠く出陣するを窺ひて、徑ちに金剛山下に突進し、後を斷て之を鏖にせむことを謀るにあり。之を探知したる正行は、兵七百を率ゐ、僞て矢尾城に向ひ、菊水の旗いさましく、火を所在に縱ち、威を示して敵を欺き退き、潛かに還りて譽田林を蔽ひ、陣を取りて待ち居たり。斯くと知らぬ顯氏は、矢尾の烟を望みて、正行果して出でゝ彼を攻むるものと思ひ、急ぎ馳せて金剛山に赴かざるを得ざるに至りぬ。急遽の下知、馬に鞍置け、物具せよとひしめけども、太刀を佩く隙もなく、誰が馬ともなく打乘りて、急ぐもあり後るゝもあり、思ひ〳〵に隊伍を亂して、嚮ふところに急ぎしに、かくと待ちたる正行勢は、敵の先驅の譽田林を過ぐる比ひ、叫喚して四方より現はれ出で、楠勢の手並思ひ知れと、初陣の勢勇ましく、暫し入りみだれて戰ひぬ。兵數こそ多けれ、敵は四國中國より驅り集めたる木葉武者、殊には陣列初めより亂れて、將卒の區別もあらばこそ。或は未だ戰はずして京に歸り上るもあり、敵とも味方とも知らぬ士に首落さるゝもあり。全く北軍の大敗に歸して、大將顯氏亦屢ば危ふからむとせしが、命を替へて討死せむと取つて返して防ぎ立つる郎黨ありて、辛うじて身を以て免れて天王寺に奔り去りぬ。正行が腕試しの一戰は即ち此の如くに大捷を得たり。是れ謂ゆる譽田林の役也。

斯くて正行の勢威漸く遠近に振ひ、捨て措き難き勢に立至りしかば、其年の十一月二十三日、幕府愈よ謀議を決し、更に山名時氏を遣はし、兵六千有餘騎を以て、天王寺に顯氏を援けしめたり。顯氏は譽田の敗を耻ぢ、身を以て衆を勵まし、共に神水を飮みて必勝を誓ひ、自ら搦手に立ちて天王寺に陣し、時氏は即ち追手の大將として住吉に陣を張り、頗る

侮り難き勢を示す。正行之を見て以爲らく、先づ住吉を破らば天王寺の後陣は刄に衂らずして潰走するや必せりと。乃ち兵二千を別ちて五隊となし、火を石津在の民家に放つて、徐ろに瓜生野の北より押しよすれば、彼方は山名時氏、亦手を分けでは叶はじと、赤松貞範に八百餘騎を授け、住吉の浦の南に陣して濱の手を防がしめ、土岐、明智、佐々木の面々には總勢三千餘騎を以て阿部野の東西に陣を取らせたり。而して搦手の大將細川氏は、五千餘騎を以て遙か彼方の天王寺に控へ、素破といはゞ荒手を入替へむとする勢凄じ。斯る陣立の間に大手の大將山名時氏は舍弟四人と精兵千餘を提げて、今しも砂烟を揚げて進み寄る先驅の敵に懸合はむと、瓜生野指して繰出し來りぬ。此樣を見たる正行は、かくては我隊を分つことの危きを察し、速に下知して五隊を一手に集めて、遠くより矢を注ぎつゝ殺到すれば、瞬く間に兩軍相近づきて、互に鬨を擧ぐる程こそあれ。敵味方六千餘騎、一度に颯と懸合ひて、思ひ〳〵に

戰ふこと稍半時、暫くありて勝鬨をあげつゝ双方へ引分れしが、見渡せば踏み躙られて、草野に溢れたる死屍、多くは敵兵にして、敵の隊形著しく亂れ、旗色頗る衰へ居るに反し、味方は餘勇凜々、陣沒また甚だ稀也。

山名時氏は切疵射疵七ケ所まで負はされて、馬を降り血を拭ひて、暫し躊躇したるところへ、楠勢の中より、年の頃二十ばかりの若武者、和田新發意源秀と名のりて、小歌を唄ひ悠々と馬を歩ませて進み寄りしものあり。續で一人逞しき法師武者、安間了願と名乘りて、一丈ばかりの鎗を馬の平頸に引き副へて、驅出でたる武者振、何れも尋常の者ならずと見えながら、跡につゞく勢なければ、山名の將卒はわれは〳〵と驚きて控へ居る中へ、二騎は忽ち馬首を回らし、楠氏の手練敎へ與れむとばかりに、前後左右に切り込み突き廻りて、小手のはづれ、臑當のわたり、下反のたゞ中、一分の明きたる所を外さず、矢庭に三十騎打落して大將に近づかむと目を配る。

山名の舍弟三河守、百四五十騎にて横合より取圍まむとすれば、楠勢また數多加勢し來りて、之を妨げ、汗馬の足音地を動かして、いつ果つべしとも見えざりしか、大將山名伊豆守、迚もかなふべき敵にあらずと覺えしが、後陣の味方に加はらむとて、天王寺さして引退けば、楠勢は勝に乘じて追かけ〳〵攻めたて、、三河守以下目立つ裨將を討取り、尙進み行くを、第二陣として阿部野に控へたる士岐、佐々木の軍、しばし支へて防がむとするも、もとより大勢如何ともし難く、列を亂して天王寺へと引退く、一陣二陣此の如ければ、濱の手も天王寺も、大河後にあり、兩陣前に破れたる上は、敵に橋を引かれては一人も生を全くするものなきを知り、渡邊橋指して馳せ集まりしが、橋は狹し、人は衆し、落ちて溺るゝもの、打たれて斃るゝもの、忽ち數千の數に上り、敵軍全く潰えて、生延びしものは幾ばくもあらず、正行は再び凱歌の間に、靜に三軍を犒ひ、傷兵を悱はることを得たり。之を瓜生野の戰と謂ふ。

此戰は十一月二十六日の事にして、氷霜の寒烈譬ふるにものなく、渡邊橋にて溺れたる兵五百餘人、正行急に味方に令して流るゝものを救ひ上げしめ、小袖を脫ぎ替へて身を煖ため、藥を與へて疵を療せしめ、四五日勞りて、之を送り返さむとすれば、多くは皆恩に感激して、歸るを肯ぜず。請ひて正行の爲めに身を抛ちて、忠勤を盡さむことを望み、味方の陣に留り、後四條畷の役に、花々しく正行の馬前に討死して本望を遂げたりしは、蓋しまた得易からざる美談なりけり。

正行は瓜生野の役後、大に兵を練り、兼て尊氏の動靜を探らむが爲に、暗夜備なきに乘じ、短兵輕騎、遽に京師を襲擊せしが、敵は思ひしよりも脆く、尊氏は周章して近江に走り、直義また間道より何れへか脫走したり、此擧正行は迫つて尊氏の夫人を自殺せしめて、尊氏を懲らしゝのみ永く京師を回復して之に據ることを許さゞるの事情ある以て、間もなく兵を收めて去り、尊氏直義又京師に入りぬ。

講義

雨月物語『白峰』

文學士　境野天華

（手引き）この白峰一篇は上田秋成の著書雨月物語中の傑作であつて、平家物語、源平盛衰記、殊に西行法師(圓位上人)自身の作と云はるゝ撰集抄にある事實などを面白く潤飾し、西行上人が諸國巡行の途、仁安三年の秋崇徳上皇(新院)の御陵白峯に詣でた時の事を小說的に書き直したもので其文章は徳川時代の文學中にても特に傑出してゐる、秋成よりも少し後くれて出た彼の瀧澤馬琴なども非常に秋成の文章を喜んだもので、弓張月其外の作に明瞭に其の影響を認めることが出來る。

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黃葉みすごしかたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島が原、淸見が關、大磯小磯の浦々、むらさきにほふ武藏野の原、鹽釜の和たる朝けしき、象潟の蜑が笘や、佐野の舟橋、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は葭がちる難波をへて、須磨明石の浦ふく風を身にしめつゝも、行くゆく讚岐の眞尾坂の林といふにしばらく筇をとゞむ。草枕はるけき旅路のいたはりにもあらで觀念修行の便せし庵なりけり。

あふ坂の關守云々あふ坂の關は京都の東の關所に

なりて往來の人を其處にせきとめて檢査したものであるところから、文章を飾りて秋が來るにも此の關所の番人(關守)のゆるしを得て始めて山々には黄葉をつけると云つたもの、即ち茲處も京都附近一帶の山が秋になりて秋の錦を飾つてゐる其の景色を見逃しかねて諸國行脚と旅立ちたと云ふ意味に見てよい。

鳴海潟(尾張)浮島が原(駿河)清見が關(駿河)大磯小磯(相摸)鹽釜(陸前)象潟(羽後)佐野(下野)木曾(信濃)難波(今の大阪)須磨明石(播磨)は皆昔から歌に能く詠み込まるゝ名所(歌枕)となつてゐる。

〔通解〕逢坂の關守にゆるされて時は今秋となつて四面の山々には黄葉の錦を飾つて居る。都近くもこの通りであるが、諸國の名所々々の秋はどうであらうと例の行脚の心が頻りに動いて、遂にとゞめることが出來ず、都を出て、足に任せ、心のむき次第、旅から旅へ經廻りた、或時は磯邊の眞砂路に縱横に印るされてゐる濱千鳥の足跡を踏みつけて鳴海潟の面白い眺めに心を遣り、(鳴海潟は昔から千鳥の名所としてそれに因んだ歌が多い。)或時は不二の高嶺の氣高い姿に對して頂から立ち上る煙の末を追ふて心も空にあこがれ、(西行の時までは富士に煙が立つてゐた)また其の裾野の浮島が原雲煙漂渺たるあたり、三保松原を前に控えて清見が關一帶の風光に時を移し、尙東の方大磯から小磯の浦つたひにつたふて、紫草生ふと云ふ武藏野の末を分け、果ては陸奥の鹽釜に朝なぎのうら〳〵としたる平和の景を見、出羽に轉じては象潟の漁家點々たる面白い景色を見引き返へして野川の名所佐野の舟橋(利根川に架したる)を渡り、信濃に入りては有名なる木曾の棧橋の名所名所を經めぐりて、至る所に心を留め名殘を惜しんだことであるが、東國の歌枕と云はるゝ名所名所はあらかた見盡くしたこと故、今度は更に西方の歌枕名所を見たいものだと思つて、時は仁安三年の其の秋に葭(蘆荻あし、いゝ、かちるは難波の 枕詞)の花散

る難波河口から播州に入りて須磨明石の浦つたひ淋しく吹き送くる濱風を身にしみ〳〵と覺えて、海を渡りて段々と巡回の杖を曳いてまはりた果、讃岐の國眞尾坂の林と云ふ所に暫時滞留することにした。それは旅から旅に歩るきつかれたので暫時休息したいと云ふ考からではなく、茲にて佛道を修行し觀念を凝さんが爲めに此處しばしの假りの宿を定めた譯である。

この里ちかき白峯といふ所にこそ新院の陵ありと聞きて拜みたてまつらばやと、十月のはじめつかた、かの山に登る、松柏は奥ふかく茂りあひて青雲のたなびく日すら小雨そぼふるがことし。兒が嶽とい ふ嶮しき嶽背に聳だちて千仞の谷底より雲きりおひのほれば、呎尺をもおぼつかなきこゝちせらる。

(通解)斯く暫時杖を駐めて滞留した村里からは近い道程の所に白峰と云ふ所がある其の白峰には新院(崇德上皇)の陵があると云ふ事を云つて聞かした人があるので、一度參詣したいものだと思つて神無月の始め頃白峯の山に登つた。山には松だの柏の木だの森々と生ひ茂りて奥深く出來てゐるその爲めに外の處では晴天で青空が見えて立派なお天氣と云ふ日であつても此處の白峰の附近は絶えず小さな糠雨がしと〳〵と降つてゐるかと思はれる位陰氣で濕りつぽい所である。其の上に兒が嶽と云ふ險阻しい山が後方に聳え立ちてゐて、其の周圍の深い深い千仞もあらうと思はれる谷底から絶えず雲が湧き立ち、霧が湧き上りてゐるので一層陰氣を添えて此の白峰に上りては、立つてゐるほんのまのあたり(呎尺、一尺ばかりの處)も明白には見ることが出來ぬと云ふ恐ろしい怖はらしい物凄い處である。

木立わづか にすきたる所に土たかく積

みたるが上に石を三かさね疊みなしたるが、荊蕀、葛蘿にうづもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢うつゝをもわきかたし、

（通解）其の眞暗らく生ひ茂りた木立の間に一寸した空虚がある其所に土を高くもり立てゝ其上に石を三つばかり無造作に疊み上げてある。それも周圍の荊蕀（刺のある小木）だの種々の葛蘿だのに蔽ひ被ぶされ埋もれ果てゝ見る影もなく荒れて居る狀が實にあさましく、見てゐる自分は悲しさが胸一杯になつて來た。これであらうか、新院の御墓は、曾つては一天萬乘の君と天下の民にあがめられ玉ふた上皇の御墓はこれであらうか、それにしてはあんまりな此の御樣子と悲しいやら情けないやらで、目前の事は心まで雲霧に蔽はれたやうで、此處にあるのは夢であるか、現の實際であるか分別しがたい迄であつた。

げにまのあたりに見奉りしは紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人はかく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし、

（通解）現に自分（西行）自身も曾つて朝庭にお仕へしてゐたことがあるので、其の時現在目の前に此の新院が紫宸殿または清涼殿の玉座に御出御になりて親しく天下の政事を聞いておゐでなされたことも拜見いたした一人である。其の時お仕へしてゐた朝庭の百官達は誰も〱實に賢明なる上御一人と思つて、其の勅命を大切に思つて何れもお仕へ申してゐたのであるのに、今其の御果は此の通り目前に見奉る御樣子であると云ふのは、さて現在見る所が果して實際の事であらうか、夢ではなからうか。

近衞院に禪りましても藐姑射の山の瓊

の林に禁させ給ふを、思ひきや麋鹿のかよふあとのみ見えて詣でつかふる人もなき深山の荊の上に神かくれたまはんとは。

●●●●●藐姑射の山　荘子逍遙遊篇の中の「藐姑射の山に神人あり」と云ふ句から出たもので、天子譲位の後上皇として住み玉ふ仙洞御所を云つたもの。

（通解）此の崇徳院天皇の天子の御位を近衛院（即ち後に見ゆる體仁）天皇に御譲りになりてからは上皇として藐姑射の山の玉の林の奥深く建てられたる仙洞御所を其の御隠居所とは定められ（禁めると云ふのは占領の意で、區域をしきりて他より猥りに侵入せぬやうに警戒したる所を云つたもの）たことであるのに、世の變遷とは云ひながら其の尊とひ御身の果ては意外千萬にも（思ひきや）此の通り大鹿（麋）小鹿の踏み通ふ外には唯一人として參詣に來ることもない此のむさくるしき荊（おどろ、いばら、うばら同じ）生ひ茂る深山の下に玉體を埋めて此の世を去り玉ふたなど丶はどうも考へも及はぬ意外千萬の事である。

萬乘の君にてわたらせ給ふさへ宿世の業と云ふもの丶、おそろしくそひまつりて罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出つるがごとし。

●●●宿世の業●凡て人間が此の現世で種々のひどい憂目に逢ふのは皆、前世で作つた罪過（業）の應報であると云ふ佛説から出た語。

（通解）此の現世では一天萬乘の天子と仰がれ給ふべき尊き御身であつたにしても、それでさへも前世にお作りなされた罪過の報が何處までもつきまつわりて此の通りの始末（罪、こ丶の罪は報酬罰と云ふやうな意）にならせられたのは實に果敢ない人の世の常で致方もない次第だと思はれる。そ

れにつけても其の悲しさ情なさ、止め度もない涙は頻りに流れ出で丶墨染の袂を濡した。

終夜供養したてまつらばやと御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて經文徐に誦しつ丶も、かつ歌よみたてまつる

松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなりまきりけり。

〔通解〕定めし新院は今尚迷執の闇にくれてゐらるるであらう、今夜は終夜此處に御墓の前に侍して供養の爲め念佛讀經をして新院の御靈を慰めてさし上げやうと思つて、丁度御墓の前に平かなる石のあつたのに座を占め、徐ろに經を讀み。又慰めのため歌を一首詠んでさし上げた。

此處松山の下にうちよせてゐる浪の景色は昔其儘のものであるのに、我君の御身は斯くも昔とは變りてもはや現の身にてはなく又昔の玉の林ではない荊の下にこうして埋もれておゐでなさるのは、何と申上げてよいことやら。

なほ心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけん。日は沒しほどに山深き夜のさまたゞならで、石の牀木の葉の衾いと寒く、神清み骨冷えて物とはなしに凄まじきこゝちせらる。

〔通解〕それからなほ後もちつとの怠りもなく、經文を誦して供養をつゞけてゐた。段々と暮れ方に近いて來たので白晝でさへ濕りぽい山中の、増して夕の露はどの位ひどく墨染の袖にふりかゝつたか、丁度今、ひが暮れて、夕陽が沈んだばかりと云ふ頃、此の深山幽谷の夜の寂しさは何とも云へぬほどで、其處に自分は石の寢床の上に木の葉の衾を被て夜を過ごすことであるから、寒さは寒し、心は澄み返へり、骨まで冷えきりて來て、何事とはなしに物凄い感を起こして來た。(此の所、下の新院の怪靈の出現を記し出す準備と見るべき文章の書き振りを注意せねばならぬ。)

漢文講義　阿井笛村

春日局（中村和）

局初名阿福。齊藤利三女。英敏有膽智。其在夫家也。夜有劇盜數人入焉。局揮刀立斬二人。餘皆駭散。局嘗夜歸。過平河門。閽人曰。夜間出入非監察之命不能也。局自稱名。閽人以白大閤。大閤曰。無監察之命。天照大神不可入焉。況於春日乎。局大窘。竚于門外。時方隆冬。寒氣刺骨。久之命下。然後得入。局感其守法嚴正。翌朝遣人遺點心謝之。

（讀方）局初の名は阿福、齊藤利三の女なり、英敏にして膽智あり、其の夫の家に在りしとき也き夜る劇盜數人ありて入る焉、局刀を揮ひて立どころに二人を斬る、餘は皆な駭き散じぬ、局嘗て夜歸り、平河門を過ぐ、閽人曰く、夜間の出入は、監察の命あるに非れば能はざる也と、局自ら名を稱す、閽人以て大閤に白す、大閤曰く、監察の名無くんば、天照大神も入る可らず焉、況や春日に於てをや、局大に苦しみ、門外に竚む、時方さに隆冬、寒氣骨を刺せり、之を久しくして命下る、然る後入ることを得たり、局其の法を守ること嚴正なるに感じ、翌朝人を遣はし、點心を遺りて之を謝せり。

（譯解）春日の局と申す人は古今に有名なる賢婦人で、德川三代の將軍家光公の乳母なりし事は人の能く知る所でわります、此の人の父は美濃國の人で齋藤内藏助利三と呼ばれまして、是れ亦歷史上有名の豪傑でありましたけれども、明智光秀の家來と爲りて居ました故に、光秀が羽柴秀吉の爲に山崎の一戰に打敗られ、敢なき最後を遂げたる後利三は一旦其の場を脱れましたけれども、幾もな

く囚はれの身となり、京都の粟田口と云ふ所にて磔の刑に處せられました、阿福は乃ち利三の三女で此の頃は未だ幼年でありましたが、漸次成長したる後に稲葉正成と云ふ人に嫁しまして、三人の男子を生みましたが、正成も不幸にして夭死しまして、手一つで三人の子供を育てゝ居ます中に徳川二代將軍秀忠公の嫡男家光公が誕生に成りまして、京師から乳媼を一人雇ひ入れたひと其の詮索のあるよしを聞き、其の頃京都の所司代たりし板倉周防守勝重の許に至りまして、將軍家の若君の乳媼と爲りたきよしを願ひ出ました、そこで勝重が其の事を幕府へ言上に及びまして遂に



阿福を召出して乳媼とせられました、それから追々に出世をして春日の局と呼ばるゝ樣な身分と成つたのであります、こゝ迄は本文には書て無ひのでありますけれども、事の序に陳て置きます。

英敏有㆓膽智㆒―此の春日の局は心が英ぐれて敏がしく其の上膽がすはつて智慧がたけて居ましたまだ夫稲葉正成の家に居ました頃の事、夜有㆓劇盜數人㆒入焉―ある夜劇盜が五六人は入て來ました局揮㆑刀立斬㆓二人㆒餘皆駭散―春日の局は、女ながらも劍術の達人で、男子も及ばぬ腕前を持て居ました故、刀を揮りかざして立どころに二人の賊を斬り殺しましたれば、其の餘のものは駭きわ

はて、逃げ散て仕まいました。局背夜歸過二平河門一＝又局が甞て御暇を頂き外出をして夜に入りて歸て來ます時に、平河御門（江戸城の麹町口にして此の門今にても有り、文部省の正面にあるもの是れなり）を過らんとしますと、閽人曰夜間出入非二監察之命一不レ能也＝閽人が『夜間の出入は監察からの命がなければ通すことは相成らぬ』と曰すと、局自稱名＝局は自分に其名を稱りて『外の者ではない春日じやに依て通してくれ』と曰ひました處、閽人は一應之を大閽に白して如何取計て宜しきかを聞きました、大閽曰無二監察之命一天照大神不レ可レ入焉况於二春日一乎＝すると大閽が『イヤ假之ひ天照大神でも監察の命がなくば通すこと罷り成らぬ、况して春日明神位は猶更の事なり』と嘲弄して中々聞入れませぬ故、局大窘佇二于門外一＝局は大に窘り果て門の外に佇んで居ました、時方隆冬寒氣刺レ骨＝其時は方ど隆冬の頃でありましたから、寒氣が骨を刺し通す樣でありました、久レ之命下然後得レ入＝久之すると閽人の届出に依て監察から命が下りましたから、然る後は入ることが出來ました、局感二其守レ法嚴正一翌朝遣レ人遺二點心一謝レ之＝此の頃春日の局は奥と表とを問はず、飛ぶ鳥をも落すと云ふ樣な勢でありましたから、若しも局が並一通りの人でありましたらば、大閽を始め閽人に至る迄如何なるお咎を受るも知れぬのですが、そこが局の局たる所で、閽人の法を守ることが嚴しく正しいのを感心しまして、人を遣し點心を遺りて謝を述べました。

開明の今日でも、厭ふべき話を耳にすることあり甞て或る官省にて勢力強き一官吏が、門の出入の規則を犯して通過せんとしたるを、門衞が之を咎め己れの職分を全ふしたるに、憫むべし此の門衞は間もなく免職に處せられけり、あはれ此等の高官に春日の局の談話にても說き聞かせたらんには、逍がに愧死したるものをと思ひまする。

MISCELLANY IN ENGLISH.

BY A. MIYAMORI.

No. 1. Conversation.

ABOUT PEACE NEGOTIATIONS.

A. Is it true that Russia has asked for peace?

B. Yes, she has done so through the intervention of President Roosevelt of the United States of America.

A. Where will peace negotiations be held?

B. In Washington, the capital of the United States.?

A. Who will be appointed plenipotentiaries for peace by Japan?

B. Baron Komura, Minister for Foreign Affairs, and Mr. Takahira, Japanese Minister in Washington, have been already appointed for the mission.

A. Who will take charge of the Foreign Office during Baron Komura's absence?

B. Premier Count Katsura will attend to the business.

A. When will the peace envoys start for America?

B. They are said to set out in the middle of July.

英文雜錄

宮森桃潭

第一. 會話

媾和談判に就て

甲. 露國が平和を請ふたと云ふのは誠ですか

乙. 誠です露國は合衆國大統領ローズヴェルト氏の仲裁に依て請和しました

甲. 媾和會議は何處で催されますか

乙. 米國の首府ウォシントンです

甲. 日本は誰を媾和全權大使に任命しませうか

乙. 外務大臣小村男爵と駐米公使高平氏とは既に使節に任命せられました

甲. 小村男爵不在中は誰が外務省の事務を執るでせうか

乙. 總理大臣桂伯が其事務を執ります

甲. 媾和使節は何時米國へ出立しますか

乙. 七月の中旬に出發するそうです

A. Do you know what the terms decided upon by the Japanese government are?

甲．日本政府の決定せる媾和條件を御存じですか

B. Oh, no, they are a great secret. Nobody but those in the government circles can have any knowledge about them.

乙．否媾和條件は大秘密です。政府部内の人の外誰も更に知ることは出來ません

A. Newspapers, politicians and the people at large are insisting upon demanding the cession of Vladivostock and Saghalien Island and the payment of 3000 million yen as indemnity. Will Russia agree to this?

甲．新聞紙や政論家や一般の人民は浦鹽と樺太島の讓與と償金三十億圓とを請求することを頻に主張して居るが露國は同意ましせうか

B. I think Russia may agree to ceding Saghalien and paying some 1000 million yen but will never give up Vladivostock.

乙．露國は樺太の割讓と十億内外の償金を出すことには同意するかも知れぬが浦鹽の割讓は決して同意しますまいと私は考えます

A. Do you mean the peace conference be of no effect?

甲．媾和會議は無効に終ると云ふ御考ですか

B. Not necessarily so.

乙．必ずしも左樣とも思ひません

* * * * * * * * *

No. 2. Pleasantries.

第二．會話

CLAPPING HANDS.

手を鳴すこと

A rustic stopping at a hotel saw the button of an electric bell and pushed it out of curiosity. Then a maid came and said, "Did you call us, sir?"

"No, when I want you, I will clap hands."

旅館に滯在せる田舍者が電鈴の鈕（ボタン）を見て好奇心に驅られて之を押したりしに女中出で來り

『旦那御用でございますか』
『否用がある時は手を鳴します』

A CHILD'S MATHEMATICS.

小兒の數學

Mother:—My boy, will you count these?

母『坊や之を數へて御覽』

Boy:—One, two, three.........ten, eleven, twelve, one, two, three.

Mother:—Why, my boy, isn't the number next twelve thirteen?

Boy:—No, mother, a clock strikes one after twelve.

小兒『一．二．三.........十．十一．十二．一．二．三．』

母．『オヤ坊ヤ十二の次ぎは十三ジヤないか』

小兒『でも時計は十二時の後では一時を打ちますよ』

PLEASE REMOVE YOUR EYEGLASSES.

Tommy:—Grandma, do things look larger through your glasses?

Grand mother:—Yes, they do.

Tommy:—Well, then, when you cut cake for me, please remove your glasses.

眼鏡を外して頂戴

太郎『お婆さんの眼鏡で見ると物が大きく見えるのか』

祖母『わゝそうだよ』

太郎『それじやわたしに御菓子を切ッて下さる時は眼鏡を外して頂戴な』

* * * * * * * * *

No. 3. Letters.

ASKING A GIRL FRIEND FOR HER PHOTOGRAPH.

Tokyo, June 30, 1905.

Dear Tomiko San:—

Yesterday I saw a nice photograph of you in Miss Dutton's album; she said it had been taken quite recently. May I ask for a copy before you have given them all away? I will, in exchange, send you one of my last new photographs in two or three days.

I am,

Ever your friend,

Lily Whitney.

友人に寫眞を乞ふの文

拜呈昨日ダットン孃を訪問致候際あなたの御寫眞を拜見仕候同孃の御話には其御寫眞は近頃御取なされ候由承候尚御手許に有之候へば一枚御送被下間敷候哉私も其代りに最近の寫眞一枚兩三日中に御贈可申上候　匆々

年　月　日　　　　リリーホイットニイ

山　田　富　子　様

ANSWER TO THE ABOVE.

Yokohama, July 1, 1905.

Dear Lily:—

Am so sorry all my new photographs had been given away before I received your letter, otherwise would have sent you one with pleasure. I intend ordering a few more copies soon, and will not forget to let you have one. Please send me yours.

Believe me,

Yours affectionately,

Tomi Yamada.

同 上 返 事

御手紙拜見殘念ながら寫眞は悉く贈與致候若し手許に有之候はゞ直に御送付申上ぐべきものを尤も間もなく更に數枚注文致度と存居候ゆゑ出來上り候時は必ず一葉御贈可申上候あなたの御寫眞は何卒御送與被下度願上候

山 田 と み

ホ イ ト ニ ー 樣

Place, Date.

Dear Mrs. Miyamori :—

Some time ago I began to study European cooking and so I want to buy some knives, forks, plates and an oven. Will you please recommed me a good store to get these things?

I am,

Very truly yours,

Kin Watanabe.

拜呈私事此程西洋料理の研究相始申候に付てはナイフ フォーク皿及アヴン相求度候間此等の品を商ふ善き商店御存に候はゞ御知らせ被下度願上候

渡 邊 き ん

宮 森 奥 樣

Place, Date.

Dear Miss Watanabe :—

As far as I know, Matsukiya, No. 6 Ginza Itchome, is the best store for your purpose. Qualities are good and prices are moderate in that store and you can get an exceedingly good oven there.

I am,

Very faithfully yours,

T. Miyamori.

拜復私の知る所にては銀座一丁目六番地松喜屋が一番宜敷と存候同店にては品質も宜敷代價も高からず特にアヴンは極宜敷もの有之候

年　月　日　　　　　　　　　　宮森たみ

渡邊様

* * * * * * * * *

No. 4. News o. the Day.

A BALLON CORPS AT VLADIVOSTOCK.

According to a report published by the "Tokyo Asahi," a ballon corps has been organized at Vladivostock. The corps is said to consist of seven officers and more than 30 non-commissioned officers and men.

浦鹽斯德に於ける輕氣球隊

東京朝日所載の通信に依れば浦鹽斯德に於て今回輕氣球隊組織せられ隊員は七名の將校と三十名以上の下士官及び卒なりと云ふ

RUSSIAN OFFICER ATTEMPTS TO ESCAPE.

A Sasebo telegram states that Commander Vedelnikoff (?), one of the Russian prisoners and formerly Second in Command of the Nicolai, I., decamped from his quarters there during a storm on the afternoon of June 27. He was, however, subsequently arrested at Fukuishi by a policeman.

露國士官脫走を計る

佐世保よりの電報に依れば元ニコライ一世艦の副長たりし露國捕虜ヴェデルニコフ少佐は六月二十七日午後暴風雨中同地收容所を脫走せしが福石に於て巡査に捕へられたりと云ふ

EQUANIMITY OF OUR SAILORS.

Between the departure of our fleet from a certain base and the commencement of the Naval Battle of the 27th May, there was an interval of a few hours, during which time the bluejackets were allowed to take a recess. Most of the crew availed themselves of their leave by sleeping. On observing this, an officer, second-in-command of a certain battleship, expressed his admiration at the equanimity displayed by our sailors.

我水兵の沈着

我艦隊が其根據地を出發して五月二十七日海戰の開始せる迄には數時間の隙ありたれば其間水兵に休息を與へたるに水兵の大半は睡眠を取りたり此有樣を見て某戰鬪艦の副長は我水兵の沈着なるを歎賞せり

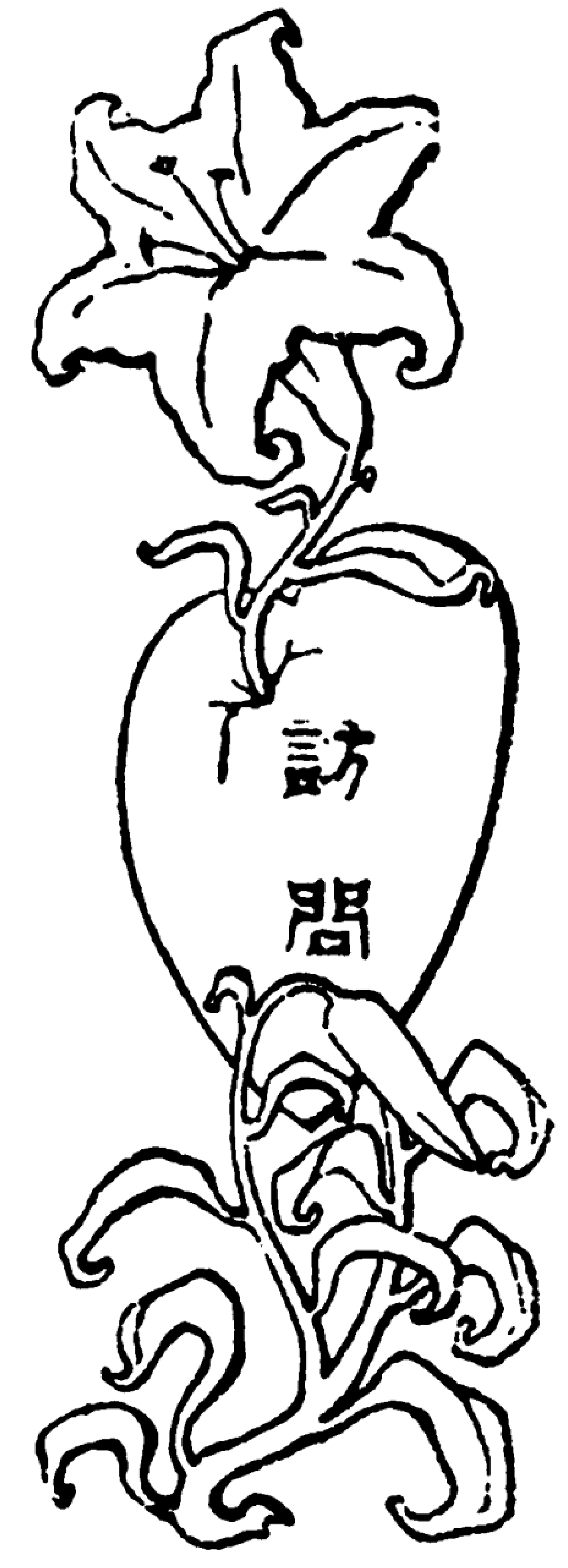
島地默雷師を訪ふ

一記者

腐敗に腐敗した教界に立つて、どこ迄もその汚れに染まで、よく救世濟度の、うるはしい實を上げやうと力めらるゝ、女子文藝學舍長島地默雷師を、お訪ねして、有益なお話しを承はらうと記者が麹町中六番町のお邸を伺つたのは、長う降り續いた梅雨が晴れあがつて、俄に暑の加はつた七月の四日でありました。

お邸の門に參りますると、右側には大木の櫻がありまして、左側に女子文藝學舍と誌した板がはつてあります、門を潜り入りまするると、左手には教場らしい建物があり、正面は寺で、其の右が御寢食をなさる、建物、其處に往つて案内を乞ひました。すると二十位の女の方が出迎れて、やがて奥の八疊の客間に伴れられました。

質素なお部屋で、額が一つ掛けられ、床には佛具少しばかり置かれ、部屋の中央に小机が正しく据ゑられてあるのみ、然し青木の多いお庭に添うて居て、涼風がそよ／＼と吹き來る心地好さは、殊更に華美を衒ふ豪商などいふものゝ住居に比して、遙にたち優つてゐると感じました。



この庭を隔て丶寄宿寮とも思はる丶がありて、紫袴着けたる、令孃達の群れ遊ばる丶さまが見える、その擧動に自ら備はる温雅の仄見ゆるにつけ、程なうあつばれ

△良妻賢母

とならる丶であらうと、敬慕の念も加はりました。

先刻の女の方の手に、茶が運ばれ、團扇が運ばれて後は、唯一人なので、いつか此の默雷師が、汽車の食堂で、杉樞密顧問官、前田慧雲、菅了法、梅原融の諸子と會せられたるとき、杉顧問官が師に向つて『島遠濤聲默』と仰せられしに、師は直ちに『梅香暖氣融』と二人の姓名を取つて聯句にせらたといふことなど想ひ浮べて居ますると、しとしとと廊下傳ひに、いとも徐にこ丶へ御出でになつた

△僧服を召したる一老人

がある、これがわが島地默雷師其人である、見るから一層お慕はしさも增す沈着に親切なる御挨拶。

暫くして突然ながら何かお話しをと申しあげしに、快くうべなはれて、早速話し出さる丶には、

日本は大變今度の戰爭で、文明の進歩をあらはし、大いに世界各國へ、日本の價値を示しました。殆ど戰爭の方は世界第一等に列したものであらう、これは實際が文明上强いので、その遣り方は少しも耻辱とするところは無い。即ちたゞ

△强いばかりで無い

戰爭の遣り方一切が學術上、猶語を換へて述べますれば、教育の進歩、それがあらはれたものといふべきです。

△教育の進歩

それには日本一種の特有たる武士道或ひは大和魂がいよ〳〵發揮せられて、かく完全無缺のはたらきをあらはしたものといはなければなりませむ、處でか

ゝる折柄でありますれば、わが日本國の位置が、大いに進んで居ることを、世界各國悉皆が仰いで居る注視して居る、それに拘ず如何も

△寒心に堪えざる事がある

それは何であるかといふならば、元來文武のことは一致ともいふべきで武事あるものは文事が無くては可けない、また文あるものは武を備へずては不可だ、この二つの者は必ず終始相伴はなくてはならぬ、彼の今川了俊の語に『文道を知らずして武道遂に勝利を得ざること』とあるやうに、文武兩道は揃つて行かなければならぬ、然るに一般風俗の上を見るに、大變この軍人が、世界に特別秀でたるいさをしを、樹てたるに拘らず、一般の風俗習慣は下つて居る、文は武に劣つて居る、到底匹敵すべきでない、この點が大いに嘆かはしい次第である。就中憂ふべく悲しむべきは總て日本人は

△體軀の取扱ひが不躰裁極まる

ことであります、この體軀の取扱ひが不躰裁である一事に至つては廣き世界中最も劣るものといはなければなりませぬ。世界は廣い隨つて野蠻の國も少くない、未開の土地も少くない、その野蠻未開の最なるものとして目せらるゝ彼の南洋の諸島でさへ、下體即ち

△腰部

は蔽うて居る。下體即ち腰部を蔽ふことは、何處の人民も知つてゐるのです、たゞに大人のみといはず小兒もまたよくこれを知つて居ます。吾人があちこちと印度の下等人民、或は南洋諸島のそれらに就いて見まするに、皆下を隱して決して人の前に醜い所を露しませぬ。

△然るに何事ぞ日本人は一向平氣

で、男女ともに深く注意しない、殊に甚しきは、うら若い何事をもはづかしがるべき年頃の男女、さては小兒など、些つとも搆はぬものと心得て居る、眞個に平氣で、隱匿すべきところのものを人前に露出する、マー何といふ不躰裁、何といふ嘆かはしいことぞ、これで文明國といへまするか、私が先日

△熱海

へ、船にて往きました、處が船より荷物を陸へ揚る人足、人足といふより寧ろ水夫とか舟子とかいふ方が適當だらう、それが多くは褌を用ゐて居らぬ。全然隱匿すべきものを露呈して居るです、年頃はといへばいづれも皆三十歳前後の大人ばかり。

さうしてこの海岸へは外國人も澤山來てゐる、して見れば醜を世界に流すといつても毫も不可は無い。然るにです、本人は勿論一向に頓着せぬのであるが他人もまた氣の毒とも何とも思ふて居ぬ。縦令褌を使用するとも元來

△腰をあらはすことが宜ろしくない

況してその他のものまで露すは、野蠻も其極であるからお話しゝたのみでは、私が偶然熱海で、さやうな場合に接したのだらうと思はるゝかも知れぬが、悲いことには、その例證が乏しくないので、三四年前夏期講習會が、駿河で開かれた時も、略同樣のものを見ました。このやうな事は同じ日本人が見てさへ、堪え難うありますのに、況て熱海など外人が多く來てゐるところで、こんな躰裁の惡いことを、平氣で行られては實に羞しう情なうあります。

さらばいかやうにして斯る惡風俗、惡習慣を改良すべきかといふに、これは急に改良せうとしても、彼等の衷心より耻と心得さすることが出來ぬ故、先づ婦人方にこの改良を望まなければならぬ、で

△婦人たるものは小兒をして

隱部を人の前にさらけ出すは、此上もなき耻辱と熟

知せしめ、決して人前に隱部をあらはすやうな不躰裁なることをしないやうに敎へ、從來の客が有らうが人が居らうが、そんな事に頓着せず、小兒の大小二便を、人の前で抱いてさすを以て通常とし、公然人目を憚ず、勿論寸毫も恥羞としなかつた風俗習慣を斥けてもらひたい。從來のやうな遣り方なればこそそれらの小兒が生長後も、一向差閊へなきものゝやう考へたのだ。それから今一つには

△乳をあらはすこと

これは前述の印度下等人民や、南洋の野蠻人民には猶行はれてゐるが、この文明國を以て目せらるゝ戰捷國の日本婦人は、注意して廢さなくつてはなりませぬ、現時の有樣は彼等に同じといはざるを得ない。視よ、日本婦人は平氣で乳をあらはして居るのではないか。

△支那人

でも、人の前に乳を露すは恥辱と知つて、左樣なことをする女は一人だもない、乃で自分は此う思ふ、體、軀體を裸にして何とも思はないのは

△角力

に因ることであらう、角力は皆裸である、下は勿論隱せども、一般人が裸を恥とせぬは、この角力が助けをするものであらう。

西洋にも裸體がある、あるけれども、必ず肉繻袢を着けて、眞の裸では無い、また女などが裾の短ひ恰も天人の羽衣のやうな衣を着て踊れども、猶肉色の莫大小を着込んで、日本のやうな眞裸なのはたゞの一人も居ない。

更に自分の考へには、この弊風改善の一方法として彼の角力取、かの角力取より更へてゆきたい。それは

△角力取に肉繻袢を着せる

やうにしたい。爾うするには、これを議會に提出し上下兩院の議題に附し、軈て一の法律として、政府より告示したならば、角力取でさへ裸を禁ぜられて肉襦袢を着けねばならぬといふにより、日本全國擧つて大に面目を一新し、この點に注意するに至るでありませう。

こゝに私が一層醜く感じました事は、往々汽車にて海水浴塲の邊を通過する時、女が湯卷をも捲かずに、其儘に水浴するのを見た。これが世界に笑はるゝ事で無くて他に何があらうぞ。これでは折角一方で、わが國の文明を進めた名譽を

△一方で世界一番の下等に

仕て行く、まことになさけない事ではありませんか。故に私は

△人の妻となり母となる人達に向つて

小さき兒に注意して、その幼時より、男女の隱部は誰れにも見せないやうに、また人前を憚み、誰れにも大小二便などを見せないやうに、堅く心得させ、以て風俗改良の魁になつて、貰はなくてはならぬと思ひます。

かくお述べになつた時、不意に、あれ見よと庭の方を指されたので、振りかへれば、二三人の令孃達が庭の樹陰に涼まるゝ所より二三間隔たりたる垣越しに二十四五歳ばかりの男が、裸で何か業を取つてゐました。あれだから困ると太息をおつきになりまして、なほ先日靖國神社の裏町で、湯屋よりわが家へ、裸體にて着物を脇にしたまゝ(尤も家は近傍なれど)歸りゆく男があつた、これは無論放蕩ものであらうが、何にしても日本人は裸を恥辱とせぬと仰しやつた。乃で記者は嘗て備前に在つたころ、西徽山といふ人が、同じやうな意見を以て、演説せられたことがあつたことなどお話しゝて、夕風の吹き初むる頃厚く御禮をまふして御邸を辭しました。

（をはり）

元良文學博士夫人を訪ふ

琴伴女史

▲お住居

両側は若櫻が列をなし、生ひ茂つた青葉が頭を蔽ふて、夏尚ほ涼し氣な道から、下は奈落ならぬ空橋を渡つて、右手を見ますると、扇要で圍つた一構、此處が文學博士元良勇次郎氏の邸で御座います。餘り新しからぬ割合に質素な洋風門を押し開きまして、玄關迄敷き詰めた花崗石の上を徐に踏んで歩を移しますると、年古りし檜葉は緑の色濃く迎へ顔、格子戸の外に立つて訪なひますると、お品の良い柔順さうな、さりとて柔弱ならぬ廿二三歳の、學生風の方が出られましたので、私がお取次をお願ひ申ますると、『暫らくお待ち下さいまし。』と、鄭重に云はれまして、夫人に問ふ爲めに奥へ行かれました。

物の二三分とも待ちませぬ間に、此方へとの御案内、夫人のお部屋らしい所や、令嬢のお部屋らしい所を過ぎまして、敷き詰めた芝生は青々と、松の翠り、躑躅の緑り、何れを何れと爭ひかねた風情、形の面白い岩の彼方彼方に、熊笹の戰ぐなど、なか〱の平和さで、此處斗りは夏を知らぬ顔の庭を左に眺めながら、廊下を奥へ八疊のお座敷に通りました。

▲お座敷

は總べて装飾が洋風で御座いまして、テーブルを圍つて四脚の椅子、テーブルの上には來客の饗應にとで御座いませう!、繪端書のブックやら、花束やらが備へてありまして、入口から見ますと部屋の中央の右手には、ネルソンの額が儼然と切の長い凛とした眼、形の良いつゝんと高い鼻、きり〱と引き締つた口元、意氣豪然と、肩迄垂れてくる〱と卷かれた髪、死んでも尚ほ死なぬ英雄が睥睨して居るやうに感じられて、思はず崇高の念に打たれました。

待つ間程なく、『一寸失禮致します。』と云ふお聲がお隣りのお部屋から漏れて、『どうぞお關ひなく。』と御年寄らしいお言葉が聞えますと、夫人はいそ〳〵と笑を含んで來られました。

召物は微細い地味な綿風通に、黒繻子に絹形付の晝夜帶を、ちやんと小さくお太鼓に結ばれ、お年は四十位とお見受け申される御容子の、何處とはなく淡泊と奥床しく、『始めまして。』と、高慢り給はぬ御挨拶、『御客樣がお有り遊ばす中を、誠に恐入ります』と、申上ますと、『何う致しまして……、私のやうな者を折角御遠方お尋ね遊ばしても、申上る事も御座いませず、却つて恐れ入りました次第で御座います。』との御言葉。

▲家庭訪問

私が何うも各夫人が、心良く面會つて下さらぬ事をお談申しますと、夫人は眞實溢れたやうな御樣子で『此頃は其處此處の雜誌に、大分模範家庭が出て居りますが、彼れでは皆樣が御利益になると被仰つてゞ御座います、私のやうな者は、お目に係りは致しますもの丶、廿世紀の新しい事は存じませんから、皆樣の御利益になる事などは、思ひも寄りませんが、お若い、それこそ只今の教育をお受け遊した方は、世の利益となる事で御座いますから、堂々とお說やら經驗やらを、お陳べ遊して、家庭の改良とか、又衣服の改良とか、部屋の裝飾、割烹から交際に至るまで、種々な事をお敎へ下さいましたら宜しう御座いませうにね。さう致しますと新しい事を知らぬ者には、大層な利益となるので御座いますからね。世の中には家庭の事や、子供の教育を致し汝す上にも、隨分困つて居る人もあるのですから、不當にさう云ふ人々に對しては恩人で御座いますよ、私などが皆さんのやうに、何んでも出來ますならば、それこそ、、、どん〳〵と申上ますが、どうも無い事は申上られやせんで、……。』と、御如才なき、活氣の有るお話。

▲御主人

ハイ、宅は昨年の五月から歐羅巴旅行に參りまして、唯今は多分英吉利に居ります事と存じます。彼方は街でも家でも立派で御座いますつてねえ。子供の處へは始終、土地が變りますと手紙やら繪端書やら送つて參りますが、それが可笑しいので御座いますよ、家内中で屹度笑ひますの』と、夫人はテーブルの上のブックを取つて示されました。成程面白い滑稽の繪端書やら、御自分の宿された旅館やら茶屋やら港やら街やら、又は古跡やらが明細に説明を附して御座います。殊に獨逸から出された猿の繪には『動物園の猿と何處が違ひますか。』『お父さんより。』と、末の坊ちやまに當てゝあるのは、お父樣の愛が溢れるやうに思はれました。又桑港から『此處は桑港の茶屋です。』と、其處の美しい景色を寫したのを送られたのもあります。又ゲーテの居た茶屋だと云ふのもありましたが、皆それ〲に優しく令孃などに與へられたのも隨分あります。滑稽なのでは猫が立つて、手を繫いで踊つて居るのなどは可笑しう御座いました。

▲繪端書

夫人は立つて次の間へ行かれまして、厚く重ねた包紙の儘の繪端書を持つて來られまして、『宅が使の有る度に、人樣にお願ひ申したりなんか致して寄越しますので、隨分溜るので御座います。亞米利加からも、獨逸からも、英吉利斯からも參りましたが、繪端書は獨逸が一番流行致して居るさうで御座いますね。』と、始めに景色の繪端書を示されました。百枚ばかりの景色、濃淡の樣々、海に山に、朝に夕に、壯大な建築、教會堂、學校、旅館、茶店、市街の有樣、道路、雜沓、港の景色、大船小船、大岩、或は水色に、或は藍色に、代赭に緑に黄色に、それは〲麗しいので御座います。次に示されましたのは、周圍を金縁の人物畫『ワシントン』に『ネルソン』に『ゲ

ーテ』に『シェークスピア』に『シルレル』、『レッシンク』、『ダンテ』が大理石のやうに透通つて、浮き出て見えるのです。『マリヤ』や『クレヲパトラ』や『メリー』などの愛らしく、又婉麗なることは、實に筆には盡くされません。次のは花で御座いました。花とても日本に有るのなどとは丸で別で、色などのくつきりと美しさ、殊に緋の色などは天鵞絨のやうで、繪端書通と誇つて居る人々に見せてやりたい位なもので御座いました。

其内の一つなりとも、諸嬢方にお目に懸けたいと存じまして、十枚ばかり拜借致したいと願いますと夫人は嫣然と笑を湛へられまして『それがお役に立ちますならば、何枚でも。』との快よい仰せで御座います。

夫人は又徐に口を開かれまして『斯やうなものは、極く詰らないやうに思はれますが、御客様が被居しやいました時にお目に係けますと、御手持にもなりますし、それにお慰みにもなりますから、私は誠に優美な御馳走だと存じます。殊に初めて被居つた方などには特別に宜しいかと考へますが、藝者などのは、厭やで御座いますねえ。

▲高等女學校

此頃は教育が大層進みまして、何處のお家でも少し成長くお成りなさいますと、皆様が女學校へ御通學遊ばすやうで御座いますが、誠に喜ばしい事で、私などの生育の時と違ひまして、何もかも悉皆整頓致して居りますし、それに教育なさる方々も經驗が積んで被居るので、お羨しいやうで御座います。ですが、中には隨分お孃樣方を女學生になさるのを厭やがる方が、お有り遊ばすやうに承つて居りますが、それはちとお考へが古くはないかと存じます。漸々と世が開けるに從つて、又婦人の教育も進むので御座いますから、それを嫌つて居りますと、交際は出來ませんから從つて世間の事も知らず、それですから自分が何も出來ないのも悟らずに、引つ込ん

ではかり居ますと、何時迄經つても、昔の婦人で男の方は進歩遊しても婦人は進歩致しませず、從つて子供の教育にも困るでは御座いませんか、私は何うしても女學校を卒へなければ社會に立つて行く上について不可ないと思ひます。本當に私が女學校へ通ひました頃は、御出校になる方も少なう御座いましたし、それに袴など丶申すやうな重寶なものは御座いませず、まして靴など丶は思ひも寄りません、學科は遲れて居りましたし、それこそまだ〳〵進歩致しませんでしたから、何處家でも女學生にするのを厭やがりまして、嫁などに致すのにも女學生と聞くと、身振ひを致したので御座います。オホヽヽヽ、私なども矢つ張り嫌はれ者の一人で御座いました。』と、夫人は快活に笑はれました。

▲高等女學校の程度

夫人は謹やかに領れまして、『教育に心を灑いで被居しやいます、皆樣方のお話を承りますと、學科が餘り低過きて、女學校を五年も費つて卒業致しても何んにも出來ませんが、何うか致したら宜しからうと存じます。と被仰る方も御座いますし、又學科はそんなに進まないでも宜しう御座いますから、裁縫を今少し多く敎へて戴きたいと存じます。と、被仰る方もお有り遊ばすやうですし、又、家政學などの家計簿記から割烹に至る迄で、日本の生活と致しては程度が高過ぎまして、どうも應用は出來ませんと、仰られる方もありますが、私は女學校の程度が學問から總べてに至るまで若い婦人の身體に對しては、少し有り餘る程だとは存じますが、決して低過ぎるなどとは思ひませんので御座います。宅の娘なども長女い方は十七歲で、お茶の水の五年に通つて居りますが、隨分先生達が、何から何迄で良く敎へて下さいますので、何うか斯うか日々に進歩致すので御座います。其次は十五歲で矢張りお茶の水の三年級に通學致して居りますが、もう〳〵皆んな出來が惡いので御座いますから、さぞかし先生方がお骨が折

れる事と存じて居るので御座います。外のお家では一旦學校からお歸りになりますと、又家政向きにお手傳をおさせ遊ばすやうに承りますが人間の身體や脳力には限りが御座いますから、さう〳〵はと存じまして、私共では學校の外一切何も致させないので御座います。

▲裁縫、張物

ハイ、裁縫やら張物やらと、土曜日又は日曜日にはおさせなさる方も有るさうで御座いますが、それは宜しい事ではありませうが、……、私共では學校に居ります内は、學科の方を一心に爲せやうと、存じて居りますので、裁縫だの洗濯だの張物などに付いては、餘り嚴格ましく申さないので御座います。裁縫等は卒業致しましてからも習ふ所が御座いますが、學科の方の數學とか地理とか理科とか歴史とか申すものは、どう致してなか〳〵卒業致してからでは、適當な先生も御座いませんから、今の内に斯やうな事は出來る丈け覺えて置きまして、まづ後にも習へる裁縫等は、拵へ方でも存じて居りますればと、何んにも致させませんで、着物は大抵女中に縫はせて着せるので御座います。何うせ裁縫の方は卒業致してから、別に習はせませんではと存じて、まあまお身體が一番大切だからなど〳〵、甘やかして居るので御座います。長女方などは此間も、先生が御自分のものは御自分で成る丈けなさるやうにと、被仰いましたから、お母樣、夏休になりましたら、自分の袷を解いて洗つて張つて縫ひませうなど〳〵申して居るので御座います。夏休には少しさせましても宜しからうとは存じますが、暑い内は身體の爲に、みんな海浴などに參りますので。……、

▲割烹

お料理の方法なども矢つ張り、學校の家政學で學びますから、何やかやと存じて居るやうで御座いますが、それに先生方も、家へ歸つてお暇が有つたら、

經驗の爲にお復習をして御覽なさいましと仰られるさうで御座いますので、何時も暇が御座いますと、お母樣、させて戴き度う御座いますと、申しますが、割烹だの、又は家事向の事は、母さんでも敎へられるから、學校に居る内は學科の方へ實を入れる方が良いと、申しては止めるので御座いますが、爲せました方が後の爲には宜いか知られなどとも思つてゐるので御座います

▲遊藝

で御座いますか、お友達は皆さん、琴だの二絃琴だのお花だのお茶だのと種々遊ばすやうで御座いますが、矢つ張り裁縫や割烹と同じに、學校に居る中はと存じまして致させません。オホヽヽヽ私共では無風流で御座いますの、いづれ卒業でも致しましたならば致させませうと存じて居ります、遊藝はなかなか宜しいもので御座いますねえ。

▲音樂會

上野の音樂學校に、土曜や日曜に音樂會が有ります時は、必ず參るので御座います。本當にお上手の方が遊ばすと、獨でに恍惚と致して終ふやうで御座いますねえ、ピアノの音などは宜しう御座いまして自然に浮き立ちますね、日本の樂器の琴だの三味線だのも、それ〴〵面白う御座いますが、外國の樂器も亦なか〳〵宜しう御座いますねえ。

▲土曜日と日曜日

音樂會などの御座いません時は、重に上野邊へ散歩に出掛けますが、上野には始終、白馬會だとか、繪畫展覽會だとか、彫刻の陳列會だとか、いつも御座いますから、それに私共の娘達は成長くなりましても子供で御座いますから、矢つ張りパノラマなどがお友達で御座いますの、……、本當は家に運動場が有りまして、テニスのコートでも作ると良いの

で御座いますが、場所が御座いませんので、思ふやうにも參りません。一體テニスは體育上婦人には適當の遊戯で御座いますね、娘なども學校で致すさうで御座いますが、出來ませんから皆樣にお氣の毒でなど、申して居るので御座います。どうしても家に運動場が御座いませんでは、不可ないやうで御座います。

▲女學生の服裝

大分令孃達の教育に付きましては心を用ひられてお出になるやうに、お見受け申しましたから、さらば令孃方即ち女學生の服裝につきましては、如何なるお考へを持つて居られるでありませうと存じまして、『大分種々な說がありまして、稱めましたり又は非難致したりしますが、女學生の服裝に付きまして貴女樣は何う思召します？』と伺ひますと、夫人は嫣然なさいまして、『ハイ、私も女子教育に付きましては多少心を用ゐては居りますが、說などと申して皆樣のやうに立派な事は元より申上られませんので御座いますが、……、美術的とか詩的とか申事は、なか／＼存じません、殺風景な私は、どうも學校通ひの内は、鬢髱を取りましてずるずると島田髷とか、唐人髷とか桃分れとかに結びまして、帶なども窮屈にちやんと背中に負ひ上げて小股に歩きますよりも筒袖に袴と申す淡泊致した服裝の方が體育上運動にも便利で宜しくはないかと存じます。第一今迄の日本の有來りの服裝では、風の吹きました時とか又は、車などに乘ります時、又は石段などを上り下り致しますのに、不都合で御座いますからね、女學生の服裝は野暮で美でないなどと仰られる方もありますが元より女學生は意氣な垢拔けた藝者等とは違ふので御座いますからね、修業中はさう／＼顏形に心を用ひませんでも、容貌と申しますものは、教育が進むに隨ひまして、高尚になりますから、それを彼是と申して服裝などに心を用ゐさせましたならば、それでなくつてさへお若い方は容貌を氣にお懸け遊はす

のですから、段々と學問などは退歩致すだらうと存じます。且つ今迄の日本婦人のやうに身體が首と背と腰と三折れになつて居りましては、體育上どうも心配なものでせうと考へます。婦人の身體が强健でなくては、立派な男子に生れなからうと思ひます。それに私は同じ色のお袴召してお揃ひなすつた處はなか／＼美しく見榮のあるものだと存じます。優美の點から申しましたならば、日本流の服裝には及びませんが、……、何しろ不便でないだけ宜しうございます。

▲母　堂

私共などでは姑がなか／＼開化主義で、それこそ私などとは違ひまして、學問も教育もある人で御座いますから、他のお家ではお年寄がお有り遊はすので、家庭改良などは出きないと仰せられますが、私共ではそれと反對で、姑に教はりまして致す位で物座います。姑は實に良く出來ました人で、女子大學の校長成瀨仁藏さんとは、昔からの御懇意で御座いまして、成瀨さんが最う暫く前から、大學の寄宿舍にお老人の監督して下さる方が有りませんからどうぞ被入つて戴き度いと、申されましてお手紙を度々お遣はし下さいましたが、姑は其都度手紙でお斷り申して居りましたが、再三再四仰越されるので、今度こそは、手紙では不可ないから、自分で上つて、良く事情を申上げてお斷り致して來やうと、申まして自分で出向きましたが、却へて成瀨さんに說き伏せられて、負けて終ひまして、承諾して參つたと申しまして大笑ひを致しました。只今では大學の寄宿舍に居りまして、時々日曜等には宅へ歸つて參りますが、種々と話を致すので御座います」と夫人は言はれながら立上り遊して、次の間から一枚のお寫眞を攜へて來られました。何れ梅やら櫻やらのお孫孃達が兩側に、活潑な絣飛白の坊ちやんと並んで、お被布姿の上品に優しく、中央に腰かけて居られる御樣子は、實に白髮の女丈夫として、三輪田眞佐子刀

自杯と、劣らず勝らずお見受け申しました。

▲新知識

『廿世紀の文明の空氣を呼吸致して居りますお陰には、どうかして新しい發達して居る事を知りたいとは存じて居りますが、元々が駄目なので御座いますから致し方も御座いません。此間も姑が參つての話に、大學に居ると家政科等では、種々な新式な事を考へ出したり、又外國からもどん〳〵と方法を輸入するから、割烹などは隨分珍らしい物が出來るよと申しましたので、私が若し姑の變りに行かれるものなら、子供を姑に願つて、そう云ふ所へ參つて居つて、少しづゝでも新しい事を覺えたいなどゝ申しましたが、なか〳〵私などには、母の代りなどは出來ませんので致し方も御座いませんが、出來ないながらも、お若い方達に伺つてお眞似でも致したいと存じまして、皆んなお若い方ばかりの御入會なすつて被居る、すみれ會に其度毎に出會致しますが、此間も大村さんが子供の教育法について、それは〳〵爲になる事を御聞かせ遊して下さいましたが、私等も今廿年も前に伺つて居つたらと存じました。何しろ最早や、

▲長男

が今年大學を卒業致したので御座いますからね、オホヽヽ此は少と父親とは違ひまして、工科で御座いますの、昨年の夏も實地練習の爲長崎へ參りましたが。』と、テーブルの上の大版の寫眞をお示しになりまして『此れ丈け一つ下宿に居つたので御座いますつて、此の寫眞では毎日遊んで居つたやうで御座いますねえ。』と、可笑しさうに言はれました。婦人の身の悲しさは、廿五六の春秋迄も友の肩に靠れ合つて、幼兒のやうに戯れて居る事の出來ない羨ましい、お寫眞の中には七八人の天つ晴れ大丈夫、鼻下の八の字髯ばかりは儼めしくとも、何處やら書生氣失せぬ風采の、菓子の攫取りを爲されさうにも見

えました。

▲兵役について

一軍人は固よりの覺悟で、其爲に常から軍事に身を委ねて居るので御座いますから、此度のやうな大戰爭に參加致して、花々しい名譽の戰死を遊ばすのは、御當人も御本望で御座いませうし、又御家族の方々も御心殘りは御座いますまいが、始めから軍人でない其外の、文學士とか法學士とか工學士とか理學士とか被仰る方々が、折角卒業なすつたばかりで、此から社會に出て一花咲かせやうといふ蕾の口切りの處を、兵役に服し暴風に吹かれてぽつきりと折られて、戰死遊ばすのは誠にお氣の毒でもありますし、又國の爲に惜しくもありますし、又御當人も御自分が目的の、學問なり事業なりに倒れてこそ、本望で被居しやいませうが、國民の義務何れにしても同じ事だとは申しながら、さぞ御不本意の事だらうと存じます。私共の長男等も今年は最う濟みましたから宜しう御座いますが、來年は出なければならないので御座います。國民の義務から申しますれば、進んでも此度の戰爭には加はらなければならないので御座いますが、却つてなれない事をするよりも。國民は國民で自分の得手の業に力を盡した方が、御國の爲でせうから、大學院へお這入りなすつた方が宜しいでせうなどと皆樣が仰られますから、それもさうだと存じまして迷つて居ります。全く出來る丈けは自分の職業に向つて進みました方が、忠義かも知れませんですねえ。

▲結婚の自由

一体私共では餘り干渉致すのは嫌ひで御座いますから、自分に恥ぢない事なら、自由になさいと申して居るので御座います、別に之れと申して惡い事も致さないので御座います。却つて餘り儼格に箱詰のやうに教育ましたら、反動が如何かと思ひます。ですから子供等が勝手なやうに致して居りますので

それは賑やかて御座います、何しろ五人の子供が騒ぐので御座いますから、……、結婚などにつきましても、干渉は致さない積りで御座います。世の中には随分親が、強ひて進まぬ結婚をさせまして、不幸に終るものも御座いますから、一体結婚などは當人の心次第で、決して他からかれこれと申したとて纏るものでは御座いませんからね。人間の性質は奇妙な所で好いたり嫌つたりするものですから、親などは決して口を出さない方が宜しいので御座います。親が爲せた結婚ですと、甘く行かない時は、まさかそんな事はありますまいが、酷い親など丶思はれるのみではなく、折角親類となつて親しくなつた間は破れ、此れが古い親戚などでありましたり、又昔からの御懇意などですと、お互につまらない思ひを致さなければなりません。これがもし自分で自由に致した結婚ですと、悪い事もありますまいし、又ありました所で自分で致した事ですから誰を恨まうやうもなく、自分の眼鏡違ひを口惜しがるばかりで御座います。然し長男なども未だなか〳〵嫁を迎へます迄には間が御座いますが、いづれ一人はもらはなければならないので御座いますから、自分の氣に入つたものならば、家では異存はないと申は致しますもの丶、然し、

▲嫁の選擇

何んでも宜しいとは申さないので御座います。無論無教育な譯の分らない者は、妻にするとも申ますまいが、……、世間では未だ随分女學生上りのお嫁さんを嫌がつて、やれ生意氣だとか、やれお轉婆だとか申ますが、外へ出しまして交際をさせますにも、人々を使ひます上にも、教育の無い者では、……、ですから私は、女學校を卒業なすつた淑女で、自分の心に叶つた者があつたならば、心快く賛成して迎へてやると申して居るので御座います。

▲芝居、寄席

本郷座も近う御座いますし、參らうと思ひますれば、随分見られるので御座いますが、どうもみんな好きませんので、つまり美術的思想が無いので御座いますねえ。大學に演藝會がありました頃は、諸夫人のお供を致して娘達も參りましたが、返つて參りますと、お母様ね、役者の眞似をして居ると思ひますと、餘り有難くなくつてなどゝ申ますので、進んでも參らないので御座います。寄席なども若竹が近う御座いますから、これも心次第で御座いますが、矢つ張り義太夫などは好みませんで。

▲避暑△

どうも東京は暑う御座いますから、大概は何處へか參ります。大磯とか箱根とかへは、お友達等もよく參つて被居しやるさうで御座います。』と云はれました時に、先程の御老人のお客様が、お歸り遊ばすやうな氣配が次の間から漏れましたから、お邪魔と存じて直にお暇致しました。

かう申しては失禮のやうにも聞へますが、流石は有名な博士を良人として、傅づかれて居らつしやる程あつて、お生育がないの、教育を受けないのと、御謙遜遊ばしても、何處かに英氣の活々として躍るやうで、一言一句に自然と力が籠つて、お仰る話がみな一々時弊に的中するのには、まことに感服いたしました。今のお若い學問のあるお方にお聞き遊ばした方がなぞおつしやるのは、夫人の如何に謙讓の徳を守つて居られることを表白して餘りありますが、その謂ゆるお若いお方――學問のある――の御名説よりも、十數年來博士の家庭を守つて、女子大學校長の達ての囑托により、同校寄宿舍の監督までして居られる方を姑として事へ、數人の子女教養の任に當られつゝある夫人の御經驗は、ヤレ倫理の、教育の、家政科のと、少しつゝ生かじりを遊ばしたお方のお話よりも、如何ばかり卓れて居るかは申すまでも厶いませぬことゝ存じました、餘計ながら一寸記して置きます。

（をはり）



安東中將の母堂

安東菊子刀自

滄浪生

△一　賢母

安東菊子は大審院判事柳田直平、第四師團長陸軍中將安東貞美二氏の母堂で、高齢正に七十八歳となられて居るが、氣丈な壯健な、そうして有名の婦人である。

人生五十といふ聲は、日本人をして、人生の一段落であるかの如く思はしむる、分けて女子は、五十の阪を越ゆると、容色凋落して白髪まじりの御婆様になつて了ふのが先づ普通であるのに、菊子刀自は生れて七十八回の春秋を迎えられながら未だ百里二百里の旅は一人で草鞋がけでサッサッと出蒐け、又朝は早くから起きて冷水で體を拭くなど、其元氣は迚も當世貴婦人方の及ぶ所ではない。

余は安東中將のことで、始めて刀自と柳田氏の邸で會つた、刀自は日記帳を持ち出して來た、それは明治十年のであつたが、中將が當時西南の戰場より寄せた手紙が一切貼り付けてある、又他の子息の手紙、或は種々のことが、留められてあつた、刀自の應對振謙遜で、元氣で、緻密で、如才ないのには、寔に人をして其爲人に敬服せしむるものがある。

△三十一才の未亡人

芋の蔓には林檎は生らぬ、人物の出づるには、必らず又其系統といふものがある。

刀自は信州飯田藩の執政島地といふ門閥家に生れた、島地家は、古來人才を出し、菊子の祖父に當る人は仲々の權力者で、藩の柱礎とまで言はれた。長じて同藩士安東三喜次氏に嫁き、四人の男子を生み、三十一歳の時に、良人に死別れて、若未亡人となつた、三十一歳以後の生涯、即ち未亡人としての菊子こそ全くこれ刀自が天より賦與されたる婦人としての任務を十分に發輝せられたもので、即ち母としての活きた龜鑑を示して居るのである、余は少しくこの菊子といふ樹に咲いた美はしい二三の花を集めて見やう。

△刀自の處生

女の一心は岩をも通ふすとかや、矢に切る竹の細さよといふ句は、克く女の一心をいひ現はして居るされど世に一心一貫の賢夫人は、尠なし甚た尠し。

若未亡人の歷史は、面白からぬ影を留めて居るものが多い、女は男の蔭に依らねばならぬものゝやうに女の方で覺悟して居るから仕方がない。

所が刀自は立派に未亡人を通ふして來り、否男も及ばぬ雄々しい光榮ある生涯を造られて、孟母の阿流を酌む一人となつて居る。

菊子の里方は、前にいふが如く、島地といふ大家であつたが、菊子が嫁入した安東家は劍術を指南する家であつたなれど、家格は中等の士族、家產は漸く人並に朝夕の烟を立つるといふに過なかつた、故に未亡人たる刀自は、四人の子を其膝下に置いて、安東家の威嚴を落さずに行くことは、仲々容易のことではなかつたが、其處が刀自の非凡なる所で、少許の知行もて、克く一家の維持をして、子供の敎育まで遺憾なく施した。

時勢が一變して維新の大幕が開かれて、文明の光が深山の奧にも輝き渡る時代となつた、即ち明治六七年の交に及ぶと、刀自は大いに時勢なるものに

感奮せられた、曰く『今後の人は學問なり』と、彼はかく決心し、子供には手習讀書を盛んに學ばせると共に、自分も歌道を熱心に執業せられて、敷島の道に夢中となつた、他人は大鳳の志を知らぬ燕雀で、酔狂とか物好とかいつたが、刀自は區々たる世評には一切耳を假さず、一家を擧げて身を學問に捧げ了つたのだが、後には人皆其志の健げなるに感服し、『女丈夫の稱』一郷を震はせた。

△百聞一見に如かずの主義

刀自は非常に旅行が好で、名所古蹟といふ所には凡そ其の足跡の印さない所はない。

旅行する時には倘隣にでも行くかの如く、或は市人の御祭見物に出懸るかの如く、何の造作もない、何の面倒もない、それは男子が散歩にでも出懸るやうに、ブラリと飛び出し、ブラリと皈つて來られる、人或は女子の一人旅と惡口するも、彼女却つて之を哂ひ、『人は智識を第一とす、智識は百聞一見に如かず』といつて取合はない、七十八歳の今日でも、尚何處へでも旅行したいと云はれる、家人が止めなければ西洋にでも行くかも知れぬ、故に彼女は一寸飛上りのハイカラのやうにも見えるが、其の本性は寧ろ剛健的實利派の人である、その崇拜者としては故福澤諭吉先生であるのに徴して見ても、其爲人が想像せられる、されば、彼女の旅行は、其の身裝手荷物ソンナものに贅澤をいふことは塵ほども無い、平生のまゝで出立するのだ。

△記憶力人に秀づ

刀自の記憶力は人に絶して長じて居る、十年十五年前のことは愚か、三四十年前のことでも、昨日か再昨日の事のやうに話さるので、孫女嫁などが『如何して御祖母様はソンナによく覺えて居らつしやるの』と呆るゝほどである。

元來記憶力は根氣の強い人に強い、根氣の強い人は多く人傑である、人傑は必ず體格が可い、五體四肢が克く發達して居る、從つて腦が堅固であるから記憶力が確かなのである。

併し乍ら身體の健全は、元より自然的に屬するものが多からうが、亦人爲の作用で即ち攝生如何で其健全を得らるので、刀自の健康は、人爲の攝生によりて得たものが甚だ多い。

刀自は如何なる寒中にでも、必らず毎朝行水をせられ、又新聞或は雜誌にでも、養生に叶ふとか、攝生になるとかいふことを書いてあると、皆それを採用して實行したものだ、而して新聞にまでも出て居ることは何か可い所があるに違ひないからそれを實行して見るのだ、といつて居らるゝ

△演説が大好き

刀自が東京に居を定めた時は、明治十七八年比であつた、此時は矢野文雄、沼守一、藤田茂吉等の人人が改進黨の勇將として、天下を風靡した時で、彼等一派が盛んに政談演説を開いてゐた。

其の演説會の傍聽席に六十歳斗りの婦人がいつも二人席を併べて一心不亂に演説を聞いて居た、其一人は龍溪先生の母堂で、一人は即ち刀自であつた。

刀自が演説會行も亦旅行のそれの如く、新空氣吸入のためであつた。

△刀自と三輪田女史

水は方圓の器に從ひ、人は善悪の友に由るといふが、刀自の知己で否刀自を自己の母といつて尊敬する人は誰あろう、彼の有名なる賢女三輪田眞佐子刀自であるのだ、此一人の知己を以て如何に刀自の爲人が推し測られる。

三輪田女史は、柳田家に來て、刀自と會ふときはまるで、姉妹の如く、また母子の如く、互ひに打解けて、殊に女史は、「私は藪入に來た積りですから」といふさうである、又刀自は歌道に熱心な人で、且つ非常に斯道に上達して居られる、而も歌道大家としいへば、遠近を問はず、必ず其門を叩かれぬはなしと云ふ程である、三輪田女史との交際も此邊から來たものであらう。

それから日常の外出には今も尚サッサッと一人で出懸け、決して車などには乘らぬ、奢侈といふこ

とが大嫌ひで、日露戰爭以來は、何か新らしい事があると飛んで出たが嘗つてマーギー女史の歡迎會があると聞くや、其孫女矢田部夫人に「私も行くよ」と言はれたが一同から止められたので、遂に行かれなかつたとのことである。

△四人の子息

刀自の子息は四人で、長兄は故山に祖道を繼ぎ次男は柳田大審院判事で、三男は即ち安東中將そして柳田氏の花聟が、有名なる陸軍中將木越安綱氏で、安東中將の花聟は、文學博士桑木嚴翼氏といふみな當世に名を知られた人である。

世に幸福なる人の中にも、特に菊子の如きは幸福なる人である、一門一家の榮へ繁れる中に芳ばしき香を放ちて、多くの令息、令孃、さては孫男孫女から敬ひ冊かれる境遇の、如何に樂しきかは、刀自ならぬ人でも推察して羨まれるのである。

松風を植て聞たし雲の嶺　千代

夏の家庭

梅のや主人

今はたゞ焦げるばかりの暑さに書よまんにも氣のりせず、晝寢すれば蠅めが邪魔をする。起きて見ても寢て見ても、嬉しからぬは此頃の炎熱では厶いませんか。マアこんな折に、何ぞ熱さを忘れるやうな樂みも有りさうなものと思ふまゝに、偶と避暑曆を繙き見るに、

花すだれ

と申す遊びこそ、夏の家庭に於て、上品で、手輕でしかも面白い遊びであると思ひました、此遊びには豫め、葭簾に小さい花籠の數々、もし花籠の大きいのが、三ッ五ッも揃はば、此上とも申分が無い。ソレニ草なり、花なり、又は木でも竹でも、生々とした夏の植物を充分に用意する。ソコで之を材料に一ッの涼み座敷をしつらへて、三伏の一日を淸らかに樂むといふのが、其趣向の大要であります。素よ

り、其しつらへ方の拙いと否とは、自ら涼しさ加減にも差しひゞきを與へるものなれど、

一通のやり方

としては、先づ、八疊内至十疊ぐらゐの一部屋で、見付の好い壁つらを後に、ズラリと葭簾を下してそれに幾つとなく小さい花籠を懸け、來遊の方がソレゾレに花を生けるのであります。勿論、花の種類は、ヤブマオでも、オドリコ草でも、ノゲシでも、オーバコでも、何でも構ひませぬ、且つ其生方も、遠州なり、石州なり、池の坊なり、投込なり、掴挿なり、お好み次第自由にして宜しいのであります。夕べ〳〵此遊の眼目たる。

爽涼清楚の氣

を忘れないのが必要です、花を集めるとしても、大凡は、

側柏　土用頃は新緑滴るばかりにて、前流などに生け込めば幽谷の松が枝にも似たり。

朝貌　白いもの特に涼しみ多し。水揚法に氣をつけよ。

秋海棠　楊妃か李夫人とも思はるゝ程優しいもので、名を聞てさへ土用中战に秋を想ひ起させる。

花丁子　葉のいや〳〵しさ。花の香ぐはしさ。暑氣を拂ふ良劑とし見るべし

薔薇　何時見ても惡くない。白いもの最も妙。水揚に氣をつけぬと、花がガクリと前へブラドる。

夏菊　水揚尖い時は、葉の邊から水が迸るやうなら、紫赤い花は嫌しからず。高い香は汚の臭を抹し去る妙。

葉蘭　暑さを拂ふの趣ありて、緑滴たる爲とし見るべし。

太藺　洒々灑々として正に是れ、瀟湘蕭々雨生するの趣あり、

河骨　花も葉も殊に逞しい、太藺と共に水草の魁なり、水揚法を忽せにすべからず。

ほしよい　涼しさ凄いばかり。横枝多ければ、二本生は野暮なるべし。

姫百合　上品でスガ〳〵しい是れ淑女のモデルともいふべきか。

金蓮花　萬緑叢中紅一點の有樣なりて、一見生氣活躍するを覺ゆべし。

尾花　以下撫子に至るまで所謂秋の七草、何れか秋風を誘はぬものやある。

桔梗　水揚確かならねば、花が前にブラリとする。

刈萱　素雅掬すべきものありて、然かも勢つよい姿。

われもこう　ヒヨウキンな花振。花の中の滑稽家なるべし。

女郎花　優婉閑雅其名まことに空しからず。

撫子　可愛らしい姿。生けるにも容易で、見ばへ更に引き立つぞうれしき。

西洋花　ソコ、コヽに混へ生ければ、東西の花くらべとなる。

コンナ種類を、コンナ心持に案排して、杜若のかへり咲など、留流にわしらふたら、ハヤ、すだれの裾

から川風でも吹き染めるやうに思はれるでありませう。

もし、其部屋が、床附ならば、又一段の幸ひ。早速其幅物を外して、跡に力味ある花瓶をかけ、思ひ切て、ドッサリとした垂柳などを投げ入れて下には、白伊萬里ホヤの香爐などを据ゑる。總べて、香の類は、惡い臭を排ふのみならず、暑さの勢さへ抑えるものなれば、タトヒ、床の無い部屋であらふとも、此種の嗜みは、時節柄忽せにしたくない。ソレカラ違棚に料紙文庫硯箱なども備へて置きたい。又部屋の中で恰好の位置を見立て、二タ組か、三ッ組ぐらゐに、**大花籠**を排置し、成るたけ、フッサリと賑かに、遠慮なしに挿花する。自ら、

暑き日の寶とや
まうす小藪かな

い消息を、此間に移すつもりでする。若し此上、清水の水盤に盛られて、椽先に据ゑゐるなど、益々座敷の涼みを添えるのみならず、都合の善いことも、多からふ。先づ之で一通の設備が終て、玆に新しい**涼み座敷**が出來上ります。一寸億劫に聞えれど、其實名々で

懸花の栞

一、花かごは、輕いものを撰べ。さなくば、簾にて支えきれず。
一、花かごは、形の多種なるが面白し。
一、花を支えるには、三叉の枝宜し。
一、莖の切口をハスギリになし、三叉と壁面とにて支へよ。
一、風などで花の形の亂るゝは、不風流此上なし。
一、挿したる莖は、花かごの眞中に立てよ。かごふちに莖のさはるは拙し。
一、一杯の花は、一莖で出來れば此上なし。多くも三莖以上なるはくどくどし。
一、掛花の丈高きは、好ましいものに非ず。
一、枝の長短と奥行とを失ふな。
一、自然の性に從うて生けよ。
一、三方より眺めて、見惡りせぬは、妙手の花と知れ。
一、水揚り十分ならざる花は、決して生けるものに非ず。

持寄た草花や、小籠などを修飾するに過ぎないので
すから、オホ……位の間に造作もなく整うて仕舞ふ
先づ、アッサリと琴に笛
ぐらゐの合奏で幕が開く
とすれば、第一が花しら
べ、委しく申せば、此集
めた花を無意味に樂まず
して、更に之を植物學の
上から味うて一通の分類
より、種下、栽培、蕃殖
などの方法、之に縁める
詩歌、傳説の名吟佳話は申
すに及ばず、裝花の評話
意匠の考案、其外、花の
水揚保存の末に至るまで
互に語らひ興じつゝ、其要
點を一ツのスケッチに殘
すのです。此スケッチなる、



花調帖

を閲すれば、開卷第一が分類表、二頁はいびやく
三頁に朝顔……と云ふ順
序排列。其出來上た表や、
記載の事柄は、誠に簡單の
ものとは云へ、其裏面には
植物の形態學や、生態學な
どの智識がタップリ籠つて
居つて、思ひ設けぬ有益の
發見、學修應用の味、考へ
遊びの滑稽の話など自然に
生ずるのであります。それ
かといふて心や體を勞する
に非らず、笑ひつ、手拍し
つゝ、遊びの間に、ツヒ植物
學のおさらひを爲た上に、
室内裝飾、園藝法、美術、
文學などの活才を運轉することを得るのではありま

せんか。同志の友の多いほど、其樂みも多い。從て規模も大きくなり、趣味も發揮される。どうか舊來のスミツコにムツ〳〵するやうな遊び方や、氷、ラムネなどを飮み過し、コロ〳〵假寢するとか、明治式の奢りをてらふやうな暑さ除けなどは、スツパリ改正して、

女子の避暑法

を、こんな方面に發展したいものと思ます。で、一夏の中同志の家々を順番に數回も巡りあるけば「オヤオヤ、モウ、秋風が吹くのか」と思ふほど、夏の短いのに驚かれるくらゐであります。しかしかやうに度々の開會では、花集が大抵でない。一々貰ひ受けたり、買ひ求めたりするのは、大業ですから、何の心配もなくして爾かも興味のある。

家庭の園藝

から、豐富に供給する工風をするのです。此の園藝と花すだれとは、其關係が極めて親しいから、ドナタも平素より、少しづゝ心にかけられたいものであります。其研究の順序は、理論より始め、實際に移るが普通なれども、一ト飛びに、素人にも容易く出來さうなものを、大略お話し申せば、先づ小砂交りの眞土を盛り立て、

可愛らしい花壇

を拵へる。肥料には、何より油糟が利きめが多い。化學肥料のプラントフッドなども中々宜しい。整地の準備がすんだ上、ソレ〳〵草木を植ゑ込み、種を蒔き下ろす。タトヒ二タ坪か、三坪ぐらゐの花壇にしても、其折々の花を絶やさぬには、隨分工夫も勞力も少なくない。で、其半ばの地面を割いて、二年生、三年生などの灌木の類を移植し、殘りの半を草花の部分に充てる。ソシテ豫め春先より、土用頃に盛んに咲き出す花の仕立方を準備するのであります。凡て草花は灌木に比すれば、種下や、培ひや植え替えや、肥料を施すなどまで、頗る厄介なものだ。デ、此二種をコンナ風に配植すれば花の眺めに飢えるやうなことが無い、同じ一本の花でも、自ら

手を下さぬと、同情も薄ければ、愛憐も乏しい。人中へ持ち出してもナントなく氣おくれが出て、人の話に力が入らぬものです。

扨又此の花すだれの遊は、衣服の着競や、馳走の爲爭などのやうに、又其外香りがましい事は、キッパリ拔きにして、淸らかにエコノミカルに樂むと云ふ精神でするのが、何より大切でわります。尤も身なりと馳走とは、交際上に於ける十分の注意を拂ふべきもので淑女は淑女らしい品位を保つことを要求しなくてはならぬ。即ち此涼み座敷に相應するやうな、身まはりの嗜みは勿論、殊に其馳走の如きも、大いに面白くして見たいものでわります。今その一二を申さば

献立（一）

一、香煎の白湯（香煎は京の名產、淡く風味高し） 午前一回
一、更科氷汁粉（蕎麥團子を氷汁粉に爲たもの。淡白にして風味宜し。） 中食
一、百桃 午後一回

献立（二）

一、都の香の白湯（紫蘇の細末） 午前一回
一、浪華辨當（卯の花を胡麻を煎り交へ握飯に附けたもの。奈良漬などを添たる。） 中食
一、唐林檎 午後一回

など面白からうと思ひます。其外此遊の精神に適ふものなら、何でも構はぬが、しつこいもの、手數のかゝるもの、席を荒らすものなどは、不粹の極でわります。

結論

さて此座敷の裝飾、當日の馳走、身なりの嗜み、言葉を代へて更に廣義に解すれば、衣食住の三要素を其の季節に從うて、家事科の應用を試みたものに外ならぬ。即ち家政の實習を遊技の上に換骨脫體せしめたもの。素より、新著の遊技書や、家政の教科書にも無ければ、今日の茶の湯生花の宗匠等が知るところでも無い。トハいへ、誰れの新案發明にもわらで、ズット昔の其上に於て、利久や、遠江守などが、日本固有の家政學を唱へられた其言葉の陰に遺されて有るのです。

脚氣病治療の實驗談

倭翁

◎いよ〳〵暑くなつて參りました、夏季はどうも冬とちがひまして病氣が多いので困ります、コレラ、赤痢、腸チブス、急性腸カタルなど流行性のものは孰れも夏の病氣であります、所が世の進歩につれて皆樣が衞生の大切なることを御承知になりまして各自に御注意なさるのと又其筋の取締も行屆きます所から、近年は此等の惡疫が甚しく流行致さないやうになりまして結構であります。

◎さて最初はコレラも赤痢も腸チブスも、此頃のペスト騷のやうに、傳染するが最後、生命はないものと呆めねばならぬやうに恐しう御座いましたが、今日では豫め用心さへして置けば左程恐るゝには及ばないとお互に安心の出來る、即ち攝生さへ怠らなければ助かると氣強くなりましたは、科學の進歩のお庇でありまして、其病源が研究し盡くされて之に對する療法が分明したからであります。

◎赤痢、コレラ、腸チブス、急性腸カタルはその病毒が、天然痘や痲疹のやうに瓦斯體でなく固形體にして、即ち其原因は下等植物又は下等動物にして早く申さば一種の蟲であります、而してその人に傳染いたしまするに空氣に乘て來るのでなく、只食物又は飲料にまぎれて體内へ入りこむものであります、「災は口より出で、病は口より入る」と申す俚諺が御座りますが、御婦人方がお身分に御注意なさらないでおしやべりが過ぎますと、アタラ淑女たる品格を御損じなさることが御座りますやうに、病氣も此俚諺の通りコレラの蟲も赤痢の蟲も又急性腸カタル腸チブスの蟲も、ドウかすると口から這入こむのでありますから、飲食物に氣を付けねばなりませぬ。

◎所が如何に注意しましても、此蟲共を舌で撰出すと云ふわけには參りませぬし、又齒で嚙み殺すと云ふことも出來ませんから、致方は御座りませんが、そこが生ある動植物のことでありますから、一度煮

沸すれば皆死んで仕舞ふのであります、故に常に能く煮たるものを喰ひ、能く沸したるものを飲みさへすれば、如何に頑强なる病魔もその威を逞ふする餘地がありません。

◎併ながら永の月日のうちには、如何に謹愼深き方も、ツイ酒を飲過ごすとか、不消化物を過食するとか、腐敗した飮食物と知らずして用ゐらるゝこともないとは限りません、若しその不攝生より彼の病魔の蟲共が口の關門を無難に通過して腹中に落着ますと、其徴候は忽ち現はれて腹痛を起し下痢を催して參ります、さて其場合には決して狼狽するには及びません、先づ不消化物を禁じ、温かい消化し易きものを食し、腹部を温めて冷やさないやうに手當し、尚腹痛には蒟蒻を温めて貼るなどが尤も効驗あるのです、かく手當しても一日以上も治らねば、此時醫師の診斷を受けてその指圖に從ひなさるがよろしい。

◎如何に激性の惡疫でもその病原がわかりて之に對する療法が發見せられてゐる以上は、前に述べましたコレラや赤痢のやうに恐るゝには及びませんが、縱令その病症が輕う御座りましても、その病源が不明である時分は決して油斷が出來ません、東洋の風土病とも云ふべき脚氣の如きものはその一でありませう、翁もこの恐るべき脚氣患者の一人でありまして、年々歳々同じ季節が來れば輕いか重いか必ずその襲擊を受けるのでありますが、之を馬鹿にして居た爲に或年は重症となつたこともありました、然るに今日まで生存へて居ますのは、自分ながら只不思議に思ふ計りであります、統計を作る便宜が御座りませんから、確証を示すことは出來かねますが、脚氣患者は中々多數でありまして、年々脚氣衝心即ち心臟痲痺の爲に斃るゝ數は、決して少くは御座りますまい。

◎さて此恐るべき脚氣の原因に付ては、今日では未だその學說が一定する迄に研究が進で居ないので、貧血說、寄生蟲說、瘴氣傳染說、細菌說、魚毒說、自家中毒說、米食說など區々で御座りますから、そ

の治療法も一定した適劑が發見せられないのであります。

◎されば醫師の投藥は大抵消化劑と通利劑とでありまして、力めて適宜の運動をなさしめ消化し易い流動食物の牛乳、鷄卵などを用ゐさせます、而して事情のゆるす限りは轉地を奬勵するのであります、古來麥飯や小豆を殊功あるやうに云つて用ゐさせたは麥飯の消化の容易なると小豆が利水の特功劑であるからであります。

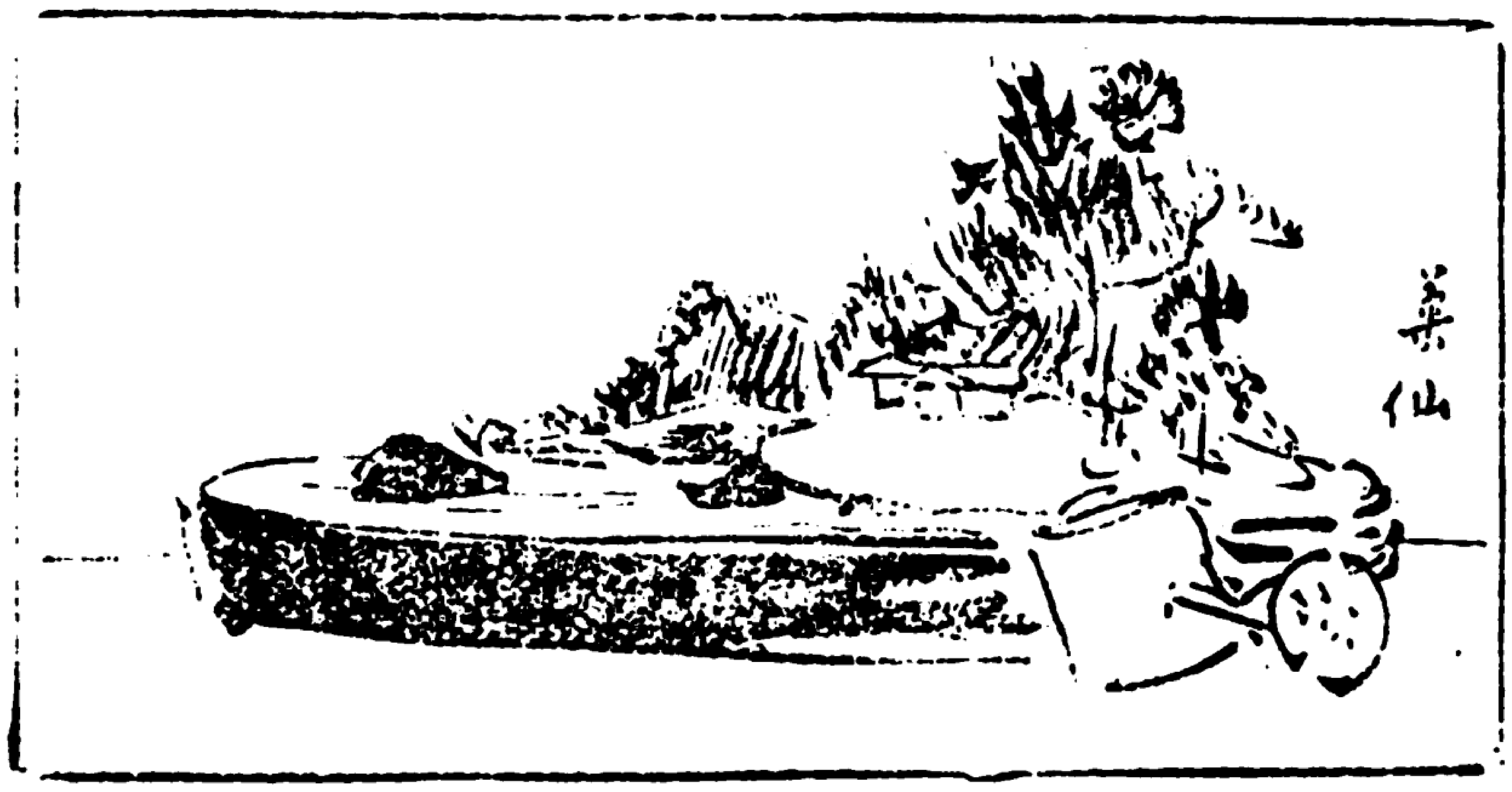
◎脚氣は年々同じ季節が來ると發る病氣でありますが、併し毎年同じ調子ではありません、年を重ぬるに從つて段々惡性に變るものであります、最初は脚部に痲痺を感じて恰も紙一重隔てゝ撫づるやうな氣地がいたすやうになつて參りますと、漸々水腫だしまして皮膚に彈力がなくなり指頭で壓せば凹みて、指跡の印するやうになりまして、自然と浮き足となつて歩行に不自由を感じて參ります、此場合には利水さへ付けば自然と痲痺も取れますから、別段轉地するにも及ばないで、盛に小豆を喫すれば快復すること容易であります、併し翁の經驗では此際麥飯を用ゐ、利水劑として別に梓桐を服用するに限ると思ひます。

◎翌年になると脚部の水腫は初年の如く目立ちませんが、痲痺は著しく上進して參りまして、下腹部に及び、入浴を苦しく感ずるやうになります、されば氣分も鬱し食慾も進みません、此處になりますと最早小豆ぐらゐでは快復は覺束ない、轉地療養に限ります、此時梓桐の服用は大に病勢を緩和する効驗があります。

◎第三年となると氣分すぐれず顔面に少々水腫を來し脣頭に薄荷を塗つたやうないやな感を起し、四體だるく暇さへあらば横になりたくなつて參ります、脚部は追ひ／＼冷却し出し痲痺は全身に及び、入浴すれば未だ湯によく浸さゞるうちに、下部より胸廓を壓迫し來りて直に絶息するやうな氣持となりますから、最早入浴に堪えられません、此處まで病勢が

つのりましては、車上の動搖も身體にさわる次第でありますから、轉地も容易に出來なく、又却て危險に陥ることが御座ります、往々轉地の途中で衝心の爲に斃れるもの丶御座りますのは、其病勢をはからない不注意から起るのであります。

◎轉地すれば一時は必ずよくなりますに違ひありません、故郷の土を踏ば十中八九は全癒するのであります、併しそれも或時期までのことで、それを過ぐれば甚だ危險であります、轉地は早いほどよろしう御座りまして、晩くなれば無功であります、翁は故郷の閭門に倚つて翁の歸るを待ち給へる一人の老母が御座ります、翁は濟まないこと丶存じながらツイ種々の都合よりこの病氣に罹つてから、三年になりましても歸省をいたしませんでした、處が第四年目に大患



に罹つたのであります、天が翁の不幸を罪せられたのでありませう、實に恐入たことであります、然るに辱けないことは老母の慈しみで御座りまして、翁が脚氣で惱みつ丶あることを聞きまして、日頃の不孝をば咎め給はで、自ら庭内の土を掘起して之を踏めとて遙々送つてくれました、翁が一度重患に陥つて、再び治癒りましたのは全く慈母の庇陰であらうと存じます、これを憶起す毎に何時も泣かざるを得ないのであります。

◎忘れも致しません明治三十五年八月十日の臨時總撰擧の時で御座りました翁の友人で東京附近に撰擧區を有して居た方が議員候補者に推薦せられましたから、友人は撰擧區へ參りまして後の事は萬端翁が引受て應援せねばならぬこと丶なりました、所が御承知でもありませ

ふ其年は珍らしい不順な年で御座りましたから、例の脚氣は疾くに私の身體に逆襲して參つて居たのでありまして、中々頑强な進撃でありました、所が翁は一方太事の委托を受けて居たのですから、若し翁が中途で斃れた爲に撰擧の大勢に影響するやうなことが生じては遺憾なりと思ふ一念で、病苦をこらえ〳〵て運動を續けましたが、丁度期日五日前即ち八月六日に友人から大多數で當撰の見込確立した安心せよとの電報が來ましたので、安心した爲か翁はパッタリと仆れました。

◎此時の容體は全身痲痺に陷り、胃腸は消化作用を廢して牛乳肉汁などの流動食物すら容易に攝取する氣力を有せず、依て飮食するほどのものは皆停滯してさばけないのであります、醫師の投ずる下劑は衰弱し極つた病軀をいよ〳〵衰弱せしむる媒となる計りであります、四體は最早寸步も動かすこと能はず微動も忽ち心臟の鼓動を速進する有樣で御座りまして其衝心は實に間一髮の危機でありました、醫師は

今一步咳氣を催し來らば萬事休すと申されましたが然るに醫師の投藥は偶々嘔吐を催し來るのでありま す、依て晝夜の別なく局部に氷嚢を措き、心臟を冷し通したのでありました、斯くの如き容體で十日立ても半月立ても一向變りがありません、云はゞ只身體の衰弱を益すのみでありました、見舞に來らるゝ人々も、彼處に名灸があるとか、其處に名高い呪禁があるとか、何處に妙藥があつたとかいふ咄ばかりで、最早やかうなつては、駄目だとの意味で、お氣の毒さまとの御挨拶でありました。

◎そこで如何にもして現狀より轉じて生氣が回復いたしませねば、到底助かられないと存じましたが、さて翁も未だ老ひ込んだと云ふ齡でもなし、此處で一週間や十日位絕食したとて死にもすまい、食慾のないのにいろ〳〵の物を飮食するから苦しみ、醫藥なども服用せねばならぬと、尙更ら苦しむので、もと〳〵脚氣の藥とて重は胃病の藥であるからと思ひましたから、看病人の心配するのも構はないで、斷

然一切の飮食物を退けました。
◎それから後は、晝となく夜となく半睡の内に彼れ是れ四五日も經過いたしました處が、一朝目が醒めますと、むしやくしやして居た胸がすいて參りまして氣持よく覺え、何か食つて見たいやうになりました、即ち胃が少々働いて見ようかと云ふ量見になつたらしいから、そこで麥粥をこしらへさせて一椀試みました、麥粥とは實にこれまでお聞きなされたことのない、珍無類の御馳走でありませう、これは折角働いて見ようかと機嫌が直りかゝつた胃腑へ尋常の御馳走では又々失敗する恐れがありましたからで御座りましたが、甘く腹に當りて頗る美味を感じまして、其夕方には快く便通がありました、依て重て麥粥を少々用ゐましたが、それから食慾が出まして快復の緒を得たのであります。
◎斯くて一椀の麥粥は二椀となり、二椀は三椀となり、追て一食引割麥一合の粥と定め一ケ月も辛防いたしました處が、丁度季節も秋冷になりましたのでトン〳〵拍子で元氣付いたのであります、暑中は無病息災のものでもドウかすると斃れるに、病體では中々堪へられまい、牛乳飮め肉汁すゝれ玉子食へと進めますは、人情さもあるべき筈で御座りますが、何分消化機が活動せないで食慾の起らないのに矢鱈と飮食を强ふるは、他の病氣は知らず脚氣にはよくないと眞から感じました。
◎麥粥は煮方に依て甘くもなり、又砂礫を喫するやうにまづくもなるものであります、翁の用ゐましたは丸麥や押割麥で御座りません、引割麥と申て臼にて舂き、荒糠を去り、磨にて引割ました粉麥のであります、烈火で煮ますと吹きこぼれたり、能く熟しませぬから、砂礫を喰ふやうで何の風味もありませんが若し之を半日以上水に浸し置きて後ち、文火で緩る〳〵煮るときは、誠に軟かく出來ます、それへ生玉子を掛けて用ゐるときは、淡泊な美味を有して居りまして、胃病患者の常食には此上なき良原料と存じます、翁は殆んど一百日間この麥粥を專

用いたしました結果、兼て持病のやうであつた胃弱が全然快癒いたしまして重々の仕合を得ました。

◎半は回復いたしました頃に、無類の名灸がある試みては如何だと、知らせてくれた方が御座りましたから、早速試みますからと返事いたしますと、其方が態々尋ねて下されましたが、脛脚氣とて足の不自由な位なら保險を附けるが、水腫も來たさず全身痲痺するやうな惡症には、効驗があるかどうだとのことでありましたが、兎も角試驗の爲に願つて點灸いたしました、それは〳〵足の先きから頭の頂きまでシーンといたし熱いとも痛いとも喩やうなきほどこたえました、是灸は一週間位措きて一回に三火づゝ點すればよしとのことでありましたから引續き試みましたが、効驗が確にあつたやうに存ずます、

◎さて其後は、脚氣の徴候あらば、直に麥飯を喫し、點灸をなし、梓桐を服用いたしますから、流石の病魔も大退却をいたしまして露助のやうに未練の逆襲を企てません、眞に脚氣の必治法は一に麥飯、二に點灸、三に梓桐で御座ります、これさへ勵行すれば斷じて脚氣に命を取らるゝことはありません、是れ萬死の中に一生を得た實驗上より保証する所であります、尤も早く轉地すればまづい麥飯も喫するに及ばず、熱き點灸も我慢せず、梓桐も無論飲まずとも濟みますが、職業や事業やの爲に如何に病氣なればとて思ふやうに勝手な事ばかりも出來ませんから、居ながら簡易なる療法ある以上は、心得をきて病患を免るゝが肝要と存じます、同病相憐むなどとはをこがましう御座りますけれど、世に脚氣の爲に惱みなさる方が少く御座りませんから、翁の實驗を述べまして御參考に供へたのであります。

◎序に申上げて置きます、點灸の場所は足の第三指と第四指との間で別れる股の端であります、一回に三火よくいふ皮切り丈けでよろしいのです。

◎又梓桐と申すは桐の一種で、その葉は青桐のやうで、實は丁度十六豆のやうで、莢の長さは三四寸から、七八寸小一尺もあるのも御座ります、熟すれ

ば莢がはじけて中より白き毛のある實が出ます、その葉なり莢なり實なりを陰干にして、湯茶の代りに煎じて用ゐるので、極呑みよいものであります。

◎盆が來れば井戸かへをいたします、歳の暮になるとすゝ拂ひをいたします、又春秋には大掃除をいたしまして、床板をはがして椽の下の蜘蛛の巣まで取ります、これは定期の家屋大清潔法で御座ります、又其他流行病でも生ずる場合は屢々臨時の大掃除を行ふのであります、これと同じことで人の體内も時時大清潔法を行ふ必用は御座りますまいか、此處になると古人は驚くべきほど注意の届いたものであります、今日でも舊慣を守つて居る家庭では朔日十五日には必ず小豆飯を炊ぎて神佛へも供へるでありませう、是れは慣例に從つて無意識にして居るのでありますが、即ち是れが定期の胃腸大清潔法なので、小豆飯をたらふく喫すれば便通は大小とも快通し停滯物を排出し去りますから、胃腸より來る病患は豫防することになるのであります、これゆゑに古人は脚氣を重患視せず、又患者も少數であつたならふと存じます、折々は赤飯も喫し梓桐湯も十分飲みて内臓の清潔法を實施しては如何で御座りませう。

美貌法及び其の保存

美貌法のことを陳ぶるに先だちまして、如何にせば美貌を長く保存することが出來るかといふ問題を研究するのが、第一の必要であると思ひます、どんな御綺麗なお人でも、爭はれぬは寄る歳波で、縮緬皺とか申しますのが、お顔にあらはれるやうになりましては、美貌法も効能が薄くなりますから、美貌法の根本的方法としては則ち

▲▲▲美貌保存法▲▲▲

を心得て居らねばなりませぬ、美貌保存法と申しますと、牛乳のお湯にでも這入りますか、又は鷄卵の白味を、始終顔に塗ることでゞもあるやうに思はれ

ますが、それも美貌の保存法の一つかも知れませんけれども、身心相關の理といふことが、大體人間を支配して居るものでありますから、如何に齷齪してお化粧ばかり致して居ましても、肝腎な精神が老衰いたしましては、兎ても追付くことでは厶いません心が若くて、和らいで居ますれば、自然顔も若やぎて、何時までも嫣然たる容貌の失せぬもので厶います、それに就いて、此に一つのお話が厶います、目下米國で有名な女優とまをしますと、リヤレ、ラッセル嬢などは、確かに屈指の人で厶います、もう此のラッセル嬢は、五十の阪は迅くに越へて、六十路に近いので厶いますが、その容姿の美しいこと、體度の若々しいこと丶申しましたら四十五十は愚か、打見にはまだ三十歳にも手のとゞかない位であります相で、或人が不審の餘り、貴女はもう餘程のお年齢であるのに、何してさう何時までも御美しいのですかと尋ねました、さうするとラッセル嬢は之に答へて『世界中に私程忙がしい女は、恐らく他にありますまい、隨つて隨分困ることも厶いますし、又失敗することも厶いますが、私は一向そんなことには頓着いたしません、そんなことにくよ〳〵して無暗に年寄らうとは、決して思ひません、貴女方も何時までも、若くて美しうして居らつしやらうと思召すなら、身體を休める暇のないやうに、始終忙がしくなさるのが、何よりも一番宜しいのです、自分は既に花の盛りの期節は過ぎて了つたのだとか、病氣が多くて困るとか、氣分が鬱いで、クシヤ〳〵するとかいふやうな考へは、一切捨てゝ了つて、何事でも自分の爲すべきことを一心不亂に爲さつたら、年寄るといふ餘地がなくなります、私しは是迄で職業として從事して居ます芝居の事に就いては、一日も怠つたことは厶いませんで、戯曲の變目毎に、全で子供のやうな熱心を以て、之に當るのです、自慢のやうにお聞き下さつては困りますが、子供だとて、私し程一生懸命にやるものは厶いますまい、それ程熱心にやりまして、成功いたしませぬ時は、自分の

有てる丈の力を盡したので厶いますから、別に心配も致しません、又自分の過失であるとも思ひません、究極心に何等の苦勞も厶いませぬから、御覽の通り私しの頭髮には、白髮一本生えずに、凡ての困難も失敗も自然と消えて行くので厶います、若し左もなくて、世間の御婦人方のやうに、何事にも熱心がなくて、たゞ詰らぬ事を苦にするやうでは、徒らに老い行く春を怨むの外は厶りますまい、私しは忙がしい時には、斯ういふ方法で、休息いたします、それは午後の五時から六時まで、凡そ一時間室に入つて枕もせずに仰向けになつて寝るのです、さうして此間は本も讀まず、何事をも考へず、唯眼を閉ぢて、靜にして居るのですが、室の入口のベルをも外し、電話の受話器をも取外づしてありますから、室の内の深閑として、物靜かなとは、突然這入つて來た人は驚く許りで厶います、此の閑靜といふことが、休息するに一番大事なことです、熱心に職務に勉强もするし、又かく安氣に休息するので、私しは一般御婦人方のやうに、早く年を取つて皺がよつたり、神經衰弱にかゝるなどの憂なく、何時も若い時分のやうにやつて行けるのです」といつたとの事であります、成程道理ある說と存じます、支那の蘇東坡と申します人は、學者で豪傑で、又た文章家で厶いますが、その自作の文章を見ますると、東坡は、錢塘といふ賑やかな好い市街から、膠西と申して便利の惡い僻地の役人に轉任しましたところが、其所引續きて五穀は登らず、民は甚だ困窮しまして、野武士物奪の類は、其處此處に起り、公事訴訟の忙がしさは大抵のことでは厶いません、さうして食べるものといつたら米麥肉類などは思ひもよらず、やうやく枸𣏌といふ菜葉を每月食べて居つたので厶りますが、さて一年も過ぎますと、東坡の貌は次第に肥えて參りまして、是まで白かつた髮毛も、復び黑くなつて若がへつた、と記して厶います、これも前のラッセル孃の話と殆んど同じやうでは厶いませんか、ソコデ人間は一生の間、其の爲すべきことを必らず熱心

に致しまして、氣の拔けぬやう、心の弱らぬやう、何時も若々と若い心持をして居るのが、長命の方法でもあれば、又一つには美貌の保存法でもあると考へます、この根本的美貌法を呉々も服用せられんことを望んで置きまして、それから

一夜化粧

の御話をいたします。この化粧法は、朝夕お忙がしい方であつて、急にお化粧を爲さらうといふ時に用ゐるので厶います、さて本化粧をする前夜、糠袋を用ゐて、よく顏を洗ひ、白粉をよく擦込み、厚化粧をして寢床に就くので厶いまして、翌朝になりましたら、その白粉を洗落し、更に湯化粧をして後、本化粧をいたします、かく致しますれば、假令一度も化粧したことのない方でも、白粉がよく落着きます又性得色の黒い方でも、自然と垢拔がして、美しくなるもので厶います、平日お化粧をなさらぬ方が、俄かに白粉を、おつけになりますと、白粉の延方が思のまゝになりませぬので、むらが出來て見惡いもので厶いますから、必らず此法をお用ゐなさるが宜しいと存じます。

お化粧の仕方に由りては、大きな眼を小さく見せたり低い鼻を高く見せたりすることの出來るものです、以下少しく是等の方法に就きて陳べて見ませう。

鼻の低きを高く見する法

鼻の低き人は、お化粧をするに、白粉を眉毛と目の中程の見當より鼻梁へ通して、少しく濃く塗りまして、鼻の兩脇へはきかけるので厶います、かういふ風にお化粧を致しますれば、鼻筋が通りまして、低い鼻も高く見ゆるものです。

眦の低りたる人

は、先つ常の如くに白粉を塗りまして、少しく濕りたる手拭をもつて、瞼より眦にかけて上の方へ輕く拭ひ、其跡へ肉色に溶きたる紅を薄く染め、眉毛を

少し細く作り、且つ眉尻を上げめにいたします、さうすれば目元尋常になりまして、容貌が自然と引立ちます。

眼の大きなる人

眼は大きくて、愛嬌のあるのが、よいと申しますがさりとて餘り大き過ぎるのも見にくいものですから尋常の眼元に見ゆるやうに致すが宜しう厶います、その法は瞼の白粉を濃くして、眼の中に白粉の入る程の化粧をするのですが、眼の格好によりましては瞼の白粉を濃くする時は、却つて眼の張りの際立て見せるものですから、こんな眼の方は、常のやうに化粧をして、濕りたる手拭で瞼を輕く拭ひ、極々淡くした紅か、猩臙脂をさすが宜しいです、尚眼の大きな人は眼八分と申しまして、少しく下を見る積りにならねばなりません。

細き眼の人

は通常の通り化粧して後、睫毛の邊りを濕りたる手拭にて拭ひ、極淡くしたる紅をさしますると、少しは大きく見ゆるので厶ります、又常に遙か向ふを見る心持をせねばなりませぬが、餘り睜る時には、眼ざしが恐ろしくなりますから、程よく注意をせねばなりませぬ。

口の大きな人

口の大きな人は、口元を尋常に見せなければなりませぬが、それには唇と吻とにかけて、白粉を塗り紅を唇の内側より七分程に附け、三分程を避け置き紅を少し濃く染むるので厶います、但し口の大さは人々によりて異なるもので厶いますから、それ〳〵口の格好によりて、程よく紅白粉を用ゐねばなりませぬ。

唇の厚き人

唇の厚きを薄く見せます法は、化粧をする時白粉

を唇へ塗り入れ、前のやうに紅を唇の内側より少しく濃く染むるのです、併し吻にはあまり一杯に施さないが宜しいです、又口の格好によりて、白粉を吻へも少しく塗り入るるが宜しいです。

▲丸顔を長面に見する法

額の狭くして丸顔なるを、長き面に見するには、先づ額を目立たないやうに剃上るのですが、此額の作り方には餘程手加減を致しませぬと、其の作方が甚だ不手際になりまして、生際目立ちて、賤しく見ゆるものですから、よく注意して、ただ拔上けたる位にするが宜しいので厶ります、又鬢の生下りの方は下しも剃刀を當てゝはなりませぬ、白粉の仕様は額の小鬢より前髮の内へ少しく吹込み、次で生際より附け始めて、小鬢より生下りの方は、極て淡く化粧をし、耳の後ろより耳朶の下少し頬にかけて、咽頸筋にて濃く塗ります、斯く化粧いたしますれば、如何程丸き顏も、少しは長く見ゆるものです。

▲額の生上りたるを尋常に見する法

額の生際の上りたるを、尋常に見する法は、白粉を極く淡く溶きまして、生際より少し内にかけて額一杯に塗ります、さうして絹切で生際より五六分許の間を、よく拭ひ、通例の如く白粉を溶き、生際の四五分許り下のあたりより稍々濃く化粧いたしますれば、最初に額の上に塗たる白粉は、皮膚そのまゝの色の如く、其上生際を若々しく見せ、又後に塗りたる白粉は、丁度額の長さに見えまして、顏を短かく見せるものです、尚額の廣き人は、成るべく眉を長く作るが宜しう厶ります。

▲眉毛の作り方

美はしき容貌の方でも、眉毛が餘りに太いのは、厳つきて、賤しく見えるもので厶いますが、眉の細いのは、之に反して容貌の何となく愛らしく見ゆるものです、しかし眉毛の作り方は顏の格好によりて、

それ〲異にすべきもので厶いますから、一概には申されませんが、短い顔や、丸顔の方の眉毛は、三ケ月形に致し、又長き顔には少し太く作ります方が似合うものです、それから眉と眼との間の短かい顔の方は、眉毛の下の方を少々剃上げて、上より作るが宜しいです、又短かい眉毛を長く見せますには、化粧後濕りたる手拭で眉の兩端を輕く拭ひ、黛を淡くはきかけるのです、黛は鷄卵の殻を燒きて粉末にしたもの、及びコロンブ炭を用ゐ、又麥の黒穂を粉末としたるもの、並に油煙などが宜しい。

眼と睫毛の事

眼の涼しいのと、否らざるとは、大いに容貌の美に關するもので厶いますから、眼は常にその攝養を怠つてはなりませぬ、上瞼の張りの強きは、俗に之を張りのある眼とまをしまして、人に悦ばるゝものですが、上瞼の柔弱にして緩みて居ますのは、容貌の美を損するもので厶いますから、かゝる瞼の方は毎夜寢床に入る前に、善良な化粧液又は香油を塗り、翌朝微温湯にて洗ひ、よく〲攝養を怠らないときは、自然に眼の張りを強くするといふことです、又睫毛の密生したるは、眼を美はしく見せ、容貌をも溫雅に見するものですから、美貌上睫毛を大切にし其の攝養を怠つてはなりませぬ、睫毛は常に胡桃の葉の煎じ汁に洗ひ、又をり〲香油を用ゐますれば次第に密生し、毛質も健全になりますから、此の方法によりて注意せねばなりませぬ。

齒と唇の事

美貌上から申しましても、又衞生上から申しましても、齒は常に清潔にすべきもので厶います、其の磨き方は、上顎の齒には、上より下へ楊子を使ひ、下顎の齒には、下より上へ楊子を使ひ、そろ〲と磨きて、齒齦の損じないやうに注意せねばなりませぬ楊子は成るべく柔かきものを選びて、磨粉の善良なものを用ふべきは云ふまでも厶いません、又齒齦即

ち齒石を生ずる時は、惡臭を發して、衛生上にも害がありますから、之を除くやうにするが宜しいです尚ほ食後常に葡萄酒で口嗽ぐ時は、惡臭を發しないと申しますけれど、これは一寸むつかしい事で厶いますから、三度の食事毎に水で嗽ぐことを怠らぬ様に注意すれば足ると思ひます、又唇の端則ち口角には往々皺の如き裂目を生ずるもので、甚だ容貌を害するもので厶います、これにはワセリンか、硼酸ワセリンを塗けますれば、直と癒るもので厶います。

▲化▲粧▲石▲鹸

化粧用の石鹸は、最も品質の宜いものを選ばねばなりません、若し粗惡なものを用ゐますれば、皮膚を刺戟し、皮脂を脱却して、光澤がなくなり、又皺烈を生ずるもので厶います、惣して原料にアルカリ劑を多量に用ゐました石鹸は、決して用ゐぬが宜しいです、歐洲で使用する化粧石鹸は、グリスリン、油類、及び芳香揮發油から製したもので厶いますからそんな石鹸を使ひますれば、皮膚を清潔にし、色を白くするのみならず、皮膚の機能を亢進し、且つ爽快の感覺を與ふるといふことです、かゝる善良の石鹸は近來歐米から、輸入して參つて居ますし、又我國でも追々善良の品が出來るやうになりましたから化粧と衛生とに注意さるゝ方は、グリスリンを材料として精製したる品をお用ゐなさるが宜しいです、小間物店などに販賣して居る化粧石鹸の有名なものは、舶來品にては、キユーチキユラ石鹸、本邦製にては、花王石鹸、ムスク石鹸、リスリン石鹸など其他にも種々でざいます。

▲美▲貌▲劑▲及▲び▲香▲水

顏其他の皮膚を美しく光澤を生ずるやうに致しますには、いろ〳〵化粧液がございますが、硼酸曹達、グリスリン、氷砂糖、薔薇水などを配合したる液は、効能の著しいものですから、毎朝面を洗つた後、又は入浴後には、必らず之を塗るのでございます、かく

して常に怠りませねば、皺烈や、凍瘡にかゝることとなく、又日焼及び雀斑の發生を防ぎ、種々の皮膚病をも豫防するの効がございます、又之を白粉下に用ゐますれば、白粧の附きを良くし、並せて鉛毒、白粉焼等を防ぐもので厶いますから、化粧上尤も必要の品で厶います、キレー水、二八水、小町水、雪の梅江戸の水、色白新剤等いろ／＼厶いますが、香水は酒精を含まない上等品を選ばねばなりませぬ。

▲品▲格

少しく議論がましくなりますが、婦人方が美貌のことに就いて、さま／＼意を用ゐ、思を凝らすのも、決して咎むべきでは厶いませんが、こゝに一つ尤も注意を要するのは、品格と申すことで厶います、如何ほど奇麗にお化粧をいたしまして如何にも美貌上一點の打塲はないにしても、品格が備つて居ませねば、決して引立つものでは厶いません、品格と容姿とは別のもので、縱ひ容姿は左までゝなくても、凜とした品格のある方は、何處となく立派に見ゆるものです、又容姿は申分がなくても、品格のない方は何處となく見劣りのするもので厶います、それ故私の考では、品格は美貌に先だつべきものと存じます品格が備はつて、それから美貌といふことになりますれば、高尚で綺麗で、實に此上もないことであります、併し品格は精神の修養から自然に生ずる結果で、一朝一夕に求め得べきもので厶いませぬから、平日學問執業の際に、十二分の修養が第一で厶います。

（をはり）

海水浴と避暑

笠城山

▲海▲水▲浴

聞いてさへ、もう身内の涼しさを覺ゆるのであるのに況して軒端の風鈴に風絶えて、苦熱燒くが如き照日盛の頃、麥藁帽子を頂いて、思ふどちうち連れ

ザンブと海水に躍り込み、萬頃の優しい美しい而かも無邪氣な白波を、追ひつ返へしつ遊んで御覧なさい、其の涼しさ愉快さは云ふに及ばず、どれ程身體の爲めになるか、知れないのであります、其處で今

▲▲▲▲▲海水浴と其注意▲▲▲▲▲

とに付き少々云ひますれば、抑も海水浴と云ふのは、其海水が多量の鹽分を含むで居るから、甚だしく皮膚を刺戟するので、皮膚が非常に強壯になり、また波浪動搖の爲め身體を撃たれ、自然他動的に筋肉を運動させると同時に、體内の燃燒作用を助けて新陳代謝の機能や、消化器の働きを盛ならしめて、食慾を増させ、身體の營養を活潑にする等の效能があります、のみならず、總て海濱の空氣は、酸素が多くて、殊に日の出前は酸素が濃厚である、且つ腐敗つた瓦斯や、塵埃などもなく、四方の景色は好し眺めは廣いので、氣も心も壯快になり、心身二ながら全きを得て、其の効驗の著しき事は世人の識る所であります、然しながら、今日の一般の樣を觀るに、海水浴場を目指して、一つの娯樂場とのみ考へて、衞生と云ふ方には重きを置かないかと思はれます、例へば彼の浴度數及び其の時間の過不及に構はず、無闇矢鱈に游泳いだり、巫山戯たり、甚だしきは、冷へ切つた身體を、海濱の焼け砂に横たへ、徒らに強烈なる日光に、背を曝すなど、實に言語に絶した不養生を行つて居ります、かくては折角の海水浴も、却て病を醸す原因となり、障らぬ神に罰中らずの嘆を漏らすやうに成るのであります、それで注意すべき事を、箇條書にして記しますれば、

一、海水浴は七、八、九の三ヶ月間に於いて、二週乃至四週間續行するを好しとす。

二、浴度數は一日一回、尤も慣るゝに從つて三回までは宜しとす、猶時間は、強壯者といへども三分より十五分間を過すべからず。

三、入浴する時は、麥藁帽子を用ゐ、腹部を布にて卷き、或は深く沈み、或は起ち、身體を前後左右に動かし、勉めて運動せざる可からず、然

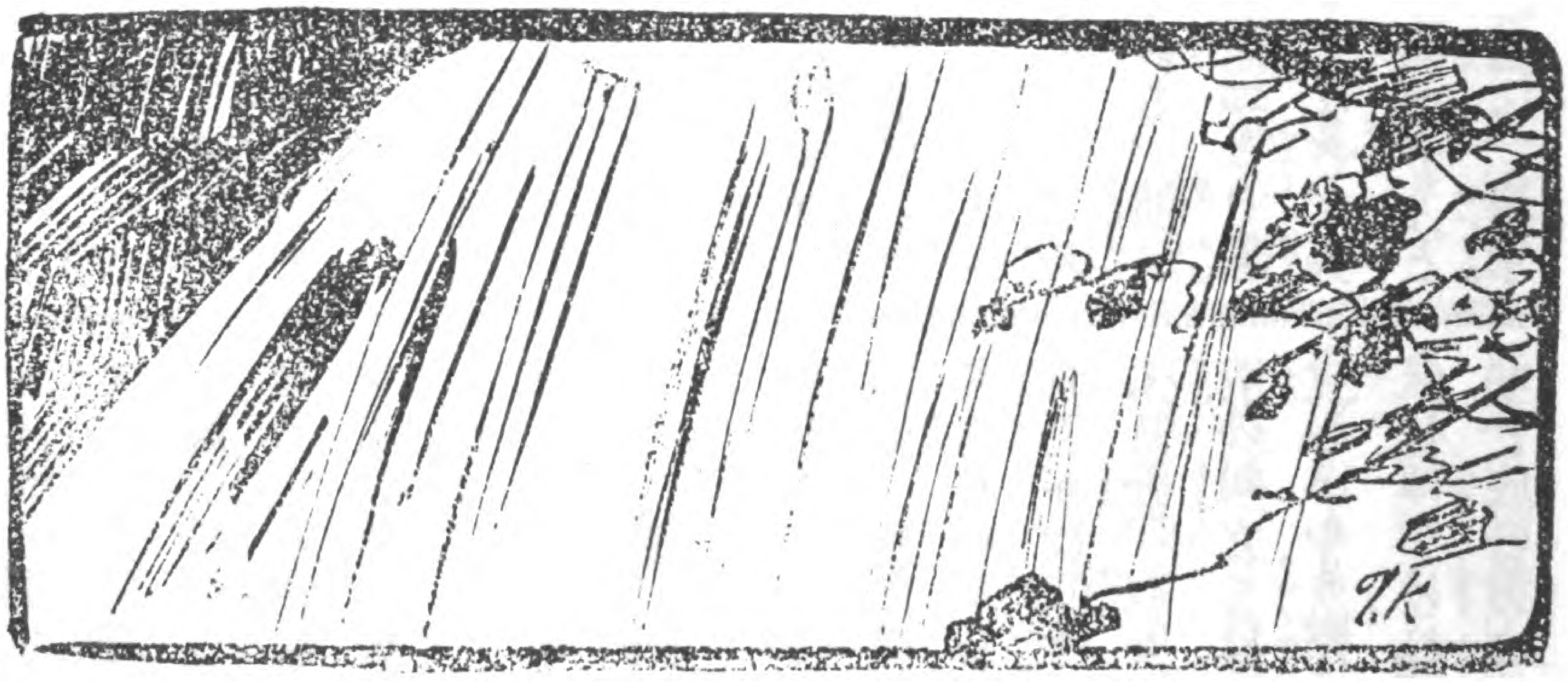
らざれば、皮膚健全ならずして、感冒に犯され易しと知るべし。

四、午前六時より八時まで、午後五時より日沒までを、入浴の最好時期とす、日中は餘り好ましからず殊に帽子もなくして、日光に顏背などを曝らすは、衛生上害ありと知るべし。

五、食後直に、若しくは空腹の時には入浴を禁ずべし、痙攣、頭痛等を起すべし。

六、裸體の儘、入浴すべからず、必ず浴衣を着くべし、浴衣は浴後直に堅く絞り、空氣に乾燥せしめ置くを要す。

七、浴後西洋手拭にて、强き摩擦を加へ、能く〳〵全身を拭ひ乾すべし、猶清水にて、皮膚を赤くなる



まで摩する時は殊に効驗ありと云ふ。

八、浴後直ちに、首筋、胸、腋の下、背、腕、脚等を清水に浸す時は、痙攣を防ぐことを得べし。

九、浴後は適當の散歩を忘る可からず、猶身體虛弱なるものは、鷄卵一個宛を飲用すべし。

十、其の他一般の注意すべき件としては、假令海水浴とは云へ、人々の體質により、適不適のあるものなれば、先づ第一に之を驗するを要す、即ち海水浴を行へば、血管緩み、皮膚潮紅を呈するものは、良く之に適する人なれど、浴後惡寒を感じ、皮膚蒼白となり、或は頭痛、眩暈するとか、または下痢、尿意次々

催ふさる、等は之れ海水浴に適せざる體質のものなれば、速かに禁せざるべからず、殊に婦人の月經中、若しくは姙娠中は、忘れても入浴すべからざるものとす、猶早起早眠して、午睡を嚴禁し淡泊なる滋養品を採るべし。

總じて海水浴場は、空氣と海水の清潔を旨とし強風少き、波浪の高からざる、潮流の急ならざる、細砂平布せし遠淺の地を撰び、併せて、氣候和順、滋養品の豐かなる、風俗の卑しからざる場所ならざるべからず、以上の諸點に叶ふものは其の何の場所を問はず、入浴に適する處と知るべし。

今や盛夏の候、凌ぎ憎い暑さではありませむか、天も地も燒熱地獄、釜中に煮らるゝ思ひである、團扇も氷も追ひ付かず、果ては、伊豫簾越の眩ゆき日影に、眼もとろ〳〵、氣遠くなつて午睡するなど、炎威烈しき今日此の頃、塵の都に在つて、熱い〳〵と嘆かむより、去つて白砂青松の美しい海邊に、海水浴と出かけて、御覽なさい、甚麼に〳〵面白く、愉快に暑さを忘れらるゝか、知れませむよ、かの碧玉を展べたやうな浦々の漁村、波の花散る磯山陰、或は八重の汐路の漂渺たる大海邊、皆人の選ぶに任かせて、今日か明日かと、待ちつゝあるではありませむか。

（完）

香の物漬法

▲澤庵漬　大根の性よきを選び、よく其土を洗ひ落し、そして、藁繩で編み、日あたりよき場所（尤も雨もかゝらず、霜もうけぬ所）へ懸けて、十四五日乃至は二十日間も干し、やがて小皺の出來たと思ふ時分、取り下してつけるのです。其桶は四斗樽の酒の明立ては一番よろしい、古い樽は濕つて居つて宜しいやうだけれども、鹽水が漏るものですから、氣付けなければ漬け損ふことがある、又古い樽で米など底の方に挾つてゐると、米粒から酸味を生じて

酸となるからこれ亦注意せねばならぬ。で、一樽の分量は糠と鹽と合せて一斗位にするのですけれど、大根の大小等によつて元より差別はあるが、凡そ大根五六十又は八十或は百本に小糠七升鹽三升の割合にし、鹽と糠を共によくもみ合せ、そして、桶の底の方へ大根の成る可く太きものを並べ、一段一段に糠鹽の混つたものをふりまき、そして、細きものを最も上方に置くがよい。此處で、おしは如何うするかといふに、成る丈け強うして、上の方へずつと水が一杯に上る位にするのです。それから押石を少しゆるめて、鹽水のこぼれぬやうにしておくのです右は暮につけて、翌る春に口をあけ、二三月頃までに使ひ切るやうにした仕様ですが、又四五月後、夏の土用越にするのは、前者よりも鹽を餘計にするのです、即ち糠六升鹽四升か、若しくば五升五升にするのです、斯樣に糠を減して鹽勝にすれば、勿論風味はかはりませぬ。

▲三年澤庵漬　澤庵を年久しく貯へ置くには、糠は右の分量に準じて、三年ならば糠を減して、そして、鹽の方二升餘もまし、若し又五七年ならば、四升ばかりも増すのです。ですから、一ヶ年に割り當てれば、丁度鹽七八合程づゝ餘分になつてゐるので大根も並よりは六七日も餘計に乾して漬けねばならぬ。之も水の十分に上つたとき、一端押石をゆるめて、そして、大根に鹽水を吸はし、又元のやうに押石をかけるのです。

▲澤庵百一漬　秋茄子を鹽押にして貯へて置きてそして、春早く口をあける澤庵漬の大根の間へ、右の鹽茄子を挾みつけるのです。そして、かやうにすること前から知れてゐれば、茄子からも鹽氣が出るものですから、澤庵漬は普通よりも鹽四五合位も減して置いてもよい、で、此漬物は大根の風味も至つてよくなり、又茄子にも大根の甘味が移つて味殊によい、春の香の物には並びなき珍物で、客づかひにもなる上乘なものであります。

▲きざみ漬　澤庵大根の莖を干葉にして、多く貯

へておきて、惣菜につかつたり、或は汁の實にすることが出來る。そして、右の莖の中から大根の軟き若株を選り拔きて、よく洗ひ、小一寸位に刻み、又大根を短冊に打つて、莖と等分に交ぜ、醬油樽（經一尺深一尺五寸）一杯ならば、鹽一升ばかり入れて能くもみこみ手比な押石をかけるのです、十日餘も經てば、もう漬かつてゐるから、之を出して、ざつと淸水で洗ひ醬油をかけて當座用にするのです。

▲大阪切漬　これは上方でくもじ又はくきといつてゐるもので、先づ大根と莖とを等分に刻み込み、醬油樽ならば、鹽五合位入れて、よく揉みつけ、强き押石をかけるのです。十日餘も經てば、もう漬かつてゐるから、之を出して、ざつと冷水で洗ひ、固く絞り、醬油をかけて用ゐるのです。

▲淺漬　太き大根を選んで、よく洗つて水氣を乾かし、酒樽の明立てへ漬けるのが一番よい、大根五十本、花麴一枚、鹽一升が其太凡の分量です。で、其の漬樣は、麴と鹽とをよく揉み合して、一段一段に之を振り撒き、そして、其間每に新藁を十五六本づゝ敷くのです。（これは色をよくし、味を付けるためです）そして、最後に其上側に、鹽二掴み計り撒き、押蓋をして强き押石をかけるのです。やがて、水も十分上り二十日も經てばもう漬かつて居ります。然し之は餘り長い間は保たぬものです。

▲大阪淺漬、細い大根を洗つて葉も切らず、莖と一緖に四斗樽ならば鹽一升ばかりを加へ、强き押石をかけるのです。水が上つて二十日も經てば、既う漬かつてゐます。

▲菜漬　つけ菜をよく洗つて、株を切り捨て、拋丁目をいれ、鹽加減を見計つて、押石をかけるのです。菜は餘り押石が强いと葉の色は赤くなるものですから、これらは注意せねばならぬ。

▲糠味噌漬　これは萬家拵へてない所はなく、大抵人の知つてゐるものですけれども、世俗には新に急に出來ないものと思つてゐる人も少ないから、ざつと玆に記して置きませう。

鹽一升に水五升を鍋にて煮えかへし、一夜冷して置きて、そして其中へ糠を交せ、桶へ漬けるのです。で、新に拵へた當座には、度々手を入れて搔き廻し陳き澤庵大根を四五本も糠のまゝ洗はないで入れ、又生大根又莖でも何でも、時の有り合ひのものを漬ける度毎に鹽を少しづゝ入れて搔き廻はすことが肝心です。かうしてやがて十日も經では、糠はよくなれて直に陳い糠味噌と同樣になつて了ひます。又なれた糠味噌を少しでも此新規の糠味噌へ入れば、最も早くなれるものです。そして、又新しくなれぬ內は、燗ざまし、醬油のおり、味噌の陳きもの、酒のかすなどある時、之を入れて搔き廻すのです。さうすれば、物も麁末にはならぬし、又一方では糠味噌の風味もよくなるのであります。

▲大根の味噌漬　甘鹽で漬けた澤庵大根をよく洗つて水氣を布巾で拭ひ、そして、二時間ばかり陰干にして、たまりがすを味噌につけるのです。で、一年經つてから又之を洗ひ、そして、別の味噌に漬けておけば、もう何年經つても決して其風味は變りませぬ。そして、平常之を使ふには、切溜でも小桶でも何でも小さい器物に入れ、その上へ味噌で掩ふておくのであります。

▲奈良漬　夏土用のうち、極上の白瓜を二つに割つて中實を深くえぐり取り、瓜の肉に創疵の付かないやうに取扱つて、中の窪へ鹽を詰め、之を天日に二時間計も乾して、そして、その溶けた鹽水を溢し、よく之を冷した後で、粕に鹽加減した粕大凡一貫目に大瓜二つを仰向にして漬けるのです。そして、始め之を漬ける前に、桶の底へ糠に鹽を少し交せたのを二三寸敷き、其上へ中蓋に穴あきたるを載せ、そして、其上へ粕を入れて漬けるのです。この糠を入れるのは、水氣を下へ吸ひ取らす爲なのであります。又茄子は甘鹽に押して、よく押石の利いた時分に、一日天日に乾して、よく冷した後で、鹽加減した粕に漬け、輕き押石をかけるのです。で、一年經つてから粕を取りかへ、又元の如くに漬直すことと瓜の時

と同じであります。之はなか〳〵漬らないもので、まづ三年目が喰べ比であります。

▲生姜味噌漬　秋の末、實のよく入つた生姜の葉を切つて、莖を少し付けておき、そして、土などを綺麗に洗ひ下し、生姜一貫目に大凡鹽五合を入れて押し、十分水の上つた時、一日天日に乾し、味噌に粕を一割まぜて、右の生姜をつけるのです。大抵百日位で漬かるものですが、押石はなるたけ輕い方がよいのです。

▲種拔番椒 日光漬　赤番椒と縮緬紫蘇の葉と一緒に鹽押にし、一日干して番椒を竪に割り、種子を拔きて、細く切り、紫蘇の葉を延して之を巻き、少許鹽をふつて押石をかけ、二十日ばかり漬けてから水を絞り、そして天日に乾して貯へ置くのです。客づかひなどにちよつとよいものです。

▲梅干漬　梅の實のよく實の入つたのを三四時間も水に浸して置き、梅一斗に鹽三升紫蘇の葉多少見計つて、漬けるのです。初めは押石を輕くし、梅に鹽の浸みるに從ひ、段〳〵押石つよくかけるのです。十四五日か二十日も經つてから、日和よき日を見計らうて、之を簀に並べあげるのです。當座喰には一日か二日乾して器に蓄へてよいけれども、永年貯つて置くのには、一日乾して、夜は梅酸につけ、又翌日干し、かやうに四五日も同じことを繰り返し、そして最後に最もよく干し上げて、壺などに入れて蓄へるのです。さすれば十年二十年經つても風味も變らず、艶もよく、酸味もさう強くなく、又格別なものであります。

又餘りよく乾せば、やゝ乾び付くといふて、天氣よき日に夜露をうけさすこともあります。

▲青梅漬　青梅を若いうちに取つて、一夜水に浸しておき、（これは苦味をとる爲）翌日水を切つて、青梅一斗に鹽二升を入れて、輕く押石をかけるのです。で、水が上つたならば、其水を零して、ざつと洗ひ、水氣を乾して又少し計り鹽をして漬けるのです。

甘露漬を製するには、右の青梅の苦水を去つて、

そして、砂糖蜜に漬け、紫蘇の葉で包んで、白砂糖をふつて、輕く押石をかけるのであります。

▲千枚漬　これは紫蘇の葉を一葉づゝよく洗つて百枚二百枚段々と重ねて、麻糸で以て之を綴付け、ざつと熱湯をくゞらせて、そして、板で挾み、水氣をよく絞つて、味噌桶の底へ並べた後、竹枝で動かぬやうに抑へるのです。さすれば、味噌の溜で、自然と漬かるのであります。

▲午蒡の味噌漬、　午蒡の本末を切つて、中の所を六七寸に切り、之をざつと湯をくゞらせてから味噌に漬けるのです。是は澤庵大根の味噌漬と一緒に、成る丈け桶の底の方へ漬けておくがよい、なか〳〵之は漬からぬもので、少くも一年經たねば可けませぬ。三年五年と陳いほどよいものです。

▲印籠漬　丸漬瓜の本末を切り、中實を繰り拔きて其中へ穗蓼、紫蘇の葉、若生姜、靑番椒等を押しこみ、鹽加減して強く押石をかけるのです。六七日も經てばやがて漬かります。瓜には番椒の辛味もつき風味も至極上品なものです。輪切にした所宛も印籠に似てゐるから、かう云ふたのでありませう。

▲達摩漬　丸漬瓜の季成を二つに割り、中實をとつて甘鹽にし、押石をかけると、瓜の形宛然手遊びの達摩に似てゐるから、此名があるのです。

▲捨小舟　越瓜を二つに割り、中實をよくとつて鹽を盛り、日に乾し上げて、その溶けた水を零さぬやうにして六七日も乾し付け、やがて乾びた時分に重ねて壺のやうな器に入れて貯へるのです。冬の中より春へかけて味淋に浸しおき、珍客を持てなすに極て妙であります。

▲渦卷漬　胡瓜の季の比、唐辛を多く入れて、甘鹽に押石をかけ、水の十分上つた時分に、それを取り出し、二つに割り切らないで、中實のある所まで庖丁目をいれ、そして、中實を取り去り、一日天日に乾してよく冷しておき、片端より竪平と卷き付け竹の皮の帶で結び、之を糠五升に鹽一升交せたる中へ漬け、強き押石をかけるのです。十五日も經てば

大方漬かるが、即ち之をとり出して、糠を洗ひ、結びを解きて、小口より切るのです。其横より見たる形狀丁度渦のやうですから此名があるのでせう。味辛く且つ甘く、齒切もよきものであります。

▲雷干瓜　全漬瓜の中實を拔きて、長く剝き、一夜鹽押して、翌日天日に乾し付くるのです。さすれば、瓜はやがて一筋の縄のやうになります。味淋などに浸して用ゐます。又當座喰にするのは、其座に剝いて鹽をふるのです。白瓜をかくすれば一層上品なものとなります。

▲茄子の鹽押　茄子を色よく漬けやうと思つたならば、鹽に川砂を交ぜて漬けるのです。又明礬をいれてもよい、當座喰は餘り鹽を入れなくても可いが長く貯へて置くには鹽を澤山入れねばなりませぬ。

▲紫蘇漬　紫蘇の實の餘り實らぬのを取りて、其穗を鋏みて後、鹽水で洗ひ、小さき虫などを驅除し後に又清水で洗ひ、水を切つて漬け込むのです。

▲梅花漬　梅干の實をとり、肉ばかりを擂鉢にてよく擂り、之を平たき器にのべ、梅の花の臺を短く切つて、梅肉へ挿し、蓋をして目張りをして置くのです。さすれば、何時までも馥郁たる香があつて、至つて妙なものであります。

▲櫻漬　櫻の中開の枝を切り、花ばかりをつみて鹽三升に水三升を合して煎じ一夜冷して後、花をひたひたに漬け、輕く押石をするのです。東京では隅田川の櫻漬が名物の一つとなつてゐます。

▲菊漬　黄菊の花ばかりを摘み取つて、是も煮冷しの鹽水に漬け、輕く押石をかけておくのです。使ふときは少し鹽出し爲ますが、薫も割合に失せぬものです。刺身の妻などによく用ゐます。

▲鹽山椒　山椒の實ばかりを取つて、少し許り鹽をふりかけて押石をかけ、やがて水が上つてから四五日經ちてその水をしぼり捨て、そして、干しておくのです。

▲辛皮　山椒の木の若き枝を切り、水に暫く浸し置きやがて、木と皮と放るゝ比に、刻んで鹽水に漬

けて貯ひ、使ふ時取り出して庖丁するのです。

▲守口大根粕漬　是も大根に湯をくゞらせ、一日乾して粕に鹽加減したるに漬け、輕く押石をかけるのです。

▲刀豆粕漬　刀豆は生で暫く湯に浸しておき、鹽を少し計りふりて十日餘も押し、それから水で洗つて、半日ばかり干し、そしてから粕につけるのです、一年半も經つてやがて漬かるものです。

▲獨活の味噌漬　山獨活を二三日陰干にし、ぐなぐなするやうになつてから、味噌につけるのに、やがて百日も經てば漬かります。

▲冬瓜味噌漬　冬瓜を皮共に斷ち、中實を深くすきとつて、一鹽して輕く押石をかけ、一夜水をとり、布巾で水氣を拭ひ、皮を剝きて、直に味噌に漬けるのです。そして、味噌に水が溜つたならば、味噌を取り代へ、又溜つたならば、之をとりかへ、やがて二三度もかくすれば、もう水も出なくなります。さすれば何時まで貯へておいても變ることとありません。

▲西瓜粕漬　西瓜の花落ち、まだ團子位なうちに取りて、丸のまゝ粕に漬けるのです。すべて生の儘粕へ漬ける者は、二重底に桶を拵へ、其下へ粕を入れておいて、水氣をそこへ導くやうにするのです。

▲初夢漬　若き茄子の蔕を切廻し、甘く鹽押にしたのを、芥子と醬油と砂糖とで鹽梅した中へ漬けたものです。日數は餘り多く保たぬものであります。

▲鼈甲漬　糠味噌漬の陳茄子を鹽出し、よく之を搾りて庖丁し、味淋に浸して、三十日計おくのです。さすれば、茄子は透き通つて、全然で鼈甲のやうになります。風味も至つてよく奈良漬の茄子よりも上品です。

▲麴漬　醴麴三枚に味淋一升をかけて、ねかしておき、干瓜、鹽押茄子、其他干大根など刻みこみ、又紫蘇の實や、生姜、唐辛など少しづゝ加へ、よく漬かつた時に賞翫するもので、一名之を漬物の醍醐味といつて居ります。

▲百味加藥漬　是は生姜、茗荷、茸、蓼、紫蘇、

青柚子、山椒、唐辛など幾品とも限らず、鹽押にして蓄へるのです。是は生の品有り合さぬ時などちよつと鹽出して使ふもので、料理の心得あるものは、必ず拵へておくものであります。

▲巻漬　太き大根を小口から薄くはやし、よく天日に乾し、これで、鹽蓼や鹽生姜を細く刻みあるを、きりきりと巻き、輪唐辛の帶を篏めて、そして、三杯酢につけて用ゐるものです。

▲隱元豆の青漬　夏の土用中に隱元大角豆を取りて豆糟をよく絞つたのと鹽と等分に交せた中へ漬け、そして、成る丈け動かないやうにして蓄ふのです。冬の中より春へかけて鹽出し、唐銅鍋で煠たてならば、其色全然で生のやうに青く、風味もさのみ變りません。



▲山葵粕漬　山葵を短册にうちて、鹽押し、翌日其水を切つて粕に漬け壺に入れて目張りをして蓄へるのです。醬油をかけて用ゐます。

▲薤の三杯漬　薤一斗に鹽二升、生姜の葉大分いれて輕く押石をかけて水を揚げ、三十日も經つて其水を溢し、暫時水を切つて、又三十日ばかり砂糖密に漬けるのです右の酢味は持ち前の酸味なれど、若しこれで薄すければ酢を入れるのであり

ます。

▲三つ葉の溜漬　三つ葉の白き所のみ揃へて、竹の皮で結び、水氣をよく取りて、味噌の溜りを馬尾篩で漉した中へ漬けるに、二晝夜ばかりで喰加減となります。

▲土筆の粕漬　土筆の穂のみを取り、よく洗つて水を切り、直に粕に漬けるのです。使ふ時には、即ち粕を洗つて、花松魚などかけ、猪口に使ふので、至極上品なものであります。

▲やたら漬　醤（麹に煮えたる鹽水を注ぎたるものです）の鹽をからめに作つておき、其中へ瓜、茄子、唐辛、或は澤庵の變味したのなどを刻みて漬けるのに、風味の至極よいものです。

▲精舎納豆漬　瓜茄子を丸で一鹽おしたの、水氣をとりて、納豆に漬けこむのです。一日乾して漬ければ、味も一層よいが、急には漬け難いものです。是も亦生姜、唐辛、辛皮など入るゝことも出來るから、時節の宜しきに任しておけばよい。

▲枝豆の鹽漬　枝豆の莢の青きのを選んで、一旦湯をくゞらせ、中鹽にして燒明礬を少し加へ、輕く押石して蓄へ置くのです。そして、使ふ時には、一夜鹽出して茹でれば、色も青く、全然で生のやうな枝豆となります。

▲鹽松茸　尋常の鹽松茸は鹽水で茹で、是をさまして、其鹽水で罐詰にするのですから、匂ひも味もない、併しこれを吟味するには、松茸の笠の蕾ばかりを選んで、蒸籠に入れ、青松葉を焚きて之を蒸し、よく冷して、松脂を細末にしたのを六十匁、鹽二升に交せ、そして、此分量ならば松茸を一貫目餘も漬けるのです。使ふ時には、矢張常の如く鹽出するので、風味は殆んど生のと同じであります、又初茸松露などもかくして漬けるに風味も變りません。

▲漬昆布　昆布のよきを選び、一夜水に浸し置きて、よく砂を洗ひ、天日に乾して、溜り勝ちな味噌に漬けるのです。

▲糸瓜の粕漬　糸瓜の花落ちて二寸位になりたる

を、粕に食加減の鹽した中へ、押蓋を堅平として漬けるのです。糸瓜の水上れば、桶を傾げて屢々糸瓜の水を零し、成る丈け水氣のないやうにして蓄へるのです。又餘蒔胡瓜などもかやうな漬方を致します。

▲胡蘿蔔味噌漬　胡蘿蔔の本末を切り、五六日風のよくすく所へ置き、甘鹽にして漬け、そして三四十日經つてから之を取出し、一日天日に乾して、今度は味噌を代へるのです。又粕漬にするには、鹽をからめにして漬けるのです。

▲十六大角豆の粕漬　大角豆の餘り實の入らぬのを取りて來て、生の儘すぐ粕に漬けるのです。殊に藤豆などは莢ばかりの内に漬けこまねばならぬ。そして、水が上がれば、早く浸み取らねばならぬ。

▲梨の粕漬　新らしき無疵の梨を選んで梨と梨と互に當り合はぬやうにして、粕に漬けるのです。

▲柿の粕漬　いゝ、はちやといふ細長い柿を靑きうちに取つて、粕に漬けるのです。さすれば自然と澁味なども拔けて、非常に風味のよいものとなります。

▲柚子の靑漬　柚子のまだ實の入らぬうちに取りて是を角天を溶しある中に轉がし、次に灰の中へ入れ、團子のやうにして壺に入れ、目ばりして蓄へるのであります。使ふ時は微温湯で洗ひ落すに、匂ひも失せず、色も失りませぬ。

▲金柑の鹽漬　水と鹽と等分に煎じ、一夜冷してある中へ、金柑の餘り實らぬのを入れ、風の當らぬやう目張りをして貯へるのです。そして、使ふ時は上水を零して、ひた〳〵にして置くので、何時までも保つものであります。

▲筍の鹽漬　筍の皮を剝きて、澤庵大根のやうに一皮づゝ並べて、鹽をふりて中鹽にし、輕き押石をかけて漬けるのです。唐辛など少しく入れて附け味するのに、至つて風味がよい。

▲天王寺蕪　蕪の莖一寸ばかり附きてゐるのを、甘鹽に押し、強く押石をかけるのです。そして、天氣のよき時を見計つて、一日天日に干し、それから味噌にても粕にても何れにても漬けるのです。い

づれも百日餘も經たなければ漬かりませぬ。

▲葉附小大根の三杯漬　大根の極く小さきを揃へ莖一寸ばかりを殘して、葉先を去り、一時間ばかり天日に當てゝ直に三杯酢に漬けるのです。俗にこれを洗ひ髮といつて居ります。

實用洋食調理法

加々美太一述
すみれ記

蝦コキー

先づ最初に、蝦の新鮮なるものを取りて、よく洗ひ、之を大鍋の中に入れ、よく煠でたる後、其外皮を去り、而して其殼と頭とを、擂鉢に入れ、充分に擂り、前に煠でたる時の汁、一合か一合五勺を擂鉢の中へ混入し、裏漉にし、別に鍋の中へ、バタ少許を入れ、之にメリケン粉を加へ、先の漉汁を入れて、粘液狀になし、鹽、及びセリ酒、牛乳を適宜に加へ、其中へ前に造り置きたる蝦の身を入れよく混交して、之を蝦の殼中に塡め、其上にパン粉少許を散布し、其上に少量のバタを乘せ、天火の中に入れまして、凡そ三十分許燒きます、但し蝦の肉中に松茸、或は椎茸の類を寒の目に切りて混ぜるを通常といたします

ポークロース

牛肉に鹽、胡椒、セリ酒、及び酢を適宜に入れ、天火又はストーブの中に入れ、四十分乃至五十分間程燒き、之れを取出し、小口切にして皿に盛り、附合には蕪の鹽煠となしたるものを、牛乳、バタ、メリケン粉を混合して、糊狀となし、之にて前の蕪をわへ、前の肉に添へて出します、

ロップスタベーキ

新鮮なる蟹を、鍋に入れてよく煠で、肉を悉く取り(足の肉並に鋏の肉も共に)よく叩きて、其中へ鷄卵の割りたるものを混ぜ、更にパセリ、葱の類を輪切にしたるもの、及び香料を少許り加へ混入し、鹽、

バタにて味を附け、最後に胡椒を散布し、之を蟹の殻中に塡め、天盤に載せストーブに入れて、十五分乃至廿分間程、烈火にて焼きます、之を取出し附合には、隠元の青煠などを用ひます、

スタフキンロース

豚肉或は牛肉のロース肉の遍平状を横に切り開き、鹽、胡椒を散布し、更に酢を注ぎ、其中に別に叩きたる牛豚肉、及び鶏卵の黄身を入れ更に香草（セージタイムと云へるもの）を少許り加へて、香氣を附與し、切り開きたる肉を抱合し之を糸にて縫ひ合せ、肉塊とし、凡そ一時間許り、天火或はストーブの中にて、微火にて焼きます、但し焼きます時に、酢、鹽、胡椒を少許り肉面に散布いたします、焼き上げたる時、之を小口切にし、二切か三切を皿に盛り、附合に隠元豆の鹽煠の如きものを添えます、

プラップスサラダ

伊勢鰕の新鮮なるものを取りよく洗ひ、煠で上げたる後、其身を取り、之にサラダ、ウスタソース、及び鹽を加へ、味を附け、且つ玉葱を切りて其内に入れ置き、附合には、ピーツ、胡瓜、隠元の青茄等を用ゆ、或はピーツ、アスベラス、豆類を共に煠で、マイナイソースを造りあへて出すので御座ります、

フキンスカラブ

最初何にても油氣のある魚を一鹽にして、パイジ(丼)の中に入れ、之を順序よく並べ、牛乳と鶏卵を交せ合せ、之に胡椒、鹽を入れ、極少量のメリケン粉を加へ、之を前の魚の上にかけ、天火の中にて、凡そ三十分間計り、蒸焼にいたします、天火に入れます前に、バタを少しばかり牛乳の中へ入れて掛けます方がよろしう御座ります、附合には裏漉にしたる芋、などか宜しいです。

フキレデビーフ

バタにて、フキレ肉を、兩面共に狐色になる迄いり上げ、之に玉葱を極めて細く切りたるものと、メリケン粉を入れ、之をスープにて一時間ばかり煮ますと、恰も糊狀となります、其煮加減は、箸にて挾みまして切れる位に煮ます、附合には、芋、人參、隱元などにて、芋、人參は賽の目に切り、隱元は一分位に切り、之を鹽煠にし、最後にバタにて煎り上げまして、鹽と胡椒をふりかけて、附合にいたすので御座います、

ミートパタ

最初に牛肉を、天火或はストーフ中にて、程よく燒き、之を取出したる後よく叩き、ウスタソース、鹽、胡椒を入れて、味を附け置き、別にメリケン粉、及び鷄卵の黄身、バタ、ケンチ油、各等分に加へ餠狀の如きものとなし、之を器皿に敷き前のミート（即ち叩き肉）を入れて程よく包み、天盤に載せ、ストーブ、又は天火中にて凡そ三十分も燒くので御座います、

ポテートコロッケー

凡そ七十五匁程の牛肉を薄く切り、バタ或はヘットにて充分煎り上げたる上、更に之を細く切りまして、鹽、胡椒を入れて味を附け、別に玉葱を細に切り、バタにて煎り、前の肉中に混じ、ソースを加へ置き、又馬鈴薯を煠で丶裏漉にし、其中へバタと鹽とを入れ、よく混ぜ、メリケン粉を附けてよく延し、之を少さく切りて手にてよく延し、其中へ前の肉を入れて包み、之を鷄卵の溶したるもの丶中へ入れ、更にパン粉を附けます、斯の如くすること二度或は三度に及び、ヘット、或はラードを鍋に入れて、よく煮沸せしめまして、其肉へ入れて揚げるので御座います、附合には其時々の野菜を用ひます、

キャベツ卷

先づキャベツを取り、一枚づ丶剝し、よく洗ひ、極

めてザツト煠で、別に挽き肉に、セリ酒、鹽、胡椒を混せ、其中へ鷄卵一個を入れ、更によく交せ、之を一人前づゝ適當の大さにキャベツにて卷きて、鍋の中に入れ、トマトスープにて煮ます、鍋を火上より下します前に、コンフラーを少々入れますとよろしう御座います、

茶席料理 献立話し

廣田星橋

こゝにお話し致しますは、私が現に招待されて、馳走にあづかつた茶席料理の献立に就て、私評を加へて見ましたのと、茶會に於て斯道の方々が批評を試みられた高説等を併せて記したものです。

△平　鴨肉、松露、串海鼠、
△燒物　鮎の片身、（煎り酒）
△吸物　川海老、
△菓子　葛饅頭、

右は好評である、併他の材料に比較するに、稍結構過ると思ふ、串海鼠は省くが、然るべき歟、これが若「坪」の材料ならば鴨肉に、丸松露等、何れなりとも然るべし、又串海鼠のみを大切にして、二切れ程を葛溜りにするか、山葵味噌にて和へたるものが適當と思ふ、併これも切り方に依るので、宜しく注意すべきである、さて、此節の鴨肉の盛り方は、配味が多くて、肉が少く、配味勝ちにて、椀中が塞がるばかりであつた、さうして、肉の切り方がゴロ〳〵するやうにて、注意が足らず、且煮過ぎた爲、不評である、冷評すれば、一羽の肉を、三四回に用ゐる心算であらうと思はれた、これは材料を澤山に盛つたのが、反つて不注意の如く見得たのである。

△向　粕漬のマナ鰹、輪切りの柚子、（味噌を詰る）
△汁　菜、獨活芽、
△平　ハンペン、玉子とぢ、細く切りたる麩、
△吸物　タイラギ、
△菓子　餡掛けウキ麩、

向附けは不評の方、粕漬の肉は長めに切りて三切

れあつた、が糟漬が餘り程經たる故色合が宜しくない、柚子の取合せも二切れ程添へたるは配味として適當であらぬ、只尋常の柚味噌詰が宜しいが、これは柚子を編笠形に形づくつてあつたのが却つて趣がないと思ふ、菜汁も濃過ぎて不味であつた、

△向　燒鮒(頭附き)ハリ栗(煎り酒)

△汁　菜、芽獨活、

△平　鯛一切れ、鴨肉三切れ(共に葛溜り、吸口、山葵)

△猪口　梅びしほ、

△吸物　細く切りたる豆腐、銀杏大根、

△菓子　大饅頭四切れ、

右は料理の專門家が手になつたもので、一切婦人の差圖であつたとのこと、すべて鹽加減は適度であつた、

△向　鯛の切身(煎り酒、吸口なし)

△汁　二寸程に切りたる菜の莖、

△平　大カキ(葛溜り吸口、山葵)

△燒物　キス、

△吸物　コキの子、

汁の菜莖は青々としてよいが味が不評である、可成はカブにタヽキ菜か、大根の四半切れに、タヽキ菜が好い、他に配味の方法があらう、一考ありたい、これは貴顯の茶席であつた、他の材料は尋常と申すより外はない、

△向　膾、アナギを刻みたるにオロシ大根、

△汁　ヨメ菜、

△平　白魚、アサリムキミ(ワサビ味噌を敷く)

△燒物　鯛(味噌漬)カマボコ、

△猪口　鰹節の切り漬、

△吸物　松茸、

△菓子　玉子の黄身に漉餡を添へ、砂糖を敷く、

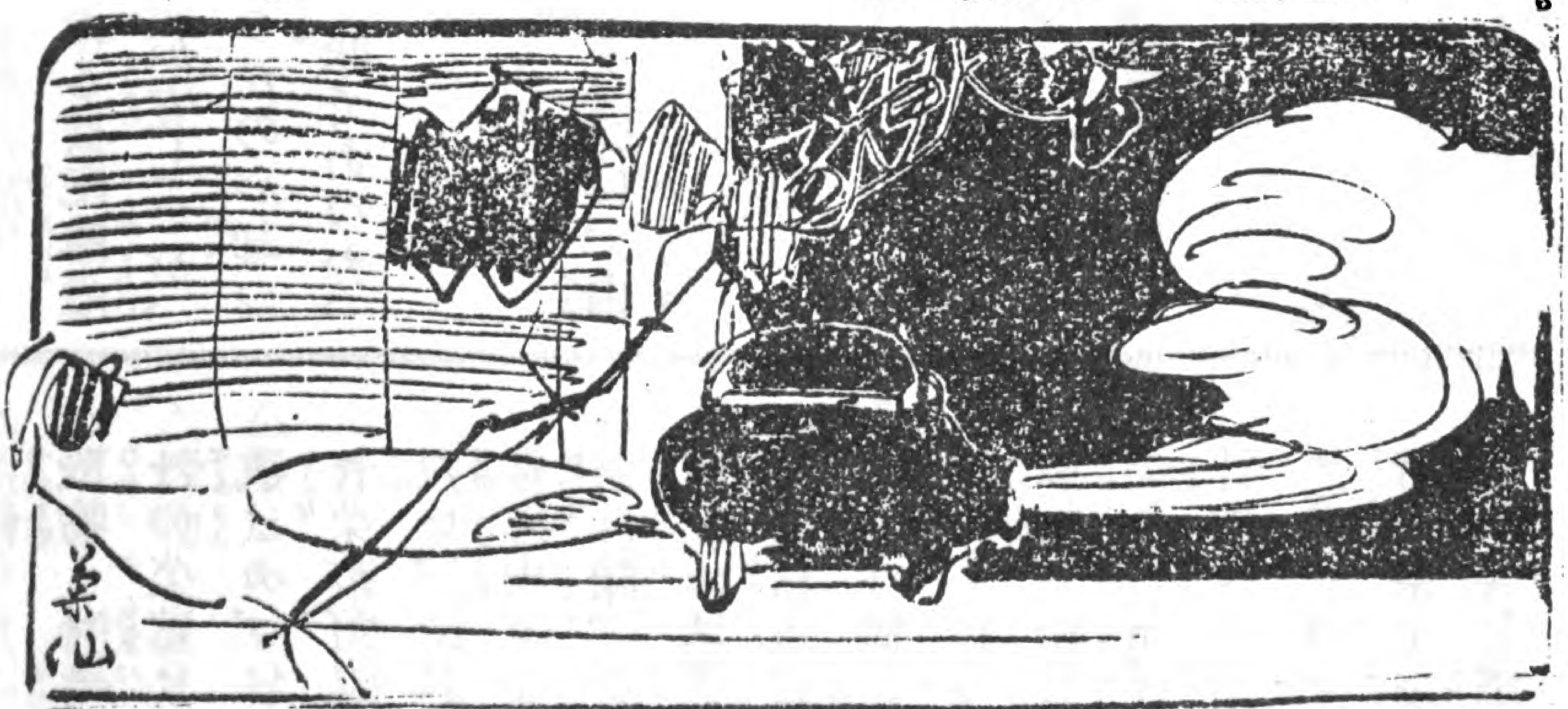
汁のヨメ菜ばかりは感伏せぬ、一種の材料ならばチサ、タンポ、菜、カブ、大根の類を撰びたい、若嫁菜を用ひ度ば、燒キスカ、竹輪豆腐、摺り身の如きを添へてはいかゞ、材料に依り、主のもの

と客のものとの區別がありたい、平は白魚の清汁にして欲しい、アサリを配味にしたるは洒落に過ぎて宜しくない、燒物の材料は書院式の趣になつて不評、鯛か、カマボコか一品でよい、菓子の材料は奇に過ぎて好くない、料理店の趣向で我らは排斥する、調理は無論再考を煩はしたい、

△向　鰻、オロシ大根(青酢)、
△汁　ヨメ菜、
△平　ハンペン(葛溜り、口、ワサビ)
△燒物　味噌漬の鯛、

右は正式の趣で、先は好評、

△向　比目魚(玉子の黄味を衣にして煎り酒にした)
△汁　一寸程に切りたる蕗
△坪　アカエ、皮付の松露、



△燒物　蒲鉾、
△吸物　鱚、
△菓子　羊羹、

右比目魚に玉子の衣は殊更に珍しかりたる調理見えて不評、これは刺身にして欲しい、さうして岩茸でも取合せたい、これを煎り酒になしたらば一層宜しからう、坪のアカエに松露は配味が適當でない、松露といふものは、鳥類には取合ふが、生魚類には不適當なものである、この献立はよいが、調理法を改むれば、完全のものと考へる、

△向　比目魚の投作り(煎り酒・酢)、岩茸、
△汁　芽獨活、蕗(共に割きて赤味噌を薄く溶く)、
△坪　アカエ(濃味噌にて和へ、粒山

椒を蓋に置く)
△焼物　鰆(ひらく)、カマボコ(小板附)
△菓子　羊羹、
都て好評なれども、焼物の配味にカマボコは不用
と存ずる、
△向　鹽鮑魚、花鰹、鹽引鮭(皮を去りて、程好く
剝ぎ、長めに切りわり、酒に浸す)蓼、
△汁　燒湯婆、蕗、
△平　パン(鳥)、ハリ午蒡、
△吸物　豆腐(葛餡)、山葵、
右は焼物は省ひてあつたが、この献立は侘の一體
として、妙味を感じたれば好評である、
△皿　淺草海苔、サヨリ、栗のハリ(ナマス)
△汁　菜、
△平　赤貝の丸煮、冬瓜(短冊)
△焼物　合せ鱚(一ト鹽)、トコブシ(鮑魚の小さな
もの)の鹽煮、
△吸物　松茸、小海老(皮ムキ)

△菓子　炒米、豆の粉(砂糖を加へてあり)、
右鱠の海苔は好(ひが盛り方が感伏せなんだ、そう
して鱚はおろし大根にて和へ、栗に片でも添へた
し、平の冬瓜は無くともよい、赤貝は洵に和く煮
てあつた、可成はこの一種のみで足れりである、
で倘細評すればこれを坪の材料にして欲しひ、焼
物も鱚のみでよい、吸物も松茸のみで足れりであ
る、菓子もよいが一考を煩はしたい、
△茶碗焼　牡蠣(玉子とぢ)、鹽山椒(碗の蓋の上に
置く)、
△汁　初茸、大根(ハナダ大根を太めに剝ぐ)、芽獨
活(小口切り)、
△平　焼豆腐(定家煮)、
△焼物　アユナマ(色付)、
△吸物　シヽミ、
△菓子　羊羹、
右は尋常の調理にて、好評の方とする、
△汁　豆腐(ザクザク)、辛子を添ふ、

△平　鴨肉、午蒡(亂切り)
△杉燒　鯛(大めに作りて二切れ)、岩槻葱の白根
五切レ半(共に小箱に盛る)
△重箱　生鮭(色付)、燒カマボコ、
△吸物　紫蘇の子、玉子白身、
△菓子　朧饅頭、

右の他に猪口は「鹽カラ」が出ておつた、都てこの献立は結構と申すより詞なしである、けれどもこの會席は尋常朋友、知人輩の交會であるに、小箱を用ふるは格外であると考へる、これは貴顯の賓客に供するものであれば、之れは大猪口に盛る材料としてよい、で鯛の配味に淡泊な材料を添へ煎酒酢にでも調理するがこの席に適當である、平は鴨に剉き葱を添へるがよい、重箱はカマボコのみで足れりで、蓋の上に食鹽に枝山椒でも置くが妙味と考へる、菓子は最精製の餡を用ひたる普通の饅頭か、羊羹が然るべきであらう、こゝに一言申したきは自體茶料理といふものに、鯛、鴨、鮭と出すは美味に過ぎるので、大概右の中一種を主として、他一種を用ふるが宜しい、且斯ういふ材料を重ねるのは配味上感伏せぬ、簡短に申せば何れの味も同じになつて、折角の調理に出來榮を消すことになる、旨味き肴も不味く味ふことになる同味の材料は宜しく避けるが得策として、注意すべきである、この献立の全體から申すと汁のザクザク豆腐が他の格に比較的劣ると考へる、それとも他の材料撰定が過ぎたるか、畢竟美味を競つて出さうとすると、斯ういう弊が起る、之れに就て思出したは、茶人宗旦がいふたとある「料理も結構過ぎぬるは味噌汁に劣れり」と、實に左樣なものであらうか、さて吸物も、紫蘇の子ばかりを鹽仕立てに仕たのは妙でないと考へる、

△木皿　鰤、鹽鱈(煎り酒)、
△猪口　膾で、おろし大根、ゴマメ、片、
△汁　蕪(四角切り)岩茸、チイモ、
△椀　クズ菜、タハン草(清汁)、

△吸物 蛤、
△取肴 鹽鮎、
△菓子 朝鮮飴、
右は都て西京風の調理と考へる、人々の嗜好に依れど、木皿に魚類を盛ることは妙でない、木皿は染付皿よりは質撲なる器ではあるがこれは好ましくない、さりとて寺院などにて、野菜料理ならば別に異論は申さぬ、和物、浸し物なれば適當ならんが、汁の子イモの配味は書院式になりて、不評である、蕪菁を角に切りたるも細工過ぎる、只蕪菁に其の葉を細々に刻みて添へるなどが宜しい、若し角切りに仕たらば擂り胡麻を加へるが妙であらう、
△菜盛 タイラギ、牡蠣、蛤、燒豆腐、テウロギ、
△汁 子イモ、大根(胡麻味噌汁)
△重箱 カマボコ、
△香の物 ヘチマ、
△取肴 鮭、鹽鱒、

△吸物 松露(清汁)、
△菓子 刻みクルミ、羊羹(小倉羹)薯蕷饅頭、
右は千家流の懐石であつたが、妙でない、菓子を緑高重に盛るは二種に限る歟、菜盛の材料も嵩み過ぎ汁の配味も趣味が少ないと考へる、
△向付平 燒豆腐、辛子を加へる、
△汁 小鳥肉のタヽキ、岩茸おろし、大根、
△重箱 伊勢海老(胡麻味噌和へ)
△香の物 ヘチマ、
△吸物 小鮒(清汁)
△取肴 鹽鮎、
△菓子 砂糖餅、
右は千家流の宗匠某が出したものであるが、平を膳付に置くことは、極質撲の會席に適當ならんといふ意にて用ひたのであらう、茶人宗旦の門人素庵、宗哲、庸軒などの諸氏がこれに就ていふた、「膳付に坏を付けるは素撲の風でよいが、平を置くはわづらはしく趣味がない」と、これも一理あ

りと考へる、重箱の材料もサッパリと仕ない、汁の配味も一考を煩はしたいものである、この献立は西京風であると思ふ、

△皿　鯛の切身(白酒をうける)

△汁　玉子、(崩し)芹、

△菓子椀　鴨、大根、燒豆腐、

△吸物　防風、紫蘇の子、

△取肴　鹽鰹、海苔、

△菓子　葛餅(密煎)

右は大阪風の會席である、都て材料が重くるしく淡味にはならぬ、殊に汁の配味が感伏せぬ、

●アイスクリーム

是から日に増し暑さに向へば、何處の家庭にでも氷水の必要が生じる、氷水では衛生上は素より、趣味にも乏しい、況して客でもある際は、何とか趣向を仕なければ成るまい、それには時節柄アイスクリームが頗る適當である、殊に小兒を保てる家庭には午後の日盛りにて退屈時刻などにアイスクリームを拵へて喜ばせるのも、家庭に於ける一つの興であろうと思ひますから、聊か其製法を紹介しませう、アイスクリームを製するには先づ牛乳にクリームを増し入れ砂糖を雜せて一度一寸沸騰して而してから用ふるのです、沸さなくても宜いが凝結らすには時間が要るから一旦沸騰した方が宜いのです、此調合した牛乳を製器に入れるのです、此頃はアイスクリームを拵へる器械が西洋食器店に有りますから買入れるには譯がないが、若し其便がない場合には、右の牛乳を丸いブリキの罐にでも入れ確と蓋を爲し置き、夫から別に米磨桶の樣な物に氷を細く碎いて入れロックソルト(つぶ鹽)又は普通の食鹽でも宜しいが鹽を入れて其の桶の眞中に調合した牛乳を入れてある前の丸罐を入れ、氷が罐の周圍に附着て居る樣にして其罐をクル〳〵廻すのです、大抵一升の氷なら二時間乃至三時間位廻して居れば出來ます。

雜録

千代と蓮月

池田紫水

○俳人千代尼

千代尼は加賀の國松任の表具師福増屋幸左衛門の女で、幼き比より學に篤く、殊に俳諧を好み、年甫めて十三に至り、當時有名なる俳人各務支考（蕉門十哲の一人）の門に入つたが、秀逸の句が多かつた。然るに幾もなくして、支考が歿したので、その後これと云ふ良師なく、太く悲んでゐたが、たま／＼支考の高弟の盧元坊といふ人が、郷里美濃から行脚して來て、この松任に來た。そこで、千代尼は大いに喜んで、即ちその夜直に其元坊を訪ふた。が、元坊は其時は既に寢蓐に横つて居つた。で、千代尼は慇懃に教を受けんことを希ふた、元坊は是望を容易くは諾はないで、

『……では、先づ一句……お詠りになつたら良からう、今は丁度夏の首であるから、時鳥を題としたら良からう。』

と、云つたのであつた。

で、千代は此時、つく／＼思ふやうには、今、この人に就いて學ぶことが出來ないならば、後、また誰によつて斯道を研究すべきであらう、今、時鳥と云ふ題を出されたが、この時鳥の一句こそ、實に我が未來の運命を決する大問題であると、推敲半時ばかりで、乃ち一句を得たので、早速之を元坊に似した。が、元坊瞠若として纔に眼を開き、此句を瞥過して一言も發しないで、其料紙を枕邊に投じて復た寢に就いて了つた。そこで、千代女は大に弱り、更に思を凝して、又も一句を作つて、これを似したけ

れども、元坊矢張り前の如くし、いよ〱軒をあげて熟睡した。けれども、千代は枕頭を去らず、夜すがら沈吟して居つた。やがて、元坊は夢から覺めたが、千代女の依然として端座するを見て、聊か驚いたやうで、

『今、もう、何時だらうか。』

と、斯う尋ねたので、千代女は透さず、一句を詠じて、

『ほと〱ぎす〱とて明けにけり。』

と、云つた。が、是に於て元坊大に稱讚し、覺えず、大聲を發して、

『宜しい、〱、是の調子でやつて行けば、他日、必定天下に名をなすやうになる、えらくなる……。』

と。そこで、師弟の約を結んだが、後、果して、元坊の言の如く、名聲を天下に轟すやうになつたのである。

千代女、十九歳の時、加賀金澤前田侯の大組足輕重右衛門の男某に嫁したが、その時に一の名句があある。

しぶかろか知らねど柿の初ちぎり

聞く者歎賞して措かず、この句忽ち江湖に喧傳さる〵やうになつた。

千代女は男子二人を擧げたが、長子は夭死した。その折に詠んだ句に、

蜻蛉つりけふはどこまで行たやら

その感情の深きこと、實に一誦凄焉たらざるを得ない、長へに人口に膾炙さる〵も亦宜なることである。

千代女二十五歳の夏、夫が歿したが、その程の句に、

起きて見つ寝て見つ蚊帳のひろさかな

この句も亦、蜻蛉つりの句と共に、情緒實に切なる所があつて、甚だ哀な句である。彼の『朝顔に釣瓶とられて貰ひ水』の句とを併せ、以上の四句、最も廣く世人の口ずさんでゐる所である。

千代女が、夫に別れて後、切りに再嫁を勸めたも

のもあつたが、堅く貞操を持して應じなかつた。斯くて、次子も漸く長じたので、乃ち夫家を續がしめ、己は生家に歸つて、やがて、髮を剃つて尼となり、素園と號して、別居獨棲し、同所の豪家相河屋六兵衛といへる人の後室そゑ女と深く交つて互に俳道に遊んだが、贈答の句が頗る多かつた。さる程に其名ます〳〵顯はれて時に貴顯の來訪さへあつたと云ふことである。一日、大聖寺の前田中務侯が、駕を枉げられたが、折柄左の句がある。

おほむけばかうべに匂ふ梅の花



千代女は亦繪畫を善くし、越後の呉俊明に學んで、頗る風致ある筆法である。殊に百合の畫は、その最も得意とする所であつた。嘗て、或るやんごとなき人、千代女を訪うて、畫讚を併たものを乞はれたので、千代は、早速筆を執つて、牽牛花の竹垣に纏ふた所を畫いて、其下に、

あさがほや地につくことをあぶながり

と、物したので、其人いたく優雅に感じたと云ふことである。

又、或時、伊勢の乙由といふ人、千代に文を贈つた時、其の端に、

　花さかぬ身は靜なる柳かな

と、認めた。然るに、この時、千代も亦乙由に文をつかはして、

　花さかぬ身は狂ひなき柳かな

と、物しておくつたが、不思議なことは、双方の文が、道に行き違うて、同じ頃同じ意の句が兩庵に着いたと云ふことである。その程、千代は或人に向うて云ふやうには、乙由の句と自分の句とは同案ではあるが、狂の字が靜の字に及ばぬ、唯敬服の外ないとその謙徳の高さことは斯樣であつた。啻に俳道にのみ秀た婦人でないことが、是でも分るのである。

　千代年七十四で歿した。時は安永四年の九月八日であつた。そが十七回忌の時、松任の俳人等相謀り、聖興寺で、追善供養を營み、碑を其境内に建て、、

　月を見て我はこの世をかしく哉

といふ、千代が辭世の句をえりつけたといふことである。

今左に其佳句を少しばかり揭げて置かう。

千なりも蔓一すぢの心より
一かゝへあるも柳はやなぎ哉
福やらやちりさへ今朝はうつくしき
梅咲くや何が降ても春は春
蝶々や女子の道の後や先
たゞ戻る心で來たに初ざくら
わけ入らば風さへきえて閑子鳥
足跡は男なりけり初ざくら
うき草や流れてはまた咲かはり
日の脚の道つけかへる茂かな
綿ぬきや初めて夜着の恐しき
蝶々の夫婦寢餘る牡丹哉
みよし野に闇一むすび柳哉
秋立やはじめて葛のおちら向
朝顔は其日におうてしまひけり
目に結ぶ谷間〳〵の清水哉
春の夜の夢見て咲や歸り花
落鮎や日に〳〵水の恐しき

松風を植てきゝたし雲の峯
手わぐれば結び目のなき清水哉
鍋墨や行へ恥しかきつばた
草むらのるすに風おく雲雀かな

歌人蓮月尼

蓮月尼は名を誠と云ひ、父を太田垣光古といふ。光古は舊因州鳥取在の大覺寺村の郷士であつたが、故あつて京に出で、東山の智恩院の寺侍となつて居つて、こゝで一人の女子を設け、乃ち誠と名稱けたのである。誠は幼少の折、母を喪うたので、偏に父の膝の上で育てられたのであつた。やがて、年比になつて、江州彦根の人で、近藤某といへる夫を迎へたが、伉儷殊に睦じく、四人の子をさへ設けたが、みな早世し夫も亦續いて歿して了つた。こゝに於て、誠は父に告げて、尼となり、名を蓮月尼と改め、香を拈り讀經して、亡き夫や子の菩提を弔うて、傍ら老さき短き父に懇に仕へ、その健かなるを責めても心遣として居つた。時に誠が三十路を二つばかり超した時であつた。

その後、八年ばかりを經て、父の光古は、積る年の弱まさりて、朽木の倒るゝやうに敢なくなつたので、今更のやうに尼の哀さ言はん方なく、乃ち一首の歌を詠じた。

常ならぬ世は憂きものとみつ栗の
　ひとり殘りてものをこそ思へ

又或時その墓に詣でた折柄、

たらちねの親の戀しき餘りには
　墓に音をのみ泣きくらしつゝ

と、いとゞ哀に悲しく覺ゆるではないか。

やがて、尼は比叡の麓の岡崎の里に移住したが、實に都の眞中とは異つて、鄙のさびしく、折柄年も暮れなんとした時であつたから、

柴の戸に落ちとまりたる樫の實の
　ひとり物おもふ年の暮かな

と、詠まれたが、その心細さの程もおもひ遣られる

のである。
かくて、尼は身を過す程の手ずさみに、埴で以つて茶器のやうな物を作つて、それに四季をり〱に詠んだ歌を彫り付け、市に持つて出て、好事の者に鬻らうとしたが、初の程は人の見もかへりもしないので、

手ずさみのはかなき物を持いでゝ
うるまの市に立つぞわびしき

と、うち歎いたが、その器物の自ら雅致があつて、彫り付けた歌も一種の調あり、趣もをかしいとて、やがて、名高くなり、都人の風雅な者が、次第に競ひ求めるやうになつたので、後には市に持ち出なくとも、草庵をたづねて購ひ求めに來るやうになつた。そして、やがては都の名物の一つともなり、諸國から上る者など、必ず之を求めて土産とするやうになつた。されば、尼は世を安らかに渡るべき筈であるが、元より一椀の粥、一把の香を得ば、それで事足れりとして、値などは、その求むる人の意に任し、聊も貪ることがなかつたので、常に貧しく窶々しくして、庵室は壁落ち、席破れ、衣はなえて垢つき、丁度乞丐のやうになつて居た。
尼の逸話逸事など多くあるが、これは他日記する事として、今はその物したる歌の中で名高いものを少し掲げて置かう。

早春月

川ぞひの柳の糸にかゝりけり
のこる氷のかたわれの月

春雨

つれ〲とうれしきものゝ淋しきは
はなまつころの春雨の宿

朝春雨

音もせず降るとも見えぬ朝しめり
えだおもげなる青柳のいと

蝶

うかれ來て花野の露にねぶるなり
こは誰がゆめの小蝶なるらむ

春月

木のもとの花のみゆきを枕にて
春の夜さむき月を見るかな

岸柳

影うつる岸のやなぎの片糸は
浪によらせて見るべかりけり

山花

うかれ來し春の光のながら山
はなにかすめる鐘のおとかな

夕歸雁

いくつらかゆくへも見えず夕霞
ねたくも雁のこゑのみぞして

新樹露

夏に今朝ならしの岡のならがしは
くぼてにあまる露のすゞしさ

渡頭時鳥

ものゝふの矢ばせわたりの時鳥
弓はり月のかげになくなり

五月祝

あやめふくさ月の玉のをのこゞや
ながき根ざしのはじめならまし

瞿麥露

衣手にみだれてかゝる朝寢がみ
かきなでしこの花のしら露

月下水鷄

門ごとにたゝく水鷄はたのまれず
うはの空なるゆふ月のかげ

夏旅

さとの子がはた織る音もとだえして
ひる寢のころのあつき旅かな

夏山家

世の中に夏はながれて出つらん
ひとり涼しきやまのした水

秋雨

ゆふづく日入江の松にかけろひて
なごりさびしき秋のむらさめ

月

野に山にうかれ〳〵て歸るさを
寢やまでおくる秋の夜のつき

名所紅葉

一枝も手折らばうけんとがの尾の
おち葉はゆるせ秋の山もり

野草花

敷くもをし卷くもをしきを秋草の
花のむしろは野邊ながら見ん

秋山

はら〳〵と落る木の葉にまじりきて
くりの實ひとつ土にこゑわり

初冬

山里のかけ樋の水にながれ來て
きのふの秋を見するもみぢ葉

海邊寒月

沖とほく弓はりづきの影ふけて
ひきしほ寒きうらの松かせ

海邊霰

船ばたに風のつぶてと打つけて
水にはもろき玉あられかな

歳暮雪

めぜ〳〵と炭うる翁こゑかれて
そでに雪散るとしの暮かな

春戀

つみすてし人の心のから薺
からきおもひにもゆる頃かな

寄衣戀

われ知らじせこの袂のほころびは
ひきけん人ぞ縫ふべかりける

名所月

むさし野の尾花が末にかゝれるは
誰がひきすてし弓はりの月

古戰場紅葉

戰ひし太刀の血しほは秋ふかき
紅葉に見するみよし野の山

雪中鷹狩

みかり人拂ひもあへずひくま野の
　まゆみのすゑにかゝるしら雪

尼は歌を誰に學べると云ふことはなく、常に萬葉集などを愛でよみ、自得したものであるといふ。尼の才藻は實に天品であつて、筆の跡も亦美しく、讃なども極めて雅趣あるものである。而して、尼の歌はたゞに風流を好めるのみのすさびではなく、流石に武士の女とて心樣の雄々しき所、其詠める歌に瞭然として顯はれてゐる。

かくて、明治八年十二月三日、西加茂なる神光院の御茶所といへる一室で、この世を限られた、享年八十五。辭世二首あり、次の如しである。

ちりほども心にかゝる雲もなし
　けふをかぎりの夕ぐれの空

ねがはくは後の蓮の花の上に
　くもらぬ月を見るよしもかな

（をはり）

萬朝報記者の戀愛論

今や世を擧げて、戀愛の神聖を喚び、自由を號び、詩といひ、歌といひ、文といふもののみな男女間に於ける相互の意思を發表するにあらざるなし、こゝをもて紅顔情に燃ゆるの少年と、青春戀を思ふの少婦とは、期せずして相會し、手を携えて共に花の小逕を辿りつゝ揚々として自ら得たりとするの色あり。而して彼等の一たび世事の意の如くならざるが爲めに、中道にして失敗挫屈するに遭ふや、世は忽ち之を肉慾といひ、獸行といひ、墮落といひ、遂に罪惡を以て之を目せずんば已まざらむとす。是に於てか、始め神聖なりしもの、今は罪惡となり、始め自由なりしもの、今は桎梏を繋がる。少年少女の愚や、寧ろ憫れむべしと雖ども、所謂雜誌小說の記者著作者等が、戀愛を鼓吹して、少年少女の情緒を攪亂すると同時に、家庭を侵犯し、社會を惑亂するの罪に於ては、汚行を敢てしたる青年男女以上にありと斷言するを以て適當なりと信ず。何となれば一は戀愛宗の法敎師にして、一は之に隨喜渴仰の涙を流す弟子なればなり、一は戀愛主義の演說家にして、一は切齒扼腕して、之を喚ぶ熱心なる聽衆なればなり、弟子豈其師にまさらんや、キリストの十二使徒が、キリストの人を爲したるが如く、孔子の七十弟子が、孔子の聖を顯はしたるが如く、この愛すべき無邪氣の少年少女は、その師たる戀愛宗の法敎師等に薰陶されて、自ら其の宗敎の旨趣を實行したるものにあらずや、知らず是等の法敎師等は、弟子の罪は師の責にあらず、門弟子の惡、何ぞ先生の知るところならんやといふを得るか。

予儕は萬朝報記者が、去る六月十五日の紙上に於て、戀愛を排すといふ論文を讀み、記者が一代の逆流に反抗して、頽勢を挽回せんと努めたるを多謝するものなり、今左に其の全文を掲げて、世の戀愛主義の奴隷たり、犧牲たる憫れむべき少年少女の警めとなさんとす。

今の青年男女を魔醉せしめつゝある者は一種の戀愛論なり、月々に日々に出版せらるゝ幾多の雜誌は何等かの形に於て戀愛を說かざる莫く、小說と名の附く小說は殆ど一として戀愛を鼓吹せざるは莫し、而して是等の雜誌小說は、社會の上下に橫行濶步し、總ての家庭に入り、殊に最も多く青年學生、妙齡女學生の机上に置かる

蓋し戀愛は殆ど人間第一の性情なり、男を慕はざる女の有る筈なく、又女に戀せざる男の有る筈無し、然れども既に人間第一の性情たるが爲めに、敎へずして知り學ばずして悟る、殊更に勞して之を鼓吹するの必要なきなり、殊に我國の風俗は、古より口に戀愛の事を云ふを耻辱とし、人に說く可からず、勸む可からざる者と爲したり、是れ誠に美風なり、和歌には戀歌ありと雖ども、斯る和歌を弄びたるは單に文弱に沈淪したる公卿の如き仲間にして社會の一隅に止まりしのみ、而も其の戀歌なる者は意を隱微に寓し、局外者をして一讀に戀歌なるや否やを知り難からしむる者多かりき、又多少の文字ある者、戲曲或は艸草紙の類に戀愛を唱はざりしに非ざるも斯る輩は戲作者として賤められ、之を劇場に演ずる者は河原乞食として人間に伍する能はざる者と視做



されたり、戯作又は芝居が如何に盛なりしにもせよ、社會の公けの風儀が、之を美とせずして、却て醜とし、苟くも良家の子女をして接近せしむ可からざる者と爲したるは嚴重なる良風俗と云ふ可し

近年、世上一切の事の進歩と共に人の感情も文弱の方に進み、又取分けて西洋異俗の風傳來し、總て右の如き者を『藝術美』の名に於て保護し又は奬勵し少くとも公然之に接し之を樂みて差支へ無き者とせらるゝに至れり、更に甚だしきは西洋に行はるゝと稱する自由結婚を、良風として唱道する者あり、之と連續して戀愛自由の說、戀愛神聖の說まで現はるゝに至れり、斯の如き論を以て、思慮の未だ確乎ならずして血性と情熱のみ熾なる青春妙齡の男女に見聞せしむ、其の甚だしく彼等を魔醉せしめ、彼れ等の心情を毒害し、彼等の品行を落堕せしめ、彼等の善良なる意志を委靡せしむるは怪むに足らざるなり

戀愛は果して美又は良なるか、曰く否、戀愛は美に非ず醜なり、良に非ず惡なり、唯だ西洋の輕文學者、之を知らざるのみ

想ふに醜且惡なる可き戀愛をば美且良なるが如く思惟するに到りしは、『愛』の一語に誤られたる者なる可し、『愛』は基督教が主として唱道する所、又世界一切の道德が、之れを私慾又は利己心に對比して道德の根本と爲す所なり、而も此愛は戀に非ず、男女の劣情に非ず、無私の愛なり

若し嚴重に云へば人間の心情には、善も無く惡も無し、唯だ理性に從つて之を發すれば善と爲り、理性に反して之を發すれば惡と爲る、愛も然り戀も然り、理性が愛す可からずと判斷する事物に對し愛を發するは愛と雖も惡事なり、之を理性に考へて、此者に對して戀す可からず此場合に戀す可からずと判斷する場合に戀するは惡なり、大體の善惡論は此外に在ること能はず、而も戀と愛とは本來の性質に於て全く相反する者なり、吾人は世の迷へる戀愛論者の誤解を根本より杜絶せんが爲に明白なる斷案を下す曰く

若し愛を美なりとせば、其の同一の道理を以つて戀を醜なりとせざる可らず、愛を善なりと云ふとは直ちに戀を惡なりと云ふと同意義に歸す愛を以て戀を辯護せんとするは非なり、其關係は稼ぐことを善とするが爲に盜むことを善とするに似たり

抑も愛と云へる心の發動に善惡無く、唯だ理性に從ふと否とにて分岐するは前述の如しと雖も、愛は母が赤子を愛する心(アッフエクション)の如く又は人と人相愛する心(シンパシー)の如く、單に自個の或者を割きて他の爲に捧げんとするの働きにして自ら犧牲の精神に叶へり、道德は之を美とす、然るに戀と云ふ心は、大なる報酬を得んと欲する心なり、一種の慾心なり貪慾なり、我れ彼れを愛するに(即ち戀するに)彼れ我れに對し同じ分量の愛(即ち戀)を返さゞれば我が心は不滿足を感ず、其極や憤怒ともなり、嫉妬とも成る、嫉妬が動もすれば殺意を含む迄に立至ることは何人も知る所なり、斯の如き貪慾を含める攝夷的の我儘心に何の美か有るや

慈母が赤子を愛するは單に赤子の幸ひを願ふなり我が幸ひを願ふに非ず、赤子成長して人と爲り他の人と結婚して幸福を得る、慈母は之を喜ぶ、戀人若し我が戀人が他の人と結婚して幸福なるを見ば怒り心頭に燃え立つ可し、故に曰く戀人は報酬を欲す、戀は欲心なりと、凡そ戀の心の如く大なる報酬を欲する者は非ず、相手の身體全部を手に入れんと欲するなり、操を受取らんとするなり、生涯を我物とせざれば滿足せざるなり、毫も競爭者を寬容せざるなり、愛の美なるを、報酬に拘らざる點に在りとする以上は、斯の如く最大の報酬を欲し他の生命全部を得ざれば飽かざるの貪慾心を醜の甚だしき者とす可きは必然の結果なり、愛と戀とを混同するほど文字及思想の甚だしき濫用は殆ど他に類あるを見ず

然らば人は戀す可からざるか、曰く戀も愛も理性に從ふと否とにて善惡ありとは茲の謂なり、今の人は野獸に非らず、規則立ちたる社會に生れ規則立ち

たる社會に生棲す、即ち理性を以て社會の命令を判斷し、社會に立てる我が地位（即ち社會と我との關係）を判斷し理性之を可とせば然る後に戀す可し、社會は夙に戀と云ふ心の我儘たるを見、之を自由に放任するの巨害わるに懲りたり、故に其害を防がんが爲めに、人の戀の心を制限する必要を認め、特に婚姻の法又は習慣を設け置けり、此法に遵ひて先づ夫婦と爲り、然る上に夫は婦を戀ひ、婦は夫を戀ふこと是れ理性の許す所、即ち戀の美なり、良なる戀なり、此の以外の戀は總て惡、總て醜、總て罪惡なり



今の我國の論者、之を知らず醜を美と爲し惡を善と爲し、戀愛神聖、戀愛自由など、根本より誤りたる事を主唱す、吾人は人倫の爲に、社會の爲に、道理の爲に斷々として之を排斥す、戀愛を說く者少しく省みる所われ

怪しむべきは、世の戀愛主義者が、本論に向つて、沈默を守れるをなり、かゝる大打撃を蒙りては、自家の立場の根底より覆がへるを知るも、鋭利なる論鋒に向ひては、敢て反駁するの無益なるを悟れる乎、將又た淫猥醜汚なる戀愛は、人生の本能的衝動に出づる者なれば、一言論の以て乃公の主義を破壞する能はずと思惟するに在るか、たゞ憾むらくは本論の記者が、末尾に陳疏せるが如く、述べて未だ盡さゞるものあること是れなり、願はくば更に詳論して、以て、警醒の實を全ふし、予輩をして、復び快哉を呼ばしめよ。

西洋の女と日本の女

▲西洋の女は、色が白く、髪が黄金色で、肉附がよくて脊が高い。日本の女は、色が黄で、髪が黒く、肉が痩せて、脊が低い。

▲西洋の女は、後ろに反りかへつて、外輪に大股に歩き、日本の女は、前に屈んで、内輪に小股にチヨコ〳〵と歩く。

▲西洋の女は、後ろで褄を取り、日本の女は前で褄を取る。

▲西洋の女は、よく談話し、日本の女はよく沈默す、前者は思ふことを十倍にも表情し、後者は思ふことの百分の一も面へ出さぬ。

▲西洋の女は、男と交際し、日本の女は、女と交際す、前者は口に『ラブ』を說き、後者は心に『ラブ』を思ふ、但し近頃大分變つて來た樣也。

▲西洋の女は、面で泣いたり、笑つたりするが、日本の女は、心で泣き、又心で笑ふ、前者は吾儘で、後者は愼みが深い。

▲西洋の女は、娘の時よりも妻になつてからが、浮氣なり、日本の女は、娘の時は浮氣でも、妻になると堅くなる。

▲西洋の女は、亭主を使つて、靴までも揃へさせる、日本の女は、亭主に使はれて、亭主の爲ならば、生命から二番目の衣物をも賣るを惜まず。

▲西洋の女は剛復、日本の女は柔順、一は悍馬の如く跳ね廻り、一は羊の如く柔和なり。

▲西洋の女は、人前で亭主といちやついて、家に還つてから喧嘩をする、日本の女は、人前では他人扱ひをするが、内に還つてからふざける。

▲西洋の女は、表面が清潔のやうで、内部が甚だ不潔で、日本の女は、表面が不潔のやうで、内部が極めて清潔なり。

▲西洋の女は、亭主を靴で蹴り、日本の女は、亭主の胸倉を取る。

二十日大根の栽培日記

氷見の里人

庭の空地を遊ばせ置かんよりはと、此夏のはじめ、諸種の野菜を植ゑたるが、胡瓜はもはや終となりたり、其跡へ何をがなと思ひつゝありし所へ、知れる人より紫、紅、黄三色の廿日大根（米名シラーシ）の種子を贈られたれば、いざ試みんとて

八月廿七日

朝早くいさゝか美術的にしつらひたる胡瓜の棚を取こはし、枯れかゝりたる胡瓜の根を抜き、畠となりたる土は、一度肥料を施せしのみなれば、甚だ痩せたるものなり、予は鍬を執りて幾度となく堀かへし鋤かへし、漸く畠の土らしくなりたるを、手にて氣長くならし、誂の如く溝を切りて得たる三行に、毎二列に一色づゝの種子をおろし、濃きいろ水をバケットに二杯、柄杓にて各行種子と種子との間に施し、一時間を以て、胡瓜畠は大根畠とかはりたり、

この夜わが書齋に對する栗の木立より洩るゝ月、得もいはれぬ風情あれど、前夜其の影を捉へんとしたる胡瓜の蔓、今は在らず、

八月廿八日

畠は昨日のまゝなり

八月廿九日

今朝また米の洗ひ汁を施し、引殘りたる小草を取り、小石の目に當るものを拾ふ、種子は早くも芽を萠き初めたり、

この日雨に成らんとして成らず、

八月三十日

今朝はノの字なりし大根の芽、いつか其の先に葉を附け、氣の早きは四つ葉となり、その長二分ばかりとなりたり、午前八時より雨ポツリと梧葉に秋を告げしが、九時頃より本降となりたり、此雨に大根の大に育つことなるべし、

八月三十一日
午前雨、白地の浴衣にては身すぼらしくなれり、昨日四つ葉と見えし葉は、今日は輪廓正しき酸漿の葉の如くなりて、たけ一寸となり、行儀よく蒔きたりと思ひし種子は、引散したる如く生えたり、

九月一日
雨名殘惜氣に晴れ、けさはわが書齋より見らるゝやうになり、春くらべする如きものありて、高きは二寸以上となれり、總體よりいへば紅の種第一にて、黄紫之に次ぐ、日あたりのよしあしによれるものゝ如し、
午後より晴れて夏に歸れるが如し、けふは二百十日なるが、この作物には新聞を煩はす程の事なし、

九月二日
事なく二百十日も過して、今日は午後より昨日の如く暑し、大根も兎も角も勢ひよく、丈八分通り三寸に達せり、通例大根種は畠一面におろし、成長に隨つてまびくやうなるが、はじめよりこの所花火線香の行列の如く、いさゝか異な感じも起るなり、土を離れて日々丈をのばし、二寸三寸とはからるゝ一條の莖は、後に根となるか、はた葉となるか、未だ鑑定つかず、

九月三日
畠には相當の肥料を施さねばならず、さりながら手近き肥料を汲出す道具なく、他手を借りては面白からず、いづれ賣物にはならぬ品なれば、例によつてしろ水にて御免蒙ることゝし、一わたり施し終りたる所へ、ポツリ〳〵と雨はじまりて、日暮るゝ頃は畠の溝、大につぶれて、梅栗の葉の船の浮べるを見たり、

九月四日
前夜の雨のために、まばらに生へたる大根は倒れて葉は土まぶれとなり、大に風采をわしくしたり、されど手の入れやうなければ成行に任すことゝしたり、この所少し張合の拔けたる形なり、

九月五日

朝來又しても雨、ぬれ鼠尾とも行かぬ、まだ子生の大根の、見る影もなく雨に倒伏して、痩せたる土は、一しほ畠に遠かれるもの丶如くなり、甚だ心細し、

九月六日

Yの字形に生へたる大根は、二股の中より芽を萌初め、これより上を葉に屬する分といふこと明白となり、莖の如きが根となりて、おひ〳〵膨らむなるべし、けふも雨に見舞はれて、畠の大根といはんより、溝泥の中の芹とも見んか、丹精の功いちじるしからぬことなり、

九月七日

けふは空快く晴れて、朝七時頃見廻はりたる時、泥溝の芹と見しものあまり、誇るほどにはわらねど、畠の大根と見らる丶やうに、倒れたるものも九分通り起上りて、葉の分長さは二寸に延びたり、下女は日々しろ水をこしらへて蓄へたるが、こ丶二三日肥料に用ひられざるにつぶやく、

九月八日

けふは中分のなき日和なり、夕方に至りて成績を見たるが、二葉の間より出でし芽は、反對の向に二葉となり、早きは前に出でし葉と同じ大きさになりたるものあり、七八分通りは四枚葉となりたり、出來榮は初めの如く、紅第一、黄第二、紫は紅に比して二分の一なり、根に屬すべき分は、二寸ばかりの小さき莖の如く、なか〳〵庖丁にか丶る程に膨まんは、程遠きやうに覺ゆ、既に其名稱二分の一以上の日數を經たるに、

九月九日

新たに出でし葉は、みなオゥバコの葉の如き形をなし、酸漿の如き古葉と、左右に岐れ、この酸漿の葉の如きも、いつしか長めになりゆき、大根らしくなるべし、今日より其の變化に注意をはじめたり、莖の如くしてやがて根となるべきもの、相變らず小さきものなり、はじめ青白なりしが、色を帶びはじめたるやう見らる、けふは天氣よし、

九月十日

朝日を宿したる、大根の葉の露は、所謂新體詩の資料ともなるべし、けさは四枚の葉の中に、また新に芽を出したり、葉は古きは長さ一寸六七分、二枚とも同じやうに伸び新葉は多くは長短不同にてはじめて書の筆法を學びはじめたるやうなり、根の分は丈もとの如し、土は濕氣を甚しく帶びたれば、鍬も入れず、肥料も施さず、

九月十一日

新芽はきのふのまゝにて二度目に出でし葉は初の葉を凌ぎてのびゆく、

予は以後の日記に、はじめの嫩葉を一番葉と稱し、二度目のを二番葉、三度目のを三番葉と稱すべし、



一度に二枚づゝ反對の方向に、抱かれたる如く生ず、

九月十二日

二番葉少しづゝ寸を延ばし、一番葉は舊形を改めずして、色次第に黄みゆく、

九月十三日

三番葉けふは五分位にのび、更に四番葉となるべき新芽を出したり、二番葉甚だ勢ひよく、恰も根より一直線に伸びゆく樹の幹の如く、一番葉は食客の枝の如し、二番葉はこの大根葉の戸主にして一番葉は隱居の姿なるもをかし、

九月十四日

この夜ごろ吹すさぶ風に、根は倒れ葉は亂れて、

其の發育は兎に角に、風姿甚だおもしろし、

九月十五日

けふにて其名稱の二十日を迎へたり、されど瘦せたる土に滋養分を與へねば、いまだ其根を風味するほどに至らず、されどこの二十日は掛引のあるやうにて、田吾作氏を煩はすも、三十日位經たねば物にならぬとの事也、

この夕、行儀わるく生へたるを一握り拔きて、一酌の下物としたり、時にとりて興深かりき、多くわらんには鹽漬にするもよからむ、

九月十六日

痛はしきはこの大根なり、生れ落つると雨になぶられ、風にもまれて、滿足に麗はしき日影を受けたることなくて、けふもまた雨なり、立掩ひて繁れる栗の葉の雫を受くるもうるさきことなるべし一番葉多くは地に委し、新芽やうやく葉の形を成す、

九月十七日

朝また雨に見舞はる、根も少しづゝふくらみはじめ、色もそれ〲濃くなりゆけり、但し黄のみは、また青味勝なり、

九月十八日

めづらしき好天氣と油斷の空に、夕刻雨となりたり、籬の朝顏のしぼむには氣附かざるも、この大根畠に暗き雨夜も厭はず、見に出掛けたれど功なし、一株、また株といふは早けれど、拔きて歸り、其寸度をとれば、一番葉二寸三分、二番葉三寸五分、三番葉は一番葉に同じく、四番葉やうやく五分、根の分三寸五分にして、蕪の如く膨らむ所は二寸、

九月十九日

またもや雨降り、二番葉相變らず勢ひよく、通常の大根の如し、葉の裏は心をかけて細きイガを生じ、いよ〲以て大根葉の特色をあらはしたり、三、四番葉三分ばかりづゝのび、根も大に見込つきぬ、

九月二十日

けふもまた雨、大根も甚だ不愉快なることなるべし、さるを馴れては苦にもならぬか、のび〳〵と葉をひろげて、きのより見榮あり、五番葉となるべき新芽生ず、

九月二十一日

朝、雨の中を、例によつて見に行く、根は日にまし大さを加へ、これと同時に一番葉は枯れ朽ちて見る影もなけれど、二番葉以下甚だ勢ひよし、

九月二十二日

雨のかはらで降る如く、大根も別に變りしことなし、

九月二十三日

さてもよく降る雨かな、殊にけふは木々の梢寒く戦ぎて、戸外一葉も懶し、されど飽かぬ此畠には、今更ながら時を得顔に、所狭きまで葉を交へて繁りたる、其の勢ひのよさ、わたりにきのふまで天を衝きし芭蕉の葉の、風に千切られて枯れ行くに比べて、折にふるゝの感なきあたはず、

九月二十四日

珍らしき日本晴なり、五番葉著しく伸びて、一番葉は影も見せずなりぬ、根は思ひしにはまして大きくなれり、

九月二十五日

けふにて廿日大根の約を違ふること十日、漸く物に成りたれば、これにて日記は終る、

附記

物に成れりと稱する大根は、小根より葉の先まで、平均七寸二分にて、内葉の丈三寸二分、根の蕪の如く膨みて食さるゝ所は一寸三分、これを通例農家に作らるゝものに比せば、甚だ不成績のものなるべし、

殊にこの三十日は、三分の一以上降雨にて、極めてお粗末なる畠は思ひ存分に荒され、鍬にも鋤にもかゝらず、肥料も初めのうち二三回しろ水を施せしのみなれば、大根にとりて不幸この上なし、

されば畠と手入さへよくば、二十日にはむづかしくとも二十五日位には、頗る立派に成長して、臺所を賑はすなるべし、

この大根は時を擇はず

この大根は色美しきを以て、諸種の料理にツマとして用ひらる、これを酢漬にして酒の相手ともなるべく、糠味噌にしてまた風味よし、

自炊生活の初日

菊池みね子

よし子さんと私とは、振分髮の昔から第一番の御友達で、同じ年に、同じ土地に生れ、同じ年に同じ小學校に入り同じ年に卒業して、縣立の高等女學校にも同じ年に入學しましたが、フト感ずる處があつて兩親の許しを得て、二人とも弓町の美術女學校に入る事となりまして、上京したのは三月の半頃でした
そして二人とも、知人の宅に居ましたが、其知人の伯父さんに當る人で、極昔びいきの方がありまして私共は常にお爺さんと呼んで居ました、その方が或日の事

「今の女學生は飯一つたけないぢやありませんか、經濟の何たるを知らない、必要のある丈、親から金を貰つて使つて遊んでる、それで如何して、將來役に立つものか、」

などと、ひどく攻擊なされたので、私共も口惜しくなり、其お爺さんの離間の四疊半を借りて自炊する事に致しました。

。　。　。　。　。

生れて、はじめての自炊生活、其最初の今日こそは、せめて失敗のないやうに、學校におくれぬやうに、笑はれぬやうにと、心がけて居たせいか、五時の時計の音、警鐘の如く聞えて、いつもよりも、より勇ましく起き出でました。

はじめて、こんなに早く起きたのですから、あけぼのゝ空の美しさ、向の木かげの、さて心地よさ、

雨戸くりわけたまゝ二人は恍惚として見て居ました
「水彩に書きたいやうだわねえ、
「え、あの空の色は如何して出したらいゝでせう、ねえあの、ぼーつと、ぼかしになつてる工合、まあ何てうつくしいのでせう、
さすがは西洋畫志望の未來の美術家の澁澤さんが居らしたら、御ひやかしでせうが、全く私共は色の出しやうまで研究して立つて居ると、活々とした新聞屋のベルが聞こえたので今更のやうに驚いて
「ちよいと、顔でも洗いませう、
「それより先づ、お釜の下をたきつけませう、お米は昨夜洗つてあるから直よ、そして御飯の出來る間に顔洗つたらいゝわ、
「え、ぢや、たきつけて頂戴、私御みおつけこしらへませう、
と二人は急いで臺所の障子を開けました、
お爺さんが、氣をきかして下さつた、鉋屑をたきつけに、たいても〳〵薪に火がうつらない、けぶたくて〳〵、親が死んだ時でなくては流すまいと思つた涙が、ほろ〳〵出るのですもの、よし子さんは、すり鉢が、おどるので容易ならぬ御困難、机の時計が五時半を指した頃、やうやく火が燃えつきましたでよし子さんの御加勢をして、逃げないやうに、シツカリ、すり鉢をおさへて、ヤットお味噌をすりました。
すると、いつの間にか釜の下が、いぶつてる、まあと、びつくりして、又鉋屑をくべるやら、マッチを摩るやら、ほんとに數學の試驗どころの話ではなかつたのです、惡るくすると學校におくれて、例のお爺さんに笑はれはせぬかとの心配があり、笑はれたくないとの意地もあつて、急げは急ぐほど、思ふやうにならない、急がば廻れとは實に名言だと思ひました。
そこで釜の前に一人つききりと定めて、私が其番に當る、そろ〳〵ふき出しましたが、いつ火を退いてよいのやら、中の御飯は、どんなになつてるやら

一向想像も見當もつかず、修身の答案位に考へた末、焦ては大變だと急いで火を退さました。

釜の下の火を火爐にうつして、おみおつけの、お鍋をそこに懸け、さあこれで一段落これからよし子さんは、御髮、私は顏洗ひ、相當に熱心になつて居ると、フーッと吹きこぼれる音に二人が前後を忘れてかけつけると、これは大變、お鍋のおつゆが吹きこぼれて居ので、あわてゝ、蓋を取つてよし子さん

「オヤ、こんなに少しになつて、足りないわ、

「いゝわ、水をたして、澤山にしませうよ、

「だつて、うすくなるぢやありませんか、

「かまはないさ

私はもう、水をさして居ました。

おつゆが、煮立つてから菜を入れるのだと聞いたので、青菜を一寸ばかりに切つて入れましたが、どうでせう、此のおかしな黄泥水に青菜の立およぎと云ふやうな、變なものが出來てよし子さんはあきれて居らつしやる、おまけに御飯は如何かと云ふと、あまり火い退さ方が早かつたのか、それとも水の入れ方が多かつたのか、少し柔らか過ぎて、また其上火の燃し方が平均して居なくて、幾度も消えたり、また奥の方にばかり火の勢が餘計だつたので、かた〳〵の御飯が出來たぢやありませんか、さすがに私も赤面しましたが、あまり滑稽なので、二人吹き出して笑ひました。

しかし、これでも自分でたいたのかと思ふと、山海の珍味よりも、幾倍おいしかつたでせう。自炊生活の妙味はこゝに始まりました。

あまり食事にばかり重きを置ひて居まして、肝腎の室の掃除を外にして居たので、あはてゝはたきを取る、箒を持ち出す、今六時半七時にはこゝを出なければ八時の始業に間に合はぬと云ふので、それはそれは大變の大急ぎでした。

家を出て道すがらも、早起の心地よさと、自炊の樂しさ、これが自分でこしらへた、お辨當かと思ふと出來そこないでも持つて行くのが、何となう、う

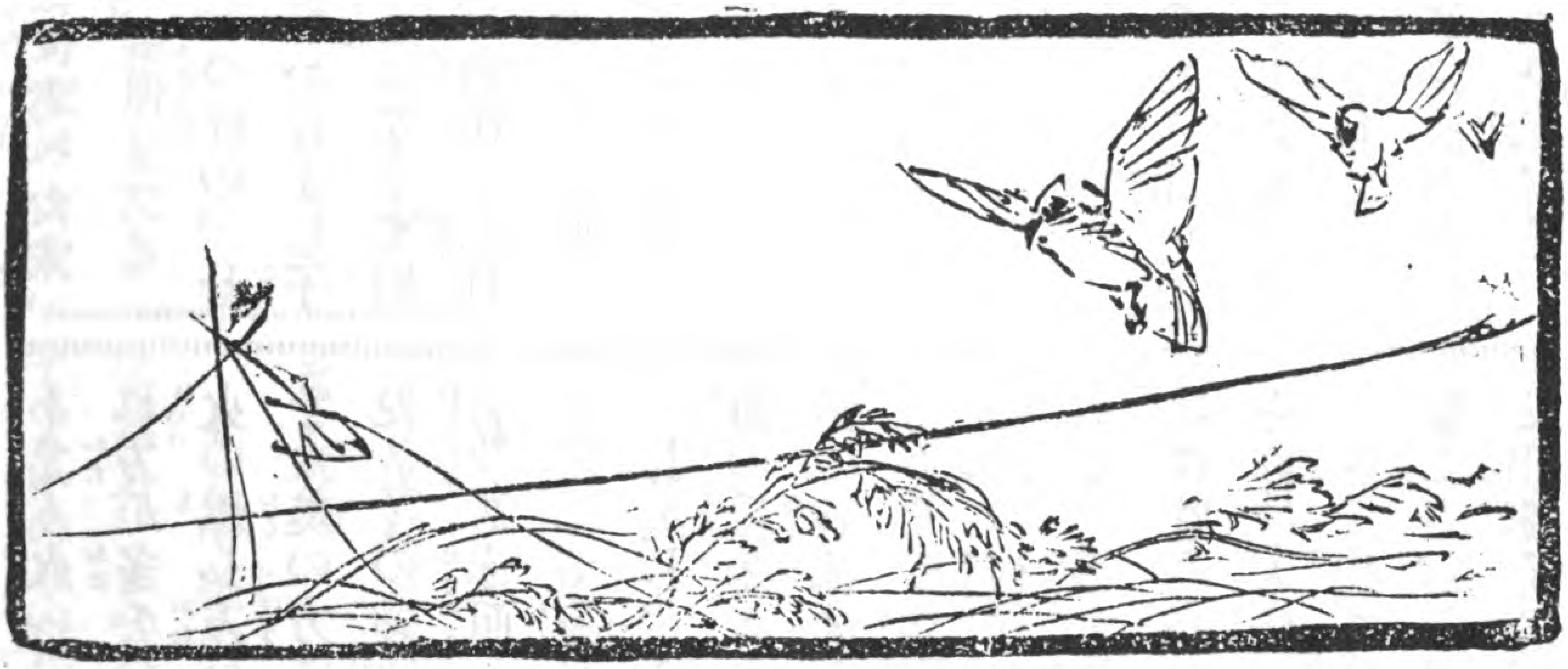
れしくて氣が引き立ちました。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿

やがて三時の放課となりました。たのしい〳〵四疊半の我が家へ、今日は自炊の初日、來て御覧なさいよと、お友達の澁澤さんを引ぱつて來て、歸ると早々よし子さんはお辨當箱を出しながら、何だか一人で笑つて居らつしやる。

「如何したの?

「あの、おかしくて〳〵ねえ、何だつて、あなた澁澤さんお聞きなさいよ、わのねえ、ホヽ、今日御辨當のおさいに、卵やきをしたんでせう、え昨夜、こさへといたのよ、するとね、そりやいゝけど、お醤油も何も入れなかつたんでせう、だからまづくつて〳〵お辨當の時、二人で顔見合して笑つたのよ



「そんな恥さらしなんて御止しなさいよ、

「ホヽ、よし子さん立派な御手柄、ほめて差上たいのは山々だが……

「わら、人の惡るい……だつて失敗は成功の母なんですものねえよし子さん來月になつたら、きつと上手になつて見せますよ、今から云つとくから、びつくりしないで頂戴、

「さわ、如何だか、……ぢや來月は、氣づけ藥を用意して來るわ、

「びつくりして、氣絶するから?え、何卒持つて來て頂戴、時に何かお祝に御馳走しやうぢやありませんか、

「え、それもいゝわ、澁澤さんのすきなもの、澁澤さん何がすき?

「私?私は筍御飯、

「筍御飯て如何するの?

「わらいやだ、それも知らないで自炊なんて、しやれてるわ、生意氣だわ、
「だつた、通常の御飯さへ、
と云ひかけると、
「出來ないの？
と澁澤さんは、あきれた風で、眼を大きくなさつたのです、
「いゝわ、そんなに勿體ぶらないで敎へたつて、いいぢやありませんか、
「え、何でもないのよ、筍をねえ、ゆでて、水に浸して、細かく刻んで、お砂糖と、お鰹節を入れてお醬油で、わたりまへに、にるのよ、そして出來た御飯にまぜるんだわ、
「えらい事知つてるねえ、
「それ位、私だつてあなた、
「澁澤さん御得意だわねえ、
「だけども、それなら六ケしい事ないわ、筍買つて來ませうよ、
「だつて私はづかしいわ、八百屋の前なんて、晝間きまりが惡るい、
「何、よし子さん自分の金で自分が買ふのに、何も天下に恥ずる事はないでせうホヽヽ、私が買つて來て上げませうか、
「え、どうぞ
と云つた時は、もう澁澤さん立つて居らつしやる、御一人では氣の毒だと思ふて私も一緒に出かける事にしましたが、どこの八百屋も丁度夕御飯前の事ですから、奥さんや、お内儀さん方が三々伍々として御出かけになつて居るので、さすがに、きまりが惡るく、三つばかり横目でにらむで通り過ぎましたが第四番目の八百屋に行つて、やつと買つたのが長さ一尺有五寸、價は十錢と云ふのでありました。
歸つて見るとよし子さんが氣を利かして米を洗つて居るのです。
丁度豆腐屋の笛が聞こえると、澁澤さん
「筍御飯には、お豆腐のおつゆなんかがいゝのよ、

と仰しやるので、ぢや買ひませうと出ると、もう通り過ぎてしまつてる、後から聲をかければ直聞こえるのに、……でも何だか、はづかしいやうで、わざわざポストの處まで追つかけて、追付いた處で
「豆腐屋さん、お豆腐持つて來て頂戴な、」
と小聲で云つたのでした、豆腐屋は引かへして持つて來てくれましたが、もう澁澤さんは筍の皮をむいで居らつしやるのです。
私は、火爐に火をおこして、お鍋をかける、よし子さんが今度は御飯の番で、出來上つた筍御飯が如何に、おいしかつたか、それは食べたものでなければわからないのです。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

今日は丗日、丁度日曜でいゝから何か月末の御祝をしませうよ」
とよし子さんの發議に、素より望む所、何にしませうと、いろ〳〵論議の末、お汁粉と定りました。
「晒わんを買ひませうよ、面倒だから、
「いゝけど、何だか日くさいのよ、
「然、ぢやどうしませう、
「あの小豆を煮て、其まゝ田舍汁粉にしませう、おいしいのよ却つて、
「え、それもいゝわねえ、だけども買ひに行くのが……
まだよし子さんは買物をいやがるのです、私も一ケ月の自炊で少しは、なれて來たのですが、矢張、お汁粉のためと思ふと幾分か、はづかしいやうな氣持もするし、遂にお爺さんの宅の子守の淸やを呼んで來ました。
「一寸、お汁粉には、どれ位小豆がいるの？子守はまじめな顏で、
「あなた方御二人なら二合位もあつたなら澤山でございませう、二合半あれば多過ぎる程でございます、
「然、多過ぎるのは、何も遠慮しないわねえ、してお砂糖は？

「え、五錢もありましたら、

「お餅は、?

「それも五錢位であの……何でございますお芋を少し御入れになつても……そりや、おいしうござんすよ。

「さう、ぢや、すまないけれど何でもいゝ丈け買つて來て頂戴な、ぼつちやん、もりして上げるから、ねえすまないけれど、

清やは、ぼつちやんを殘して飛が如く出たのですよし子さんは素より、私もあまり子供は好かない方ですから、最初はだまつて、坐らしたまゝ批評的に見て居ましたが、泣き出し相な顏をするので、

「おゝ〳〵、お汁粉のためには、嫌ひな子守もしなければならず、

と、いやな課業を强ひらるゝやうな吐息をして双手に抱き上げると、今年二歳の肥つた、ぼつちやん、にこ〳〵して私の膝の上で、立つて躍んで仕方がありません。

「ノッペリしてるわねえ、ぼつちやんの顏、

とよし子さんは、つく〴〵ながめて、かう仰しやる

「きれいぢやありませんか、早晩に立派な紳士になつてよ、二十年も經つたら、

「ハイカラにでせう、すまして……ねえ、ぼつちやん、髭がないらしいねえ、

「いゝわねえ、ぼつちやん、英雄は髭はないんだつて仰しやいよ、シーザーも、ナポレオンも髭なしさねえ、ノッペリさん、

「オヤ口が惡るいのねえ、この姉さんは、ノッペリさんなんて、

「オヤ〳〵どうしたの、泣いちやいけないのよ、未來の紳士が、ほれ、ハイカラが泣くもんぢやないのよ、それ、もう、清やが歸つたわ、

「どうも御苦勞さま、

「オヤ、ぼつちやん、

と清やが笑顏を出すと、ぼつちやん、泣き止んで、走つて彼女に抱きついて、よつぽど、うれしかつた

のでせう。

「あのねえ、お孃さま、小豆は、長く〳〵氣長く、馬鹿におたきなさらないと、だめでございますよ、馬鹿にさしろつて申します位でねえ、

「わさう？ぢや今日一日の積でしよう、ホヽヽ、出來たら御馳走するから御出よ、

「呼んだら直御出なねえ、

「え、ありがとう、

と清やは、子守歌を唱つて行きました、私共は例の火爐に火をおこし、小豆を氣長くにる可く覺悟しましたさて、その間に一ケ月の決算をしよふと云ふので通ひ其他の帳面を取り出しました、勘定の結果一ケ月の食費、二人で十六圓五十八錢となつたのです。

「お爺さんは、一ケ月十圓あれば女二人は立派に食べられる筈だつて仰しやつたでせう、間賃は別としてさ、

「え、何も別に御馳走はしないのにねえ、これぢやお爺さんに約束した豫算に超過してるわ、お爺さんに云つたのは、間賃が二圓五十錢米代が三圓五十錢、毎日のお菜其の他平均二十錢として一ケ月六圓、總計十二圓……だつたんでせう、

「家賃も何も食べてしまつたのよ、ホヽヽ、十二圓五十八錢に二圓五十錢の間賃を加へて都合十五圓八錢一人一ケ月七圓五十四錢、少し多いかも知れないだつて仕方がないわ、今月はなれないからよ、來月から少しは經驗が積みますよ、

「今度まで、お爺さんにかくしときませうよ、うそ云つたつてかまわないわ、

話してる内、例のカラツコロンと曳ずるやうな足音がしました。

「や、お爺さん

二人は、わわて、帳面を押込みに投げ入れて知らぬ顏、小豆の鍋を見て居ました。

「月末の决算は如何です。

と腸を見すかすやうな目で見られて、二人は笑つて何にも云はなかつたのです。

八日の旅（つゞき）

松林歌子

二十一日午後春日神社參拜

公園廻り

午後一時より一同人車にて春日神社參拜并に公園といでたつ先づ旅館前なる一の鳥居をくゞり行けば道巾いと廣く兩側は淺茅果はしく生ひ廣がり松杉欝々として心自から平か也車の音をきゝて兩側より雌雄牡鹿の數多く餌を得むとてより集まり何處までも車の後に從ひ來る樣のおもしろさに初めより秩にせるかすていらを車上より投げ遣れば我先にと爭ひ食ふ春日神社の下の石段の兩方には四五軒の茶店ありて鹿に與ふる煎餅を賣れり此處より車を下り車夫一人を案内にて上れば二の鳥居の左に祓戸社といふありて瀨織津姫命を祭る是より春日社迄路の兩側には有名なる春日燈籠ありて古より其數と鹿の數とを正算せし人なしと云ひ傳ふとぞ又或人の計算によれば社の内外を通じて金屬製の物九百八拾八石造りのもの一千七百八十九基に及ぶと云へり春日神社は春日山の麓に鎭まります官幣大社なり一の鳥居より東春日社迄の山野を春日野と呼び世に云ふ春日野の鹿其間に起臥せり若宮は天兒屋根命の御子天忍雲根命をいつき奉る社前に神樂所ありこゝにて巫子常に神樂を奏す春日大宮は若宮の北にありて東第一殿は武甕槌命第二殿は經津主命第三殿は天兒屋根命第四殿は姫大神の四神鎭座まします御本宮門の兩側なる廻廊より御本堂に至る間及びそれにつらなりたる處には無數の唐金の燈籠實に目を驚かすばかりなり又御本堂及び廊下はすべてきらびやかなる朱塗りにして其宏壯華麗なる實に筆紙につくしがたし御本堂の北に「やどり木と云ふありて一名七種の木とも稱し名の如く柞の木藤椿南天陸英櫻楓の七種に寄生し根は一つにしていと奇觀なり裏門を出でゝ右に行けば鹿の角細工奈良人形店あり暫時此處に休らひて色々家づとに購ふ古より此地の鹿は神鹿と呼びて捕獲殺傷する事を禁じ鹿を殺しゝ者は一命を亡なひしとかよく昔話しに聞く處なるが其爲毎年毎年其數を増せりと云ふいたく行人に狎れ睹み人の足音をきゝては左右より集まり來り食を求むるに餌を購ひ兩手にて直接にあたふれば露恐るゝ樣子もなく靜に食する樣の可愛らしさは飼猫の主人の手より食物食ふに異ならず社内には參拜者の鹿に與ふる餌代を以て終年の生計を立つる者いと多しとなり又聞く處によれば年に一度角切りと云ふ盛典ありて嚴かめしく生ひたちたる角を切りて商人等が彫刻の料に供するなりされど又一年にして美はしく生ひ立つといへり汽車中より望みし三笠山の麓を行く車夫の話によれば此はげたるは若草山と云ひ春日神社の後なる松樹森々たるこそ實に三笠山にして阿部の仲麿が「三笠の山にいでし月かも」との歌は此山をよみたるなりされど世人は一般に此若草山を呼びて三笠山とは云ひなせりとぞ此山毎年一度必ず草木を燒き拂ふとなりかゝりければ遂に三笠山の實景見るあたはず父上にも此地は早や幾度かの御旅ながらやはり此若草山を眞の三笠山とぞ思ひ居給ひけるとなりおかしきことにこそ神社は御本宮の西北にありて素盞嗚命稻田姫の命大巳貴命を祭り三笠山の麓手向山八幡は應神天皇仲哀天皇及神功皇后を祭る近傍いと楓多く菅公の

このたびはぬさもとりあへず手向山
　紅葉のにしき神のまに〳〵

とよみ給へるはこの山なりとぞ此裏にくりなし堂三月堂四月堂二月堂あり此二月堂の本尊十一面觀世音は古へ攝津難波の浦より獲たる者にて俗に肉身の像と稱ふる由也此處より左方に下るに鐘樓ありて鐘の高さ一丈三尺六寸口徑九尺一寸三分厚さ八寸廻り二丈七尺ありて此の鐘の衝き初めは朝日奈三郎にて七日七夜鐘の響き市中に鳴り渡れりといひ傳ふとぞ俊乘堂は鐘樓の西に在りて本尊には俊乘上人の座像を安置せり大佛殿即ち有名なる奈良の大佛は俊乘堂の西にあり初め聖武天皇の勅願に依り天平勝寶三年佛像殿堂共に落成し其後三百廿年を經て治承四年平重衡の爲に燒失せしを以て俊乘上人再建

り勅命を蒙り建久三年に成就しけるが後又三百廿一年を經て松平久秀三好康永の亂に燒失し現今の堂は寶永五年の再建にして當寺公慶上人の建立に成り棟の高さ十五丈六尺東西二十九間南北二十六間廻廊東西七十七間南北六十間餘本尊は金銅盧舍那佛の坐像にして總丈五丈三尺五寸面の長さ一丈六尺廣さ九尺五寸眉五尺四寸五分眼の長さ三尺九寸鼻穴の廻り三尺長さ三尺七寸耳の長さ八尺五寸肩徑り二丈八尺七寸胸腹の長さ各一丈八尺にして鑄料熟銅七十三萬九千五百六十一斤鍊金一萬四百四十六兩白鑞一萬一千六百十八斤水銀五萬八千六百三十兩炭一萬六百五十六斛を要せりと或本に見えたり其宏大無双なる推して知るべし近世にありては萬づ學術も進歩し種々の機械等も整頓せる事なればかゝる工事もさのみ難事にてもなかるべけれど昔時種々の機械も整はざりし時に當りいかにしてかゝる宏大無双なる大工事を成就せしものにかと思へば實に驚くの外なし大佛の左右には虛空藏菩薩如音輪觀世音まし／＼大佛の後堂には觀世音十八體まします殿舍内に入れば外部の物皆偉大なるものゝみなるを以て有名なる大佛もさのみ大いならぬ樣の感あれど外にいでゝ人の高さと大佛及び棟の高さとを比較すれば可笑しき程にて實に大いなる者よとの言葉のいづるを覺えず柱の直徑傘にて測りし處によれば凡そ三尺五寸餘假舍の前に八角形の金燈籠ありこは宋の代陳和卿の鑄造に係るものとの事にて佛像及び獸形を刻したり大佛堂をいで興福寺をさしてゆくに左に博物館右に師範學校縣廳等あり師範學校前なる淺茅ヶ間には五六十名の生徒武裝して兵式體操をなせるあり左側

興福寺の東金堂あり其前には花と松とて一の老松生ひ榮えたり元祿年間に植ゑられたるなりと云ふ後に五重の塔ありて應永年間の建築にかゝり高さ十五丈一尺興福寺は法相宗の本山にして南都七大寺の一なり右に本堂內院あり此處より猿澤の池上に出づ南圓堂の下にあり此池を猿澤の池と名づけたるはもと天竺の獼猴池を摸したればなりとぞ池の周圍百八十餘間あり池中鯉いと多く人の來つて漁するを許さず俗に魚七分水三分の稱ありと池西に采女宮池東に衣懸柳あり大和物語りに昔宮女采女と云へるが恩寵の衰へたるを歎きて終に此池に身を投じたる由見え衣懸柳は入水の時衣を脫ぎてかけたるものなりと云ひ傳ふる由也宿に歸りしははや四時過る頃なりきそれより湯浴みして旅のつかれを休め夕飼を終へ食後の運動かた／＼母上と町に出でゝ見るに町幅いと狹けれど賑やかなり宿近くに雌牝牡鹿の樂しげに打むれ遊べるいとをかし又髮のあまりに亂れたれば明早朝髮結を呼び吳るゝ樣にと宿の女に賴み置きつゝ十時頃床につく

二十二日午前博物館見物

十九日以來の名所廻り殊に二十日の屋島山上りにいたく疲れ居たれば枕につくよりはやく此世の人ならず雨戶開くるも知らでいねたりしに宿の女のはや髮結の參りぬと呼び起すに驚かされて起き出づればくもりなき日の光の勢よくさし入りたるに髮結の弟子にやあらむ十六七なる女のほゝゑみつゝ障子の外にたゝずめるいと面はゆくてそこ／＼に姿つくろひて長く待たせむも心なしといそぎ鏡に向へばいまだ寢むたげなる眼のあからみたるそのまゝに寫れるいと恥かしくて何かと土地の事等尋ねつ問ひつしてまぎらすもをかし下すき終へて間もなく三十近くの品よく薄化粧のあとさへ見ゆるが來りて髮を結ひ終りて下なる洗面所に至り含嗽してありしに四十の坂を三つ四つ越えたる丈六尺にもあまるべく見ゆる洋人の日本の浴衣着たるが側なる金だらひに向ひしが己の傍なる小さき手桶に湯の少し殘りたるを見て「このお湯頂戴してもようございますか」とたくみなる日本語にて問はれたれば「どうぞおつかひ遊ばせ」と答ふるに一寸會釋して金盥に移したるに僅か盥の半ばかりなりしかば「一寸御待ち遊ばせすぐに御湯取らせますから」と下女を呼び湯を求むるに「いゝえまう澤山ですどうもありがたうございました」と口はやに語らひたる實に子供ならねどいと可愛らしく覺えたりそれより母君の髮結ひ終て朝食をしたゝめて午前九時四拾五分より博物館見物にゆくまづ一人前五錢にて切符を求め履物傘等をあづけ草履はきて上るに玄關に一人の館員ありて陳列品目錄の求めに應ず追加共に三十二

鐵此左側なる一室に聖武天皇御寢輪西大門額あり總丈七尺七寸横巾六尺六寸額縁には木像八體を彩色したるを配置せり鏡故堅五尺六分幅三尺七寸三分「金光四元」「王護國之寺」と二行に記しあり眞すぐに行けば此處はおもとして佛像を配き又五重の塔羅大鼓一對あり右は二室に分れ一は佛像軸物にして行勢金岡の畫繊縁起の雙幅狩野守信の布袋渡水圖山水人物六枚屏風小栗宗丹の筆聖武天皇御寄妙法蓮華經の内二卷其他種々の名工の手になりたる書畫多く又後醍醐天皇御寢翰并に巾二尺五寸余丈一尺余の御消息を古代錦地の軸物となせる又明正天皇御寢翰渡唐天神の一幅後陽成天皇御寢筆

おろかなるわれをたすけのまつりごと
なほもかはらずたのむとぞしれ

との御歌一首を伏見天皇御寢筆正誠三十領一幅の四幅別室に陳列せられたり玄關に入りて左室壁の部にて村正吉光貞宗の名刀矢母衣一脊に矢二十七本立ちたる緋糸威の鎧同じく樺糸威山田鬼齋作の武將運騎の像村上彦四郎所有の兜一個へ箔押箙箭筒梨子地杖菊を箔繪は楠正成所有の物同じく正成の有の鞍鐙の袖支那製の劍支那帽子支那古代の鉄甲冑其他種々の像譜蹴鞠二へ香爐碁盤一具碁石入は梨子地に金まき繪碁盤も同じく古代錦の袋入り金鼓僧空海の茶磨尺量古女官服一具琵琶二つありて一つは銘湖月一つは神女後水尾天皇靈元天皇の福門院御寄破片の還大鼓胴の地に雲龍の銀蒔繪、黒地櫻花金蒔繪小鼓胴も同じく金蒔繪、笙、大和琴は銘を音延と呼び箱蓋の表に

音延、千代との美称の飛の松に契かなあかぬこころの飛九に萬か熟て

との墨書かすかによまれ又象牙　茶杓　茶杓あり銘は吉夢とありて其筒に

ふしたかく霧のなせる賀　茶杓
誰かなすべき準ゝをわれな壽

との和歌あり横造の如意輪に歸あり左側中央の間に楠正行繍を以て彫刻せし

かへらじとかねておもへば梓弓
なき數に入る名をぞとゞむる

の和歌を彫刻せり又鬼瓦丸瓦磬瓦等の破片は何宮殿何寺院のものとも云ふなるべし其他古代の有名なる物品數多く美術工藝部には日本各地名産の陶磁品支那焼等美はしく中に富士山の圖繍線七寶焼の扁額目もさむるばかりなり其他種々の珍器古物いと多くて何百年前の諸帝の御寢は歴史にて委てしたひし名畫工の筆珍器或は萬世に香しき忠臣の肌身につけけりと云ふ鎧兜忠死を決しゝる哀れの辭世の和歌等親しく目のあたりにうち見ては實に其いさをの尊くしたはしくそゞろ昔の忍ばるゝこそ是非なけれ十一時半此館を立ちいで師範學校前に憩し休らひて宿に歸る

午後京都行　奈良名産、ねごろ盆、奈良人形、奈良漬、ならの酒、鹿角細工

實に此地のながめや幽邃閑雅にして身は仙境にさまよふが如く浮世をよそなる長閑さをせめて今一日だにとは思ひしかど日數限れる急ぎの旅のまゝならねば惜しき秋をふりすてゝ心をあとに十二時四十五分發の奈良鐵道に乗り込み京都へと心ざす山々さながら屏垣をめぐらせし如くなる間をぬひ行きて十二時五十五分木津驛着此處にて奈良と櫻井行の汽車に行き合ふ一時二十分かみこま驛をすぎて棚倉に着するに茶園竹林いと多し畑の間なる柿の木は美はしく枝もたわゝに實りたれどもいと小さし宇治驛に着すれば十五六歳の驛夫名産の宇治茶を摘み來る驛の西にあたりて海かとばかりうたがはるゝいと大きなる池は小倉の池なり流れも清き宇治川におりし昔を忍びつゝ二時十五分桃山着奈良列車行合ひなりながいけ驛より桃山の間茶園多き外は畑の眼なれ處々には只々藭ろくの外なく幾町見渡す限り青々たる中に柿櫻等の色づきたるが相映ぜり右には桃山御陵の式會場左には桃の木山もはるかにいらなりて春の頃をぞおもひやらるゝ七條にてえんしよんに着せしは三時十五分頃なりき我等は宿を三條上る藏、右は淨交に取るにけよはやり神宮時代祭とかにて軒毎には提

灯同旗をたてならべいと賑やかなり電信柱には最下に電氣鐵道線のいと大きく上には電信電話電氣燈線等の數しれず引きはへられて恰かもくもの巢の如く縱横にわたり人車電車荷車の往來さながら織るが如し宿につけば直に薄茶を持ち出づいとゆかし十分間餘休息の後下鴨なる知人を訪問せんと車を整へまづ鉄屋町をいで大宮御所梨木神社を左に見右に折れて醫學校高等女學校前を通り出町橋を渡りて下鴨に至れば突然なる訪問にこればとばかりいたく驚かれぬ皆々五年振りの對面なれば互ひに其壯健を祝し別後のつもる物語りに一時間餘を費しぬ歸途下鴨神社に參詣す此度は同志社女學校の前より御所内に入りぬ五六間餘のいと廣やかなる道幅ありて青松散在し一面にしき渡したる柴生は毛布とばかりにうたがばれぬ今上天皇御誕生所桂宮を右に朝日の御門前にいで大宮御所を左に測候所圖書館美術學校前を通りて五時半宿に歸る測候所より道を隔てゝ南隣に裁判所あり此處は昔石川五衛門の舊屋敷にして一町四方ありとか御所は東西六町南北(失念)ありて六つの門あり下鴨神社祭禮の時には朝日の御門より世に名高き御所車牛にひかれて下鴨神社にお下りしますとなり郎内總面積二十五萬坪と聞えし禁闕の正面は南門にして別に唐門朝日の御門公家門等あり紫宸殿は更に宮垣をめぐらし承明日花月花の三門あり殿前には左近の櫻右近の橘あり清涼殿御所常御殿其他の宮殿造りいとも森嚴壯麗にして現今の御所は安政二年の御造營なりと承る午後五時半宿に歸り湯あみはてゝ夕食の膳に向ふに此日の食器特に清潔美麗なり又誠にこゝろよく覺えしは食後含嗽器を持ち出でし事にて今迄の旅宿になき事なり明日は又早朝より名所廻りに出で立つべければ今夜は早く休息せんと九時半頃床につく

二十三日京都名所廻り

朝日影はなやかにさしいでたる心地よさけふは一日都の景色たゝへむと萬事の案内は心きゝたる車夫に打まかせて午前九時より宿を出づるに朝風いと肌寒し先づ二條離宮表大門前にいで左に折れて監獄署の前を通り花園村なる禪宗臨濟派の大本山妙心寺にいたる南門を入れば右に門番所あり門内は幅一間半餘の敷石あり其左右には浴室鐘樓經藏佛殿法堂あり經藏の左前に雪江の松と云ふあり當山六世雪江和尚の植ゑたる者にして四百四十餘年の星霜を經たりとぞ實に境内一美觀たり又四派の松と呼ぶ四株の老松あり浴室は明暦二年明智光秀菩提の爲創始したるものにして世に明智風呂と稱する由也鐘樓は徳川家光將軍の乳母春日の局其亡母追ぜんの爲に建立せりとぞ又經藏は延寶六年の造營にかゝり經文六千一百六十六卷を藏め外部にかゝぐる毘盧藏の額は伏見天皇の御宸筆也佛殿は文政十三年の改造にかゝり本尊は拈華の釋迦如來脇立は伽葉阿難の兩尊者正面の像は達磨大師左は百丈和尚右は臨濟和尚にして其他の佛像由緒ある天皇將軍諸侯の靈位ををさめたり法堂は山主諸法式を行ふ處にして又問答の堂なり此處棟梁の材は遠く日向より集めし松にて柱は花井紹隆富士山麓より伐採して寄附したる物なりと天井極彩色畫の龍は狩野探幽が精神をこめて揮毫せしものにして筆勢の勇健なる恰かも活けるが如く古今無雙と稱せらる大方丈は承應三年の改建にして檜皮葺なり内に祠堂壇を設け末寺檀信徒の靈牌を安ず正面唐戸口に揭ぐる方丈の額は明朝張瑞之の筆襖の畫は狩野守信、狩野探信の山水畫にて奥の二室には古代書畫の寶物あり大方丈の東に玉鳳院玉鳳禪宮祥雲靈屋靈宮開山堂涅槃堂名將墳墓等あり玉鳳禪宮は一に花園御殿又麟徳殿と稱し花園天皇法衣の御像を安置す内陣口の唐戸四枚は唐の玄宗皇帝常居殿の具にして文祿の役加藤清正が彼の國より持ち來りしものなりと云ふ紫銅二重の塔には後水尾天皇の皇女文守尼公が帝のお爪を以て自ら伽羅木に觀世音菩薩の名號を刻ませられしと云ふ爪形觀世音を納む後花園帝の御宸筆額は狩野永眞雅楽助筆法皇御座の間なり祥雲殿靈舍には豐太閤の嫡男捨君乘船の像を安置す開山堂は一名微笑菴と號し開山の像を祀り明治三十五年迄五百四十四年をへたり堂前微笑菴の額は雪江和尚の筆同唐門は後小松天皇々居の御門を御寄附遊ばされしなりと涅槃堂の中壇には京都の人吉岡豐前の守藤原重次七十餘歳時鑄造せりと云ふ

婦人と社會　みつ子

大阪の關西鐵道は、學校通ひの男女學生の乘込列車を區別することに評議が極つて、近々より實行するさうです、其の方法は、男女學生乘車の際、連續列車の中央部なる一二等車を境とし、前部には男學生を、後部には女學生を容れるので、決して混同乘車を許さない仕組であるといふことです、これには定めて種々の理由もありませうが、男女交際論者などは差向き反對の大運動をせねばなりますまい。

東京でも、惡口好きの批評家などは、少なくとも夜中丈は男無用の電車と、女無用の電車とを別けるがよい、男女學生間に於ける種々の罪惡は、多くは電車の中で始まるので、角帽と廂髪との懇意になるのは、則ち電車が媒介をするのだ、などゝいつて居る人があります、どうぞ此な必要が起らないやうに致したいものです。

米國大頭領ルーズヴエルト孃の一行は、六月十二日に、サンフランシスコを出帆して、七月六日にはめで度横濱に着せらるゝ筈でありましたが、米國國務卿ヘイ氏の逝去せられた爲め、一時出發を延期されたといふことです、同行者は陸軍卿タフト氏を始め、元老議員十名、下院議員二十名、又孃の隨伴員が二十八程です。

乘船は太平洋郵船會社の新造船、マンジユリアといふ船で、上等室九十二は悉く一行の爲に、占有せられて居る、孃の室はサスガに華麗なもので、黄銅製のベットを具へたる安樂寢臺もあれば、また二重に下げられた白き蚊帳があつて、寒ければそれを閉る、暑ければ開くといふ仕組になつて居て、防寒防暑とも自由になるさうです、其他特別浴室あり、讀書室あり、談話室あり、音樂室ありて、善美をつく

したものと申します。

一行の中に、シンシンナチ州選出のニコラス、ロングウオースといふ當年取つて四十歳の少壯代議士があります、富豪で俊才で、將來有望の人であるさうで、此人こそルーズヴエルト孃の未來の配遇者であると、切りに羨まれて居ます、米國の新聞は岡燒半分に、此回の旅行は、氏と孃とが、互に意志を交換すべく造られた機會である杯といつて居ます。

此の船と、關西鐵道列車とは、正反對では厶りませんか、甲は米國式で、乙は日本式、甲は男女交際論主義を完全に代表し、乙は非交際論を絕對に代表して居るのです、しかも甲は十數日間夜晝なしの旅で、乙は長くて一時間に過ぎないのです、處かはれば品かはるで、どちらもお國振と申して置きませう。

下婢學校といふ學校が、岡山と新潟とに出來ました、どんな仕組のものかは存じませぬが、兎に角下婢の仕事を、一の職業と見なし、相當の教育を與へて、その勞働が、紀律的に、又經濟的に行はるゝやうになりましたら、主婦の地位も改まり、家庭もおのづから利益を見ることゝ思ひます。

金港堂の原夫人禮子さんは、この間支那から歸られましたが、或寺での法話會に臨みて、大氣焰を吐かれました『上海に居る日本人は、四五千人以上と申しますが、其の三分の一は、長崎バッテン肥後子イ〳〵の賤業婦達で、其又背後には一人か二人宛の男が居るのです、其人達の中には、西洋人の妾や、清國人の妻になつて居て、ダイヤモンド入の金指輪で、二頭立の馬車に乘て居るのも三十人位はあります、私しは此の連中に向つて、ヤケにならないやうに、變な意氣地を出さないやうに、勤めるところは充分に勤めて、收入は正金銀行にでも貯金して他日獨立の出來るやうに心掛けてもらひたいと申してや

りました』寔に其通りです。

ベルカーチーといふ米國の演說家、著述家、旅行家として有名の婦人は、世界の新興國なる日本婦人と握手せん爲めに來朝されました、孃は人道と人生問題とに對し、大なる感化を米國の上下社會に與へた方で、倫敦のローヤル、アルバートホールを始め米國各地の會堂には、何れも出席されざることなき程、極めて熱心で厶いますが、其の言動の、女性的柔和を失なはざることは、甚だ感心だといふことです、アメリカ流などゝまをしまして、男のまねをして、活潑だとか何とか自慢なさるお人達は、孃に對して、お恥かしうは厶いませぬか。

世界第一の婦人の大財產家は、獨逸エッセル市のベルサ孃でございませう、孃は有名なる大砲王クルップ氏の一人娘で、鹿のやうな眼ざし、金茶色の頭髮をもつた、花の十九の娘盛り、財產の總額は、四十五億萬圓で、一年の收入が、二百五十萬圓であるさうです。

結婚媒介所といふ看板をかけて、嫁を求め、聟を探がすもの丶、希望に應ずる處が、諸方にございますが、男子の方では、軍人、官吏、會社員などの嫁をと申込む人が多く、女子の方では、自分の位置、財產に適するやうな配遇者を求むるものが少なくないさうで、その年齡は十六七から三十五六までの間で二十二三の婦人が一番多いとのことです、便利な世界となりました。

女學生と小說とに就いては、兎角の議論もございますが、澤柳普通學務局長のこれに關する意見を聞きますに、

今日の女學生をして健全なる敎育を受けしめんには、卑猥なる小說を購讀するの風を禁止せざるべからず、歐米各國に於ては有名なる小說の筋書位

は、之を知らざれば、恥辱とするが如き風あり、我國と雖も、高尚なる小說ならば、之を愛讀するも不可なしと雖も、彼の卑猥なる小說を喜ぶが如きは甚だ不可なり、聞くところに依れば、女學生の文章が、古への文體より一變して、現時の文體に接近し來る傾向ある中に、其の文章及び言語の間に、卑猥なる小說の言辭を用ふる所少なからず此等は最も深く注意せざるべからず、要するに一方には卑猥なる小說を製作せざるやう勤むべきも亦社會の制裁を高め、學生をして卑猥なる小說を手にすることを恥辱とするの風を養成せざるべからず、これ獨り女學生のみならず、男學生も同樣なりとす云々。

本鄕邊の貸本家のお得意は重に學生で、其中にも女學生が多いとのことです、さうして一番流行るのは戀愛小說だと申しますが、果して事實でムいませうか。

人生の大恨事とも申すべき近頃の大問題は、詩人故野口寧齋氏一家の出來事です、惠曾女にあんな大罪があらうとは、どうしても信じませぬか、嫌疑のかゝつて居る丈けでも、甚だ殘念な次第ではムいませぬか、境遇は恐るべきものです、況て男女間の非倫なる關係から生じた境遇ほど恐ろしいものはありません。

直言の靑眼白眼に云はく『食慾と性慾とは、極めて不自然な生活をして居る現今の靑年を刺擊する二大勢力だ「成功」の二字が、一時社會を風靡したのは、食慾の要求に應ずる體の好い化物であつた、今や性慾の衝動を滿足せしめん爲に「家庭」の二字が美服盛裝して現はれて來た」と極端の議論のやうにも聞へますが、又何處かに、面白い味があるではムいませんか。



淸澄山

笠間醉雨

（上）

房州は天津の町外れから、右へ折れて淸澄山への道、鎭守の森は濃やかな綠を染めて、その朝化粧の美しさ、いつしか薄絹張つたやうな白靄も消えて了つて、木々の葉末の露は日に煌いて眞珠の光るかとばかり、それが颯然との風にも、はら〳〵、はら〳〵、零るゝやうに散つてゐる。

その玉と散り散る美しい露を、綾織紫紺の洋傘に避けて、彼方へ、しとやかに步を移す若やかな婦人、芳紀は八か九か、まだ二十歳とはならぬらしい、その面影は確乎と分らぬけれど、すらりとした脊、お太鼓に平たく結んだ橄欖色の夏帶、華美やかな瀧縞崩の中形の浴衣、その匂やかな袂から零るゝ鴇色の襦袢の袖、いづれ都育の、而かも名ある人の令孃であらう。

『まあ、お主婦さんの遲いこと！』

と、件の婦人は斯う呟いて、徐に立ち止り、洋傘を肩に、顧返つて見

た顔は、くつきりとした雪の細面、漆と黒き髪の毛を脹らかな花月に束ね未だ結立の櫛目鮮に水も滴らんばかり、眼は鈴を張つたやうで、涼しげなる柳の眉、卓絶つて美いといふではないが、至つておつとりした、愛嬌のある面相なので、それだけ、また優に其人を優雅に見せてゐるのである。

『オヤ來た！來た!!』

と、斯う獨語ちて、晴やかな眉を開いて、口元に微笑さへ浮べて、凝然と下道の方を見遣つたのであつた。

町の方から、身を低くして、急躁しう馳けて來た女は、既う彼是三十近であらう、顔色の淺黑い、頭髪を銀杏返に結つて眉毛拂つた大年増、團栗眼をぐるつかして、手拭で顔を押し拭ひ、呼吸も絶え斷えに、

『お、お嬢さん……ど、どうも相濟みません、た、大變にお待たせ申しまして……。』

と、彼方もにつこりとして鐵漿つけた歯をちらと光らかした。

『ナニ、そんなにも待たなかつたよ。』

『いゝえ、どうも、濟みません、つい、談話が長うなりまして、……まあ、お嬢さん、これから、漸次にお天道樣がお出になりまして、お暑くなつて參りますから、まあ、悠乎として行きませう……。』

『あ、悠乎とね……。』

と、二人の婦人は、斯く語らひつゝ、お嬢さんと呼ばれた若き女は、先に立つて徐に步み、右へ折れ、左へ曲り、谷を廻り、畦を辿つて、小松原の間の細徑投げたやうな山路を縫つて行くのであつた。

武井倭文子の父の義禮は、舊は農商務省とかの官吏であつたが、今は某銀行の重役を勤めて居、その方の配當や、公債證書の利子や、それから、幾分かの恩給等で、至つて裕福な生活向。それに又、此の義禮は勤儉で質素で、別に是といふ道樂もなく、煙草も喫まず、酒も餘り多くを用ゐないといふ風であるから、

世人は噂して「あれでは、武井さんはお金の貯る一方……」など、云ふものさへ有つた。けれども、義禮は決して〳〵世の所謂銅臭的の蓄財家とは違ひ、寧ろ模範的一種の理財家と云ふべき人物であつた。――と、いふのは、彼は平生、成すこと爲することと凡ての物事に中つては、至つて約やかで、幾分か切詰勝であるにも拘らず、彼は一家の娯樂、家庭の平和といふことを求める爲には、如何なる高い價を拂ふとをも敢て辭さないといふ風で、毎年〳〵夏が來ると同時に、直ぐ家族一同、その他骨肉の者までを引き連れて、やれ、日光、やれ、鹽原、さては箱根へと避暑に出掛けるのが例となつて居た。が、今年は、義禮は、此春から無上に釣魚に凝り出して居た矢先であつたから、此一ト夏は一つ風變りに、釣魚と海水浴とを兼ねて送らうといふことになつて、既に今、一人の書生を連れて、房州の北條の方へ往つてゐるのである。

で、丁度、娘の倭文子も學校が休暇になつたので、乃ち、母の清子と共に房州へ行くことになつたのであるが、母は例の東京灣の腥い汽船を嫌ひ、且つは一度は誕生寺や、清澄寺へも參詣し、序に又、六七年前に召使つてゐた下女が濱荻とやらに世帶を有つてゐるさうだから、それをも訪ねて見やうといふことになつたので、忽ち相談は纏り、某の日の早朝、倭文子と母とは兩國橋から、汽車で上總の大原へ行き、勝浦へ出で、翌日は誕生寺へ參詣し、彼の名高い妙の浦をも遊覽して小湊で一泊、その翌日は僅か二三里の所を歩いて天津に至り海明樓といふに投じたのであつた。そして、今朝は愈々清澄へといふ日取であつたが、倭文子の母は、大分久々のことで徒歩旅行が過ぎたと見えて、少しばかり左の脚を痛めたといふことで、まづ今日の登山は思ひ止め、倭文子に向つて、責めてお前だけでも參詣して來たら宜からうと云ふことになつたのであるが、此言を鳥渡耳に挿んだ宿の主婦が、自ら進んで、いざ御案内仕らうといふやうな仕儀となつたので、二人は今し登山の途に就いたのである。

『まだ、あんまり、急な登りでないのね。』
と、斯う倭文子が優しく尋ねると、彼方は受けて、
『ハイ、まだ、さう急でもございません、麓から半道は至つて平な道で、樂ウでございますが、それから後の一里が急です……、ですけれど、道幅も廣うございますから、ナニ、造作はありません。』
『さう。』
と、輕く首肯いて、雪のやうな白い手に搦む桃色の綾の手帕、玉と艶やかな富士額に滑つて、宛ら紅霞一抹と流れたかのやう。
右手は見上るばかりの、楢、松、榛、榧なんどの雜木山、左手は底知れぬ崖になつてゐて唯一面の竹籔、谷から谷へと渉つて來る朝風に簌々の音をなして、恰も白雨の降り濺ぐかとばかり、其籔を見透して碧の流が箭の奔るやう、瀬の聲は遠く〳〵、彼方の霞を籠めた溪谷から、幽に漏れ聞えるのである。
『オヤ、川があるのね。』
と、倭文子は涼しげな睫を彼方へ投げて顧返ると、主婦は左手でちよつと、、、胸を寛げながら、
『ハイ、ございます。』
『何と云ふ川？』
『ハイ、川の名でございますか。これは清澄から出ますから、矢張り清澄川と申します。……ハイ、綺麗なことは此上なく、京都の鴨川も此川には及ぶまいと私なんかは思つて居ります。』
『あら、まあ、そんなに綺麗なの？』
『ハイ、綺麗でございますとも、綺麗でございますとも、如何です、お孃さん、、、ちと此綺麗な水でお磨き

なすつては？、お孃さんなんかは元來お美しいのでございますから、それこそ玉のやうになりますよ、オホ……』

『あら、さう、では、ちと磨きたいものですね。』

と、倭文子も滿面に溢るゝばかりの微笑を湛えて、

『では、お主婦さん、そんなに水が澄うでは魚なんかは居ませんでせうね。』

『いゝえ、さうでもございません、これでも、鮒、鯉、石斑魚、それから鰻なんかも幾分か居ります、それが又なか〳〵美味うございます。』

『あら、まあ、そんなに何か居て！。』

『ハイ。』

爪先上りの坂路を物の小半町、木苺の下枝を潜つて、蓮芋畑の露を飾る間を拔ければ、厚い檜の板を二枚渡した至つて簡易な橋、兩岸から靑葉若葉の綠は逼つて、水上の方は綿のやうな眞白の川霧、漾々として又漠々、四邊の景色は一切これに包まれてゐる。

『あら、橋！。』

と、倭文子は足早に進んで、その板橋へ踏みかけると、主婦はちよいと顏を拭いて、

『お孃さん、これが、只今の川の上流でございます。』

『さう、成る程綺麗だわね。』

『ハイ。』

川幅は然して廣くはないが、水は玲瓏として水晶を束ねたやう、白玉轉ぶ早瀨の聲、綠玉奔る急流

の姿、それが思はず倭文子の足を止め、恍惚としてすらゝゝりと橋上に佇む様は、宛ら天女が浮き出たとばかり、そして、何か魔術でも使つたかのやうに、倭文子が直ぐ脚下の眞菰の間から星と流れ出でたる一羽の翡翠、一ト聲清快なる美音を殘して、急流を掠め、霧の中へと消え去つた。

『さあ、お孃さん、參りませう。』

土地の者には、然して珍しくもあらぬ谷川の景色、倭文子は、主婦に促されて、名殘惜げに橋を渡つて行く。

手を立てたと云ふほどでもないが、可なり急な坂路を喘ぎ〳〵登りつ、登りつゝ、倭文子は何か思ひ出したかのやうに、花瓣の唇を徐に開いて、

『お主婦さん、私、先刻も云つた通り、明日は是非、濱荻の下女の所を訪ねて見やうと思ふのですが、天津から大分遠いですかね。』

『ナニ、近うございます、小一里しかございません。』

『オヤ、、、たつた其位。』

『ハイ、造作はございません。』

『大概、苗字を尋ねたら分るでせうね。』

『分りますとも、狹い所ですもの、一軒〳〵尋ねた所で知れたものです……何と云ふ名でございますか。』

『苗字は梁瀨、名は嘉久と云ふんですが、嫁つた家はたしかいゝ庄司とか云ふんでした。』

『さいでございますか。』

倭文子は談話に氣を奪れて洋傘を深く翳し、脚元ばかりを見詰めて行くと、山上の方から、緩漫かに道を拾つて降りて來る一匹の飴牛、倭文子に間近くなつた時分、突然、もーつと唸り出した。不意を打たれた倭文子は、跳ね返へされたやうに飛び退いて、

『お主婦さん。』

と、ばかり、無意識に叫んで、素早くも主婦の背後へ縮込み、耳朶までを火のやうに眞赤に染めた。主婦は、これを顧返つて、

『ナニ、お孃さん、何ともありません、大丈夫でございます。』

『だつて、……私は、……可厭ですわ。』

と、聲は聊か慄えを帶びてゐる。

間もなく、炭をしこたま背負つた件の牛は、道幅一杯に首を振りつゝ、十五六歳の少年の、暢氣さうな鼻唄に伴はれて、下へ／＼と降つて行つた。

すると、又其所へ、今度は年頃三十前後から五十歳ばかりの女が、何れも一丈ばかりの杉板、檜板、松板などを各自に背負ひ、云ひ合したやうに皆手拭を冠り、三人五人、隊をなして、何か呑氣らしく語らひつゝ過ぎて去るのであつた。

やがて、農科大學の演習林の標木の在る所を過ぎ、岩山を切り開いたやうな豁然とした所へ出たが、顧返つて見れば、東方翠微たる巒峯の盡くる所より、遙に外の海の青波白浪を見晴し、耳に泉聲の危石に咽ぶを聞き、肌を山風に淸むるの快さ、幽情快感、渾身に滿ちて溢れて、倭文子は轉た仙境に漂つてゐるかのやうに感じたのであつた。

山は靜に、谷は閑に、折々は谺に響く鉞の音、杉間を漏るゝ知更鳥の聲。

青葉の烟る其中に、燃ゆるが如き丹塗の門、朱の楣に輝くは金文字の『淸澄寺』の額、倭文子は涼しげなる眸を凝して是を打ち仰ぎ、徐に門の内に入り、右手なる御手洗水へ進んで、その細やかな手を淸め、軈て、此方へ顧向けば、苔蒸す石段の彼方には、見上るばかりの本堂と覺しき摩尼殿あり、凡て丹塗であつて、その棟宇の宏壯なる、伽藍の雄大なることは、實に、類のない程である。

本堂は後に淸澄山を背負ひ、老杉古檜繁茂つて、物象凡て太古の趣あり、境内廣くして且つ淸く、四面の岩衣長く連りて、千古の玉露今なほ是に宿るかとばかり、雲霧堂頭を鎖して空翠濛々、怪鳥の聲は幽に滿山の寂寞を破つて、凄惋轉た人に迫り、幽邃なること云ふばかりなし、倭文子は此所に至つて、妄想消え雜念去つて、唯小さき胸に一種の感懷を喚き起し、自ら膽寒きを覺ゆるのであつた。

倭文子は主婦と共に階段を登り、帶の間から古代紫の華美やかな銀貨入を取り出して、御賽錢を上げ、い、やをら跪いて、一ト際祈念を凝らしたのであつた。

軈て、倭文子は其所を立ち去つて、右手の廻廊の方へ進み、欄干に身を靠せて、主婦と共に何か打ち物語つてゐたが、そこへ、階段を斜に登つて來る年比十七ばかりの女がある。手織木綿の筒袖に鰹魚縞の山袴といふ扮裝で、背には空の背負梯子を背負ひ、右手には小さな鎌を持つてゐるが、深山には珍しい位美しい女、色の白いが先づ眼に付いて、地藏眉、二重瞼、豐肥とした頰は暈したやうな紅味を潮して、何となく愛くるしい小娘であつた。

この愛らしい小娘は、甲斐〳〵しう、まづ背負梯子を取り外して、殊勝らしくも堂内に跪いたが、何を

祈るのであらう？幾度となく掌から火の出るほど擦り合して一向祈念を凝らして居たが、やがて、懐中より紙捻のやうなものを取り出して、廻廊へ出で、そして倭文子等の前を少しは憚るやうに、又、幾分かきまり悪げにして、その廻廊を廻り初めた。

倭文子は、直に彼の女の心を諒して階段を下つて、さて、種々の想像を彼女の上に走らした、まあ、あんなに年齢も若いのに、何たる殊勝なことであらう、これも土地の純朴な所で、婆様仕込の宗教心が、この年位から表示されてゐるのであらう、それにしても、一體彼の女が祈念する所の者は抑も何であらう、戀か、あらず、涙か、あらず、彼の女は、まだ純潔で清快なる氣象が眉宇の間に表はれてゐるから、決して決して戀や涙や將た血や情の爲に迷ふものではなからう、親の爲か、將た兄弟の爲か、……あゝ、けれども、何れ彼の女の上には或る悲慘なる事情が横はつてゐるのであらう、病氣か、負傷か、それならば、早く彼の女の爲めに全癒を祈る！さて、何様な事か、自分の力の及ぶことなら、助けても遣りたいものだ……と、倭文子は、如何なる理由とは、我自身にも分らぬけれども、唯何となく、無上に彼の女が可憐しく懐しくなつて來て、彼の女の爲には、少なからず同情の涙を灑いで、願くば彼の女の爲に幸福多かれと、心密に祈つたのであつた。

倭文子は彼の女が一心不亂に眼の色さへ變へて、尚ほ廻廊を廻りつゝ、何か文言を唱へてゐる有様を、幾度となく、顧返つて、また見返したが、いつか、既う門の前へ出たのであつた。

で、倭文子は、主婦に薦められて、門の直ぐ隣りの、小やかなる掛茶屋へ這入つて、花筵を敷いてある休息臺へやをら腰を掛けたが、なほも彼の女の俤が偲ばれて、唯茫乎とするまでにも、獨り深き〳〵想像に沈んでゐたが、主婦は、倭文子の此有様を見て、

『お孃さん、何うかなすつて？』
と、小首を傾げて、聊か心配さうに斯う尋ねた。
『いゝえ、別に何うも爲ないの！』
『だつて、先刻から、貴孃の御容子を伺つてゐるのに、何だか變でございます。』
『ナニ、そんなことは無いのよ。』
『だつて、そりや分ります。』
『ナニ、ね、別に他の事では無いがね、今、彼所に參つてゐた彼の可愛い女の子ね、彼の子のことを種々と思つてゐたんですわ、まあ、どんな理由があるかも知れんが、年の行かぬ女の子にも似合はない、殊勝なことね、私、何んだか知れぬけれど、可哀さうな氣がして堪らないのよ。』
『あら、さいでございまして……それは〳〵……』
と、主婦の首肯を、茶屋の老婆の、年頃五十餘りな、澁紙を攫んで引き伸ばしたやうな面付なのが、横合から、
『はあ、彼の娘のことでがすかえ……』
と、小さき白髮交りの髷に一つ合點〳〵をさせながら、茶盆を差し出した。
倭文子はきつと老婆を見詰めて、
『お婆樣さん、彼の娘を知つてるの？』
『はあ、知つてるのでがす、彼の娘は毎朝〳〵詣りに來るでがす。……はあ、直ぐ此の近所のものでがす』
倭文子は何となく云ひ知れぬ嬉色を面へ顯して、

『では、お婆樣さん、……何だか、根堀り葉堀りするやうですが、彼の娘は何の爲めに、そんなに信心に來るの？それも知つてゐて？』

『はあ、知らないでもないでがす。』

と、老婆は、菓子鉢に鹽煎餅を盛つたのを兩人の間へ置いて、腰骨反らして、二つ三つ手の甲で叩きながら、

『はあ、彼の娘は本當に感心なものでがす、彼の娘の直ぐの兄樣が豫備の軍曹で戰爭に往つてるが、それが、この間の何處とかいふ所の戰爭に、何でも下腹へ銃丸を受けて、大怪我をして、今、戰地の病院にゐるさうだが、實に、はあ、氣の毒なことで……それで、兄樣思ひの彼の娘は感心にも毎朝〳〵、彼樣やつて參りに來て、早く元なりの身體に癒るやうにと信心してるのでがす。』

『本當に、彼の娘は感心ね』

と、倭文子は太く彼の女を歎賞して、

『では、彼の娘の家は何所？……何と云ふの？』

『はあ、彼の娘の家は庄司といふので、彼の娘は澄といふでがす。』

と、云ふを、倭文子は何か思ひ當つた節あるやうに、老婆の言を聞きも終らず、

『ぢや、その庄司といふのは、昔から此山に居るの？』

『はあ、さいでがす、隨分舊いでがす、けれど、六七年前に分家した、今の御亭主さんの弟子の、――その今の軍曹の家なら、去年の六月に此山へ來たばかりだ、それまでは濱荻に居たでがす。』

『えッ、濱荻に居た庄司？』

と、倭文子は思はず斯う口走つて、

『それなら、その人は酒家を營て居たんでなくつて？』

『はあ、酒家でがす。』

と、この時老婆の凹んだ眼が異樣に光つた。

『えッ、酒家の、……それなら、その主婦さんはお嘉久と云ふんぢやなくつて？』

と、倭文子は腰掛から、前へのめるやうに頸を投げて、きつと老婆の口元を見詰る。

『はあ、お嘉久と云ふんでがす。……』

と、彼方も少からず驚異の感に打たれたやうで、語調さへ高めて、急き込んで、

『……まあ、貴孃は、何うして、彼のお嘉久さんを知つてるでがす。』

『あゝ』

と、倭文子は首肯いて莞爾すると、今迄默つてゐた宿の主婦は此時初めて口を切つて、

『お孃さん、あの、先刻の、お話の、あのお女中さんのことでございますか、どうも、實に不思議なことでございますね、……これも、清澄樣の御照合せかも知れませんね。……』

『さう、ね。』

と、倭文子はさも〳〵喜ばしげな眼色して、今度は茶屋の老婆に對ひ、

『お嘉久はね、東京で、永らく私の所へ奉公してゐたのよ。』

『あら、まあ、さいでがすか……お嘉久さんが……お嘉久さんの家は直ぐ其所でがす、是から一つ訪ねてお遣りなさい、なんなら、俺、案内しますべえ。』

と、老婆は莞爾とした。
倭文子も、益々驚異の感に打たれたやうで、自づと語調さへ高めて、
『まあ、不思議ことね。』
と、斯う獨語ちたが、老婆も主婦も、同じく事の意外なるに驚いて、唯口を噤んで、各自に顔を見合はすのみであつた。
茶釜の松風が冴えて聞えたが、やがて蟬時雨に音を變へた。

（下）

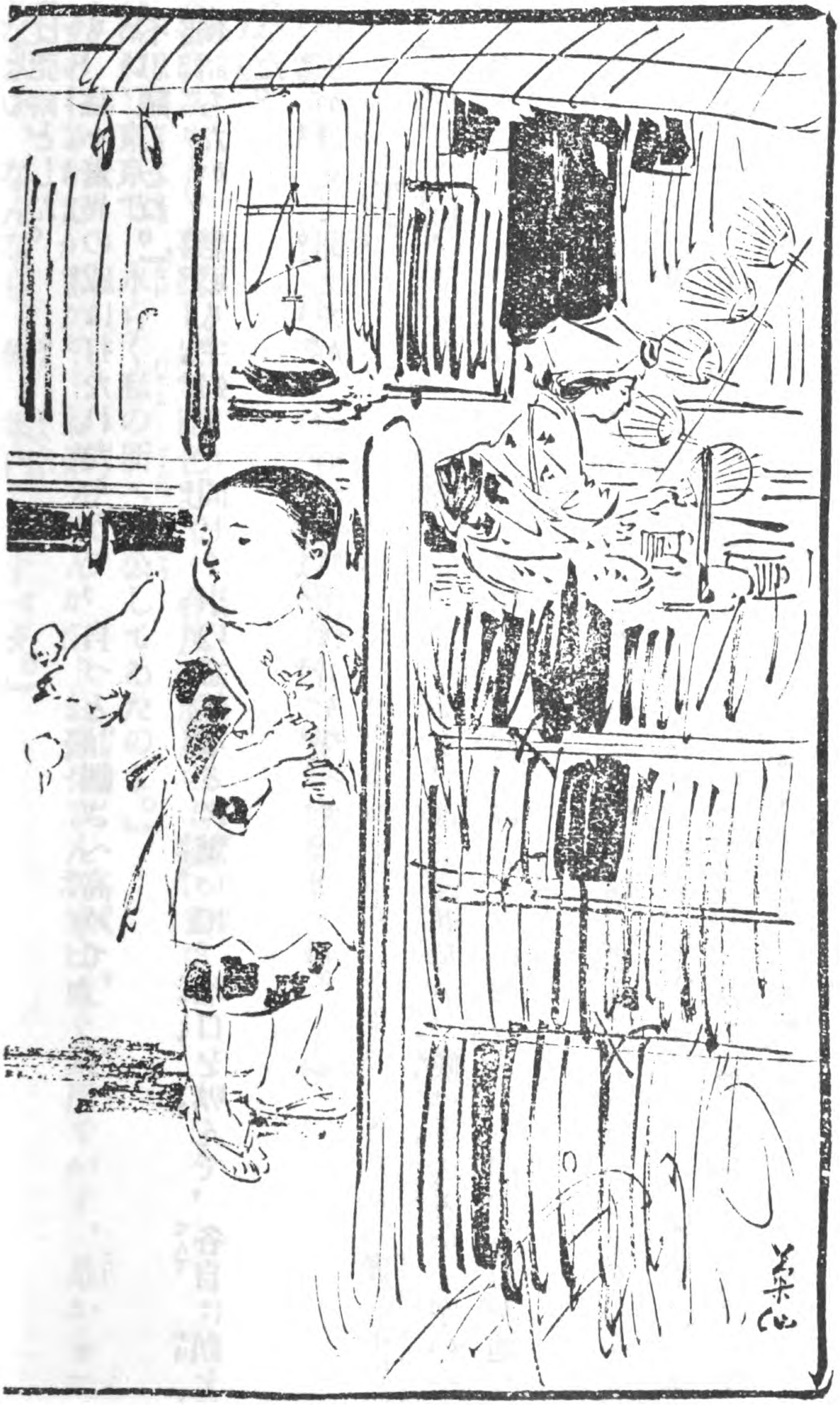
右も竹藪、左も竹藪、だら〳〵坂を登つて、また降り、晝なほ淋しい、候べく候といふ字のやうに微に辿つた山の細路を行くと、彼方は松、杉、眞柏、榧、樅、椎なんどの彌茂る木下闇、そこを辿つて行くのは、倭文子と宿の主婦とである。
『ねえ、お主婦さん、本當に此樣な不思議なことがあるものかね、まるで、小說かなんぞのやうだわね、濱荻でこそ、お嘉久に遇へるとは思はぬでもなかつたが、まあ、こんな所で、……そして、大分音信がなかつたのだから、それも、遇へるか遇へぬか、それも、まあ、十のものなら七分までは遇へないやうにも思つてゐたのに、圖らずも、まあ、此樣な山の中で邂逅りあふとは、本當に不思議ぢやありませんか。』
と、倭文子は洋傘を肩に、やゝ汗ばんでゐる美しい頰に、崩れかゝる鬢のほつれをちよいと搔き上げた。
『全くですね、私なんかも驚きました。』
往手は綠滴るばかりの杉の林、その境目を透して黄色く光る新しい屋根の一ト構。
倭文子は、左手に手帕を握つたまゝ、彼方を指し、さも嬉しげに、

『お主婦さん、彼所がお嘉久の居る家でせうよ。』

『さいです、必定、あれが、さうでせうよ。』

と、語に力を籠めて、主婦は答へた。

杉林を扱け藪陰に添うて、ぐるり、と鉤の手に廻ると、赤い椿の花の零れてゐる所に、白い鶏が二三羽



何か頻に餌を捜つてゐる。倭文子は眸を凝して彼方を見ると、其所には縁側で洗ひ晒した白い浴衣

の筒袖を着て手拭を被り、餘念なく團扇の骨を削つてゐる一人の、瘠せぎすな老婦がゐた。



倭文子は、そなたへ、徐に進み寄ると直ぐ脚元の翳薈の中から、黒いものが、むつくり起き上つた。はつと思つて見ると、これは年比五つ斗の眞黒な、目の丸い、坊主頭の、腕白らしい男の兒であつた。

男の兒は、丸い目を一層丸くして、凝然と倭文子の華美かなる清姿を打見戍つて、一散に驅け付けたのは彼方緣側の方。

『母や。』

との、男の兒の呼聲に、其痩ぎすな老婦は面を擡げて、直ちに又倭文子等二人を見た。痩ぎすな老婦、それはお嘉久でなく、まだ此の他にお嘉久がゐると思つた倭文子は、直ぐ其昔の俤を偲んで、その正にお嘉久であることを知り得た。しかし、其お嘉久は昔日のお嘉久ではなく、その俤は打つて變つて、昔い肥滿せる體軀は殆ど半分にも痩せ細つてゐるので、倭文子はちよつと見違ひもし、且つは又、驚きもしたのである。

『お嘉久！』

と、倭文子は、微笑みながら、優しい聲して、先づ、斯う呼びかけた。すると、彼方は全く知らぬ人から我が名を呼ばれたかのやうに驚きの眼を睜つて、唯、凝然と、倭文子の顔を打ち戍目つてゐるばかり、口も得利けぬと云ふ始末。

『お嘉久！お前、驚いたゞらう。』

と、再び倭文子は洋傘を窄めながら、斯う云つたが、彼方は、唯、

『ハーイ。』

と、ばかり、殆んど度を失つたやうな一單語。

『お前、私を忘れやしなくつて？』

と、倭文子は、溶くるばかり頰に微笑を湛えたが、彼方は、なほも、

『ハーイ。』

と、云つたが、やがて、思ひ出したと見えて、ぐいと一つ頷いて、顔さへ赧め、聊か頓狂な聲して、

「あら、まあ、お孃さん！」

と、膝蔽の上の竹屑を手早く打ち拂うて、つい、と立ち上り、倭文子に近く寄り添つて來て、更めて低く座り、頭を縁側へ擦り付けたが、兩手を突いた儘、面を擡げて、

「お孃さん、まあ、どうして此樣な所へ被入いました、私、まさか、お孃さんが被入るとは夢にも現にも思ひませんでしたから、全く驚きまして、一ッ時は碌々お答へも出來ませんでした。」

と、云つたが、お嘉久の不思議に思ふのは無理ではなく、實に至當なことであつた。

で、倭文子は、まづ、父の北條へ往つてゐること、母と共に房州へ出掛けて來たこと、母は大津の海明樓に居ること、宿の主婦と登山したこと、清澄寺でお嘉久の小姑のお澄を見たこと、それから掛茶屋の老婆にお嘉久のことを、圖らず聞いたこと、一伍一什、順序を立て丶、精しく打ち物語つたが、耳を欹てて聞いてゐたお嘉久は、全く不思議さの感に打たれて、唯默然として石の如くに端坐し、倭文子の談話の斷れ目〳〵に折々うち頷くのでみあつたが、同時に、又嬉しさ懷しさの感懷が彼女の胸に溢れて湧いて來たと見えて、やがて、それが涙の露となつて瞼へぼろ〳〵と音を立て丶零る丶のであつた。

それから、やつと、お嘉久は、それ、茶、それ菓子と、この珍客の倭文子、並に隨行の海明樓の主婦とを出來得るだけ饗應さうとしてか、起つては座り、座つては起ち、子供に乳を添へるやら、座敷の物品を片付けるやら、それやこれやで、目の舞ふ位に立ち働き、その間々に何かちよつと倭文子に問ふたり、また答へたりして、それは〳〵忙しいことであつた。

そして、お嘉久も亦、倭文子の問に應じて、亭主の出征した始末だの、負傷したことだの、手紙の來た數だの、此山へ引越したことだの、濱狄では商法の可なり善かつたことだの、子供のことだの、舅姑のこ

とだの、さては子供の生れた時、祝儀物を貰つたお禮だの、子供の寫眞を送らなかつたお託だの、夫から夫へと、談話は昔に還り、今に戻つて、何時盡くべきとも見えなかつた。

斯うなると、宿の主婦は、殆んど談話の繼子となつたのであるが、この主從二人の餘念なき談話に聞き惚れてゐた。

やがて、お嘉久は、急躁しく臺所の方へ往き、間もなく出て來て、倭文子に向ひ、

『お孃さん、御覽の通り、この山中のことでございますから、何にも貴孃方へ御馳走することは出來ませんが、只今、綺麗な、谷の眞清水を汲んでお湯を立てましたから、どうか、お孃さん、お行水なりとも一ト浴遊ばしては如何でございます、これが責めての、私の所の、御馳走でございます。』

と、斯う云つたが、倭文子は莞爾として、云ひ合したやうに主婦と互に顔を見交して、

『それは、何よりの御馳走、願つたり叶たりだわ、……では、其綺麗な水で、一つ肌を磨いて見ましよ…ねえ、お主婦さん！』

と、諧謔一番、倭文子は聲高に打笑ふと、主婦も亦是に同じて笑つたが、何と云ふことを解し得ないお嘉久も亦にこ〳〵としたのであつた。

入湯を終へると、丁度正午、お嘉久が心盡の膳部を飾る物は、是も噂に乘つた清澄川の鯉のあらひ、それから自然生のころ煮、鼈甲のやうで眞黒な味噌漬、砥石のやうな豆腐とざく葱との汁、これが清澄第一の獻立、これより以上の饗應は出來ないのである。

夏の永い日も、既う傾き初めたので倭文子は既う、此家を辭して歸らうとして、縁側を下りた其時、其所へ急躁しく驅け込んで來たのは、彼の清澄寺で見たお澄であつた。

お澄は、倭文子等を見て丁寧に挨拶し、何か嬉しげに、

「姉や、兄やの所から郵便が來たゞ。」

と、懷中から出したのは、一封の軍事郵便、お嘉久は早速お孃さんに讀んで頂きたいとのことで、倭文子は封を切つて中を見ると、至つて手短な文言、負傷もお陰で八分通り癒え、やがて、退院するのも近いことであらうとのこと、是を聞いたお嘉久もお澄も、一同の顏は嬉しさと、喜ばしさとに輝いて見えた。

「お孃樣！私、斯樣なに嬉しい、斯樣なに喜ばしい日は、以後にも以前にもございません。」

と、お嘉久は、既う歡喜の絶頂に達して、殆んど狂するばかりに喜んで斯くは叫けんだのであつた。

峯の松風、谷川の潺湲、これも彼等の歡聲に和する如くに聞きなされた。

（をはり）

婦人の文身

倫敦のコックスパー街のアルフレッドサウスは文身術界の先覺として稱せられて居るが其今日迄に施術した者は一萬五千人以上に達し其内九百人は英國婦人であつたとのことだ而して此婦人達の選む紋樣は自から一個の特色を備へて居つて其著しき者は十字架とエッスホモとの形であるが或る婦人は鳥の鬪つて居る圖を文身したこともある夫れで一般に婦人達の好むのは其良人とか情人とかの肖像を文身することで中には良人の聯隊の腕章を文身した者もある此他組合せ文字、頭文字住所の名等を多く用ゆるのである加之其用ゆる國語も頗る注意せらるべきもので多くの婦人はアッシリヤや支那やアラビヤやの各國の文字を其腕の上に書くのである又宗教上殊にローマンカトリックの赤納の如きは甚だ數々用ゐらるゝのである而して或る婦人は其指へウエッヂングリングの形を文身し又多くの貴婦人達は其手首へ黄色な腕環を文身し、流行を追ふ者になると自働車の形をさへ文身すると云ふ騷ぎである最も氣取りたる者はキユーピッドが其弓と箭とを棄てゝ鍋製の蓋の内へ隱れる所を文身するのである之れには特に愛は蓋に入れりと銘打たれてあるとのことだ。

文林

○七月五日宮中月次御歌會御兼題詠進

紀貫之女

うくひすの宿はとゝはゝ御園生に
めしたまひぬと答へましものを　田中光顯

みこゝろにしみし言葉の花のかに
うめの親木もおほしいてけん　高崎正風

ふきかへすうめのかをりは紀の海に
おひし玉藻のたねにそありける　渡邊千秋

大庭にめされし梅のほまれより
ことはの花もよにかをりけり　鍋島直大

黄鳥のやとはともわれみことのり
うけてさゝけし梅のひともと　北小路隨光

うくひすの宿の梅より言のはの
花のわるしも世にしられけん　本居豐穎

うくひすの宿はとゝはゝ答ふへき
詞なしとてわひし君はも　黒川眞頼

うくひすのやとゝはんてふ言のはの
花こそうめの香に匂ひけれ　松浦詮

大君のみおとろきしも梅か枝に
つけし言葉のにほひなりけり　小出粲

うくひすの宿はといへる言のはに
をしむ心はあらはれにけり　梅溪通治

九重にめされし梅のひともとに
言葉の花も世にかをりけり　竹屋光昭

うくひすの宿はといひし言のはの
花はうめよりよに薫りけり　前田利鬯

みめくみの露かゝらすはさく梅の　藤井　行德
ことはの花もにほはさらまし

一もとの梅なかりせは我かやとの　唐橋　在正
名はくもゐまてしられさらまし

さく梅の花のかよりもかくはしく　日野西光善
雲井に匂ふきみかことの葉

黄鳥のうめにやとかる言のはの　水野　忠敬
花はくもゐにかをりける哉

しきしまの道なかりせはうくひすの　清岡　長言
宿は雲井にうつりはてまし

しきしまの道にしられて梅のはな　清岡　峯子
きよき心ぞ世にかをりける

大みやにめされしうめの花よりも　柳原　愛子
かをりみにしむ君が言の葉

一もとの梅にそへたるうくひすの　藤枝　雅之
こゑより高き君かことのは

ひとはゆきはなはさかゆく九重に　澁谷　隆敎
むかしをかたる黄鳥のこゑ

さゝけてし大内山のうめかえに　小倉　文子
かくはしき名も殘りける哉

しつかやの垣根にさけるうめの花　河鰭　公篤
くもゐの春にあひて匂へり

うくひすのやとはといひし言のはに　宮地　嚴夫
梅のあるしそあらはれにける

言のはを雲上まてさゝけゝり　坂　正臣
これや親木のこすゑなるらむ

さき匂ふこそめの梅の花よりも　近藤　久敬
色こそまされきみか言の葉

かしこみてさゝけし梅にみめくみの　小池　道子
つゆの光ものこりけるかな

ゆひつけし歌はみまへにめされたる　荻原　嚴雄
梅にもまさる色香なりけむ

うくひすのこゑにまさりて世に匂ふ　小杉　榲邨
やとりし梅の言葉の花は

なつかしき君かことはの花のかは　植松　有經
梅かゝよりもみちわたりけむ

かくはしきひとときのうめの陰しめて　小出　粲
やふうくひすも世に聞え兒

勅なれはいともといひしうめにこそ　中郡　秋香
かしこ所のみはむすひけめ

わつめたることはの花の色みても　鎌田　正夫
このきの深き根さしをそしる

黄鳥のやとる梅をもめされけん　大口　鯛二
きみか言葉の花をみんとて

うめよりもその言のはの花をこそ　猪熊　夏樹
わはれと君はみそなはしけめ

うくひすの宿はとなきし一こゑに　千葉　胤明
かくれし梅も世にかをりつゝ

黄鳥のやとを惜みしひとこゑは　栗田口　顯久
雲井をさへにとよもしにけり

うくひすのやとらさりせは言の葉の　遠山　英一
花もかはかりよには匂はし

うくひすの宿のわるしもくれなゐの　加藤　義清
こそめの梅の若木なりけり

うくひすの聲さやかにも殘りけり　鈴木　小舟
梅にそへたる君かことのは

おほけなく根越の梅にゆひそへし　尾崎　宍夫
言葉の露や御手にふれけむ

うくひすの宿も雲井にしられけり　須川　信行
ことはの花の高きかをりに

○七月五日御宮中月次御歌會通題詠進

夏　湊

ひきわけし船の上よりいくさ人　高崎　正風
月みるなつや涼しかるらん

こきつれてみなとをいつる百船の　前田　利鬯
しらほすゝしき夏の海原

うをつりて舟こきかへる夕まくれ　水野　忠敬
ゆらのみなとに夕立のふる

すゝしくもみえこそわたれ水くきの　宮地　厳夫
をかのみなとの夏のよの月

おひてよきさかみの海のかつを船　小杉　榲邨
みやこのみなとさして入來る

追手ふくみなとをいてゝゆく舟の　鎌田　正夫
白帆すゝしき波のうへかな

おきつしまおほひし雲のたちまちに　大口　鯛二
みなとにかゝる夕立の雨

みなと江につとふ千船のともし火の　遠山　英一
つらなる影そ涼しかりける

詞苑

従二位男爵 黒田清綱先生撰

（代撰有池武則先生）

老人

天

昔帰ることしの春のはなこよみ
まきかへし見ん老をわすれて

岐阜市中竹屋町 豊田冬子

地

何となくなつかしきかなきくことに
老たる人のむかしかたりは

東京府下田端 田中千賀子

人

竹の杖つく〳〵すきしいにしへを
おもへはひさし老か身にして

奈良縣高市郡八木町 天野照子

甲

月はなになれし昔はゆめなれやかしらにつもるけさのしら雪　山城 鈴木蕙子

いかにせんふはひのみかは雪さへもかしらに積る老となる身は　和泉 中江けい子

いつのまにつもり〳〵て霜雪のかしらに消ぬみとはなりけむ　岐阜 青木まさを子

月はなに遊ひ遊びしおこたりの數や積りて老ひとなりけん　秋田 古瀬りく子

おひらくはむかふかゝみを月にしてかしらの雪も花と見ゆらん　埼玉 横田秋子

耳にふれ目にみる事もつきに日にうとくなるまて老にけるかな　埼玉 横田須磨子

老人は田草とりつゝ休むかないくさにいてし子やおもふらん　名古屋 不破きみ子

乙

名古屋 近藤偉子

めのさきの物見えすしてをさなごに笑はるゝまて老にけるかな　東京 松本くすゑ子

おいらくの姿あらはれたかさこの松を千とせのともとなるらん　東京　山田婦美子

老の身にたのしきものはまこの手をひきてひかれてかみしふて　愛知　後藤のふ子

いにしへを語りあふへき友もなくあはれ我身はひとり老ひけり　秋田　古瀬惟子

かくまてもなからへはこそ老楽のかゝる嬉しきよにはあひけれ　東京　高橋珍子

たよるへき杖はあれとも老のさか何こともなく越えまほしけれ

（以下到着順）

丙

花待てはまたも月をと願ふなりわか老らくをとゝめてもかな　東京　駒澤さた子

小山田に軍語りもいさましく老とも見えすすきかへすなり　和泉　中江けい子

みいくさに我子めされて老いのみの一人さひしく田畑たかやす　三河　鳥山とも子

ふろゝまに向ふかゝみのかけさむし老のかしらに雪のつもりて　和泉　中江なほ子

つとむへきわさなしはてゝし老人そまことのとかと謂へかりける　東京　日祥郁子

おこたらぬ子供か學ひみろにつけ八十のさかなわれもおすなり　京都　坪内りき子

わたし世のよせししら波かすそへて梓の弓のはるやいくはる　長野　細野撫子

浦やすき世にもあるかなさま〱のうき世渡りしむかし思へば　東京　後藤喜代子

よきをとりあしきをすてゝ老にける人のこゝろを我鏡とやせむ　山梨　櫻　武子

よい中にこゝろも業もきたえてしおきなおうなはいとし尊き　東京　武井光子

靖國のやしろのまへにぬかつきてなにをか老いかたるそあはれ　大和　栗山たか子

ますかゝみむかふことにそ白たへにかしらの霜のおきまさる哉　大和　栗山俊子

とも〱に生たちなんと植ゑ置し松にさき立たれ老にけり　能登　池野いさみ子

祖母君は今日もわらはの手を取りぬ老ひし其の身の年も忘れて　岡山　小山松枝子

腰まかりつとむるわさもつらからんたよる子らなは兵士にして　東京　林　環子

老人のよれのいはひをひこやしやこつとひていはふ家そ楽しき　三河　永井さい子

むかしはと思ふ事のみとし〱にまさるや老のこゝろなるらん　神奈川　森田はな子

うひ孫のかほなかめつゝほゝへめるおきなやいかに幸多きかも　東京　林　點子

なからへてあふそうれしき外國に國のみいつなかゝやかすとき　肥後　德永殷子

ゆく道のとほきことゝはしりつゝもいそくはおいの心なるらん　肥後　德永萬壽子

入相のかねもあらしにちる花もおいぬる身にはなみたなりけり　肥後　德永而有子

老ぬれは起きふしさへもまゝならすもとの童にかへりぬるかな　陸前　前田河千年子

目はかすみこしはあつさの弓なから杖をちからに國につくさむ

陸前　前田河みさを子

このなつは老の身ひとり山田もり子は御戦にはけめとぞおもふ
熊本　日高かす子

いま昔おもひくらへてたくひなきみよにあふ身をいはふ老ひと
長野　田島みよ子

置く霜にしほれはてたる翁くさむかしはよそに見つゝすこしを
越後　松永しげ子

こゝろして世をこそ渡れ我こふと子をおもひけり老しひとさへ
名古屋　中島業子

めはうとし耳はきこえす愚かなり老のはてこそあはれなりけれ
東京　杉田紫子

朝な夕なほうしならわとみほとけにつかへまつれる老人あはれ
神戸　今西みさを子

おひの波うちよせさらは昨日今日杖持つもろ手つゝ取らましを
名古屋　木下鶴子

うつ蝉の世になれ〳〵し老人はさすかにいへのたからなりけり
大阪　船越小仙子

世のうきを瀬のなみを寄せし身のおさなき夢やたのしかるらむ
薩摩　松原みれ子

そのむかしとりたるつるき杖にしてわかゝりせばとなけく老人
肥前　藤松りか子

腰かゝむ人をあわれとみしわれもいまは杖つくみとそなりける
埼玉　澤田房子

壯男はいくさにいてゝおいびとのをさなきまこと田畑まもりつ
埼玉　横田やな子

何ことももさこそと人にゆるされておもふまゝにも老にけるかな
秋田　細矢はろ子

まこひこをゆみやの神にいのりつゝ鳩のつゑひく人そゆかしき
津　神田みよし子

杖となしはしらとたのむ子に孫にこゝろひかれて老そわするゝ
津　茨木みす子

子に孫にひまこもともにさかへきてよをたのしくもくらす老人
肥後　佐々小學子

夏の夜もねさめかちなる老か身は窓おしあけてかせをこそまて
肥後　坂本豐子

老ぬれはなにをなすにも杖めかれ孫をたのむのほかなかりけり
肥後　佐々有鄰子

老人はすゝめの子さへなれなれてひさのあたりに舞あそふなり
能登　杉下富美男子

かくまてに偽りおほき世なりとは知らて過き來ぬ七十のわれ
栃木　福田さと子

あたらしき月日を重ねかさねつゝおのれは老となりにけるかな
栃木　福田富久子

うなひ子の生ひ立つふりを樂しみて老となる身を知らぬなり鬼
東京　小林芳子

身はかくて霜かれゆくかもみち葉の若葉さしたるをもおりしを
下野　金子とし子

ひけしろきゆみひく翁すこやかにおさな夕なにことりやしなふ
三河　榊原きく子

老ひ人の昔のはいとゝうるはしき行すゑなかくいかて消ゆへき
東京　瀬藤ちよ子

孫子らか手を引きそへてとしよりをいたはるさまの心やさしも
埼玉　柿沼福子

まこのみにつゝかなかれと祈るらん杖にすかりて神もうてする
福井　岩橋化子

うつせみのよの荒海をかすこゑてひたへの波そよせまさるかな
上野　飯田かつの子

君かへむ年を千代もと祈るかなやそまり三つをかすとわにしく

もの丶夫も夢路はろかにかよふらむ老ひたる父や母のみうゐに　愛媛　高橋茂子

御軍にせかれ召されて老いの身のかれきにまたも花さかすとは　能登　松岡繁子

駒つろきわきへの庭はとしをへしおいその森の影にそありける　但馬　田尻保代子

老ひ人のつえをたよりにてらもうて地獄こくらく祈るならんか　千葉　石橋たけ子

やしはこも其やしはこもて引てめてたくゆくもみつはくむ人　東京　五十嵐清子

翁をはひとなとかめそわれとてもいつかはをかん霜いかんむり　東京　田中千代子

やつれはて腰にあつさをともにして聲もあはれに物ひさきけり　金澤　北　隆子

かやり火に手枕かろく老ひとのめつるはこよひいさよひのそら　磐城　三森須磨子

あさかほの花かそへつ丶おいひとのひけ白うして面はゆるかな　岩代　菅野和子

へたてなき家のまといの花むしろ老ひ身はいかと楽しかるらん　東京　平野千茂子

もの皆の新らしきをはもらふよのひとは老ひしく貴とかりける　愛媛　岡田猪子

老ひたりと我はすこしもしら糸のおきそふ髪に知られけるかな　大和　橋かほろ子

世のなかの浮こと丶もをうちすて丶たのしかるらん老人のみは　伊豫　高橋かめよ子

はなやかと思ひし時はむかしにて庭のしるしにしらそおひける　福井　今村春子

本郷　小坂操子

老の坂のほるにつけて我か子等の勤をもいつかか丶れとそ思ふ　東京　岡田柳子

くれたけの杖を千とせの友として世をやすけくもおくる老ひ人　東京　奈良たく子

とし波はよれとみたれぬいとはりは老木の花となもひこそすれ　上毛　八重山咲子

かい孫かすやすやねむる夏の朝しかそと来てほ丶ゑみにけり　上野　木暮千代子

忘れぬは浮ふしのみに老しにろおさなこ丶ろの世をいかにせん

掬泉

天

わきいつる清水のもとにやすらへは
　むすはぬ袖も涼しかりけり
　　秋田縣由利郡本荘町眞尾崎町　古瀬りく子

地

照し日の道ゆきなやむ松かけに
　むすふ泉そいのちなりける
　　東京日本橋區中洲町二號地　小林芳子

人

夕月の影うつるまてむすひけり
　いはもるみつになつをわすれて
　　東京市本所區湯島三組町八十四番地　伊藤幽子

甲

東京　伊藤竹子
岩しみつあかすむすひて暮にけりあすもまたこむ松のしたかけ
東京　小幡榮子
ひ影さへもらぬ三山の岩しみつむすふたもとはなつなかりけり
東京　吉岡龜子
立いてゝけふもむすはん岩しみつわきてすゝしき松の木かけに
東京　高橋珍子
みな月のあつさわすれて岩しみつむすふたもとに秋やかよへる
上野　木暮千代子
松かけをうつす岩根のましみつをむすふたもとは夏としもなし
三河　榊原きく子
さゝ〳〵と流れて清きましみつをむすふたもとに夕かせのふく
栃木　福田富久子
道のへの松のしたれのこけしみつむすふたもとは夏なかりけり
埼玉　柿沼福子
さゝれ石のかすさへみゆる岩清水むすふしはしは夏なかりけり

（以下到着順）

丙

東京　佐野ふき子
袖寒きかぜさへかよふ松かけにしみつむすひてけふもくらしつ
岩代　菅野和子
夏草をふみわけゆきてこのかけにしみつむすへばあつさ忘るゝ
磐城　三森須磨子
夏しらぬ山路たどりの木のもとにすくふしみづのいとゞ涼しき
大阪　太田ちよ子
小山田のくさとりすむやたにいつみ掬ふもうれしあつさ忘れて
能登　栗倉婦美子

亡妹子とともにくみてし岩清水ことしも湧きぬ掬ひて手向けむ
東京　五十嵐清子
山かけの岩井のしみつむすふてにすゝしさおちる松のしたかせ
東京　佐野富子
つちさけて照日もしらぬ山陰にしみつむすひてけふもくらしつ
東京　田中千賀子
岩かれのいつみ掬ひてたびのみはしはしあつさを忘れてそゆく
愛媛　高橋茂子
あえきつゝのほる山路に岩しみつみいてゝむすふ時そうれしき
東京　伊藤敏子
立ならしむすふいつみのすゝしさにくるゝもしらぬ松のした陰
東京　伊藤英子
桐のはのしけれるかけの岩しみつむすひてけふも暮しつるかな
静岡　竹内みつ子
わくものときゝて結びし山しみつこほるばかりに寒くも有かな
東京　入江菊子
日影さへもらぬちひろの松はやし岩もるしみつむすふすゝしさ
能登　ふみな子
遣る瀬なきひろの暑さに堪えかねて苔路をつたふいつみ掬ひぬ
肥後　佐々有隣子
堪かれしあつさわすれてわきいつる水をますますむすひつる哉
肥後　佐々小琴子
足引の山路のしみつむすひあけて世の塵あらふ〳〵すりとそなす
津　神田みよし子
むすふ手もすゝしかりけり夏しらぬときはのやまの松のした水
津　炭木みす子
松かけのいつまもりくる水きよみむすへは秋もてにそかよへる
秋田　細矢はる子
すゝしさの庭のやりみつむすふての上にも月のかけはうつれり

夏の日をへたてゝむすふおくやまの清水にかよふ秋のはつかせ　埼玉　横田すま子

まつ山の岩かれしみつ夏くれは千世もくむへくすゝしかりけり　埼玉　横田やな子

おく山の岩かきしみつくみ〳〵て夏はよそびなのふるなりけり　埼玉　横田秋子

あつき日にとふる山路に駒とめていつみ掬ひてあらふ馬子かな　埼玉　澤田房子

清水わく松の木陰はなつころもかされてくへきところなりけり　秋田　古瀬惟子

わきかへる谷の清水を結びあけて夏はあらしとおもひけるかな　尾張　後藤のぶ子

谷間よりなかるゝ清水てにうけてあつさわするゝ心ちこそすれ　愛知　松本たか子

こゝろなく山のゐの水むすふてにすゝしく宿るつきのかけかな　肥前　藤松りか子

ときはなる松したかけに濁りなきいはまのしみつ掬ふすゝしさ　薩摩　松原みれ子

聞てふ名もなつかしき眞清みづを結ひてけふもあつさわすれむ　大阪　船越小仙子

たえかたきあつさに結ふましみつに思はすぬらす袖そすゝしき　名古屋　木下鶴子

おく山のまつの木かけの岩清水むすへはあきにあふこゝちせり　岐阜　青木まさを子

岩間よりもりくる清水むすひあけて　ましはの袖にかへるころ哉　神戸　今西みさを子

池のうちのきよきいづみをてに結ひ　けふの暑さをわすれてし哉　東京　奈良たく子

東東　杉田紫子

むすふ手も氷るはかりにおほえけり夏しらかしのかげのまし水　名古屋　中島紫子

友たにもとはぬあつさに岩しみつしらぬ人さへくみにけるかな　岡山　黒瀬まさの子

松かけの岩間のしみすむすふけふあつさ忘れて月やとるまで　上野　八頭やまふき子

ゆりの露こほれて流るゝいつみ川我をわすれてりやうのてにくむ　東京　日暮郁子

岩くゝる清きなかれのひとしつくむすはぬさきそ夏そわするゝ　東京　森千里子

松かけの岩井の清水むすふことに夏をえしらぬこゝちこそする　東京　松本くすゑ子

むすふてに秋はかよひて雫にもなつはのこらぬこけ清みつかな　熊本　日高かず子

岩清水まつかけなからくみあけてときはになつを忘れはてなむ　陸前　前田河千年子

岩清水音もすゝしきまつかけにむすへはそてそいよゝすゝしき　陸前　前田河みさを子

このあつさいくさ人も岩しみつもとめむすひてすゝむなるらむ　肥後　織永萬壽子

山かけの岩井の清水手にむすひさらになつともおもはさりけり　肥後　織永而右子

涼しさをなにゝたとへん松かげのいは井の清水むすぶたもとは　肥後　織永廣子

むすふてのかけさへそこにうつりけり涼しさあまる山の井の水　東京　林環子

見るたにもすゝしきものを岩しみつ結ひて夏をわするうれしき　東京　林艶子

松かけのいは井のしみつ結ひあひて　夏をよそにもくらすけふ哉

秋をさへむすびあげたるこゝちしてしみづすゞしき松の下かげ
三河　永井さい子

たび衣そでぬらしつゝむすぶてのいづみの色のこゝろすゞしき
神奈川　森田はな子

足曳のやましたみづをすくはんとおもふばかりも涼しかりける
大和　栗山たか子

むすぶてに月もやどりていはし水ひるの暑さをわすれけるかな
大和　栗山俊子

ゆきなやむ山路のうさも忘れけり木かげのしみづ手に結びつゝ
岡山　小山松枝子

涼しさのこゑをたよりて岩清みづむすぶたもとに秋かぜぞふく
東京　山田婦美子

ひろくらきしげみのおくの古いづみむすぶたもとに涼風のふく
東京　武井光子

湧きいづる岩間の清水手にうけてむすぶたもとに秋かぜぞふく
栃木　福田さと子

今日ばかり夏のあつさもわすられぬむすぶ手こぼる谷の清水に
東京　瀬藤ちゑ子

わきいづる岩井の水のおときけばむすばぬ袖もすゞしかりけり
東京　森下里子

亡き妹子が常にこのみし岩清水ことしもわきぬ掬ひて手向けむ
能登　杉下富美男子

給にあきてしばしさまよう谷あひの泉やくまむへにであらひつ
越後　松永しげ子

たえがたき暑さ忘れてくみあぐる水にうつろふかふほねのはな
名古屋　不破きみ子

あつさをもあらひながせり夏としも岩根の清水むすぶたもとに
和泉　中江なほ子

長野　細野旗子

友のためけふはひとり掬む筒井筒ふりわけがみのむ昔こひしき
東京　後藤喜代子

松のねをながるゝしみづ結びつゝさらに夏なきとしかとぞ思ふ
山梨　武子

たらちねのなさけの泉手にむすび暑さわするゝことをえしかな
東京　松川千代子

風わたるやまの奥なるまつかげにむすぶもうれしはしりゐの水
京都　坪内りき子

老杉のたてるみやましめぐり來しいめたきふちに結ぶたまみづ
和泉　稲原龍子

松かげの岩間の清みづむすぶまは夏のすみかぬこゝ地こそすれ
東京　岩谷おさ子

世のなかに夏はなかれて岩しみづ掬てもこぼるゝこゝちこそすれ
東京　駒澤さだ子

神さびしみたらし清水底澄みて　むすべばうつる御やしろのかげ

女鑑兼題

歌

十月	松間紅葉	月前遠情
十一月	初冬時雨	靜女
十二月	氷始結	社頭雪

文

十月	月に對して懷を述ぶる文
十一月	秋日汽車旅行の記
十二月	雪の日に滿洲の寒氣を想ふ

華族女學校教授　井上頼國先生撰

避暑旅行

天

大阪市南區惠美須町二丁目六六三番屋敷　船越小仙子

けふは八月十二日。

いさ咲初めし垣朝顔、徑三寸許りの一輪、紫の露滴るをも見捨て、裾に纏はる愛犬ペチの頭をおとなしく留守せよと撫でやりつゝ、不在中の萬事を從妹田中廉子に托して、この夕、一家——一家といへど、良人と、去年七月生れし坊やとの三人——つれたち三年振にて故郷なる淡路へ暑を避けんと、安治川口より汽船生田川丸に乘る。

夏の夕日は天保山の燈臺を掠めて墨繪の如き築港の棧橋に落ちぬ、見よや此處ぞ我百萬の同胞を征露の首途に見送りし好個の紀念場なると良人の指し給ふを、坊やは何事とも知らで、唯丸き目を動かし肥太りし頬に無心の笑渦を湛ふ。

夜に入りて浪いよ／＼静かに、今霄海上の月殊更に清し。

二年越の大阪住居、それを思へば舊知の山と川とは如何に涼しかるべきと宣ふに、嘸や父上母さまの未だ見ぬ孫の顔見むとて指折り數へて待ち給ふにと答へまつれば、さなり、まして豫ての計畫成りて錦を飾ることを得たらばと、いきいきと目を見張り給ふ。

船は和田岬を廻りて淡路の西海岸を過ぐ、夜深し、良人はうと／＼と眠り給ひ、坊やもすや／＼と寢入りぬ、夜明けなば舊知の山、舊知の川、さては磯邊の松、村はづれの鎮守、ほの見えそめむと思へば、その山影も涼しく、その川の流も清し、夏知らぬ磯邊の松の朝嵐、暑さ忘るゝ鎮守の森の夕風、はや身に泌み

互る心地して、なつかしきまで涼し。

評　筆路輕妙紀行文の上乘

地

東京下谷區御徒町三の三三　岡田柳子

幾月、影淡く山の端にほの見え、青葉をゆする清風、徐に吹き通ひて、ひら〳〵と袖ひるがへす夏の朝、日頃又なく親しめる一の書泆と、重からぬ壯快の感とを荷ひて、旅途に上れる嬉しさよ、世に樂しみてふ樂しみあれど、是に過ぎたるは、あらざらまし。

一すぢの煙りを吐いて進みゆく、車窓より打眺むれば、東の空稍白みそめて、まだ晴れやらぬもやの、絶間〳〵に、遠方なる賤が伏屋の竈の煙り、ほの見えたる、いとをかし、朝風にさゝなみよする山田の稻葉打ちけふれる小川の水、遠き山々雲かあらぬか、見るだにいとゝすが〳〵しきを、まいて限りなき樂しさは、日光に先だちて我胸にかゝやきあへるをや。げに樂しく嬉しきは避暑旅行よ。

堪へかねし昨日の暑も、一炊の夢の如く、身は唯恍惚として、我あるを忘れぬ。

あはれ人の健康を進むるは、旅行に如くなかるべし。浮世をよそに愛を忘れ、煩をさけ鬱を散して、氣を爽に意を愉んならしむ、品位は山の如く高く、心は水の如く淸く、いよゝ、己が勉むる業をはげむは、旅行に於けるたまものなり。さるを徒に身をほしいまゝにし、怠りに習はしむるあらば、高き峰淸き水に對しはづかしともはづかしき、極みならずや。

詩趣溢けるが如し

人

越後國西蒲原郡卷校　松永しげ子

あらがねもとけん許りに照り渡れる夏の日の暑さこそげに苦しけれ、常に住ひたる草の戸も風だに通はず

扇のみ頼めど、なほ堪え難きまゝ避暑のこと母上に乞ひしにあな嬉し許されぬ、夕顔のいと白う、蚊遣火の煙いぶせき宵仕度とゝのへ明くるをまつ短夜の夢はかなくさめおく露の袂をうるほす夏の朝、草刈の歌馬の嘶き、犬鶏の聲何となく心地よし、立ち上るかまどの煙も豐けし、朝日を背に受けて、腕車を直江津まで走らすこゝよりは汽車、海山の話とりどりなるに滿州に在る兵士の身を忍ぶ老母もあはれに、乘り合ひ多くて苦し、送り迎へらるゝ山野に慰さむに、はや田口、又腕車をはしらす、志す方の赤倉も見えて心いそがる、坂路なれば車のめぐり遲く、車夫の汗拭ひ合ひぬるも心苦し。

宿につきよき室にくつろけば心地よく日本海鏡の如く、通ふ白帆の影も數多く、廣き田原一きは緑に、そが上を渡りくる風の扇をよそになしたるこそをかしけれ、茶の味もよう、かなたを流るゝ谷川の岩をかむ音もゆかしうて、温泉も湧き出づ、飽くまで浴して夏衣かつぎ、翠緑したゝる木蔭を徐ろありければ暑さも知らで、衣重ねまほしうて、亦宿に歸れどいぶせくもあらず、欄によりて女鑑を繙く、蚊の煩ひもなく氷水よとかこつ言の葉もなう、唱ひ出つる虫の聲も、峰より出づる月影も一きは澄み渡りて夏の夜とも覺えず面白き夢を見ぬ、故郷の窓いかにむしあつからむ、かくてたのしく八日許り暮しぬ、歸るさ母上の頭を見れば、白髮のちと黑みたるもこゝに避暑したるがためか、あはれ樂しきは、避暑の旅。

評　文情愛すべし

能登　松岡しげ子

道すがらよきこともがなと、足の向ふにつれて運ぶ、避暑の旅路には、えも言れぬ趣味あるものよ茂れる木の間より、吹きくる涼しの風を身に受けて、掬む流れに暑さを忘るけふ此頃の心地、いぶせき小家に扇取る人のなどてかはかりうべき。——扇の風もさるものなれど、自然の風にくらべなば、みやびなしとやいはまし。みちすがら見渡す、夏陰深き遠山の眉もほのかに匂ひ立ち、下を流るゝ大河には、河舟の子が棹さし

て上りつ下りつ網打つ手際などをかし。波靜かなる大海原には、ほがらほがらと朝日さしのぼりて、水面に黄金をたゞよはし、はるか沖の方には眞帆片帆にはする船の日光に映れるは、不思議の鳥の翼を張るかと疑はる、漕ぎ行く船のかじねに飛び立ち騒ぐ水鳥いとをかしう見ゆ、ほど近き岸邊に網引く聲、おちこちの人の船を呼ぶ海士が子、磯打つ波に千鳥の聲など、見るも聞くも心樂しく、わけて磯の松枝を吹き鳴らす風はえも言はれぬ涼しの心地して、其音は自然の調べにていと風情あり、げに避暑の旅こそ、趣味多けれ。

東京　杉田繁子

ことしの暑は、いかなればかくは、堪がたくあるらむとは、ゆききする人の語り草になむありける、げに日脚は既に入り、焔につつまれたらむやうにて、苦さいはんかたなし、折しも同じ心の友三たり四たりきあひて、何地へか此あつさを避なん、箱根こそよけれ温泉の名高き上に、遠近の山のたずまひ、ちひろも漲り落る瀧の白糸、岩にせかれて、水泡飛散る澤のありさまなどは、名たたる畫工の筆も及ばぬ程にて、またかたみに心をやらむ、歌、文の道には、こよなき趣あらむといふにたらちねのみゆるしも、えてければ、なゝの温泉をへめぐらばやとて、心もあはただしく、明る朝盛れるに出立ちぬ、新橋の驛より汽車にのりけるに、せばき箱の内の、まして人氣多ければ、むさるゝやうにて扇をならす手の暇なきに、しなとの神もなきにやなど、友のざれいふもおかしけれと、ゑむに汗の出なんとくるしく、車の走るまま吹入る風が命となん、賴みぬ、ややゆくに、雲の破れより日影現れ、青々と生立し稻葉の末より、遠方の海に漂へる、白帆に照り輝くに、賤の男は草取らむとてか、小さき菅笠に日をさけて、ここかしこの田の面にをり立さまの、いかにくるしからましと覺ゆれど、かくしてこそ、こん秋のたの實の豐も、推はからるれ、神奈川、大船もつかのまに過ぎて、國府津の驛になんつきぬ、車より下りて、ほとりの茶店にしばしいこひて、涌出る湯にとく汗を流さばやと、湯本なる、旅の宿りへと

はいそぎぬ。

岡山　小山松枝子

さゝやかなる家ゐながら、春は花の色鳥の音をめで、秋はおく露の千草か中にすだく虫のあはれさ冬またをかしき雪のながめなど、心をやるべきを夏ばかりうくたへがたきはあらじ。いのちともたのむ風の音つれもたえはてゝ、ちりばかりの雲もわらばこそ庭の草木はしほれ蟬の聲のみかしましく、日ころ友としめづる書さへ見るものゝうく、ただもだへにもだふばかりにてせん方なければ、かねてきゝわたる夏をよそなる海邊にとおもひ立ちて旅衣袖もかろらかに出ぬ。涼しさはさらにもいはず、見渡すかぎり疊をしきたらんごとき海原のかすめる中に白帆の見ゆる、はるかにそびゆる山はさながらすみ繪のやうなり。よせてはかへす白波に心のちりを洗ひ、幼兒にたちましりて美しき貝など拾ふもおもしろし、あるは白砂のわたりそぞろありきし、風清き松かげたゝすみ、たのしくめつらしきながめに世のうさも忘れてけり。げに夏は海こそことに身をもこゝろをもやしなふ所なれ今まで何にくるしみけんとぞおほゆる、勇しくわかぬけしきの、夕さればまたおちこちにいざり火も興ありげに見えて、海をわたりくる風のこゝちよさ、今宵の夢やいかならん。

廣島　小川じう子

昨日と過ぎ今日と暮れ行くまゝに、あら金の土も熔けなん斗の夏は來にけり大陽の光はいとも強く此の下界を照すなり、われは暑さを大磯に避けむと誘れて契りおきし二人三たりと汽車に乘りて旅立ちぬ折しも空には塵程の雲もなく照りはたゝく日影は車の窓よりさし入りぬ、狹き室の内に多くの人の乘り居る事なれば其暑さいはむ方なし、そが内に二人三たりの學生あり夏休日にて歸鄕するならん、我が物面に處狹まき迄、大ひじを張り煙草くゆらすなど、あな意きたなの人どもよと一人ごちつ、疾く走る車も過ぎ心地せらるなり、かくて數多の驛路過ぎ大磯につき、福住ふ宿の樓にぞ登りぬ海面よりは清き、つめたき風颯々と衣の袖を翻へし而かも蒼々たる海原は波い穩にして眞帆片帆雲間に隱見し風景いはん方なし、やがて海に入り雪を欺く眞砂の濱數多の男女と寄せ來る波に打れつゝ遊ぶ事片時ばかり、昨日迄の暑さは何地行きけむ、暑さに苦るしみて、かようなる景色知らざる都人に告げたき心地のせらるなりあな樂しき哉あな涼しの海水浴哉と思ふ折しも、はしなくも滿洲の空あるは怒濤に動かぬ皇軍艦の思ひ出られ其の中にありて二六時中働き盡す火夫もあるかと思へば、轉た此身のかく安らかに遊ぶ事の何となう心苦しく覺えてやうやく胸は塞りそめぬ、おゝ波よ汝は過ぎにし日敵國數多の將士を底のもくずとなししなり、彼等ははろけき海路をし渡り皇軍艦を、打ち

しづめんなどとは、まこと一時の夢なりしぞ、哀れなる哉敵國將士の志や打ち寄せ去る波はあたかも浮世の無情を、かこつが如し

かくて二三日を樂しく遊びぬ、されど興びの、かたはら自活の道に汲々たる、我身の長く留まるを得ず、つきせぬ名殘を後に友と袖を分ちて家路につきぬ

神奈川　安部ます子

あはれ、樂き今日の旅路よ、濱千鳥、飛びかふ樣の面白き、品川沖も見えそめぬ、たつた四杯で、夜も睡られぬ砲台よ、さても變りし今昔の樣哉、八景園も過ぎ行けば、新田の君の、武藏野の、露と消えさせ給ひし、矢口の渡も、かしこならんと、思ひやられて、梨の名所を、打過ぎつ、鶴見、神奈川、程ヶ谷も、戸塚の宿も行き過ぎて、はや、藤澤へときにけり、時宗の、御寺に詣でゝ、松風の音に、送らハゝ、片瀨の浦の、濱風に、袂飜かせて、一の宮に、着きし頃は、日も高りて、暑さいといみじ、蟬の鳴音も、いとゞしく、山二つに、さしかゝりて、見れば、谷合深く、相摸灘行かふ舟の、眞帆片帆あるは、み崎に、こぎ隱るもいと／＼しきながめなりけり、坂を降りに、降りて、一枚岩に浪の吹雪を浴びながら、辛くも、岩やをくゞりきて、小高き茶やに、休らひぬ、芙蓉の峰を、中とし、箱根の山々、すそなびき衣かへしたる、いひしらずけ高い、早雲の君の、攻めたりと、いひけん、城の後、西行法師の鴫立澤と、よみたりしも、かしこならんと、見渡されぬ、沖を遙かに、見やれば、大嶋のあたり、烟靡かせつゝ、近く渚の、かたへには、烏帽子岩の、立ちたるなど、げに、飽かぬながめなれど、限りあれば、とて急ぎぬ、行程もなく、七里ヶ濱にと、出ぬれば、寄來る浪も面白く、漁魚とる舟も、藻屑刈る海人も、汗おしのごひつゝ騒ぐめり、稟、鎌倉山も早、つきぬ、見るみ毎に、昔忍はるゝ里の樣にて、袖が浦、稻村崎、踏み分けて、極樂寺につきし頃は、早や晩鐘の音、幽に響き渡りて、暮色轉瞬日の暑さを忘られぬ、やがて、巳が別墅に入りて、けふ一日の、日記をかくはものしつ。

能登　杉下富邑男子

あらがねの土も熔けなん斗りの暑さにたへかねて、昨日露子の君と、日影にうとき山里に浮世の夏を避けなむと誘らひぬ。今朝は空いと晴れて、塵ばかりの雲もなければ、旅出するにはげによかりけりと。母が呼び起すに驚きて起きつれば、げにやよく晴れ、東の山の端よりはろ／＼とさし登る日影、いとめでたし。午前八時露子の君と共に、皆々に送られて家を立ち出でぬ。朝風涼しく吹きて、いと心地よし。姫百合、撫子、其他あらゆる夏の草花の茂りにまじりて、畝の中を行く心地す。ほどなく三保山に登る見晴しいとよろし。我がふるさとは目の下に近く、石な投げなば屆かんやうに覺ゆ、海は油を流したるやう澄み渡り、男波女波のいたづらに岸をうつのみ、沖には白帆二ツ三ツ見ゆる。たゞ恐くの景を、我が掌上に載せたらん心地す。

鴨浦の鏡に似たる海の面に
　漕ぎゆく舟の影のどかなり

もはや午にも近ければ、日は頭の上に照り暑く暑く、たへがたきを忍び行くほどに、青葉ほの暗き陰に、岩路をつたふ泉あり。嬉しく嬉しく。露子の君の「此れこそ地獄に佛なり」と言はれしは、うべうべし。いと小さけれど底まで澄みとほりて、見るさへいと涼し。母の注意の丹を取り出し、汲み飲みしがまことに快よく、冷たきことは結ぶ手もきるゝばかりける。こゝにて晝餉をなし、疲れを休めてまたあゆみぬ。日は西に沈みし頃、我等は和倉温泉あきしつ館に着しぬ。

和泉　福原菫子

嬉しく／＼といふは年毎のならひなれども。今年はわきて賜りはた

いく暑のいと堪へがたうて過し兼ねつる折しも。山里の伯父君の許より。ことしの暑さをいかに凌らしつる。こゝは山かげにて夏をよそなる作居にしあなれば。ぜひに避暑がてら来よと言ひおこせ給へりしかば。とび立許り嬉しくて。急ぎ旅裝して明くる朝とく起き出でぬるに。空は未だあけやらでところ〲に星のきらめき有明の月はかすかに殘りつ。向ふ青き山白き川などほんのりと目新らしう見え初めたるなど中々にたのし。早苗吹きくる涼しき朝風。旅衣の袖を拂ふも心地よし。やがて西村驛に至りにければ夫れより汽車に乘りて。向ふところは東へ東へとやがて深井の里にては雲とのみ眺めし双子山のふもとにつきぬ。此地は山高うして水深ければ自然氣候も異なるやう覺ゆものから道すから汗さへい[illegible]ざるすが〲しさよ。やがて程近き伯父君の家につきしは朝の十時過ぎなりき。あはれ夏の旅行ばかりたのしきはなし。

能登　池野いさみ子

今日清見寺の鐘かすかに訪づるゝ頃 名たる興津の宿に到着いたし候、海にのぞめる二階の障子がらりと打あけて、頬杖つきて、潮風そよぐ夕の海を餘念もなく眺め候、春ならねども、水天接するあたりは朧ろに〲に霞みて、伊豆の岬は床かしき蓬萊の山描き候、沖行く眞帆片帆・紫匂ふ浪の上に、はツきりと輪廓染め殘したるは、海の女神が殊更らに技巧見せんとの戯かと存じられ候、三保の松原かすみのはてに連なり、清見潟のながめ縹渺として、眞にや夢見る如き心地せられ候、(第一信)

安らけき夢を結びたるせいか、いつになき清清しき心地せられ、朝まだき日和下駄ざく〲と、白砂の上をそゞろあるきいたし候可愛き櫻貝など拾ひつゝ、潮の香みなぎる小松の影、白砂の上、おむろに横臥して、梢かくれの富士の山ながめ候、あゝ君よ夏は海邊に限り候、松の青き、砂の白き、眞に人をして神ゆかしむるものにて候はずや、島山を見て歌を詠まんか、海原をながめておもひをやらんか自ら胸襟のさはやかなるをおぼへ候、(第二信)

久しく御無音に打ち過ぎ平らに御容赦くだされ度く候、昨夜松風の調あまりに面白ければ、宿立ちいでゝ、一里の曲浦をさまよひ候。漁火點々浪音高し夏の月、(即興) さらば〲是を最後にて、近く都にかへる可く候(第三信)

東京　伊藤福子

鎌倉の西御門といふ處に家ゐもたる、人のもとよりことしはまれなるあつさにて、都人も暑中休にきたるよし、つげきたりぬ、さるおりには靜にも、あらじなこと人にききたちてとく、きませと、しば〲便おこせたりしも、いとうれしくてとも人もつれずして、出立あらましごとに

こゆるぎの磯立ならす濱風は
おもいやるさへすゞしかりけり

朝とく新橋より汽車にてすゞしき、ほどに心ざす方にいたりぬげきゝしにも、まさりていとよき所也、庭には大きなる松の、か、に清水の、おともきこえてせんさゐにはあき、よりまだきに千種もさきいでゝ、山里めきたる木立生茂りてあづま、やの軒にはほの出ぬ海もまれきていひつゞけむもわづらはしくこゝろゆくに

浦風に波のうちよるおときけば
ぬれぬ袖さへすゞしかりけり

筆にも紙にもかきとりがたくてなむ

東京　伊藤竹子

ことしは例よりも暑さたへがたき心地せらるいづくにゆきてか夏を凌がましと思ひわづらふ折しも友どちにいつられてきたりいでやとてそゝのかす儘に箱根のいて湯にと出立はふみ月の末つかたにて蟬の聲さへくるしげに聞ゆる午後二時に家を立て新橋の停車場にといそぎにいそぎて汽車に遅れじと思ひしよほいのごとく今

しも呼笛のきこゆるほどにはしりつきたるはいとあわただし上等室に入たらむには人も少くて涼しからむと思ひしにしりがくる處もなくて中に立てゆられゆく思ひの外のことなりかしほどなく心さす方にいたればこれかれとりはやして則出湯にとあなひしつゝゆかたなどとり出てあつかふに

いづる湯のわきてすゞしき
あしがらのとひのかふちに夏はくらさむ

東京　伊藤敏子

暑中休にておの〳〵官人たちいとま給はりて避暑旅行に出立よし、いでやと數ならぬ身も思ひおこして、茅ヶ崎なるある所に夏わすれせんと、女子のはらからみたりうち揃ひて、手たつさはりつゝゆくは思ふこと、なきやうなれどもさいつころ朝鮮へ、おほやけの大命承りてもちて渡、給ひし父のことふとおもひやりて、まづたのしき道にもひとりうち、しほれて姉なる人のいかにやなど、尋ぬるにこゝろづきていさゝよく汽車にものりて心さす方にいたれば、都の人々はやしろしらぬあまた宿、にありてあすは潮あみにいざたまへ、などねもころなるにまた家に歸し、まいらせしはは君のこゝにまされば、物たらぬ心地して

はらからとあそぶたのしき潮あみに
ちゝとはゝとのうへをしぞ思ふ

東京　田中千賀子

年ごとに、立歸る夏の暑さも、うしとせで、ひたすら、またるゝは、避暑旅行になんゞけに、親しき友どち、打ちつれだち、海邊に、松風、波の音も一年ぶり。ましろなる、海水服に、裾深く、一日を波間に、蝴蝶と、むれ遊ぶ、避暑の友、日ごと數ましては見しらぬ君とも、やがては、たがひに、ゆきかひしげく、なりて長き日を淋しとも思はず、今日は舟遊びに、終日を暮し、あすは貝拾ひに、家路を忘れ、夜はまた螢狩に興を催し、あるは一人緣際に書など繙きては、一時、二時を、見ぬ世の君と交るなど、仲々にたのしみつきせず、かくてあかぬながめに、五七の日數も夢の間に、過ぎては、かへる難作を。今日しも、かの君より忘れ給はで云ひこされし避暑地またもや往時の樂しきを、繰返さんとてか、あなたのしきは、この旅行

三河　島山もと子

此頃の、むしあつき際の都を、外に暫し海邊に、過さんと思ひ、風そよふける、朝まだき、汽笛とゝもに、山又川とすぎ、漸くめざしし地につきしに、早白衣きて、海水浴する人、數多ありけりわれは、はや、胸をとり、かねての家にとたどりつ。こは、われ今年は自炊して、避暑の樂しみを、まさんと思へば、此地のあき家を借りしなり。あゝ自炊の避暑ばかりたのしきはあらじな、思ひながら、彼の家にたどりつ、汽車のつかれを休め、そと見渡す海原は、白浪たちさわぎて、千鳥かと疑ひ、沖つへは、海人のつり舟なるかまほかたほ、など目新らしき風景に、しばし見とれつ。あゝ今よりはかゝる地に避暑の身いかに樂しかるべきぞ。

短文

小學校の祝捷會

神奈川　森田はなこ

千早振神のしわざとわふかる、先つ日海戰の大捷に、人皆の喜び溢れて、こゝかしこ盛りなる祝捷の催ありつるかわれ等も亦其會を催しぬ。海に沿へる土地なりければ、漁舟をよそほひ、其中に棹たて、左右に綱をはり、各國旗をつらね、舟緣に

は生徒の、になひわゆみし、海軍旗をすきまなくたてつらねて、滿艦飾となし、海上にうかせつ。末は雲井とひとつなる、青海原の一點の障なく、仰きても伏しても何れか久方の空なるかはたわたつ海なるかまよふ色なる中を、紅の旗の山陸ちかき所を右に左に、或は遠く或は近く、旗風なびかせ漕ぎ巡る。陸には男女合せて二千有餘の生徒堵の如くゐならひ、諸手をうちて勇みに勇む。舟には絶ぬ樂隊の音陸には歌ふ君が御代、萬歲の聲大海原に響き渡りて、舟中よりは折々放つ花火、空中に翻る樣こそ、いともゝ壯快に覺えしか。

舟行列を見て

備後　片山松子

たぐひなき此度海軍の大捷報を聞きし國民の歡びはいかで都も鄙も異るべき。されば我里にも過ぐる三日の夜、盛なる舟行列をなむ催されける。浪靜かなる鶴溂には、數十艘の小舟紅提灯を山形に吊し、花火を打あげ、色花火もて空中を彩れる樣などのいと美しくて、やがて勇ましき樂隊の響と共に西に向ひて進み行く、其樣の雄々しさ美しさいはんかたなし。かちどきあげて歸りくる御軍ふねやいかならんと推しはかる。港に碇泊せる汽船さえ劣らじと飾り立王の浦波は、恰も紅の海の如く映ふ火影の美しさ、あはれ陸と海とによひたたへたる萬歲の聲は、外つ國までも、響きつらんかちどき祝ふ國民よ、夢な忘れそ今日あるはすめら大君の御稜威と數多のますらを等が犧牲なりし為なるを。

車

長野みよ子

昔も今も、車こそいと品多かめれ。されば、申すもかしこかれと、頂に、竹の實をはむてふ鳥の居るなる、鳳輦を始とし、物見車のあためきたる、檳榔毛の面白き、飾車の美しきは更なり、倭文の苧環くり出す、糸車は、古びたる貴び、牛車は遲きをよしとす。井戸車の廻り能きは、婢女どもの都合宜敷く、花にはいとふ風車の輕々しきは、春の長閑けさも見えていとうれし。或るは泥車と云へ、花車と云へ文車と云へ、輝車と云へ、皆廻るを貴び、いづれも懷しき者なり。されど、胸車に、破れ車は、有らずも哉。返へり車は一割安きとか、

四車は相撲の名にも有り、時の間に千里を行きかふ蒸氣車は、便利なれど、いと乗り安すく、廻り安すきは口車に石車にこそ、豈いましめざるべけんや。

夏の樂み

下野　金子とし子

花笑ひ鶯歌ひし彌生の空も早や夢と過ぎてみどりしたたる若竹さらさらと涼風に吹かれてこゝに樂き夏は至りぬ庭の袖垣には朝〳〵新らしう朝顔の花咲き出る彼方の園には牡丹芍藥紫陽花など取とりに咲き出でて吹く朝風になびく姿の美しさ小高き丘の上にのぼりて打見やれば晴れ渡りたる日曜の旦など背の小笠の乙女子ひな歌うたうて早苗植うるも面白きに萬頃の青田輕く波うたするなど心地よき眺なりわわ此青田は花鳥の艶曲なるに較ぶればいかばかり興味多からん彼方を眺むれば黑烟を吐きて青葉の陰を走る一條の長蛇あり牛に乘れる兒童馬を曳ける老夫などこれ一幅の活畫にあらずや林中にハンモックつりて可愛き妹と打のり唱歌を歌へば松風に青葉涼しく吹きはらへ心地よき事云はん方なし夜に入れば雲なく晴れし空に圓なる明月一輪下界を照らして涼しさ限りなし雨上りて後など清風涼しき夕ぐれ川邊に立ちて螢を撲ち或は廣き田に數多の蛙どもの閙々と鳴くを聽き池中の白蓮の葉にはしづけき夕露かゝり忽ち亂れて玉とくだくるなど其風景一として筆紙につくすべくもあらず實に樂きは夏の眺めなりけり。

親友の死を悲しむ

富山　三澤　藤子

あはれ昨日の言の葉は。今日の烟とたち上りぬ。親しき吾友も今は早や。音づれもせぬ人ぞかし。思ひ出づれば手を交はし。野邊の花見し樂しさも山に遊びし愉快さも過ぎし昔の夢となり。昔の夢を今に見る。術も嵐に花ぞ散る。花咲かざらば散らましや。友なかりせば別れめや。あふうれしさのやがてまた。別るゝ種となりぬなり。空蟬の世ぞあはれなる。げに空蟬の世ぞ哀なる。

我身の不幸を嘆きて

富山　三澤　ふじ子

過ぎにし、三歳の水無月の上旬、又なき友と親みし、慕はしの君は、ふとした病より、遂にあはれ果敢なくも、歸らぬ旅に趣かれ

ぬ、あゝ思ひ出すも涙の種、友達多しといふとも、君程心のあひしよき友はあらざりしよ、あはれ悲しき事よと嘆きし間もあらで又もや同年霜月の七日、いとも優しき兄上は、同じくなき人の數に入りし悲しさよ、以來涙のかはく暇もなかりしが、あゝ吾は友なり兄なり、さらばこの亡人を生み給ひし御兩親の心中は如何ぞやと吾と我身で未練を戒め／＼て今こゝに至る、かゝるふびんのものゝ神もあはれと見給すや、今又姉上の大病こんど此度姉上の藥石其効なき如き事あらば、嗚呼如何せん／＼と一人空想を繰返してありしが、會々聞ゆる青遠の鐘の音に、驚かされて夢路に入りぬ。

噫亡友　　茨城　石涙子

野分のはしたなく芭蕉の葉の吹き分けらるゝ昨日今日今は世になき友の路のみつら／＼忍ぶれば悲しき聲が此の世をば假の宿りと云はにしもさる事乍ら今も尚在りし世の面影偲ばれては萬感交々胸裡に往來して悲哀の涙止めがたくなむ　噫あはれ悲き小野かれ子の君よ君は如何に散る花の路難ひ給ひしか哀れ無情の夜嵐はつぼみの君をうばひ去りしか嗚呼頼みがたきは人の世なるかな幸うすきは親しき友に別れし身なるかな

平和の夕　　大和　柳川眞紅

今日の我が務を、終つて入浴、樂しき夕食を、すましたる私は何時の間にか川風涼しき、吉野橋の上に立てり、今や西の山に入らんとする、夕日の、水の面に移りて美なるに、鮎釣る人の様々なる、實に得も云はれず、只た／＼見恍れてありしを、側なる甥質に促されて、いと惜しき景色を後にはなしぬ、水田に立ちて草取れる早乙女牛追ふて歸り路急ぐ童の餘韻あゝ平和、何たる平和ぞ彼等の心や、潔く高く、一點の燐榮でふ事なく秘密なく、又嫉妬もなし、あゝゝゝゝ彼等の心や如何ばかりか貴しき樂みに滿てる、……………はや、吾等は我が花匂ふ庭に入れり腰掛くる間もなきに、質の「姉さんおお一しよに歌つて頂戴よ」とて、ヴワイオリンを持ち來る、私は思はず、ほゝ笑まれたり、質の云ふがまゝに「お母さんにもらつて種まいた」と云ふ朝顔の歌金魚、夏の夕、等歌ふを聞きつけて、近所の愛さん、敏さんの二人來る、皆な思ふどち征露軍歌を、いや日本の兵士、なとせまる途に遊嬉となる老いたる母も、常に内氣なる姉上も共々歌ひ給ひて、打ち、にぎはふ時に螢の一匹、二匹、我等の群に入りぬ、年少なる質の聲にて「ホータルキタキータ」「姉さん甘い水のましませうか」空に輝けり清き星の二つ三つ四つ。

秋季祭に詣で、然紙にかへりて作文　　豐後　佐藤家子

今日は我里の鎭座の神の祭にて、例より夕餉もはやくすみぬれば今夕は何くれとこのめる者ども、ひもとかんと涼風吹かよふ丸窓のもとに燈火かき立て、昨日博文館より到着せし紅葉の錦の上巻なる齋藤の節をよみて二八の花のつぼみ無官の大夫あつもり郷のすゑの嵐にちりゆき給ひしことどもあはれかなしく夜のふくろもしらでひもときつゝふと空をうち仰げば今しももち月の大空高うさしいでたるに清龍川の上津瀬より水鷄さへ鳴きいでぬればいよ／＼心もすみわたりてこよひは此書よみをへんと思ふなりしも母君の明日の日さめやあしかりなんはやくいねよとのたまふものからよみさしたる書籍とりまとめてふしどにいりぬ。

人のいましめ　　岐阜縣　三原すゞ子

正直者一生財寶
堪忍者一生相續
慈悲者一生祈禱

苦は樂の種樂は苦の本なり主人と親は無理なといふとも無理となもふな下人は禮儀を知らぬ者なれば無禮をいふとも咎むべからず恩は忘るべからず子を思ふ程親を思ふべし掟と火と分別なきものに恐るべし欲と色と酒とは敵とおもへ堪忍は十分にせよ朝寢はすべからず他家へ行て長坐すべからず小なる事に分別せよ大なる事は

驚くべからず九分はたらず十分はこぼるゝと知るべしむかし賢人の言葉に遊びも度々すれば楽しからず珍膳も日々なればうまからず人の悪事はいふべからず人のよき事は聞て喜ぶべし世の善悪は人も知るしることなればいわずともよし我身にあてゝ人のかなしみを思ひやれ上にへつらひ下を賤しみ正直顔して内心に邪心を含み人をそしり欲心深く心散乱して人には敬して遠く可し是等の事を慎に守れば神佛の冥慮に叶ひ先祖の御心にも叶ふべし

盛合せの目標

出雲　加藤鈴子

裁縫、料理、育兒、家政、禮儀、衛生、看護は婦人の天職なり而して是等は天下諸姉の夙に研究する故を以て今更喋々する必要を見ず唯今日諸地方又人々に依て料理の盛合せ即ち献立嫌惡なき能はず、

料理の法割烹の外あることとなし而して四季の取合せ常座の取合せ小笠原丸善同じからず献立は五味を異にするの故にして吸物煮占揚物ひたし酢合田楽漬物等を異にするなり而して吸物は汁を清潔にして中に汁實を入るべく他の盛合せは物に依ては平たく丼へ或は凸く盛ると雖可成鉢の縁に掛らざる様にすべし大平小皿の盛合せも縁を四方と為し一方の縁の外へ掛くべからず。平盛凸盛は異れども鉢の縁は顕はるゝ様にすべし

天下の禮儀は風俗を正ふし人心を一にするに在り地方或は人に依て好悪を異にすれども期する所一ならざれば民志治まらず些事なりと雖大に注意すべきなり

無情感

岐阜　三原鈴子

年若き頃木の葉の散るを見て我身の有様思ひつゞくれば是に同じ十歳頃には春の若葉のごとく又はたちに及べるときは夏の梢の如くみそじ四そじは秋の色づくにことならずいそじは冬の枯果てゝ其さまかはるはしばしの間かくあだなる身をしらず心なく世を過さんは果敢なき浮世なるかな去れば我夫身は倫分にして冬の枯果てゝ其さまかはると共に歸らん旅路に散り果てし惜めど其甲斐もなく殘し身にははらからよりの形身は男子も女子もなく心は千々に打みだれてうき人の身の上など想出て夜更す事も一度ならずあゝあはれにもの淋しき心の恥ずかしさいづこも同じ満洲の野に散り給ひし軍人様よ殘りし妻君様の御心根如何斗ぞや心痛におはすれど千歳の末迄際はり候はん筆にも言葉にも盡しがたく花より勝りし勇士なるかな惜めど浮世のあわれさ思ひめぐらしてせめては女鑑誌上にと送り参すべき是にて郷似には託したり

それがしの君へ

能登　某女

一度ならず二度迄も、御水茎のあと美しく拜しました、然し御返しなんか上げる必要はないのです、否勇氣がないのです、無論私は昔者ですから○○交際とかなんとか言ふ明治的の六ヶ敷事は好ましくないのです、それから御文を下さるのは、失禮ですが以後堅く御斷り申ます是でおさらばです。

田植の朝

播磨　横田春枝子

がゝとなく蛙の聲の喧しきに、ふと目さむれば、いつになくそともの賑しく、遠ち方に夢のように唄の聲さへ聞へて、時計は今正に四時なり。するりと闇をすべり出で、門外に立てば、すみきつたようなる空には、星のまたゝききら〳〵と、愛らしく、一面にもや深くとざして、そよ〳〵と吹風も、夜明なればにや、うすさむげなり。昨日迄も黄金と見し、田の面も、今日は水みなぎて、白きが中に、黒き人のこのもかのもに、丸き笠五ッ六ッ、ぼんやりと見ゆる田は、早半ば青くなりて、赤のたすきに白き手ぬぐひ、足もかろげに裾かきあげて、走る乙女の勇ましく、鍬を肩に、梓弓の腰はりて、行く老爺も、今日のみは若返りて、心も矢竹にはやるらん、あはれ、今日の暮れにもならば、見渡す限りの前田に御代豊年と、唄ふ蛙の聲すなり。

公報來る十分間

能登　高森以知子

チリン〳〵アラ何だらう號外か不知！オゝ能く當りました。例の號外オヤ〳〵恁麼大きなのに書いてあるわ。敵艦隊全滅！空前の

た勝利！あらまア……美ちやん〳〵早う御出よ……露西亞の軍艦を澤山々々、沈めてヤツたつてよ夫から敵の司令長官を捕虜にしたつてア丶そう一番頭の方よ。日本なら恰ど東郷大將みたいな位の人ですよ。イ丶エ此方のは一隻も損しないの……エ丶そうですとも屹度縣下鳴ツて、石川縣中同じい日に御祝ひするのでせう……子エ美ちやん私等が戀う嬉しく遊ぶのも、皆軍人の方が命を捨てゝ國の爲に戰はれるからですよ、だからそう輕る輕るしう勝つたと思ふてはいけませんよ……じや御父…樣の處へ行つて、御喜び申上げませう。

〆切當日のつまらぬ苦心　東京　石川薰子

〆切が今日限りと云ふ日、あせりにあせつて、漸く出來た文章をザツト手帳に書きとめて、是よりいよ〳〵寫し直して見れば、長い長い投稿字數規則以外尙二十余行、あれを消しこれを加へ、或は片假名を漢字に直すやら、大騷をして見ても未だ餘字が有る。アア此處も消して見樣か？？此處だけはどうしてもをしい樣だなどゝ立派な朱肉の彩色をした。紙が二三枚取り去られた。後やツと出來上つた時のうれしさ、長たらしい前者と比較して見れば、駄文字が多い。それより遙に優る數等。全く規則と云ふ者は、大事なものだと考えた事が度々有つた。

亡友を忍びて　群馬　林　廣子

我が無二の親友、……平山けい子の君、あゝ思ひ出すも涙の種かし。今年と去年との差こそあれ、ゆかり色濃き燕子花色を爭ふ頃ほひ、君は病をえさせられ療養との御事にて此の地をあとに四ノ湯泉に向はせられき。

姿も及ばすながら、旅の徒然を聊も慰め參らせんとて、新雜誌さては拙き筆染めて、送れるに、君は殊の外女鑑を好み玉ひ、久々にて病のうさも忘れしよ、されば月の中旬頃には、歸橋さるべしと、嬉しき文は己が手に落ちたり。さはれ喜ぶひまも束の間に失せ果て、御身も常ならず、臥へ給ひて、ドツと重れる病の床、母姉君等の心づくしも、今はや水泡ときえて、獨り淋しくくれ行く秋を、名殘にてよみ路に急がせられぬ。哀れなり〳〵母姉君がみ心の中、おしはかられて、又一入に胸つぶれぬ。

あゝ月にむらくも、花に嵐、滿つればかくる世の習ひ、さるをあきらめかねて、徒に思ひつゝくるも、いと〳〵愚の極みやなのみ

たそかれ　さつき子

春は今やくれなんとす。夕暮あはれいづちのかれならん、餘音ながくひゞきて、彼方の森より群鳥の聲、寂を破りて、物すごくきこゆ。折しも畔の細道さびしげに行く、一人の少女あり、今をさかりの還櫻、二枝三枝手にもちて、今や其すがたの次第にうすく遠く見えずならんとする、時しも背風一陣袖をかすめて、心なくもさそひぬ。櫻花一輪二輪又三輪嗚呼少女の心やいかならむ

短歌

石狩八景　石狩　加藤壽惠子

八幡宮秋月

千早振る八幡の宮の秋の月くもらぬ御代の姿なるらん

船場町歸帆

夕まくれ眞帆はらませて濟來るは船場に歸る小舟なるらん

中洲落雁

秋ふけて中洲の芦も枯にしをあはれ一トつら落るかりがね

若生町晴嵐

朝またき嵐もはれて若生の芦の岸邊に舟そよりくる

西濱夕照

打よするみぎはの波も靜かにて夕日まばゆき西濱の宿

高岡葬雪

花ならばうれしからまし野に山に名も高岡の雪のゆふ暮

能登寺晩鐘

御佛の法りの光りを身にうけておのが家路に入相のかね

辨天町夜雨

糸竹の音もしみ〴〵と降る雨に名殘を告ぐるたかけの聲

五月雨いたく降りて郵便のとまりければ　松原みれ子

さみだれに谷の川みづあふれけむふみのゆきゝもたえしやま里

水上螢　肥後　松村綱子

ゆく水のはやき川瀬にたまとちり露とみだれてとぶほたるかな

樹陰螢　大和　栗山たか子

ゆふされは隅田つゝみの柳かけつゆをよすがにとふほたるかな

水鶏　豊後　佐藤家子

たにかはにたゝく水鶏のすがたさへさやかにてらす夏のよの月

熊本縣杖立温泉紀行のうち　肥後　秋吉輝尾子

ひさかたの雲にひびきてきこゆなりみなぎりおつる土田の瀧は

温泉場につきて　肥後　秋吉輝尾子

やまも水もなつのけしきに色そへておもはず杖をたつるかは岸

阿蘇郡の鏡の池を見て　肥後　秋吉輝尾子

いけ水のそこにもみゆる人々のすがたをうつすかゞみなるらん

百合　肥後　松村綱子

露ふくむにはのひめ百合白妙のたもとうれしくかほるあさかぜ

納涼　肥前　藤松りか子

山のゐのしみづをたづねきてみればわれよりさきに月ぞ宿れる

亡き母の衣を我に縫直せんとする時　東京　牧野ふさ子

有りかたや亡きはゝきみの晴ころも袖の縫込今ぞ身にしむ

朝顔夢　神奈川　夏野しげる子

きぬきぬの別れの袖のつゆをもみとこなつかしき花のいろかな

折百合　同

心なしとなれなうらみそ百合のはなたをるもめづるあまりけり

泉　神戸　今西てさを子

深山路をたどりゆくての岩間よりすゞしくもるゝたにのま清水

亡き友　同

世の人ののがれぬ道とおもひつゝ花のつぼみの惜しくあるかな

螢　東京　日暮郁子

川岸のあしまがくれにとぶほたる月まつよひのながめなりけり

蓮の花　下野　金子とし子

尼寺の小まどひらけば小雨降る背戸のみいけにはすのはな咲く

柳　同

池の面に垂れしやなぎのかげゆれて眞鯉緋鯉もうかび出でけり

早苗　肥前　藤松りか子

賤の女が初きのそではぬれつゝもさなへ取なりさみだれのころ

義勇艦隊の義捐金を愛國婦人會に納め奉りて　肥後　佐々有鄰子

手のすえのみつぎをさめて國のため浮たからふれそなへ奉らん

阿蘇神社の上宮に詣でゝ壽安鎮國山の神饌池に參る　肥後　秋吉輝尾子

ふきいだす阿蘇の三山のかみの火はそぞろ心もこわくなりぬる

煙　同

立のぼる煙にあたりとざされてふきいだす池のそこもわかたず

紫陽花　越路　巻しげ子

かはらじと頼みしものを紫陽花の色かうつろうまどのさびしさ

同　同

紫陽花の窓には又もあめこぼれ思ひもはれぬこころにもなるかな

友の旅立　茨城　佐藤八重子

別れてもまためぐりあふ月かけのしばし曇りをなにかなけかん

魚　　能登　池野いさみ子
おしなべて世もかくこそと願ふかな水にあそべる魚かげを見て

日暮しの聲きゝて　　岡山　黒瀬まさの子
夕くれはひるのあつさもわすれけり耳もとすゞし日暮しのこゑ

夢逢戀　　さつき子
ぬは玉のゆめに相見しその日よりむれの思ひはいやまさりけり

朝顔の影障子にうつる　　東京　瀬藤ちよ子
のぼる日のうつる障子にあさがほのかげさへ見ゆるおのが文窓

晴樹菊　　名古屋　中島素子
草ふきのきのしつくの音たえてこゝろはれゆくさみたれの空

折にふれて　　三河　榊原きく子
百千年ふともいかでかわするへきめくみの露にうるほひし身の

嫁ぎし友に　　能登　杉下富美男子
人妻となりにしきみをいまはたゞさちあれかしとわれ祈るなり

遙見行客　　津　神田みよし子
小笠もち杖さへつきてはるかなるさか路をのぼる旅ひとやたれ

蛙の初聲を聞きて　　長野　田島みよ子
鳴かさりしかへるの聲もきこゆなり苗代小田にみづや入りけん

あやめくさといふことを歌の句の頭に置きてよめる　　名古屋　中島素子
あしひきのやまたの早苗めにたちてくきのみのひし梅雨のころ

須磨の海岸を歩きて　　三河　榊原きみ子
あさぼらけすまの濱邊をさまよへば水面にうつるありあけの月

戰死せる人の親のもとに　　空知　武こまち子
敷島のやまとさくらは散りぬれとかほりは千代に匂ひけるかな

茨城　白石けい子
我が胸にかざしの男をゆるがせて泣きにし君よさらば聖にあれ

同
戀ごもるゆかしきさとよ吾行かばせめて幾世のわがゆめに入れ

茨城　白石けい子
弱き子よ君よ運命をときますなはなにもつゆのやどる吾が世ぞ

帝國館によめる　　山梨　武子
たまさかに歸りきまさんおや〳〵に何を手向てなにをかたらん

敵艦全滅　　下野　井上なほ子
わたつみのみなしづみたる海の上をてらす朝日の影のさやけさ

戀しき君へ　　能登　杉下富美男子
戀し君の嫁ぐときゝし夕ぐれほしのひかりのなつかしきかな

社頭に時鳥を聞きて　　同
おはしまに我れたちをれば時鳥情け知りてやもらすひとこゑ

月の夜川邊にて　　下野　井上なほ子
せと川にのぼるやまめの影みえでなみにくだくる月そすゞしき

海岸を散歩して　　三河　榊原きく子
浦風にほがけかゝけて歸りくる海にやゑものもおほくあるらむ

早苗　　播磨　横田春枝子
なやみなきさつきの雨に早苗とる田子の裳裾はかわくまぞなき

橋邊柳　　埼玉　横田秋子
やまかはの黒木の小橋あをやぎの糸をつるてふわたるはるかぜ

菜花　　同
山畑のすゝなすゞしろはなさいて黄金しろかねにほふはるかな

今様

曉水鶏　　岐阜　中島もと子
雨ふる深のよしわしも　また見えわかぬ明かたに
水鶏の床やぬれにけむ　たゝく音さへしめりけり

山家春　　松原みね子
人目もかれし山里も　春きにけりと窓の

歌ひいつれは蝶も雛い
菫櫻もわらふなり

海軍大捷

岐阜 松原みね子

對馬の海によする仇
砲のひゞきにはかなくも
こゝや彼處に逃け迷ひ
白旗たてしふねあはれ

雨後新樹

大和 栗山たか子

夕立はれしなつ山の
木の下露に袖ぬらし
しはし暑さを凌かんと、
いこへは風のかよふなり

古城

水戸 高村きの子

城は三十五萬石
青葉に埋る天主閣
昔をとはん人もなく
ひとり血になく杜鵑

春の今様

豐後 佐藤家子

見渡す限りわをわをと
わか草もゆる春の野に
厥つみつゝ今日も亦
野守がいほにやどからん

時鳥のころ

空知 武こまち子

花たちはなに匂ふなり
のきのあやめのかほる頃
山ほとゝぎすなのり來て
枕べちかくときをつぐ

散し花の後を見て

空知 武こまち子

つれなき嵐に誘はれて
雪にまがへて散る花の
あとのながめはさまもなく
あはれはかなの散しあと

金鵄勳章

片山松子

家をも身をも打忘れ
國につくしてますらをが
功は胸にかゝやける
こがれのとびぞしるしなる

螢

播磨 横田春枝子

柳の糸を吹く風に
露とみだれてとぶ螢
草葉のかげにやどりては
いかなる思ひに身をもやす

君に捧げん

東京 田中千賀子

胡蝶の夢のさめぬまに
朝とく園におり立ちて
手折りし花の露共まゝを
君にさゝげんかゝそれよ

夕べ

愛媛 薫子

一日のわざをなしをへて、
松風かよふ端近く、
手馴の小琴かなづれば、
心もすみて月涼し

道子

日高かず子

父は何處とたづぬれば
遠き處とさす指に
歸ります日をかゞなへて
土産まつ兒ぞ哀なる

待時鳥

さつき子

更ともしらで夏山の
青葉しげれる木のしたに
名のるひとこゑきかんとて
まち渡るかなほとゝぎす

かきつばた

群馬 竹のふし子

ゆかりも深き紫の
雲やなりぬる池の面に
にほひこぼるゝ白玉は
星かとばかりかゞやきぬ

新體詩

折にふれて

むらさき子

名殘すゝしき夕立の
大空淸く晴れ渡り
葉末の露にさやかなる
月さへ今宵は十三夜
父がかたみの笛とりて
松の下陰さまよへば

思ひは胸にみなぎりて
うすき袂ぞぬれまさる

何の巧

能登　池野いさみ子

ひゝなたびにし乳の母に
『ひゝなの如く笑み給ふ
ひらいて散りて二十年な
柳のまりをけらんずる
妹が袂にぬすみたる
特更笑みてうかゞひし
父がゆづりの古がたな
都にいでゝ何の巧

昔のわれを尋ねには
めぐしの稚子に『おはせし』と
袂は園生に老いにけり
高きのぞみや今いかに。
其小鏡をてにうけて
我頬の紅は薄かりき。
秘して守らば安かるを
今日も黄金の太刀をにぎりぬ

須磨浦雑感

播磨　榎倉とみゑ子

汐りは深く砂白く
夕日まばゆくかゞやきて
はらむ白帆も往き返る
歸れるふねを迎ふるは
沖より送る潮風に
びんのほつれ毛なで敢へず
たれ來て救ふ人もなく
あまのすがたも古しへの
見れば昔のしのばるゝ
うごかぬ御代のかげ見えて
入合告ぐる須磨寺の
早や日も西に沈まりぬ
描るうすづみの色かとぞ
しづかに暮るゝ夕景色
波間にくだく金色の

沖の波間に紅ゐの
ねぐらないそぐ磯千鳥
はまには今日の業終て
るすをあづかる妻と子よ
吹れてみだる百千筋
天を眺めて目に涙
からき浮世の潮なぐくむ
松風姫となとらへて
手に取る如き島山も
眺めもあかぬ須磨の浦
鐘の響きともろ共に
夕照うけし海の面も
まごう斗りにかはり行き
折しも六日の月高く
色は乙女がたづさへし

おけの中にも入りたるか、

夏の夕まぐれ

下野　金子とし子

朧月夜を逍遙ひて
月はめぐりて朧夜の
梧桐繁りてほの暗き
南の窓に文机を
獨り懐にふけりたる
いとしき友のうつし繪に、
情をこめし玉章や、
髪や衣裝や都ぶり

別れに泣きし花の下
櫻は三たび咲にけり。
窓の燈したたるゝ
二つならべし事ありき。
橘香ふ夕まぐれ
たよりを添へて送りきぬ。
面は昔とかはられど
ほほづりするも恥しき

露營の月

さつき

いくたの勇士血しほもて
ふきくる風もなまぐさき
露營の天幕狂ふるて
ともし火消えて影くらく
ねむる兵士は古里の
折しも聞ゆ喇叭のこゑに
露の涙かふる雨か

色くれなゐにそめなせば
こゝ滿洲の荒野原
月はいよいよ物すごく
戈をまくらに草の床
妻子やいかにと夢むらん
夢おどろかされて立兵士
征衣の袖をうるほしぬ

亡祖母を想ふ

神戸　今西みさを子

思ひぞ出る四歳前
父母にも増して慈しみ
青葉若葉に露しげく
かぜの心地と伏し給ふ
みとりに餘念なかりしに
故に有るらんいたつきは
やせ細らるゝ見る我は
祈るのみかは是にても

我なつかしの祖母の君
教へ給ひし彼の君は
朝風涼しき初夏の頃
只かりそめと思ひつゝ
よわいはいたく老の身の
怒る事はさて置きて
朝な夕なに神佛
願かなはす成らんには

我命だに惜しからじ　とくとく元のみ體に
復させまつり今一度　月雲花のなかしさを
繰返しつゝみ教を　受けんとせしも仇なれや
神も佛もなきものか　時は暫しも此ころの
土さへさくてふ眞盛の　夏にしあれど夜は更けて
そゞろ肌へを冷す時　なげき悲しむ此我を
心強くも振殘し　またと再び遇はれざる
遠き國へと旅立たれ　時雨のかゝる袖重し
折しも月はおぼろ夜の　きなる泉は如何ならん
光陰早くめぐり來て　玆に四とせを經し今日も
亡き面影を忍ばんと　手に提き余るたむけ草
君が奥津城行見れば　墓守り顔の撫子は
濃き紅に匂ふなり　暫しぬかづき拜を述げ
いざ歸らんと思へ共　松吹く風のいかなれば
亡き祖母君のみ數の　聲に聞えて坐ろにも
住りし昔の偲ばれて　なつかしさのみ彌增り
歸らん心なかりけり　あはれ幾歲過ぬ共
など忘るべきたらちねの　それより高き君が恵み

或夜亡き姉を偲びて　岡山　黒瀬まさの子

去年の今月此の夕べ　月影落ちて山寺の
入り相の告ぐる鐘の音は　今猶耳に殘りけり
思ひ出すも涙の種　妾の爲には杖柱
頼みと思ひし姉君は　つれなの風に誘はれて
散なくなりし其時の　姿のなげき今も猶
涙の袖を絞りつゝ　月や今宵ぞうらめしき

糸やなぎ　愛知　中村きん子

夏のあつさをうちよせて、　吹くや川邊のそよ風に、
なびくと見せてまたかへる、　心の中や糸やなぎ、
なびきとほさぬものならば、　よその空にも吹かましを、
にくや小枝のもつれ糸、　吹き止みぬれば招くなり。」

少女傷病兵を送る　群馬　竹のふし子

霞のひまにほの見えし　雪化粧せし遠山の
綠の衣に更ふるとき　廣野に草は色づきぬ。
里の少女は眞白なる　前掛姿愛らしく
黄金の波にゆられつゝ　草笛ふきて舞ひ遊ぶ。
折しもきこゆるゴー／＼の　響は何ぞなる神か
又もきこゆる笛の音に　少女かけ行きたちとまる
ひまもあらせず黒烟　はきて長蛇は走せさりぬ
少女は高く小手かざし　萬歲々々又萬歲
窓により居し白妙の　布おほひてしものゝふは
ほゝ笑みつゝも首のべて　みかへる目には露の玉

夏の川　能登　金森かの之子

野薔薇にほひて露と散る　夕ぐれさびしいさゝ川
心の空に絶え殘る　昨日の春もうかびいづ
いかに恨みむあゝ夏よ　螢飛びゆき水澄みて
夕ぐれ涼しいさゝ川　心の中の浮雲や
なびく涼かぜ首たえて　いかになつかしあゝ夏よ
漣織りて星てりて　夕ぐれたのしいさゝ川
流れてせく水に　秋も近うと忍ぶれば
いかで惜まんあゝ夏よ

◉守田寶丹の改良　東京池の端守田寶丹店にては從來使用の錫器を當今總て輕銀器に改良することとなり既に三十錢器五十錢器一圓器の如きは二十錢器同樣輕銀器に改正したる由



國母陛下の御儉德

（靜岡に於ける御舟遊）

國母陛下が平素御儉素にましますことは屢々記し奉る所にして然なきだに時局の折柄一としては國事に御心を痛めさせられ彌が上に御儉素に遊ばさるゝは今更ら申すも畏き事ながら去るころ葉山御用邸に御滯在あらせられ降り續く梅雨の霽るゝを御待ち遊ばされ風景の最も優れたる長者ケ崎及び同附近の大ケ島に御出遊あらせらるゝ趣きにて既に御召船の御準備も整ひたれば漁夫等は早くも御召船を漕ぐの光榮を得んものと喜びつゝ偏すら腕を撫りて梅雨の霽るゝを待ち居たりとの事なるが該御召船は甚と粗末なる漁船二艘を並列し其中央に横木を渡して假りの御座所となし之に幔幕を繞らしたるのみなりと又此の御召船の舳艫には各二名づゝ乘込み舵を取り棹さしを掌り小船四艘を曳船となす都合にて船長は同所漁業取締員角田銀藏にて漁夫は三十名なりと云ふ然るにても陛下の御身に渡らせ玉へばヨット汽船の御召艇を召させらるゝとも易き程の御事なるにも拘らず然は無くて斯る粗雜なる有り合せの漁舟を擇び玉ふ御儉德の程こそ記し奉るだに惶くも畏こけれ

新聞號外の御遊戲

（兩皇孫殿下の御健勝）

迪宮 淳宮兩皇孫殿下が過にし梅雨中の御起居御遊戲の御一班を洩れ承はる所に依れば兩殿下とも孰れも御健康に渡らせ給ひ取分て乙宮殿下は御體量も加はり御肉つきのたくましうわたらせらるゝこと驚くべき許りにて靴紐の寸尺は御兄宮殿下よりも長きを用らるゝ由、元來御體量を衡り奉ることは容易なら

ぬ次第にて至尊の御下命にて行はせらるゝ場合は「御體量を奉伺す」と記錄し折に又侍醫扈從の間にて仰せを畏み奉伺する砌りは「窃かに御體量を伺ふ」と記錄しありとぞさるからに兩殿下には軍國の今日帝國の威武世界に輝きつゝある大御代に御成長在ます所より平常の御遊戯まで自然と御活潑に渡らせ給ふが中に御座所の青山市街を隔つる事左して遠からざるにや折にふれ市人の賣聲など御耳に入る事さへ尠なからず申すも畏こき事ながら我海陸軍の捷報の傳はるや都下の新聞社が爭うて出す號外々々の聲は就中御耳に熟れ給ひけん五月雨の徒然の御遊び事など兩殿下とも愛らしき御手に紙片を持たせ給ひ號外々々と御聲を張上げつゝ御廊下の彼方此方を走り給ふより御扈從の女官はその御跡を慕ひ參らせつゝ「號外を頂戴いたします」と申上れば嬉々として御笑ませ給ひて其紙片を賜はりそれに倦ませらるれば木馬の脚に紐を通しエイヤ聲して引張合を爲し給ふなど其御勇壯なる云はん方なしとぞ

兩内親王殿下御調製の戰死名簿

去る五月舉行されたる靖國神社勅祭の砌委員の一人となりし本郷陸軍大佐は當時撮影せる大祭の寫眞を常宮周宮兩内親王殿下に捧呈せん爲め先月四日を以て高輪御殿に參向し數十枚の寫眞を捧げたるに兩殿下には大佐を御前近く召させられ尙御養育主任佐々木伯加賀美御用掛等夫婦をも召し給ひて勅祭當時の實況より戰死者遺族の狀況など親しく御下問ありしかば大佐は感涙に咽びながら逐一奉答して退出したりと云ふ尙漏れ承はる處に依れば兩殿下の將卒を思はせ給ふ御誠情淚なくして拜するを得ざるものあり承れる儘を記し奉らんに兩殿下には開戰後程なく戰死者名簿を調製せんと思し立たせ給ひ縱一尺二三寸横八九寸の立派なる折本數十冊を製せしめ御日課として之に姓名官位勳等を漏れなく記し給ふ事一日も怠たり給はず往々夜更くるまで御染筆遊さるゝ事あれば佐々木伯始めお附の人々は若し健康を損じ給

ふ事もやと心を痛め時々御猶豫を請ふ事あれど兩殿下には「國家の爲に斃れたる將卒の身を思へば斯ばかりの事何の勞れとなすに足るべき、五年十年かゝるとも此名簿を記し卒へて忠魂を慰むる心を表はさゞれば止まじ」と仰せられ尙ほ最と御熱心に筆を執り給ふにぞお附の人々は餘りに有難き思召に唯々感涙に咽ぶばかりなりとぞ、扨此忠魂帖は前にも記せる如く姓名官位勳章を始めとし戰死の年月日其場所など一々御正書遊ばさるゝ由なるが彼の敵國深く入りて遂に胡地の鬼となりたる橫川省三沖禎介等一味の志士の名も記され之等の姓名には「忠君愛國之志士」と記し給へりとぞ承はる、あゝ此至仁至誠の思召を承る者誰か王事に死するの名譽を要めざるものあるべき

中山一位局の御祝宴

從一位中山慶子の方の母君なる愛子の方（故從一位中山忠能公夫人）には本年八十九歳の高齢に達し一位局も古稀の齢とならせられたるが此程麹町區有樂町の御別邸に母堂が八十八の祝賀と御自身の七十の祝ひを兼ねたる目出度き筵を開かせられたり此御祝賀は昨年中に催さるべき筈なりしが母堂には當時病の床に就かれ居たるより今まで延引されたる由なるが此度の催し　を聞召さるゝや天皇陛下よりは特に御心を籠めさせられたる純金三組の御盃一組と皇后陛下及び東宮殿下より服地御目錄外數種の結構なる品々を御下賜せられたりと承はるが一位局にも特に此筵を賑はさんとて御近親の方々は申すに及ばず有ゆる方面の御懇親なる人々を呼び集へらるゝとぞ返す〲も目出度き御身の上と申すべし

滿子殿下の佛語御研究

北白川宮滿子女王殿下には一昨年の今月恰度華族女學校を優等にて御卒業相なり昨年中今の甘露寺伯爵方へ御降下遊ばされたるが折柄麹町區平河町五丁目に住める佛國婦人セント、アンリー氏が夥多い上流

婦人を會して佛蘭西語を研究しつゝある由をきこしめされ御自分も亦此婦人を宅に招きて交際社界の必用語たる佛語を學ばんとは思はれしもセント、アンリー孃は如何なる高貴のお方にても出教授のほどは致し申さずと御斷り申上げたるに女王殿下にもなるほどゝ思召れて去四月以來府下千駄ヶ谷なる甘露寺邸より隔日に一人の女中を連れて車にて時折は電車にて通學遊ばされたるが教師は如上のアンリー孃と野邊地里安子の兩氏にて他の皇族方に比して御發明に渡らせられ進歩のほども餘ほど速き方なりとは野邊地女の語る處なるが殿下の外この雙葉會に日に通學さるゝ夫人には岩倉公爵令孃米子、季子、西鄕侯爵令孃不二子、松平侯令孃敬子、昭子、寺島伯夫人徳大寺侍從長令孃いそ子、桂伯令孃潔子、輝子、すま子、外百二十名あまりの華族夫人及令孃方にて何れも佛蘭西語を首とし英語の外、音樂、繪畫など熱心に學ばるゝ姫君の多き中にも殿下には勝れて御上達あらせらるゝ由に承はりぬ

渥見千代子女史

京都第一高等女學校教諭にして家政科を擔當しゐたる同市新烏丸頭町東へ入渥見千代子は今回　兩　皇孫殿下の御養育係を拜命したるを以て近々上京する由なるが今女史の經歷及び家庭の模樣を聞くに女史は和歌山市屋形町四丁目に生れたるが其家は同藩士なりしかば家庭教育も嚴格にしつけられ去る廿五年四月女子高等師範學校を卒業したる後間もなく渥見健治氏に嫁ぎ卅四年五月長男楠雄(六つ)を擧げしが健治氏は不幸にも世を去りしかば其後は楠雄を連れ實母秀子(六十二)妹いはほ(三十)と同棲し專ら女子教育に身を委ねて餘念なし女史の學校生活時代には學識容貌とも他に優れ同窓の者に對しても頗る親密にして評判よく士族の家に生れしだけありてその風采も高尚にして性質は沈着、平常愼み深く言語數も利かざればとて教授をなす時の如き諄々として順序正しく談話をなすといふ風にて生徒等は女史を師とも親とも敬ひ

又父兄よりは良師として尊敬せられしをり女史は何事にも熱心に全幅の力を注ぐと云ふ氣象にて擔當の家政學上の實地研究に當りては料理は素より洗濯、色揚げ其他衛生上の事に至るまで苟も女子の爲すべき件々は實地に調べ又專門家の意見を叩き置きて生徒の爲めに利益ある智識を授けんと苦心しつゝありしといふ。又賢母秀子は女史を敎養せし丈ありて同藩中にも賢女の名高く女史が良人に先だゝれ可愛し盛りの楠雄を後の片身と敎育するに就ても老母は孫の敎育法に就ては昔しとは違つて世が開けて居るから孫の敎育はお前の意見通りにして育てるがよいと姑息の愛に溺れず家庭は常に團欒の和樂を全うせりといふ

玉枝女史の光榮

跡見玉枝女史は昨年聖路易大博覽會見物に趣きし際遍く北米の勝地に遊びて其景物及び花卉等を寫生し之を一冊の畫帖として此程皇后陛下へ献上方を宮内大臣に願ひ出でしに畏くも御手許に留めおかせらるゝことゝなり御挨拶として金二百五十圓御下賜相成るべきよし去る十四日香川皇后宮太夫を以て宮内大臣へ御沙汰ありしといふ女史の光榮想ふべし

中學生の成績と婢僕

學生生徒の學術優等品行方正なるものは生活程度の高き家庭にあるものよりも却て富裕ならざるものゝ子弟に多き傾向あるは夙に世人の唱道せる處なるが東京府立第四中學校長深井鑑一郎氏は茲に見る所あり同校生徒と家庭の關係につき種々調査せし由なるが今學業成績と婢僕使役との關係に就て聞く處によれば同校本年五月一日現在生徒總數五百八十三名の内家庭に婢僕を使役せるもの三百十六使役せざるもの二百六十七而して學術品行共成績善良なる生徒九十三名の家庭を調査せしに婢僕ある者四十一名無き者五十二名を得又成績不良なる者百三名の内に於ては有る者六十五名無き者三十八名を得たりといふ

忠魂紀念の室

神戸市花隈町に京都深井染工店支店貝塚米といふ人の夫婦の中に三人の子あり長女をお種(十五)次女をお惣と云ひ三番目は男にして目下小學校に通學し主人は常に京都に在りて家に歸る事月の內五六日のみなれば母親お何は心して三人の子の教育に餘念なし然るにお種お惣の姉妹は性質至つて優しき方なれど亦快活の氣風に乏しからず曾て東京高輪御殿に在ます兩皇女殿下には出征軍人の國家のために名譽の戰死を遂げし者ある時は一兵卒に至るまでも一々其姓名をお筆になし玉ひ其札を御殿內に安置せさせられ香華を供へて忠魂を慰め給ふとの有難き事を新聞紙上にて知りしかば娘心にも大方ならず感動し其後は二人相談して新聞雜誌に掲げられたる忠死軍人の肖像は一兵卒と雖も一も洩さずして之を切拔き初めは手文庫の中に蓄へしも疾くに之に滿ち充ちて更に他の函に蓄へ置たるが父が京都より立歸りし時姉妹は之に向ひてお父さん妾等に奧の四疊半の室を貸して下さいませんかとの突然の求めに父は不審して何うする心算ですと問返せしに名譽の戰死軍人の肖像を貼りますとの思ひがけなき答には元が借家の事とて爾う勝手に襖や壁に手をつけらるべきにもあらねば父親も之れには挨拶に當惑せしが段々と仔細を聞きて少からず感心しよし〳〵襖は別に拵へて遣りさへすれば家主も承知するであらうお前方の心任せにせよと許したるにぞ姉妹はいたく打喜び豫て貯へたる夥しき肖像を取出し先づ切床には貴顯の御肖像を掛けて花を生け姉妹は襷がけとなりて糊刷毛片手に小きものは襖大きなるは額に製し尚貼り足らぬ個所は其後又々新聞雜誌に出でたる寫眞版を切拔きて貼足しければ今は四疊半八枚の襖一杯に餘りて一尺の餘地なきまでとなりしかば其後の分は屛風に貼りつけつゝありと云ふ去れば一たび其室に入る時は廣瀨中佐あり橘少佐あり其他の勇士生けるが如く列りありて恰ら忠魂彷彿たる計なりとぞ

孝行の若者

香川縣高松市佛生山芝居町西裏の西森佐平（六十）と云ふは妻ヤエ（六十五）長女ヤス（三十五）長男佐太郎（二十九）との四人暮にして佐平は佐太郎と共に所々の池川等にて漁業をなし長女ヤスは高松佛生山等にて下女奉公をなして其給金を父母にみつぎ居りしにヤスは去る三十二年の頃虎列拉病に罹りて死せし後は佐太郎の及ぶ限り働きて父母には必死となりて孝養を盡し居りしに父佐平は最早寄る年に物の役にもたゝず母ヤスは老衰から眼病に罹りて食事萬端の出來ざるより今は佐太郎一人にて家事の始末より食事に至るまで引受け朝は星明りに起きて朝飯より晝飯の拵らへまでを濟し置きて稼ぎに出掛け夕方歸りては夕食を拵へると云慘怛の中にも父母の存命中は決して嫁も取らぬ嫁を取れば子供でも出來自然父母の取扱が麁末となりて乾度不孝者になるだらうと一意専心父母に孝養中佐太郎は本年の春より佛生山郵便局の集配人となりたるが根が律義者の事とて職務に勉強し其成蹟も優等にして集配人の模範なりと褒むる人もあり斯る男の事とて幼時より未だ嘗て父母の叱責を受けたることなしと云ふ

九州婦人の結婚年齢

熊本縣立病院婦人科部長醫學士山崎正薫氏が九州產の婦人八百二十一人に就て結婚年齢を調査したるに左の如くなりと

結婚年齢	市婦人	町婦人	村婦人	合計
滿十三歳以下	一	：	二	三
滿十三歳	一	二	七	一〇
滿十四歳	五	八	一二	二五
滿十五歳	一五	二三	四〇	七七
滿十六歳	二五	三一	五三	一〇九
滿十七歳	一五	三九	六六	一二〇
滿十八歳	二六	二四	七九	一二八
滿十九歳	一六	二五	五七	九八
滿二十歳	一七	一五	三一	六三
滿廿一歳	六	一三	三二	五一
滿廿二歳	六	九	二九	四四
滿廿三歳	六	七	二三	三六

満廿四歳	二	六	一四	二三
満廿五歳	一	四	三	八
満廿六歳以上	五	九	一二	二六
計	一四七	二二四	四六〇	八二一

右の表にては何年何ヶ月と云ふを満何年と略してあるが今月数を入れて結算をして平均の結婚年齢を出して見れば市の婦人は満十八年九ヶ月町の婦人は十八年九ヶ月村の婦人は十七年九ヶ月の平均数は満十八年一ヶ月となれり満十九年十一ヶ月前に結婚したる婦人は五百七十一人満二十年より二十五年迄に結婚したる婦人は二百二十四人満二十六年以後にして結婚したるものは二十六人の割合なりと以て九州婦人結婚時期の一班を知るべし

●ホワイト裁縫ミシン使用法夏期講習會　芝公園第十五號地日本女子美術學校にて八月十七日より三十一日まで開會する由會費は金二圓、宿泊希望の向は食料舍費共金四圓にて同校寄宿舍内に宿泊せしむといふ

▲新刊批評

◉良人の自白（中編、木下尚江著）社會主義者たる著者が、自由平等、戀愛、結婚、及び是等に關する不自然なる現代制度の結果として生ずべき各種の罪惡に對する痛快の意見（寧ろ不平）を思ふさまに記きあらはしたるものなれば、文に逸氣あり、句に熱誠龍りて、細讀の際、身恰かも其境にあるが如きを感ぜしむ、但し現今の女子に關する著者の觀察と理想とは、予輩の見るところと頗る異なるものありて、本書中に描かれたる人物の操行に就きても、個人、社會、國家より見たる男女の關係、貞操、德義の諸點に於て、非議すべきもののなきを得す、更に下編の出るを待ち、各編を通じて細評を試むべし。（定價三十五錢、麴町區有樂町三平民社發行）

▲花冠（田部井竹香編輯）　女子の友の臨時增刊なり、初に小栗風葉中村春雨、伊原青々園等の短篇小說を載せ、終りに例の閨秀連の懸賞小說をも掲げたり、義塾の目醒しなどには、倔強の讀物なるべし。（定價二十錢、牛込區市谷田町二、文友社發行）

▲明治才媛新體詩第一集（田部井竹香選）　其名の如く明治の才媛達の名詩に、一々批評を加へ、其の小照までも添えたる小册子なり、名作と美貌とを載せられたる才媛達の得意の程、誠に御察し申すといふの外には、兎角批評すべき言葉だになし。（定價二十五錢發行所同上）

▲みづゑ（第一）　木下藤次郎氏の編輯せる水彩畫の雜誌なり、水彩畫に關する諸般の記事、寫眞版、美麗なる數葉の繪はがきなどありて、この道の人に取りて、利益ある新誌といふべし。（定價一册十八錢毎月一回、小石川區關口駒井町三、春鳥會發行）

▲實地經驗臺所重寶記（村井弦齋著）　食物、食品、洗濯、掃除等いろいろの事を問答體に記したるものなり、食道樂信仰の臺所には、必ず備へ置くべき重寶なる良書なり。（定價八十錢、麴町區有樂町二、報知社出版部發行）

寄贈書目

日本婦人	六九	東京	帝國婦人協會
女學世界	五ノ九	同	博文館
をんな	五ノ七	同	大日本女學會
家庭のしるべ	一一三	同	白木屋
大日本婦人教育會雜誌	一七六	同	同教育會
愛國婦人	每號	同	愛國婦人會
婦女新聞	每號	同	婦女新聞社
家庭週報	每號	同	櫻楓會
時好	三ノ七	同	三越吳服店
婦人と子供	五ノ七	同	フレーベル會
國學院雜誌	一一ノ七	同	國學院
正則中學講義錄	每號	同	大日本國民中學會
慶應義塾學報	九二	同	慶應義塾
教育公報	二九七	同	帝國教育會
新國民	一ノ四	同	大日本國民中學會
六合雜誌	二九五	同	ゆにてりあん弘道會
精神	一ノ七	同	精神學會
新聲	十二ノ七	同	隆文館
二十世紀の婦人	二ノ七	同	北海道婦人同志會
日本の家庭	五	同	同文館
裏錦	一五一	同	尚網社
成功	六ノ七	同	成功雜誌社
直言	每號	同	平民社
向上主義	每號	同	久友社
教界時事	每號	同	教界時事社
體育	一四〇	同	日本體育會
商家の友	四〇	同	時事新報社
東京經濟雜誌	每號	同	同雜誌社
婦人世界	五〇	大阪	浪華婦人會
工談雜誌	一八〇	同	工談會
世界各國の家庭		同	博文館

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半ヶ年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一ヶ年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

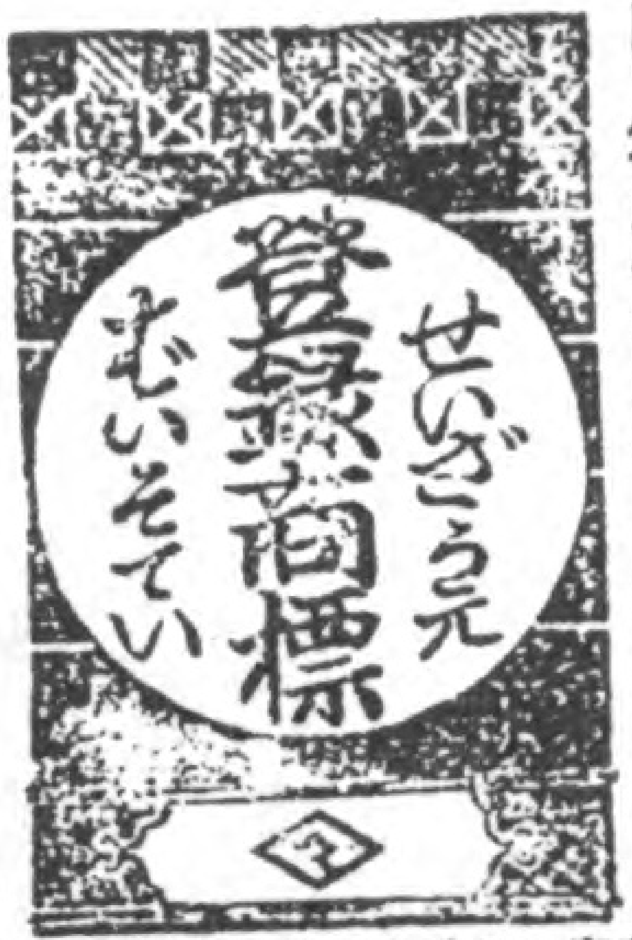
明治三十八年七月卅一日印刷
明治三十八年八月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊案一
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十番地 河本龜之助
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社 國光社 (電話新橋二六三九番)(電話新橋特八八番)

定價 壹袋壱錢
罐詰五錢



此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町
梅素亭謹製
電話下谷二三四

月經[illegible]



藥價
半週分 二十五錢
一週分 四十五錢
二週分 八十五錢
三週分 一圓二十錢

月やく閉止 三四ヶ月の月經閉止も二週分にて必ず通ずる不思議の効あり

月やく遲延 常に月經閉止を苦慮するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一週分も用ちゆれば直ちに通下す

血の道にて**頭痛眩暈**し 目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人殊に女十五六才にして月華なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病** 月やく閉止、遲延、過少を忌ふことなく通利を快よくし**血の道**を**根治**し身體强壯に**容貌爽快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舗 東京市日本橋區藥研堀町四十三 藥劑師**高木與八郎**

●紳士の洗顔用として高評を蒙る

セーネー



色白くなる

高等化粧洗料

定價大瓶五拾錢　小瓶弐拾錢

●歐米最新流行品

●紳士貴女の洗顔用

本品は使用の時乳色に變化し永く芳香を保つ

御注文は　市内郵送可仕候　市外小包料拾錢添付

發賣元　松泉堂　東京日本橋區くれまさ町七番地

●夏季衛生必要品

清心丹は興奮、清涼、收斂、健胃消化劑なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要藥なり依てポッケット用、携帶用に便利なるニッケル罐入の設けあり定價は金卅錢、十五錢の二種あり販賣所は全國藥舖賣藥舖にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御愛求あらん事を乞ふ



本舖東京市元大阪町

高木與兵衛

稟告

弊社發行女鑑の義大方の御好評を博し御愛讀者の數日に月に累加仕り候段深く感謝の至に奉存候女鑑代金御拂込に付き爲替不便の地に於てば郵便切手代用（一割增）の便法を設け居候處萬一不着の場合には取調方困難にして隨て御愛讀者に對し甚だ御氣の毒の次第に付き以來成るべく郵便爲替又は郵便小爲替を以て御送金被下度御願申上候
郵便爲替又は郵便小爲替券面の受取人指定の場所には必らず「東京市京橋區築地二丁目廿一番地株式會社國光社」と御記入下され又た拂渡局指定の場所には必らず「築地郵便受取所」と御記入下され度候
爲替券は成るべく書留郵便にて御送付被下度然る時は萬一不着の時取調方容易にして相互の便利に付き成るべく前文の如く御取計ひ奉願候

明治卅八年八月

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社出版部
電話新橋 特八八番 二六九三番

明治三十八年八月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
第拾五年第八號